

論にまでなつて居る。けれども自我の消滅、自己否定が人類生活の上に力説せらるゝ必要のあつたのは原始仏教の創造せられた時代であつた。其の後人類生活の進歩は基督に依つて絶対個人主義（自我の実現、自己肯定）の典型を示された。天理教は即ち仏教の無我主義と基督教の大我主義とに立脚して更らに其れよりも一層徹底したものである。

凡そ人格発展の過程には三つの時代がある。

其の第一は 小我の時代である

其の第二は 無我の時代である

其の第三は 大我の時代である

天理教に於て八埃を払つて誠を發揮せよと教ゆる所以のものは即ち小我を去つて大我の境に入れと教ゆるのである。教祖は即ち其の最初の典型人であつた。彼女の中には自他の障壁は取り去られてしまつた。彼女の中には全世界全人類が一つに包有せられて居た。彼女は世界にただ我が姿を見我が声を聞いた。彼女は凡ゆる生物に吾が心臓の鼓動を聞いた。全世界は彼女にとって一物一体となつた。これが彼女の絶対個人主義である。

けれども今日の天理教は未だ此の大我の境に達しない。否な無我の境にさえ達しないのである。けれども理想は灯明である。常に一步先を照さんければならぬ。今日はもはや無力を唯一の理想として進むべき時代ではない。更らに一步を進めて大我の境に向つて努力しなければならぬ時代である。今日ではもはや自我の消滅をもつて生活の標準として居る時代ではない。自我の実現をもつて生活の標準としなければならぬ時代である。今日ではもはや自我の破壊をもつて生活の目的とする時代ではない。自我の建設をもつて生活の目的としなければならぬ時代である。今日ではもはや自我の縮小をもつて生活の信条として居る時代ではない。自我の拡大をもつて生活の信条としなければならぬ時代である。しかも無限大に、宇宙大に、神大に、今日はもはや自己否定をもつて生活の土台として居る時代ではない。自己の積極無限の肯定をもつて生活の土台としなければならぬ時代である。云い換えれば個人我を去り、家族我を去り、国家我を去り、教会我を去り、天理教我を去り、真に宇宙我に帰入し神我に一致しなければならぬ時代である。更らに云い換えれば埃を払つて誠を發揮しなければならぬ時代である。其処に生活の発展があり、其処に人格の生長がある。

次に天理教は無欲の宗教であるという。如何にも御神樂の歌五下り目の四「欲の無い者なけれども神の前には欲はない」八下り目の四「欲の心を打ち忘れ篤と心を定め掛け」九下り目の四「欲があるなら止めてくれ神の受け取りでけんから」十下り目の四「欲に限りない泥水や心澄み切れ極楽や」十一下り目の四「欲を忘れて日の寄進これが第一肥料となきる」の如き何れも無欲を説かざるものはない。けれども天理教の終局の理想は此処に尽きて居るものではない。天理教の終局の理想は人類的欲望神の欲望を以つて直ちに自己の欲望とすることである。無欲即ち私欲の否定は此の大欲を実現する消極的手段に過ぎない。けれども浅信なる天理教信者の中には往々天理教の真意を誤解し、現在の地位財産名誉を放棄することに依つて直ちに天理教の理想に到達し得たと信じて居る。けれども其は大なる誤解である。何故なれば天理教の教ゆる所はかくの如き境遇の変化にあらずして精神の変化にあるからである。もし此等地位財産名誉の放棄者にして単に此等の外的付屬物を放棄して肝心の私欲を放棄しなければ何んにもなるものではない。けれども更らに一つの注意は単に私欲を放棄したこと其れ自身が天理教の終局の理想であると思つてはならない。御神樂歌十一下り目八

「屋敷の土を掘り取つて所更える許りやで」
は即ち私欲を人類的欲望化し神の欲望化することを歌つたものである。しかも今日の天理教に欠乏して居るものは無欲にあらずして大欲にある。吾人の希望は天理教徒否な全人類が単なる個人的欲望もしくは家族的欲望もしくは国家的欲望もしくは天理教的欲望以上に人類的欲望神の欲望をもつて直ちに自己の欲望とせられんことである。吾人はもはや無欲無欲は消極的理想であるをもつて理想として居る時代ではない。もっと積極的に大欲をもつて理想としなければならぬ時である。天理教将来の発達には前者の消極的理想を捨て、後者の積極的理想に生きることにある。

次に天理教は無望の宗教であるということである。其の説の要領は人間は凡て神の道具であるから使用はただ神の意志の俛である。従つて自分自身の勝手に希望を画いてはならぬと云うのである。元より其れに相違ない。一面より見れば天理教は無望の宗教無目的の宗教である。けれども一面より見れば天理教程大望の宗教有目的の宗教はないのである。ただ天理教に於て禁止する所のは個人の名利より生んだ個人の我俛の希望である。宗教、哲学、芸術、科学、政治、実業、教育の進歩発達に対する希望、並に濟世救人の希望、人類の発達の希望の如きは之れ何人も有せざるべからざる所のものである。天理教をもつて凡ゆる知的活動情的活動意的活動を停止した無為に返えることを理想とする宗教であると思つてはならぬ。否々天理教の天理教たる所以は凡ゆる人間の本能を最も有意義

に活動せしむる点にあるのである。ただ衣食住の欲望の如き又は自分一身の名利のために人類進化の理想を忘却せざらんことである。否な時々刻々の精神が一に人類進化の理想をもって自己の理想として進まなければならないのである。これ即ち天理教は無望を目的とする宗教にあらずして大望の宗教であると説く所以である。

次に天理教は謙遜の宗教であるという。如何にも天理教は一面に於て謙遜の宗教である。けれども之れを他の一面より見れば天理教は自信教であるということが出来る。

蓋し謙遜は小我の否定である。自信は大我の肯定である。此の二つは一見甚だ矛盾せるが如く見ゆれども其の矛盾したものではない。寧ろ人格発展の自然の階段である。

エマーソン曰く

「嬰兒の心は天真爛漫にして其眼未だかつて他人のために制せられず。寧ろ吾人は其直視して何物をも恐れざる面貌を眺め衷心忸怩として狼狽せずんばならず」
と。彼は嬰兒の顔に大なる自信を見た人である。私は嬰兒の顔を見る毎に此の哲人と感を同うせざることはない。

基督曰く

「汝等謙遜りて嬰兒の如くならずんば天国に入ることを得じ」
と、彼は嬰兒の顔に大なる謙遜を見た人である。蓋し大人の謙遜には自卑がある。大人の自信には自負と高慢とがある。眞の謙遜はただ嬰兒の胸にのみあり、眞の自信も亦其うである。

けれども現実の人類よりは此の嬰兒の謙遜と嬰兒の自信とは失われてしまった。彼等の顔には卑屈にあらざれば高慢の色が漂うて居る。「三歳児」を理想とする天理教徒の顔も亦其うである。彼等の多くは去勢せられたる馬である。狂犬は甚だ稀である。けれども将来の天理教は去勢せられたる馬の力には余りに重い。寧ろ狂犬の努力に待つ所甚だ大なるを思う。

古来如何なる英雄豪傑聖人君子と雖も自信なくして何事もなし得たものはない。即ち釈迦には釈迦の自信があった。基督には基督の自信があった。孔子には孔子の自信があった。我が教祖も亦大なる自信の人である。もし彼女を以って世間普通の単純なる謙遜の人と思うはそもそも大なる誤である。何故なれば大なる自信はしばしば大なる謙遜の姿を呈するものであるからである。私の天理教徒に望む所は大なる謙遜（小我の否定）の人たると共に大なる自信（大我の肯定）の人たらんことである。何故なれば自信は謙遜より一歩積極的生活へ踏み出たものであるからである。

次に天理教は推譲主義の宗教であるという説である。之れは広池博士に依って唱えられつゝある所の説であるが天理教には「互い立て合い助け合い」（互立主義相互扶助主義）なる教理はあれども推譲主義なる教理はない。

畢竟推譲主義と云うが如きは倫理上の消極的用語である。其の中には「互い立て合い助け合い」即ち互立主義相互扶助主義の如き一歩進んだ積極的の意義を盛ることはできなない。私は博士が如何なる点より天理教は互立主義の宗教であり相互扶助主義の宗教であると云わずして教祖の教理は正さにかく云わざるを得ない 推譲主義の宗教であると云われたか未だ明かなる説明を得ないから博士の用語の出所を知るに苦しむのであるが今日公平に天理教の主義を観察すれば天理教は推譲主義というが如き消極教にあらずして明かに互立主義、相互扶助主義の宗教であることを断言して余りある。何故なれば教祖の教理が直ちに之れを証明して居るからである。

次に天理教は他力主義の宗教であるという説である。之れは一面の真理である。けれども天理教の他力主義は彼の法然親鸞に依って開かれたる純他力宗とは其の面目を異にして居る。天理教の他力主義は即ち「人事を尽して天命を待つ」という自力主義的他力主義である。

此の他今日の天理教は其の教理の解釈に於て、邪路に入るかもしくは自ら其の解釈を縮小して将来の発展を阻害して居るものが少くない。例えば貸物借物の理の如き、日の寄進の理の如き、因縁の理の如き即ち之れである。之れを狭義に解釈すれば貸物借物の理の如きも単に精神、肉体、物質に対する觀念の変更を促すだけのものに止まり、之れを広く解釈すれば凡ゆる生活を決定する人生の大綱となる。又た日の寄進の如きも之れを狭義に解釈すれば教会の用を勤むるとかお助けをするとかに止まるけれども之れを広義に解釈すれば人生に有益なる事業に従事するものは凡て之れ日の寄進ならざるはないのである。別けて誤解され易きは因縁の理である。此の教理は天理教信仰の入門であると共に又た最終門である。此の教理の精神は「動あれば反動あり」「原因あれば結果あり」という自然の法則に帰するのである。（誠一つが天の理天の理なれば直ぐに受け取り直ぐに返やすが天の理という如き天理教教理中の最も重要な教理も此の法則の支配を免かれないのである）然るに此の自然人生の法則はしばしば原因と結果とを顛倒して信ぜられつゝあるのである。即ち天理教の二大律

理（神）を立て、身が立つ
人を助けて吾が身助かる
に対する誤解の如き即ち之れである
誤解の要点は此の客観の法則の結果を直ちに主観の法則の目的とすることである。彼の
人を助けるのは自分の因縁を切らして貰うためだというのが如き教理の誤解は此処にある。
しかも此の主観の法則と客観の法則との誤解に陥れるものは単なる一信徒のみではない。
地位あり名譽ある教師迄（広池博士の如きも其の誤解者の一人である）かくの如く公言し
て憚らないのである。
けれども自己の因縁を切りもしくは自己の一家の因縁を切るために助け一条に従事する
というに至っては教祖一生の事業は非常に小なるものとなってしまう。蓋し教祖一生の事
業は今日の人々が解する如くしかく小さいものではなかった。彼女が助け一条の道に生き
たのは世界一列を吾が身吾が肉吾が魂と思つた一念凝つて止むに止まれぬ至情からであ
る。豈に自己もしくは自己の家族の冥福のために此の大事業をなしたるものならんや。
今彼等の説即ち自己並に自己の家族の因縁を切らして貰うために人を助けさせて貰うの
だという彼等の説が天理教の眞の教理であるとせば天理教は今日迄全人類の間に最高の慈
善として是認せられて来た報酬を予期せざる善行の意義及び価値を破壊して新に利己的慈
善を推奨せるものと云わなければならぬ。しかも私は未だ天理教々理の何れよりもかくの
如き利己的慈善の奨励を証明せる言葉を発見することができないのである。
私の天理教に対する研究の結論はただ自己の精神を助け一条の精神化し、自己の生活を
助け一条の事業化すること之れが即ち天理教信仰の全体であると云うにあるのである。自
己並に自己の家族の将来の幸福のために助け一条の道に従事することは私の未だかつて学
び得ざる所である。
以上述べたる所は天理教の病弊の一二の例に過ぎない。けれども将来眞に天理教をして
完全なる発達を遂げしめんと欲せば今日迄三十有余年の長日月の間に作つて来た古い型を
打破しなければならぬ。而して全然従来解釈とは独立した新しき眼をもつて見た新教を
樹立しなければならぬ。何故なれば今日はもはや所謂絶対服従主義（盲従）の時代では
ないからである。今日はもはや無我主義の時代ではないからである。今日はもはや無欲主
義の時代ではないからである。今日はもはや無望主義（無定見）の時代ではないからであ
る。今日はもはや所謂謙遜の時代ではないからである。今日はもはや所謂推讓主義の時代
ではないからである。凡て此等の主義もしくは理想は二千年もしくは三千年以前に於て説
き古された黴の生えた眞理である。天理教の如き新時代の宗教に依つて再現せらるゝ必要
を認めないのである。（事実天理教はかくの如き思想を繰り返しては居ない）
天理教の新思想の中心は地場中心主義である。神靈中心主義である。日の寄進主義であ
る。絶対個人主義である。無我主義的大我主義である。無欲主義的大我主義である。無望
主義的大望主義である。平民主義である独立主義である。積極的活動主義である。
然るに広池博士を始め其他教界の諸先輩は天理教の消極的方面をのみ見て其れを強いて
旧思想（主として浅薄なる国家主義、浅薄なる家族主義）と連結することにのみ腐心して
来た。ために今日の天理教は甚しく消極的、旧套的、形式的、固定的のものとなつてしま
つた。これ教徒の精神にへビーをかけて天理教の発達を急ぐ所以である。
今此処に天理教の将来の予想を一言すれば将来の天理教は必ずや個人主義の洗礼
を受けざるべからずと云うことである。（今日の所広池博士を始め教界の諸先輩も未だ個
人主義に対する明かなる自覚がないために強いて此の問題とぶつかることを避くる観があ
る。而して生活の徹底の上には毒にも薬にもならぬ家族主義や国家主義の調和にのみ腐心
して居る。）蓋し将来天理教思想界に一新紀元を画する時代がありとすれば全天理教徒が
明かに絶対個人主義（此処に云う絶対個人主義とは大宇宙主義と云うのである）の理想を
自覚した時にあるのである。今一歩々々其の時に近づきつゝある。天理教の新生面の開拓
は其れ以後の事に属するのである。
要するに今日の天理教は余りに消極的である。将来の天理教はもっと積極的になら
なければならない。之を具体的に云い換えれば今日の天理教は余りに小我の否定に傾いて居
る。将来の天理教は進んで大我の肯定（善をなせ）に入らなければならぬ。天理教の新生
面は其処にあるのである。

（大正四年七月八日地

場にて）

教界の問題

天理教の世界化か？世界の天理教化か？

私は新宗教六七月の両号にわたって現今天理教界の革命せざるべからざる所以を述べた。本論は寧ろ其の結論と見ざるべきものである。私は本論に依って天理教徒として最初に自覚すべく且つ最終まで徹底せざるべからざる本教の大問題を呈出して置いて更に神の国への無限の旅行を続ける心算である。心ある人の精読を望む。

現今の天理教界を見るに大別二つの大なる潮流を認めることができる。其の一つの潮流は天理教の世界化にして他の一つの潮流は世界の天理教化である。此の二つの潮流は時々相激して以て大なる飛沫を天に沖することがある。

之れを例えて云えば此の二つの潮流は教界の静脈と動脈とである。動脈は絶えず新鮮なる血を心臓より送って人体の發育を計る。而して人体を洗淨した結果汚血となって静脈より心臓に帰るのである。教界の二つの思潮は正さに此の動脈と静脈とに似て居る。本部は即ち此の授受両面の作用を司る心臓である。

此の二つの作用は単に血液の循環作用にのみ行われるものではない。凡ての生理作用凡ての心理作用に通じて行われ、共通の法則である。例えば飲食を取る代りに排泄物を排出する。運動の結果として休息を要求して来る。此の補充と供給、摂取と排泄の法則は知的活動、情意的活動に於ても亦同一である。

けれども此処に主要の問題は飲食が目的であるか？ 排泄が目的であるか？ 補充が目的であるか？ 供給が目的であるか？ 運動が目的であるか？ 休息が目的であるか？ 研究が目的であるか？ 発表が目的であるか？の問題である。此の問題を解決することはやがて此の問題を解決する間接の鍵である。

然し此の問題は既に解決せられた問題である。何故なれば吾人は決して排泄物を作るがために栄養分を取るものではなく又た休息（もしくは睡眠）のために労働するのではないからである。天理教の目的も亦此れと同一である。即ち世界の天理教化は人生の継続発展上避くべからざる第一の主要条件であって天理教の世界化は或は其の結果として生ずるものに外ならないのである。然るに今日の天理教界にはしばしば此の原因と結果とを顛倒して世界の天理教化より離れて天理教の世界化に向って流れつゝあるのである。此処に於てか私はしばしば自己の信仰を披瀝して教界に新生命を注入せんとした。けれども其は却って一部旧思想の人々の反感を買い真に教界全体の肺腑に徹底することのできなかつたのは私の不徳の罪とはいへ遺憾の至りである。此の遺憾残念は私をして再び此の主要の問題を呈出して全天理教徒の最後の解決に訴えしむる所以である。

蓋し草木の生長するや常に根に培う肥料と水とがなければならぬ。人間の生長も亦同一である。必らずや新鮮なる靈肉両面の飲食物に待たなければならぬ。

然るに今日の天理教は永らく靈の泉と食とに離れ其の血は汚濁して居る。もし今日にして之れに向って新鮮なる血液を注射せずんば恐らく壞血病のために自滅の運命を免かれまいであらう。

然らば今日の天理教を救うべき新鮮の血液とは何んぞや？ 其れは云う迄もなく教祖御親の蔽われざる思想即ち之れである。

蓋し天理教は世界の動脈血である。其は世界の道 世界の道は静脈血である に依って汚さるべきものではない。常に新鮮なる血液を排出して世界を淨化せざるべからざるものである。これ私の天理教の世界化を極力排斥して世界の天理教化を絶叫する所以である。其処に天理教の使命があり、其処に天理教の価値があるからである。敢て天理教本来の目的を逸したる人々の反省を求む。

新旧思想の衝突と道義

凡そ如何なる社会 芸術界哲学界科学界政治界道德界教育界実業界 に於ても新旧思想の衝突と云う事は蓋し何うしても免かれ得ない現象である。殊に文明の進歩が激烈になり、社会の発達が迅速になるに従って新旧思想の変遷は一層激しくなり従って其の衝突も自然に激烈に起ることを免れないのである。

天理教は創立日な浅きためとは云え比較的長い間旧思想の勢力を維持して来た。けれども時代は進歩すと云う宇宙進化の法則は天理教にのみ例外なる筈はない。今や天理教は即ち此の新旧思想の分岐点に立って居るのである。而して此の新旧思想の分岐点に立って最も迷って居る者は青年天理教徒である。此等の人々を善導して新しき第一歩に向って踏み出さしむることは先覚者の神より与えられたる使命である。而して此の使命を果たさんとする者の第一の覚悟は「百の麦を生やさんがために死する一つの麦」たる覚悟がなければならぬ。此の犠牲的精神なきものには真に新思想樹立の資格がないのである。しかも今日の天理教の飢饉は實に此の新思想家の欠乏にあるのである。……

凡て新陳代謝は宇宙の法則である。古き物は廢れて新しき物が起り、老人は死して青年

が起る。其処に人生の進歩がある。此の原則は天理教発達の過程に於ても亦同一である。即ち先輩の思想は既に陳腐に属して新しき青年思想家の時代が来たのである。

蓋し人間進化の法則たるや粗より細に入り、剛より柔に入り、醜より美に入り、偽より真に入り、悪より善に入り、野蕃より文明に入るものである。其の間に漸進的の進歩があるのである。

蓋し新とは真である。深である。神である。蕙である。心である。従って真に新しき者のみ真に善なるものである。(凡て古きと名のつくものは既に要求と価値とを失ったのである)此の意味に於て私は絶えず新しきものを愛するのである。何故なれば真に新しきもののみ真に価値あるものであるからである。

今日の青年は思想の新味(深味)に於て確かに一步神に近い来て来た。彼等の人生観は拡大された。彼等の信仰は一段の高さに向って進んで居る。彼等の精神は一層自由になって来た。けれども其の凡ては未だ新天地に解放せられては居ない。其の多くは籠の中にあつて旧思想の制誅を受けて居るけれども時は彼等を驅つて河川の狭窄より大海の広さに導いて行くのである。しかも何人と雖も其を止むる権力と權威とがない。何故なれば神彼等に於て常に広き大道に導くからである。其処に進歩がある。進歩は即ち青年の使命であるからである。

吾人はもは永遠に道の先輩と思想上の調和を失ってしまった。其れはちょうど仏教や基督教や儒教や古神道の思想との調和を失った様に。これは当然の事である。何故なれば先輩の来たる道を仮りに京都とすれば吾人の道は更に其れを一步東に向つて踏み出して居るからである。終つて其の調和もしくは一致もしくは並行のあり得よう筈がない。又たあり得ないのが当然である。もし之れを誤つて強いて青年をして自己の旧思想に一致せしむる先輩並に自己の新思想を枉げて旧思想の上に屈伏する青年ありとすれば其は大なる立脚地より見て確かに進歩の阻害者たる罪を免かれないのである。

けれどもただ一つ道の先輩もしくは後輩として守らざるべからざることは其の間に一点の私情を交えざることである。之れを一層詳しく云えばお互いに各自の労力に対して感謝の念をもつて対せられんことである。即ち先輩は今日迄長い間重荷を負うたために困憊疲労して此の上一步も踏み出づること能わざるとせばこれに代るとしても先輩の今日迄の功勞を厚く感謝し之れに向つて罵詈訛弄の言のあらざるべきことは云う迄もなく寧ろ自ら先導して之れを負うの覚悟がなければならぬ。これ愛を以つて精神とし助け一条をもつて生涯の事業とせる道の先輩と後輩との間の礼儀である。又たかくの如くにして始めて道の人としての価値を証明するのである。

私は此の最も礼儀正しき模範を天翔りつゝ万里の空を旅する雁の一行に見る。彼等は一人の先導者を定め其の者の疲労するや之れを後列に廻して更に新手の先導者が其れに代つて一行を目的地に導くのである。其の間所謂順序の理を確守して一糸の乱るゝことがない。これぞ吾人天国の旅行者の模範である。

之れを要するに新旧思想の相違は蓋し自然の現象として免かれないのである。ただ之れをもつて勢力上の問題とせずして徳義上の問題とする所に天理教の特色があるのである。云い換えれば之れを以つて社会の所謂弱肉強食の意味の生存競争の意味に解せずして社会の進歩発達のために協力一致して来又た相互扶助して行く所謂互立主義相互扶助的意味に解して始めて道の上の新旧思想の相違が円満に解決せられるのである。

之れを今一度繰返して云えば旧思想を抱いて居る人々は之れを道の上の厄介物視せずして同情と愛憐とを以つて接せんことである。これ道の上の新思想家の先輩に対して第一に心得べき信条である。

次に一言付加して置かなければならぬことは先輩が後輩に対する礼儀道德である。此の問題は後輩が先輩に対する礼儀よりもより以上になおざり視せられつゝある。けれども此の相互間の道德は一方に重くして他方に軽く、一方に軽くして他方に重き理由はないのである。其の間必ずや同等の礼儀がなければならぬ。これは事将来に関する問題であるから一言もつて先輩の反省を求めて置くのである。

蓋し今日の先輩を見るに青年が其の意見を吐露するもしくは新策を樹つる時は其の価値を考へることなく一言の下に圧迫せんとする蕃習がある。これでは将来道の発達も世界の発達もあり得ない。青年は未来の後継者ならば宜しく之れを愛護して其の誤れるを正し其の正しきは何処迄も進めて行かなければならぬ。其れを先輩の權威に任せて之れを圧迫し甚しきは之れを敵視するが如きは余りに自分一身の地位を恐れて道と社会の発展を無視した行為と云わなければならぬ。

由来今日一般社会の悪弊は幼少青年を目するに玩具もしくは日用品の如く考えて居ることである。従つて彼等幼少青年が無邪気な微笑と従順なる服従をもつて彼等に仕えて居る間は之れをこの上なく愛するけれども一旦彼等の精神中に新しき思想の萌芽の生ずるや之れを以つて直ちに毒虫の如く厭嫌するのである。これは幼少青年をもつて自己の後継者と

考えずして競争者と考へて居る誤解から出るのである。もし今日の幼少青年が将来神の事業を繼續する貴き後継者であることを自覚したならば寧ろ彼等の前に跪拝して後事を委託するの覚悟がなければならぬ。況んや之れに向つて罪なき鞭を当つるの暴行をや。従つて私は常に信じて居る。

老人は青年を教ゆべきものにあらずして青年に学ぶべきものである。ということ。私は之れと同一の精神をもつて常に嬰兒の面貌に神の思想を学び少年の笑顔に向上の勇気を獲得するのである。

今日の世界並び道の諸先輩にして少くとも此処に想到したならば彼等は必らずや幼少青年に対する傲慢の態度を捨て、敬虔の膝を折つて彼等の前に跪拝するに至るであろう。これが真人の後輩を迎える礼である。従らば先輩の權威を以つて後輩に臨み之れに対して自己の貴重の後継者たる觀念がなかつたならば其の人は自己の利害に囚れて天下国家の大事を知らざる人と云わなければならぬ。敢て道と世界の諸先輩の反省を求むる所以である。

以上述べたる所は新旧思想の衝突と其の間の道徳であるが之れを要するに先輩となり後輩となるも歸する所神の理想を実現する道具のみ。其の間私の目的あることなし。其を誤解して先輩と後輩と相敵視して宛然勢力上の競争を続けるの觀あるは愛と信と義を生命とせしめる道の人として恥づべき行為である。将来の天理教徒は深く此の点に向つて自覚を進め行かなければならぬ。敢て新旧思想の衝突に連関して一言以つて先輩対後輩の道徳に言及した所以である。

神の家族となれ神の雇人となる勿れ

凡て家族は自己の家のために働き雇人は自分自身の利益のために働く従つて一旦利害の衝突するや彼は振り返つて主人に向つて矛を向けるを辞さない。これが人情の自然である。

今日の天理教界には多くの雇われたる人々がいる。けれども雇われたる者の生命は一時である。彼もし自己の利益のために去ることを欲せざるとも不用の時には何時にても神より解放せられるのである。さればこそ神は常に彼等に向つて「足場になるなよ」と警告せられているのである。之れを云い換えれば雇人となるなと云う天啓に外ならないのである。

凡て自分一身の利益のために教界の事務に従事するものは之れ皆足場であり、雇われたる人々である。普請が成功するかもしくは不用になつた時は取り払わるゝかもしくは解雇せられるのである。従つて私は其の人の因縁のために

「神の家族となれ神の雇人となる勿れ」

と警告せざるを得ないのである。

蓋し金のために雇われ名のために雇われる人々は平時は主人のために忠なれども一旦危害の自分自身に及ばんとするや彼は主人を捨て、逃亡するのである。けれども家族は決して其うではない。彼は外来の賊と戦つて其の財産を最後迄保護せんとするのである。

蓋し雇人は主人の監視の届く範囲内に於ては忠実に活動すれども一旦主人の姿の隠るゝや直ちに仕事を放擲して遊惰に耽らんとするのが所謂雇人根性である。従つて将来真に道を発展せよめんと欲せば先ず第一に一身の利益のために働いて居る雇人を解放して家内水入らずの生活に入らなければならぬ。天理教最後の理想は實に此の大家族的生活の實現にあるからである。

青年を教養し人才登用の門を開け

凡て一家は一代にして立つものではない。必らずや後継者を待つて相続せらるべきものである。天理教も亦同一である。即ち天理教は決して教祖一代の宗教ではなく又た現本部員一代の宗教ではなく人類永遠の宗教である。其の繼續発展は必らずや偉大なる青年天理教徒に待たなければならぬのである。

然るに今日の天理教の先輩が今日の青年に対する態度は甚しく不親切と冷淡とを極めて居る。もし真に天理教の未來を思い且つ彼等青年の未來を思つたならば彼等の肉体を扶養する前に先ず精神を教養しなければならぬ筈である。然るに今日の本部並に部下教会の青年に対する態度はただ之れを手足の人として使うことを知つて心の人もしくは頭の人として養成することを知らない。わけて憂うべきは本部の青年である。何故なれば彼等の中には未來の本部員 現行制度より云えば たるべき人々が交つて居るからである。けれども今日の如く本部を以つて自轉車乗養成所音楽生養成所にして置くならば其の中より生るゝ所の者は頭もなく心もなき人がでなければならぬ。これ未來の部下数百万の信徒の統治者として私の第一に憂う所である。従つて私は当局者に向つて建言するのである。

本部青年にして少くとも満三ヶ年の実地布教を経ざる者は本部員の列に列すべからずと。元より此の三ヶ年は単なる申訳的の布教であつてはならぬ。真の実地単独布教でなければならぬ。何故なればもし今日の彼等を生長するが俛にと長せしめたならば知も情も意もなき傲慢と無知生懶惰との本部員を作るばかりであるからである。之れと一段の階級を異にするとは云え教養の必要は各大教会の青年に対しても同一である。

彼等の間には青年会の組織あり中には真面目に教理の研究をなしつつある者ありと雖も真の教理は決して頭脳に依つて理解せらるものではなくただ実験心理の上のみ成立するものなれば、青年教育の上に於て最も重んずべきは実地布教の経験である。此の関門を置いて道の真人を作る方法はないのである。これ私が三年布教制を進むる所以である。

此の他本部並に各教会青年養成法に就ては種々の計画と抱負とを有すれど其は他日に譲つて更に一言人材登用の件に言及せんとするのである。

今日の本部員並に部下教会の役員を見るに其の多くは年限もしくは功勞の故を以てて登用せられたる人々にして其の凡てが必ずしも人格の人と云うことができないのである。もし之れを人格の上より云えば現城法分教会長並に山本藤四郎氏の如きは当然本部員に列すべき人々である。(けれども此の人々は本部員にすると云つても成らないであろう)否な本部員以上の人々である。然るに当局の怠慢か本人の謙遜か今日迄其の拳を見ない。教界の遺憾である。

そもそも此の道は年限並に功勞の道であるとは云え其れが唯一の神の人物使用法ではない。神の第一に選まんとする者は年限功勞にあらずして人格にあるのである。如何に年限を重ね功勞を積んでも其の人の人格が劣等であつたならば末代神の藩屏として用ゆるに足らないのである。知識の卓越せるものと雖も亦同一である。

此の道は人格の道である。従つて人格の卓越せるものは其の現在の身分の高下を問はず其れに相当せる地位を与うべきである。これが真に徳(価値)を世界に勧むる所以である。

(此の方法は知識才能の卓越せるものにも適用せらるべきものである。)

御言葉に曰く

大きな所で小さい道具は使えぬ。小さな所で大きな道具は使えぬ

と。蓋し適材を適所に用ゆるのが神の人物使用法である。

然るに人材登用法の不完成なる今日の天理教界にては此の神の明識は必ずしも行われて居ない。

わけて世襲制度を実行して居る現今の教界にては公平の見地より適材を適所に用ゆるにあらざるよりは人材をして徒らに腐朽せしむるより外ないであろう。

私の本部を始め部下一般教界に望む所は願くば情実因襲を脱して自由に人材登用の門を開かれんことである。何故なれば之れ真に徳(人格的価値)を天下に勧むる所以であるからである。敢て天理教当局者の公判に問う。

神の常紋を打て

或る村落に一人の貧しき老人があつた。又た其の村には一人の富豪があつた。其の老人は天性正直のために非常に其の富豪に愛せられていた。

然るに此処に此の老人にとって目出度い事が起つた。其れは其の老人に初孫が出来たことである。老人の一家では初孫のことであるから孫祝いの印をしたかったが家貧にして其の祝いの品を配る器具がなかった。

其処で老人は恐る 自分の愛顧を蒙っている富豪の宅に重箱を借りに行った。富豪は喜んで老人を迎えて云うには

「誠によく来て呉れた。けれども内の物は皆内の定紋がついて居るが其れで良いなら持つておいで」

と。老人は喜んで御礼を申上た。次に富豪の云うには

「お前の内には袱紗があるか？」

「何う致しまして、袱紗どころでは御座いません」

「其んなら袱紗も持つて行つたが良い。が内の定紋がついているが良いか」

「イ、結好で御座ります」

其処で此の老人は定紋の付いた重箱と袱紗とを借りて喜んで歸つて行つた。……

老人は家に帰ると早速赤飯を蒸かして第一番には富豪の所へ持つて行きそれぞれ親類にも滞りなく配つた。而して借りた重箱を丁寧に洗つて其れに寸志をつけて富豪の許に返した。

然るに同じ村に同じく貧乏な夫婦があつた。其の夫婦も何かと富豪の許に借りに来るのであるが未だ一遍も催促を受けないで返したことはなかった。しかも其の品を返す

や必ず不潔にして返えすのである

其れで富豪は一日番頭に向って云った。

彼の夫婦に限らず村の者に物を貸さんと云っては困るだろうから貸してやるにしても以後決して彼の夫婦には良い物を貸してやってはならぬと。

之れは教祖が其の弟子に向って説いた貸物借物の理の寓話である。今日の天理教徒は如何に此の寓話を考えるであろうか？

此の寓話中の富豪とは云う迄もなく天の親様である。村民は人類である。其の品物に一々定紋のついて居るのは人類が神より貸し与えられて居る物質にも肉体にも凡て神の定紋の打たれてあることを指して云ったのである。

然るに今日の天理教界を見るに上は本部より下は一信徒に至る迄神の定紋を付けたる者は一人もない皆各自銘々の因縁の紋を付けしかも得々として自ら真の天理教の信徒なりと信じている。

けれども真の理想より云えば全人類は凡て精神的に神の定紋を付くべきのみならず、形式的にも亦神の定紋を付くべき筈である。今日の如く本部は中山家の紋を用い（神の紋は十二の菊花である）部下教会は各々教会の紋を用い、更らに一般信徒は皆それぞれに自己の因縁の紋を付けて居るに於ては真の天理教徒とは云い得ない。もし真の天理教徒ならば単に形式的のみならず実に精神的に神の定紋をつけなければならぬ。これが人類の義務であると共に人類の特権である。従って私は今日の天理教徒に向って望む。

自分自身の因縁の紋を剥いで神の定紋を打て

と。而して此の実践躬行の範を先ず本部に求むるのである。何故なれば凡ての教風は本部より出るからである。

暑中休暇を廃せよ

今日の本部にては八月の上旬より下旬にかけて暑中休暇の制度がある。私は此の制度が何時何人の許可を得て制定せられたものであるかを知らない。けれども思え日月は寒暑に依って其の運行を止むるかを。又だ思え神は四季に依って其の働を鈍くするかを。又だ思え病める者と死ぬ者とは本部の休暇の間死と悩より猶予せらるゝかを。更らに思え本部の休暇中部下は助け一条の道を廃止するかを。

助け一条の道には休暇はない。休暇は要らぬ。休暇が欲しくば世界に行け。助け一条の道に休暇はない。死と病とは暑さを待たない。苟も病める者の苦痛と部下の苦勞とを思わば僅かの寒暑に耐え得ずして助け一条の道を停止する筈はないのである。道はかくの如き本部の懶惰に依って少くとも十年を遅れたのである。

私は云わんと欲す。

暑中休暇が欲しくば俗務に従事せよ

と。此の道は今日は避暑明日は避暑と一身の安樂を求めて歩く道ではない。今日は寒風明日は酷暑と苦勞を求めて歩く道である。

聴け卿等の耳には疾病に悩める人の子の声を聞かずや？ 卿等の眼には罪惡に苦める人の子の姿を見ずや？ もし此等の人々の苦痛の声と悲惨の姿を見たならば卿等は安んじて自己の安樂を求め得ない筈である。

思え神と教祖は寒暑に依って助け一条の道を一日なりとも休んだことがあるか？ 又だ卿等の部下は寒暑に依って助け一条の道を一日なりとも休むか？ 上は神と教祖に恥じ下は部下一般に恥じよ。助け一条の道は誰がために後れしや？ 思うて此処に至らば本部員たるもの何の言葉をもって神に答うるぞ？

時は一日一日と近づけど誰も其の時を知らないでいる。

今日の一日は天理教にとって千日の価値ある緊要の時節である。

顧るに世界は一日一日と進歩しつつあり。然るに天理教は一日一日と退歩せんとす。かくの如くにして何時の世にか理想の世界を此の地上に実現せんとはするぞ？ 私は今日の本部の暢気さには寧ろ絶望せざるを得ないのである。

記せよ。今日は昼夜の區別なく助け一条の道を急行すべき時である。未だ悠々として暑中休暇を利用する様の時でないことを。

助け一条の道は一日も廃すべからず。授訓は一日も廃すべからず。もし暑中休暇が欲しくは世界に行け。此の道は寒暑を避くる道ではない。水火を選む道である。従って私は当局者に建言す

休暇を廃せよ

と。神の道 助け一条の道 には安息日（日曜）はない。これは基督すら云って居ることではないか？ 況してシュン刻限に一刻 近づきつつある世界最後の宗教たる天理

教に於てをや？ 従って私は重ねて云う

休暇を廃せよ

と。助け一条の道には休暇はない。此の意味が理解され得なかつたならば本部員の服を捨て、もう一度助け一条の精神を第一歩より修行しなければならぬ。何故なれば真に助け一条の精神に燃えて居る者の精神には二六時中休息と云うものはないからである。敢て天理教当局者の反省を求む。

小成に安んずる勿れ

凡そ小人の常として目前の成功に安んずるの傾向がある。其の目的の小なればなり。今日の天理教を見るに殊に此の感を深くするものがある。

彼等の中には天理教の独立もしくは第一期神殿建築事業の完成をもって殆んど甘露台の実現せられたかの如くに思つて居る。けれども之れを所謂「きりなし普請」の理想より云えば真に其の千万分の一をも実現しては居ないのである。従つて天理教の事業は寧ろ全然将来の事に属して居るのである。

例えて云えば今日迄に完成した天理教は宏壯優美の神殿を建築せんとしてただ一つの礎を置いた様なものである。将来天理教の無限理想を実現せんとするにはなお多くの時日と努力と用材とを要するのである。これは少しく天理教々祖の理想に味到したものゝ何人にも理解し得る事実である。

然るに悲しいかな今日の天理教界には上は本部より下は部下教会に至る迄やゝもすれば神の無限理想を忘れて僅かに一身一教会の安心をのみ計つて居るものがある。

(将来天理教の盛大に赴く時今日の神殿に倍する五倍の神殿が十年毎に新築せらるゝに至るであろう？ 部下の教会も亦之れに準ずるのである。)

別けて発奮努力せざるべからざるは個人の性格改造の事業(此の事業は未だ神の予定の千百万分の一にも達して居ない)である。これぞ即ち神の所謂「きりなし普請」の本義にして天理教の精粹は此処にあるからである。

畢竟小成に安んずるものは其の理想が狭小であるからである。真に無限の大理想を胸に蔵する者には永遠に其の理想の実現しおおせたということはない。必らずや新しき理想と新しき光明とは常に彼を導いて無限に導くであろう。

私が全天理教徒に望むことはすべからず神の理想をもって理想とし神の希望をもって希望とせられんことである。苟くも神の理想と神の希望とが常に其の人にあつたならば彼は必らずや小成に安んずるの余裕を有たないからである。これぞ即ち自己を永遠無限に生かす道である。

別けて今日の天理教当局者に対して天理教将来の発展のために一言の婆言を呈せざるべからざることは精神の完成に先つて形式の完成を急がざらんことである。今日の天理教は余りに形式の完成を急いだ。例えば天理教独立の如き教務支庁の建築の如き其れである。もし天理教当局者にしてなお今日迄過去の不自由を忍んで来たならば今日の天理教はもつと偉大なる精神上の収穫(実力)を得たであろう。惜しむべきことである。

ただ此の際全天理教徒の反省を促して置きたいことは「過去の功を忘れよ」と云うことゝ「小成に安んずる勿れ」ということである。何故なれば過去の光榮を誇ることゝ小成に安んずることゝは其の者に死の運命を与えるものであるからである。

因循姑息を排す

小成と共に事業の発展と成功とを妨害するものは因循姑息の弊風である。わけて信仰生活の上には大なる禁物である。

蓋し宗教生活とは人生の精粹生活である。徹底生活である。根本生活である。人間生活の意義及び価値は宗教生活に入つて始めて完成せられるのである。わけて天理教生活は凡ゆる宗教生活中最も徹底的に進歩せる人間生活の理想の極致である。其の間一点の因循姑息を許さないのである。

然るに今日の天理教を見るに甚しく此の因循姑息の気風が瀰漫して居る。即ち天理教を一時今日の社会の思潮と調和させ、国家主義と調和させ、古神道と調和させ、学説と調和させることに依つて一時天理教の立脚地の安全を求め敢て其れ以上に進んで神の大理想を徹底せしめようとしぬ。もしたまたま神の初一念を徹底せしめんとするものあれば彼等は其の人を目するに異端をもってするのである。これぞ天理教今日の墮落を導いた第一原因である。

けれども信仰は事業でない、従つて信仰上の徹底を求めれば其の間必らずや周囲と相容れざるものあるは蓋し止むを得ざる現象である。徒らに其の信仰を自ら枉げて強いて他と

調和せんとするが如きはこれ調和にあらずして屈辱である。而してこれ真の宗教家の暫時も忍ぶ能わざる所である。諺に曰く
詩人は生るゝものにあらず
と。真の宗教家も亦其うである。彼は生るゝものにして作らるゝものではない。其の信仰は先天的に天より賦与せられたものである。
然るに宗教家の心臓を有せざる似而非宗教家は宗教をもって道徳と混同視し信仰をもつて事業と同一視し宗教も信仰も亦自由に人為的に作り得べしと信じて居る。此の事業家的精神はやがて天理教をして天然自然の宗教心を離れて人為的の魔道に墮し教会及び儀式をもって第一義的信仰なりとの誤解を抱くに至った。(教典の如きも亦此の事業的精神のなしたる業である)
蓋し真の宗教家と宗教的事業家の區別は一は理想に執着し一は現実に執着する点にある。前者は天眼通を有し、後者の眼は眼前数尺を離れない。従つて其の為す所は常に一時的である。けれども前者の眼は居ながらにしてよく千里の外を見、生きながらにしてよく未来を洞察するが故に其の為すところは常に永遠の計である。真の宗教家と宗教的事業家の別るゝ所は此処にある。
然るに今日の天理教を見るに余りに宗教的事業家に充ちて居る。ために往々善言を未前に進める者があつても敢て其れを用ゆる者が無い。唯一時表面の糊塗策を講じて以つて万全を期し得べしと信じて居る。けれどもかくの如き者は大海の潮流を一本の指にて支えんとする者と同である。吾人は其の余りに短見なるを悲しまざるを得ない。
けれども時は迫つた。今日はもはや教理を隠蔽し天啓を曲げて醜骸を何時迄も路上に曝らす時ではない。又た国家を憚り社会を恐れて神の理想の実現を猶予する時ではない。何所迄も徹底的に神の大理想を実現して一日も早く甘露台を此の地上に実現しなければならぬ時である。従つて此の際天理教界になくは叶わぬ者は妥協ではない。徹底である。因循姑息ではない。人類永遠の計である。宗教的事業家ではない真の宗教家である。之れ天理教焦眉の急である。敢て天理教当局者を始め一般信徒の自覚を求む。

神閣改造の予言

此処に大帝の館がある。大帝は国々を旅行して今其の家にある者は家臣のみである。其の中には人格の優秀なるものも少くない。けれども其の大部分は人目を盗む曲者である。其の或る者は主の金を盗んだ。其の或る者は主の娘を嘲つた。其の或る者は主の僕を苦しめて居る。懶惰と榮華は彼等の俛である。
けれども主の足音は近いた。彼は凡て自己の僕が自己の留守中に如何なる事をしたかを知つて居る、従つて其の善き者は賞められ其の悪しき者は罰せられ、其の罪の重き者は遠島に流罪せられん。これぞ現在の天理教本部である。
現在の本部には神の忠臣は隠れて悪臣のみ時を得顔に跋扈して居る。けれども神の足音は近づいた。其の足音は聡き者の耳にのみ聞えて居る。神の姿は近づいた。其の姿は明き者の眼にのみ見えて居る。
私は予想するのである。
神の公判の開かれたる時神の重臣の中必らずや馘首せらるゝものあるべし
と。此の予言は早晚事実となつて此の地場を実現せられるのである。其の時に至て悔むは既に遅し。脛に傷あるものは今にして懺悔して一日も早く神の恩沢に浴しななければならない。

シュンは迫つた早く大掃除をして来るべき正月を迎えよ

「シュンは未だし夜は未だ明け放れざるなり」
かく云いつゝ再び明け方の寢床に返つて行つた者がある。宜なり彼は暁明の光を知らざればなり。
されども大家族の中には二人の目醒たる人々がある其の一は女にして他の一人は男である。
「シュンは迫れり」
実にシュンは迫れり。明日は正月である。皆起き出でゝ大掃除をせざるべからず。其の時使わらるゝ神の大掃除は先ず母家より始めらるべし。而して隅から隅まで掃き清められるであろう。
母家には多くの家族と多くの雇人とが眠つて居る。中には悪夢に襲われつゝある者がある。其れ等の人々は禍なるかな。
「シュンは迫れり」もう今日明日に迫つて居る。早く床を離れて各々与えられたる所につ

け。

明日は正月である。けれども大なる家は未だことごとく掃き清められては無い。早く大掃除をして来るべき正月を迎えよ。

地場より

R O 生

長い間待ち焦れたお地場へ帰って住所も定まりやし。これで一仕事が出来ると思ってホッとする間もなく貸主から矢継ぎ早の立ち退きを命ぜられた。勿論事件の真相は雑誌新宗教の問題のためであると思われる。人の噂に依れば其の使喚者は某本部員であると言う事であるが迫害が此ういう処まで届こうとは思わなかった。自分の因縁とはいえ兎に角苦々しい事である。

教祖の墓地へ参拝して何時も感ずる事は夫善兵衛氏の墓の余りにみすぼらしいことである。神が教祖を立役とし善兵衛氏を敵役にしたのは教祖に花を持たせて此の空前の芝居を一層有効ならしめんがためであった。之れを芸術的見地より云えば二者共に甲乙なしと云うことが出来る。

蓋し此の度教祖を主人公として演ぜられたる空前絶後の神秘劇は神が選りに選ったる名優を選んで演ぜしめたのである。其の間には立役もあれば敵役もある。夫善兵衛氏は即ち此の敵役に廻られたのである。しかも其を遺憾なく勤めおおせたのである。其処に彼が普通の人情を超越して芸術の絶対境に入った偉大なる芸術家としての面目がある。かくの如きは神にあらざりてよく演了することは出来ないのである。宜なり彼は伊弉諾命の権化なることを。

私は常に夫善兵衛氏の墓に詣づる毎に教祖に優るとも劣らぬ偉大なる心事を想像して感謝と喜悦の涙にむせぶのである。

凡て何事にあれ裏があつて表があり表があつて裏がある。此の表裏二面の事情を心読するにあらざればもつて事相に徹したということでは出来ないのである。此の度人類の眼前に展開せられた教祖と善兵衛氏との関係も亦其うである。心ある人は教祖御親の墓地に詣づる度毎に其の一身の名利を全然犠牲にして空前絶後の大演劇を成功せしめた男優の大恩に感泣しなければならぬ。

御言葉の中に「敵を敵にして呉れな、味方を味方にして呉れな」という御言葉がある。

真に道を広めんと欲せば表に廻り裏に廻り陰となり陽となり敵となり味方とならなければならぬ。此の難事を仕遂ぐる事が出来なければ天下の大事は出来ない。

世人は私をもつて非常の悪党の如く考えて居るものがある。又た非常の善人の様に考えて居るものもある。非常の勇者の如く考えて居る者もあれば、非常の臆病者の如く考えて居る者がある。又た非常の賢人の如く考えて居る者もあれば非常の大愚の如く考えて居る者もある。私は之れに向つて一言の弁護をもしようとは思わぬ。何故なれば自己弁護は自証であると同時にしばしば自傷に陥る危険があるからである。

天理教立教の副人物として善兵衛氏に継いで偉大なる二人の花形役者があつた。其れは秀司氏と小寒子嬢である。

此の二人の功劳は天理教徒の否な全人類の忘るべからざるものである。しかも今日の天理教徒は此の二人の功劳者を表彰することを忘れて居る。これ私が豊田山の墓地に参拝する毎に拭わんとして拭い得ざる悲哀の影である。

私は常に神に向つて祈るのである。

「人の為すことを欲せざる至難の業を吾に命ぜよ」と。私の最大の快樂は実に其の中にあるからである。

人は云う

此の道は自ら進んで苦勞を求むる道にあらずと。もし此の人の云うが如く全天理教徒が凡て苦勞の道を避けて来たならば此の道は今日の発達はしなかつたであらう。しかもこれが道の上の先輩の言であると云うに至っては驚かざるを得ない。私は常に信じて居る。

此の道は自ら進んで苦勞を求むる道であるということ。蓋し天理教の天理教たる所以は其の苦をもつて苦として観ぜずして寧ろ其を樂と観ずる所にあるのである。醜を醜として観ぜず之れを美化して樂む所にあるので

ある。悪を悪として観せず之れを善化して楽しむ所にあるのである。偽を偽として観せず此れを真化して楽しむ所にあるのである。苦を苦として避け、醜を醜として厭い、悪を悪として憎み、偽を偽として排することは私の組し得ざる所である。

「悪をなす勿れ」とは従来宗教道德のしばしば教ゆる所である。けれども「悪をなす勿れ」というのは其の価値消極的にして寧ろ「善をなせ」と云うの積極的価値に如かない。天理教は即ち此の両面の宗教である。

私は人を判断するに未だかつて其の地位財産権勢名誉才力外貌に依って其の人を判断したことはない。必らずや先ず其の人の赤裸々なる人格的価値を見るのである。これが人を判断する唯一の正しい方法である。

私がお地場に来て第一に学んだことは神は祈るべきものにあらずして謝すべきものなりということである。少くとも祈は吾人の第一の問題ではない。

陽気は天理教の特色である。けれども底なしの陽気は脱線者の陽気である。真勇はしばしば臆病の衣を纏う。

私は神殿に参拝する毎に常に復活の気分を味う。しかも此の味は尊きお地場を置いて他に味い得ざる霊味である。

人の悲を自己の悲とするものは多い。人の喜を自己の喜とするものは少い。もし其をよくするものがあれば其の人は人にあらずして既に神である。

早く起きて早く臥す。これが最も天然自然の法則に合している。凡て天寿を与えられたる人の心理と生理とは努めずして自然の法則に一致して居るものである。

作られたる宗教家はある。けれども生れたる宗教家は少い。今日は未だ此の作られたる宗教家の時代である。

来年より十年が待ち遠しい。其の時の事は選ばれたる人の胸に秘せられてある。

従来道德の教ゆる所は食わず働かざることであった。今日の道德（天理教道德）の教ゆる所はよく食い、よく飲み、よく働き、よく遊び、よく眠ることである。

謙遜は小我の否定である。自信は大我の肯定である。一は消極的にして他は積極的である。真の偉人は此の二つの方面に於て完備しなければならぬ。

私が祝詞改作論を発表するや一読者は書を寄せて其の具体案を求めた。私は之れに対して親は子に語るに現代語を以ってす。子も亦親に語るに現代語を以ってせざるべからずと云う意味を書いた。而して終りに吾が祈るべき言葉は他人に問うべきものではないと書き加えて置いた。けれども私は此の読者に向つてもう一言書き足して置きたい。其れは天理教の祝詞は御神楽歌の霹靂に於て神が教えてあるということ。之れ以外に吾人が朝夕に捧ぐべき祝詞はない。臨時の祝詞は其の時と其の所と其の人とに依つて定めらるべきものである。

教えよ教えらるゝ勿れ。悟れよ悟らせらるゝ勿れ。

助け一条の事業が遊ぶよりも楽しみとならなければ真の道の人とは云えない。

神木の根元は腐ってしまった。其の幹々枝々には虫が巣くって居る。根元から切つて新芽を出さずか現在の枯木を助けて花を咲かさずか神はお考え中である。

口に云われん言葉に尽されん理を本部に見せて居る。けれども誰も其れを悟るものがない。

余りに謙讓に過ぐることは余りに自信に過ぐると同じく罪惡である。現在天理教界の大

徳の中に此の種の人が一人居る。彼もし自己を守るの巖を一步超越して積極的に本部に入って道のために奮闘せば其の功の大幾何ぞや？ 道のため世界のため其の人自身のために惜しい事である。

現在の道には裏が表となり表が裏となって居る。これ一つ改めなければ道は発達しない。

私の末代の信条は何を置いても神のお伴をするということである。

神命を奉仕し弾丸雨注の中に立って救世の大戦に従軍する教師等よ神のお伴に後るゝ勿れ。

北と南は道の兄弟。愛がなくては道の発展はあり様はない。上と下とは道の主従。敬がなくては道の発達はあり様はない。一列一列世界一列心と心とを結び合うて通れ。其うしたら神の働きは恐ろしいものである。

最も楽しく育てられたる人は最も苦を経なければならぬ。父祖の功業のために人格修養の要諦を忘れ其の日を空費しつゝあるものは禍なるかな。

雇われたる人の解放せらるべき日は迫れり。名と金とのために道の寄生虫となって居る人々の用意すべきは迫れり。

宗教家の生命は財産でもなければ名誉でもない人格にある。然るに今日の天理教徒を見るに如何に名利のために汲々たるものゝ多き？ もし多少なりとも神と教祖の所志を考うるだけの神経のあるものあらば先ず本部員より腐れ切った私財を擲って助け一条の道の金とせよ。然らば天理教の発展は必らずや見るべきものがあるであろう。

あゝ光栄ある単独布教師よ。神に最も近きものは卿等である。

此の道の要は常に一兵卒の心を忘れぬことにある。

よくも 人間心で十年押し切った。けれどもシュンが来たなら其れだけの報はある。

天理教史上の第一の失敗は独立を急いだことである。もし天理教当局者が満を持して世界より頭を下げて独立を乞うに至る迄真価の發揮に力めたならば天理教は此の十年の間に一千万の信徒をつくれたのだ。ただ教界の小人等が姑息の安心を求めたために道は二十年退化した。（此の事は実力なくして名称の認可を急ぐ布教師の注意しなければならぬ要件である）

私はかつて幼時祖父より此うい話を聞いたことがある。

身上（財産の俗語）を作ろうと思えば人の知らぬ内に作れと。私は祖父とは方面を異にしながら此の言葉をもって常に自己修養の座右銘とした。

心に眼明きて行に眼を閉づるものは偽悪者である。行に眼明きて心の眼を閉づるものは偽善者なり。現在の天理教界には如何に此の種の独眼の人の多きことよ。

吾人は共々未成品である。其の真に完成せられるには無限の時を要す。

進歩？ 進歩？ これより自分の生きる道はない。

序論 人生とは何ぞや？

此処に空間に遊離せる無数の水蒸気がある。其れは春夏秋冬の四季の氣候の変化に依り或は雨となり、或は露となり、或は霜となり、或は氷となり、或は雪となり、或は霰となつて地上に降る。其の降るや氣候の冷化により、其の昇るや氣候の温化による。其の形の異なるは温度の差異に依るのである。

凡て此等の雨露霜氷雪霰（もしくは霞雲靄霧）は其の時と所とに依つて其の体と用とは一様ではない。例へば屋上に落つる雨は瓦を洗ひ落つては軒端の石を穿つ雨垂となる。又庭園に落つる雨は庭樹を生かす甘露となる。高山の頂に落つる雨は集まつては大飛瀑を形造り、深森に落つる雨は木々の渴を医し余つては溪間の流となる。或は田に或は畑に或は野に落ちて五穀野菜の露となり野辺の草花の生命の靈泉となる。散じては水蒸気となり集つては井池湖沼江流海洋となる。澄んでは人畜魚介を養ひ腐つては子子を養ふ。静かなる時は三才の小児を浮かばせ、怒れば大浪の巨巖を砕く。更らに氷雪霜露に至つては或は天地の温氣と醜惡とを包み、或は有害の害虫を殺し、或は草木を生かす靈泉ともなり或は草木を枯らす毒薬ともなる。等しく天より降る一滴の水蒸気の運命と活用とはかくの如く異なつて居る。人間の運命も亦此等水蒸気と甚しく其の趣きを等しうして居る。即ち等しく「高山の大池に湧いた水」であつても或る者は金殿玉楼の中に絹布に包まれ美食に飽き、或る者は大地を床とし青天井を屋根として日々の衣食に苦しみ、或る者は人を毒する濁水となり或る者は人を助くる清泉となる。且つ此の二つの極端なる性格と運命との間には更らに無数の異なる性格と運命とがある。其は例へば人の面の異なるが如く異なつて居る。凡て此等の原因は何処にあるであらうか？

此の他誕生、結婚、死亡の問題の如き家庭問題、社会問題、国家問題の如き生活問題、經濟問題、労働問題の如き政治問題、法律問題、外交問題の如き、社交問題、軍事問題、通商問題の如き、倫理問題、道德問題、宗教問題の如き大小無数の人生問題が吾人の前に横はつて居る。わけて吾人々類にとつて直接の重大問題は生命其の者の問題である。此の最後（最初にして）の問題は人世問題の核心である。従つて其を解決することに依つて他の凡ての人生問題は自然に解決せられるのである。

古来「人生とは何んぞや」との問題は東西古今の先覚者の頭脳を最も苦しめた問題であつた。けれども之れに向つて一人として完全無欠の定義を与へたものはなかつた。（釈迦や基督や孔子の如きは最早や今日の進歩した複雑なる人生問題を解決するには余りに時代後れである）而かも時代の進歩は益々此の疑問を深くすると共に最後の解決を要求してゐるのである。此の際に於て突如として人生問題の最後の解決者として表はれた者が所謂世界最後の一大新教の樹立者たる中山ミキ子である。

ミキ子が天理教を創立するに至つた動機は全く偶然の必然に属して居た。即ち彼女が天保九年十月二十六日（ミキ子四十才の時）宇宙の根本實在の神の天啓を受くる迄は新教樹立の如き彼女の夢想だもせざる所であつた。けれども之れを大宇宙の大意力者の眼より見れば全く予期の事実であつたのである。之れは其の後彼女の口を通じて表現せられた天啓の聲に依つて証明することができる。

即ち天啓に依れば天保九年を遡ること九億九万九千九百九十九年の過去に於て世界が未だ混沌たる泥海時代に属して居た時宇宙の兩極力を代表して居る所の国床立尊重足尊の男女兩神が月読尊国狭土尊以下伊邪那岐伊邪那美尊の八柱の神（此等の神は其の當時に於ける最高等動物であつて神ではなかつた。後に人間創造世界創造の助力の功に依つて神名を附与せられたのである）の助力を得て人間並に人間の生活根拠地である地球の創造を始めた。当時人間の靈魂の前身として用ゐられた動物は鱈であつた。之れに當時の最高動物の有した凡ゆる特徴を合して造つたものが人間の前身である。けれども當時の人間は唯當時の最高動物の有した凡ての特徴を具へて居たと云ふ迄であつて今日の如き進歩せる人間の形態を具へたものではなかつた。其の後漸次昆虫魚類鳥獸の時代を経て遂に猿人に迄発達し、猿人より今日の人類に迄発達した（此の点に於て進化論は天理教教理に一致して居る）。之れに要した時間が九億九万九千九百九十九年。其中九億九万年は水中生活。六千年が知識の教育。三千九百九十九年が學問の教育。其れに依つて十のものなら九つまで教育した。後の一つ一人格一が教育するにせられなかつたから、シユン刻限即ち時機の到来を待つて因縁の場所即ち人類創生の最初の根源地（大和国庄屋敷現今の三島）に元なる神が出現し因縁の身体即ち中山ミキ子（人類の原母伊邪那美命の後身）を立て、典型人とし従来未だ曾つて説かなかつた宇宙人世の秘密を啓示するといふのである。

「其れで今迄も何の様な宗教もあつたけれども皆神が人類発達の程度に鑑みて教へて来

たものである。今度の教が教へ始めの教へ終ひ。之れ一つ充分に仕込んだなら後に何も教へることはないぞよ」

と。よつて天理教は一名之れをだめの教へとも止めの教へとも云つて居る。蓋し世界最後の宗教を意味するのである。之れが天理教立教の正面の理由である。

今之れを世界の三大文明教の一なる基督教と比較する時は其の教理は云ふ迄もなく其の人類觀に於て大なる相違がある。例へば基督教にては神が世界を六日にして創造し其の最後の日に人間を作つたと説いてあるがよし之れを一步譲つて一日を一時代と見人類を第六紀の創造と見るも尚ほ始めより現人の姿に作つたと云ふ非科学的非合理的事実を否定することはできない。此の点に於て天理教の所説は全然今日の進化論の前驅をなすものである。

次には原人の数である。基督教では原人の数はアダム、イヴの兩人にして今日の人類は凡て其の子孫であると説くけれども天理教では伊邪那岐（岐魚）伊邪那美（巳）の兩神を父母として生れた原人の数は九億九万九千九百九十九人と説くのであるが此くの如き巨大の数が何うして同時に宿り而かも五分の身長を以つて生れることができたであらうか？ 思うに原始時代の動物は一体に其の体格が巨大なりしを以つて此の岐巳の二高等動物も亦非常に巨大なる骨格を有したものであらう。けれども此処に一つの疑問は現在の人類の数は殆んど原人に倍するの一事である。ミキ子は之れは他の動物の進化せるものと説いて居る。

要するに天理教と基督教との教理の根本的相違は一は進化説向上説に出発し他は退化説墮落説に出発して居ることである。此の出発点の相違はやがて其の帰着点を異にするのである。唯兩教の一致は人類の家族的結合と地上天国（もしくは甘露台）の理想である。此の点に於ては兩教共殆んど一致の歩調を取つて居ると云つて良い。唯其の間の理想に本末大小の相違のあるのは一は枝葉の宗教であり他は根幹の宗教であるからである。即ち基督教の家族的結合並に地上天国の理想には神靈中心的思想はあつても地理的中心地はなかつた。これ天理教の地場中心主義に一步を輸する所以である。

蓋し天理教の地場（人間創造の根源地即ち大和庄屋敷現今の三島）は人間の最初の肉の故郷であると共に最後の靈の故郷である。従つて天理教の地場中心主義には基督の神靈中心主義を含むと共に有形の地場中心主義を含むのである。天理教の大家族主義は即ち此の地場中心主義の別名に外ならないのである。之れを云ひ換へれば天理教の終局の理想は此の地場を中心とせる平和にして且つ健全なる一大家族を実現するにあるのである。これが即ち人生の歸趣であり且つ人類将来の理想生活である。此の理想の世界を称して神は甘露台と云つた。蓋し無上の幸福を意味するのである。

（甘露台に二種ある。其の一つは有形の甘露台にして他の一つは無形の甘露台である。もし無形の甘露台が全人類の精神中に建設せられたならば同時に地場に於て有形の甘露台が建設せられると云ふのである。蓋し今日は此の有形無形の甘露台建設の過程にあるのである）

以上述べたる中で吾人々類に取つて三つの忘るべからざる重要事がある。

其の第一は地場である。

これは全人類の最初の故郷として、世界最後の宗教の立教地として最も重要な場所である。天理教が他の既成宗教と異なる所以は他に種々なる原因ありと雖も此の世界無二の靈地に起つたことは確かに其の一つでなければならぬ。

第二は教祖である。

天啓に依れば教祖中山ミキ子は人類の原母伊邪那美尊の後身であるといふのであるが其の円く豊かなる心、玲瓏玉の如き人格は殆んど人類として達し得べき最高の高さ、最広の広さ、最深の深さに達して居た。もし地場が天理教の有形の中心を形造くるものとせば教祖の人格は正さに其の無形の中心を形造るものであつた。天理教立教の序論として神が下した左の天啓の如きは教祖の人格を説明して余りあるものである。曰く

「国床立尊、重足尊は泥海の中より顕れ出で、世界を創めかけた根本の神である。此屋敷は人間最初宿し込みの因縁ある故、又た美伎の心体を見るに世の中に我子程可愛い者はない。其れを我子二人までも差し上げ其上我寿命迄も捨て、人の子（これより先きミキ子は我子二人の寿命と其れで足らなければ我が寿命迄も捧げるに依つて何うか預り子（隣家足達源右衛門の息照之丞）の寿命を助け給えと黒瘡瘡にかかつて一命危篤と伝えられた照之丞の爲めに祈願して不思議にも危篤の病人を助けた事がある）を助ける心といふは人間を宿し込みたる根本の親伊邪那美命の魂である故、其れを天より見澄して十柱の神が天降つたのである。此の十柱の神の総名を天理王命と云ふ。美伎の心は天理に叶へど人間に名を付け置かれぬ故此屋敷の因縁に依つて地名に天理王命の名を授け置く」

と。もつて彼女が尋常の婦人でなかつたことを知ることができる。

ミキ子は光格天皇の寛政十年旧曆四月十八日を以つて大和国山辺郡三味田に生れた。父

教であつて天理教は其の最後に表はれた宗教である。
之れを天理教々理に見るに「埃を払ふて誠を發揮せよ」と云ふのが天理教の根本精神であるが之れを仏教より云へば破邪顕正といふ言葉に相当するのである。此処に埃を払へと云ふことは大我を肯定せよと云ふことである。此の二つの活動は小にしては個人の生長大にしては人類の発達の上を避くべからざる必然の徑路にして此の二大宗教は即ち此の必然の徑路に於ける極端と極端とを代表するのである。
此の理由を以つて吾人は仏教の人類史上の価値を否定するものではないが之れを現代に布かんとするものに対しては時代後れと云ふものである。何故なれば時代の進歩は昨日もしくば一昨日飽食した飲食物が今日の空腹を充たし得ざるが如く二千年乃至三千年以前に吾人の靈の飢渴を医したものは最早や現代に於て何等の医力を余さざる為めである。
もし之れを知らずして否な感ぜずして二千年乃至三千年以前の人生問題の解決者たる釈迦や基督や孔子やソクラテスを捉へ来つて今日の複雑なる人生問題の解決を与へよと迫るが如きは其の人の靈魂は眠れるか？ 其れとも半睡半起の状態にあるものと云はなければならぬ。此の際現在並に将来の人生問題を解決し人類の長き靈の飢渴を医さんが為めに遣はされたるものが天理教々祖中山ミキ子である。此の意味に於て彼女の人類史上の地位は最も重大なるものである。

第三は瞬刻限である。
之れも地場と同じく天理教独特の宗教的術語であるが此処に云う瞬刻限は天理教立教の時節を云うのである。

御筆先に
今迄も何のよな道もあつたれど月日教へんことはないぞや
月日より大抵何かだんと教へて来たることであれども
此の度は未だ其の上の知らんこと何も眞実皆な云て聞かず
とあるが如く今日迄に世界に存在した宗教は拜火教拜石教拜木教動物崇拜教の如きものより仏教基督教儒教マホメット教天理教の如き高等宗教に至る迄皆神が人類の精神的發育の程度に應じて教へて来たものである。然るに此の度は人類の精神的年齢を一個人に例へて云へば十五歳となつた。人間十五歳と云へば一人前である。よつて此の度一人前の教を授けて人類を肉体的にも精神的にも独立した完全なる大人を養成するのであると云つてあるが瞬刻限とは即ち此の大人教育の時機に到達したことを云ふのである。

此の天理教立教の三大要素なる時と所と人とを天理教では「三因縁」と称して居る。之れは単に現在の天理教徒にとつて重要な点である計りでなく将来の天理教徒即ち全人類の忘るべからざる三大奇縁である。

以上述べたる所は「人生とは何んぞや？」と云ふ人類永遠の大問題と之れに向つて最後の解決を与へた天理教の如何なる宗教であるか？ 其の概要を述べたのであるが以下に述べんとする所のものは即ち世界最後の人生問題の最後の解決者たる天理教祖中山ミキ子が此の人類の大疑問に対する答案の研究である。

(元より織才微力の私が彼女の深遠なる思想を全解し得たるや否やは大なる疑問であるが少くとも其一部を彼女の思想として捕捉した得た所を現実生活の試金石と日常生活の飾にかけて精選したものである。もし多少なりとも其の中より人生の眞実味を発見することができらば私の今日迄の努力は全く無徒ではなかつた。もし夫れ彼女の思想の核心に達し彼女と全く同一標準の下に立たんとするが如きは唯神明の加護と不斷の努力とに待つのみ。)

第一章 人生の定義の変遷

人もし全世界を得るとも其の生命を失はば何の益あらんや？ 又何をもつて之れに代へんや？

基督

凡そ人間にとつて何が重大問題だと云つて生命其の者の問題程重大問題はあるまい。何故なれば生命は人間にとつて全部であるからである。彼の猶太の青年詩人が其の弟子に向つて、

「人もし全世界を得るとも其の生命を失はゞ何の益あらんや？ 又何をもつて之れに代へんや？」

と云つて警告を与へたのは其の実弟子に向つて警告を与へたのではなく全人類に向つて須臾も忘るべからざる一大問題に対する警告であつた。

古来日本の民族的格言に「生命あつての物種」といふ俚諺がある。けれども詩的性情はあつても哲学的性情は少ない。否、な更らにそれよりも宗教的性情の少ない日本人は折角の格言に形而上的意味を附与することなきが、なかにあつた。為めに折角の格言も今日迄皮相の意味に用ゐられて来たのである。けれども此処に基督が全世界を以つてするも尚交換することを肯んじなかつた生命はかくの如き浅薄なる物質的生命ではなかつた。彼の認めて無上無等々の絶対価値を附与した生命は火も焼くこと能はず、水も濡らすこと能はず、風も消すこと能はざる精神的生命である。

此の精神的生命に絶対の価値を発見したのは基督が最初の人ではなかつた。彼の前に釈迦あり、彼の後にミキ子がある。孔子すら「匹夫の志は奪ふべからず」と云つて生命力の絶対的權威を認めぬた。否、恐らく東西古今の聖賢と称せらるゝ人にして此の精神的生命の価値を認めない人はない。これは当然の事である。

けれども然らば如何にして精神的生命を生かすべきかの問題は個人によつて一様ではない。例へば釈迦には釈迦特独の生き方があつた。基督には基督特独の生き方があつた。孔子には孔子特独の生き方があつた。ミキ子には亦ミキ子特独の生き方があつた。而かも其の中には殆んど正反對の生き方をしたものがある。之れは主として各自の人生觀の相異と当時の時代思想の相異とに歸するものにして蓋し止むを得ざる自然の事実である。

けれどもつゞまる所人間には唯二つの生き方さへないといふことに歸着する。其の二つの生き方とは生欲（生命、自己）を肯定することと生欲を否定することとの二つである。此の二つの生き方の内其の何れを選択するかによつて積極的ともなり消極的ともなり樂天的ともなり悲觀的ともなる。けれども此処に一つの問題は然らば此の人生は或る人にとつては好むべきものであり或る者にとつては厭ふべきものであるとせば人類共通の生き方即ち人道もしくは人生律と云ふものはないであらうか？ 之れはある。けれども同じく一国の法律でも大宝令と現行制度と異なるが如く人生律（人道）にも亦不断的の改正が行はれて行くのである。従つて或る時代に於ては新思想であり、新人生の解決者であつた宗教、哲学も時代の推移は何時迄も其を新思想として立つことを許さないのである。例へば仏教である。其れは當時にあつては當時の凡ゆる旧道徳旧思想を排斥して立つた新思想であつた。けれども時代の推移は今日之を新宗教乃至新思想として許すものはないのである。従つて嚴格の意味より云へば一定不變の人生律（人道）なるものはないと云ふことができる。けれども其れは人道の形式的方面を觀察して其の實質的方面を閑却した論である。何故なれば一国の国法は時代によつて其の形式を異にするとは云へ国法の根本的精神即ち国民の幸福、国家の安寧秩序の保護と云ふ立法当初の精神は永遠に失はれないのである。人道即ち人生律も亦之れと同一である。即ち其の人道の形式は時代に依つて種々に變化すると雖も其の精神（最大多数の最大幸福）は變化することはないのである。之れは生命其の者に於ても同一である。

英の詩人は歌つて曰く

「我は變れど我は死なじ」

と。蓋し變化は宇宙の法則である。従つて其の進化せざるものは必ず退化するのである。古来各国各種の時代に産した多くの宗教の中に於て仏教程退化思想を多分に有したものはなかつた。又た天理教程進化思想を多分に有せるものはない。之れは天理教が他の宗教と異つて最も進歩的宗教なる所以である。

畢竟宇宙は永久無限の靈體、人間こそ向上進歩の活物である。常に進歩し、常に發達する。其れに依つて神の無限理想が實現せられたのである。現実の世界は神殿の仮普請に過ぎない。神は万物を進化し人間を淨化して更らに完全無欠の理想の神殿を建築するのである。ミキ子は之れを稱して「きりなし普請」と云つた。彼女の所謂心の入れかへ（人格改造）世のたてかへ（世界改造）は此の神の大理想實現の自然の手段、方法、順序である。

近世の宗教哲學者は宗教の目的は人格創造（もしくは人格教育）にありとして居る。天理教は即ち其の新人格主義の代表者である。

要するに宗教（人道、人生律）と人生との關係は之れを種々なる方面より説明することができるが最も平易なる解釈に依れば宗教は人生の精粹であるといふことである。之れを例へて云へば人生と宗教との關係は濁水と清水との關係である。現実の人生には多くの汚泥が混入して居る。其の中より汚泥を排出した純粹の清水が宗教である。

御神樂歌 十下り目の

三ツみづのなかないこのどろうはやくいだしてもらいたい

四ツよくにきりないどろみづやこゝろすみきれごくらくや

は即ち此の間の關係を説明したものである。

蓋し宗教生活（人道生活人格生活）は人生の精粹生活であり人生の徹底生活であり、人生の根本生活である。吾人々類は唯其の中に於てのみ眞の人生の意義及び価値を発見することができる。従つて宗教其の者は人生の標準であり、宗教生活其の者は人生の標準生活

である。これを例へて云へば宗教とは白金の尺度である。吾人々類の尺度は狂ふことがあつても神の作つた白金の尺度は狂ふことがない。唯時代の推移は鯨尺をもつて曲尺とするの相異なるのみ。

凡て宗教にあれ哲学にあれ倫理、道徳、政治にあれ其れが人生に対する使命は刻々に湧き出づる人生問題を解決して更らに未来に向つて向上発展の活路を開くにある。就中宗教其の者の使命は人生の根本問題を解決するにある。

古来人生に対して一定不変の定義を下さんと企つた精神界の賢者は雲の如くにあつた。

就中其の中に於て最も大なる人生の定義者は釈迦と基督とミキ子とである。

此の三聖の中人類史上に向つて一大光明を投じた最初の偉人は釈迦であつた。彼の人生に対する使命は宇宙の根元、万有の起源、人類の発生に対する根本的の説明を与へる為めではなかつた。彼の人生に対する使命は如何にして人類を現在の苦痛より救ふべきかにあつた。

彼は即ち人生の一切の苦痛の原因は生欲に対する過度の執着心でありとし人生の眞の快樂は唯其の執着心を去ることにありとした。彼は此の苦を断除する自然の順序として人生の無常と因果の理法とを説いた。

彼にとつて最大の敵は何処如何なる時に於ても自己の精神的平和を攪乱することであつた。彼が人生に対する一切の執着心を去つて独身生活隱遁生活を勧めたのは此の精神的平和の攪乱せられることを恐れたからである。彼は此の一切の外的欲望に蔽はれざる眞我の生活を称して涅槃と云ひ、其の状態を形容して眞如と云つた。蓋し眞は彼の求めた唯一の人生の目的であつた。其の証拠に彼並に彼の思想に依つて救はれたる者は何れも眞を攫んだ時云ひ換へれば本當の我に歸つた時である。之れは基督に依つて救はれたる人々が何れも最高の精神美を發揮した時に救はれ、ミキ子に依つて救はれたる人々が何れも人生の最高善を發揮した時に於て救はれたると同一の現象である。

かくの如くにして釈迦に依つては人生の完全なる客觀的定義は与へられなかつたとは云へ彼が人生の幸福は物質欲の満足の中にあらずして精神欲の満足にありとした大なる功績は没することができない。けれども彼が余りに現實的快樂を否定し社会的欲望を否定した結果として却つて大なる反動を精神界に惹き起した。基督教は即ち此の弊害を救ふべく表はれたのである。

之れは元より基督自身の自覺に依つて行はれたことではない。けれども神と人とにとつては全く偶然の事實ではない。時代の趨勢は自然と其処に到達して居たのである。

基督教の与へた人生の定義は基督の与へた次の言葉に依つて解決せらるゝものと思はれる。

「人もし全世界を得るとも其の生命を失はゞ何の益あらんや？ 又た何をもつて之れに代へんや？」

之れに向つて更らに積極的に具體的解答を与へたのが次の教法師と基督との問答である。

「爰に一個の教法師あり起て彼を試み曰けるは

師よ我なにを為さば永生を受くべきか？

イエス曰けるは

律法に録されしは何ぞ爾いかに読むか？

答へて曰けるは

爾心を尽し、精神を尽し、力を尽し、意を尽して主なる爾の神を愛すべし亦己の如く隣を愛すべし

イエス曰けるは

爾の答へ然り之を行はゞ生くべし」

即ち愛は彼及び彼の宗教の生命であつた。否な全人類の生命である。

即ち彼にとつて最大の罪惡は生欲に対する執着心（愛）の強大なることではなかつた。寧ろ其の欠乏にあつた。彼が神人の愛を高唱したのは其れは自己を殺す為めではなくて自己を永遠無限に生かすことにあつた。

彼にとつては個人的欲望は少しも厭ふべきものではなかつた。唯其れが小なる相對的個人的欲望に終ることを悲しんだのである。

彼は一生独身であつた。けれども彼は独身主義でもなければ厭世主義者でもなかつた。彼は明かに家庭生活を肯定し、社会生活を肯定した。今日の基督教國民が何れも家庭の熱愛者であり社会の熱愛者たる所以は彼の感化の与つて大なるものがある。此の点に於て彼の思想は仏教よりも寧ろ天理教に・・・・・

本當の我に歸へるの時

○ 生

人間は元来正直な動物である。其の証拠には社会に出でゝは几帳面だとか厳格だとか云はれる人でも其の家庭生活は存外寛大なものである。けれども人間の真相は独居の時に於て始めて発見することができる。云ひ換へれば独房は人間の真相を写す浄玻璃の鏡である。彼は其処にあつては寝たければ寝、起きたければ起き、自分の考へ通りの事を誰憚らず実行して居る。然るに偶然其処に一人の客が入つて来る。其うすると其の部屋の主人は俄かに周章てゝ今迄裸体の俛に横臥して居たのが俄かに衣服を着る。散らばつて居る室内を片附ける。而して今迄崩して居た姿勢をグツト引き直して忽ち厳格な態度に変つて来る。これが大抵の人間の生活である。

殊に此の独房の生活と対人生活との間に著しい區別を立てるのは婦人である。勿論彼等の中で一層馬鹿な婦人か其れともズバ抜けて偉い婦人は人が来やうが来まいが平気で有りその俛の天真な生活を営んで居るが其うではない普通の婦人になると急に髪を直したり帯を締めたり居住を直したりする。殊に其れが交際社会の婦人となると客に対する迄には化粧室へ一時間も牢居して折角急用の客に用を達させないで帰すやうになる。此等は元より極端の例であるが人間が人の前に我を飾ると云ふことに依つて何れだけの金銭と時間と労力を空費してあるか知らない。

例へて云へば盆とか正月とかに親戚知己朋友の間に贈答する形式的贈答品の如き其れである。此等は不断疎遠になつて居る交際を復活せしむる為めであると云へば云へるが無い算段までして形式的の贈答をしなければならぬと云つては其れは却つて親密を敵とするものである。

此の他誕生とか結婚とか死亡とかに際してはなくもがなと思はれる様な繁雑な虚礼が行はれて居るが此等は生活上の不便といふ点からでも自然廃止しなければならない。

けれども私の云ふ「本当の我に歸へるの時」と云ふのは此んな社会化せられた虚偽に就いて計り云ふのではない。吾人の日常生活に於て不斷に行はれて居る二重生活の弊害に就いて云ふのである。

私は感ずる。

吾人の眞の幸福は自分自身の中心の聲に依つて生きる時にのみあることを。實際私にとつて何時が一番危険な時であるかと云へば外部の聲に依つて中心の聲を攪乱せられる時である。其う云ふ時には平時休息して居た神経が周章しく働き出す。而して全力を尽して外部の聲を圧迫するのである。私が群居よりも寧ろ独居を愛するのは自分自身の中心の聲を愛するからである。

けれども此処に私が独居を愛すると云ふのは必ずしも一室にあつて我俛 我俛は自滅である。な生活を行ひたい為めではない。眞に自分自身の中心の聲を何人にも妨げられることなく聞き惚れたいからである。これは自分にとつて善いことであるか悪いことであるか知らない。けれども自分にとつては其う云ふ自分自身の聲に耳を傾ける時より幸福な瞬間を有しないのである。且つ又た人生の幸福は此の中にありと信じて居る。

私は教室に於ても或は公会堂に於ても教師の講義や弁士の演説を聴く時にも彼等の聲を聞いたことはない。何時も自分の講義や自分の演説を聴いて来た。此う云ふ性癖は随分外部に表れて強情とも云はれ独断とも云はれることもあるが其れでも如才がないとか伶俐だとか云はれるより余つ程自分にとつては優しである。

實際私は先天的に人に媚びたり人の機嫌をとつたりして少つと計りの財産や吹けば消える様な名譽を得ることの出来る人間には作られて居ない。其んなことをしやうたつても出来なければしても必らず失敗することはわかり切つて居る。其れよりも私は自分の中心の聲に聴き惚れながら一生を終りたい。

内に窮屈な思ひをして外に大きな顔をするよりも内に楽々とした自由な生活をしたい。これが私の唯一の希望である。

私は虚偽虚飾をして迄も一時の利益や一身の利益を計らなければならない人間のあることを見て身慄ひする。

外処行き言葉と外処行きの行為とは眞生活の呪誼である。

私の最も満足を感じずる時は平常の綿服を着て居る時である。もし止むを得ずして外処行きの着物を着なければならぬ時は私にとつては全く生きた心地がない。家に歸つて平常の綿服に脱き換へた時本当の我は復活するのである。

此の点に於て市中を散歩しながら妙想に耽つたユーゴーは幸福な一人であつた。

古来英雄と云はれ豪傑と云はれた人物にして其れが本当の英雄本当の豪傑であればある程自分自身の聲に生きた。此の点に於て嬰兒は天国に於ける最大の偉人であると喝破した基督の言葉は眞である。又た赤児の心になれと教へた釈迦三才心を定めと悟したミキ子の

言葉は真である。啻に彼等の言葉が真なるのみならず彼等の精神生活は真であつた。何故なれば彼等の凡ては皆な三才児の心（天真爛漫）に生きた人達であるからである。

然るに今日の人間は余りに人の顔色を読むことに巧みになり過ぎた。殊に社会の上位に野心を有するもの程巧みである。而かも三才児の心になれと人に向つて教えつゝある宗教家に於て其うである。

蓋し虚偽虚飾虚栄虚礼に馴れて了つた今日の間には本当の私の生活が如何計り自己にとつて貴いものであるかと云ふことを知らないである。かくの如くして彼等は平気で自己の真の幸福より日々遠かりつゝある。人生の最大悲惨事である。

けれども時は早晚彼等の上に来る。彼等は晚かれ早かれ一度は自分の眼にて物を見自分の耳にて物を聴き自分の鼻にて物を嗅ぎ自分の口にて物を語り自分の手にて物を作り自分の足にて立つて歩む時が来る。（今日の間は他人の眼にて見、他人の耳にて聴き、他人の鼻にて嗅ぎ、他人の口にて語り、他人の手にて働き、他人の足にて歩んである）其の時こそ真に救はるゝの時である。

要するに今日の人間は余りに他人の眼、他人の耳、他人の鼻、他人の口、他人の手足、他人の意志に支配せられ過ぎた。将来の人類は与へられたる自分の眼、鼻、舌、心、意に生きなければならぬ。私は各人の生活の上に其の時の一日も早く到来せんことを望む。何故なれば其処に人間生活の真味があるからである。否其処にのみ人間生活の真味があるからである。

（大正四年八月十三日）

天理教と家庭を流るゝ相反せる二個の潮流

大平 良平

凡そ人間にとつてシミジミと人生の情味を味はせるものは家庭である。然るに多くの場合家庭は人間にとつて幸福を与へる樂園ではなくて却つて苦痛を与へる地獄となるのである。否な寧ろ地獄の方が多いのである。これは云ふまでもなく家庭を組織せる庭員の思想が相尅して一致せざるが為めである。

御言葉にも

「親子でも夫婦の中も兄弟も皆銘々に心違ふで」とあるが如く人間は各々其の思想と要求とを異にして居るのである。（家庭とは即ち此の異なる思想と異なる要求とを以つて居る人間の共同生活である。）然るに此等の異なる思想と異なる要求とを有する人間が一軒の内に居住し各々其の要求を徹底せしめんとすれば其処に家族と家族との衝突は免かれないのである。

畢竟一家が和合して居るとか和合して居ないと云ふことは之れを云ひ換へれば家庭の各員の要求が満足されてあるか否かと云ふことに帰着する。けれども家庭と云ふものは元来一個の限られたる有限の世界であるから其の中の各員が自分のしたい放題の我儘を持ち出したらば其の家庭は破壊するより外はない。

例へば此処に強酒で錢使ひの荒い主人がある。彼は至る所に金銭を湯水の如く使ふ。其の結果は何うであらう？ 主人を除く他の家族の者は其の日の口を過すことも出来なくなるのである。而して其の家庭は遂に破壊する。之れは当然の事である。何故なれば一家の経済には限りがあると共に人間の勢力にも亦限りがあるからである。勿論之れは極端なる一例に過ぎないが普通財産とか地位とか名望とかの点に於て何不自由なき家庭が屢々破壊の悲劇を見るのは何の為めであらうか？ これは極端なる物質的欲望の充實を計る為めではなく寧ろ精神的欲望の相異より来るのである。例へば夫は平民的思想を有して居るに干らず妻は貴族的思想を抱いて居るとか夫は進歩的思想を抱いて居るのに妻は保守的思想に囚れて居るとか夫は利他的思想を奉じて居るに干らず妻は利己一点張りであるとか云ふ時には其処に思想と思想との衝突を来し引いて一家の破壊を免かれないのである。彼の比較的教育ある上流社会に頻々として起る不祥事の中には確かに此の種の分子の多分に含まるゝ事を想像することができる。

此等家庭の不祥事は世界至る所に於て屢々発見する事実であるが更らに一つの家庭の悲劇は新思想と旧思想との間に起る所謂新旧思想の衝突の悲劇である。これは何処の家庭でも多少の気分は認められる。けれども其れが悲劇となつて破壊の火花を挙げる所は真に稀である。何故なれば大抵の家庭にあつては新思想と旧思想との旗色が鮮明でないからである。之れに反して一家中に於いて新思想を抱けるものと旧思想を抱けるものと其の生き方が深刻であればあるほど其所に大なる距離を生ず距離はやがて一家分散の基となるのである。

けれども此所に一つの重要な問題が潜んで居る。其の問題とは即ち個人的欲望が大切であるか？ 家庭的欲望が大切なるかの問題である。此の問題の解決がつけば家庭問題も自然に解決がつくのである。

天理教では普通家庭の種類を因果律の上より

一、味方の因縁より成立せる家庭

二、敵の因縁より成立せる家庭

との二種の家庭に區別して居るが之れを今日の言葉に言ひ換へれば

一、同一もしくは類似の欲望の結合

二、反対もしくは別種の欲望の対立

と云ふことになるのである。吾人が此所に問題とする所の者は主としての後者の家庭である。

古来東洋では家庭をもつて神聖にして侵すべからざる人生の主権者のごとく信じてきた。「而かも其れすら仏教に破れた。これは当然の事である」其れが為めに個人の幸福は往々犠牲にせられてきたのである。例へば一家の生活を支持する為めに娘をして醜業を営ましむることを以つて大なる罪惡とせざりしが如き其の一例である。此等は其の結果は良くなかつたとは云へ其の目的は必ずしも悪なりと云ふことはできない。何故ならば人間は時として自己の要求を他人に依つて充実せらるる如く又時として他人の犠牲となつて他人の要求を容れなければならぬ時がある。此の互ひに助けつ助けられつ利用し利用せられ、犠牲とし犠牲とせられつ生活してゆくことは宇宙の法則である。

蓋し家庭は一個の小社会である。其れを継続発展せしめるには各員の共同一致の愛と努力とに待たなければならぬ。これやがて家庭の各員をして幸福ならしむる所以である。事實一家の心が一致して居る家は財産に名譽に事業に着々歩をすゝめつゝもある。之に反して一家の心の分裂して居る家は所謂「権兵衛が種蒔けば鳥がほじくる」の愚を日々演じつゝある。従つて其の家は社会的に退歩するとも進歩することはないのである。かくの如く個人の意志が一致すると分裂するとは単に自分一個人のみならず家庭の全員の幸不幸に關する問題であるから一家の負担に耐えない過度の要求をすることは家庭並に家庭道德の破壊者となり引いては自分一身の破滅の原因を作るのである。

けれども物には大小本末がある。其れは個人の欲望が更らに大なる団体的欲望を実現する為には屢々犠牲となるが如く家庭的欲望も更らに大なる人類的欲望神の欲望を実現する為には屢々犠牲となるのである。此の場合に於いては家庭的欲望の如きは第二義的欲望にして個人の幸福が家庭の幸福の為めに犠牲となるが如く家庭（少数者）の幸福は人類的幸福、神の幸福のために犠牲となる。これが自然の順序である。

従つて吾人は一概に吾人の要求を家庭のために犠牲にすべき所謂はない。時として犠牲にしてもより大なる人類的欲望神の欲望に殉ぜざるべからざる場合があるのである。

一行抜ける 職

て従つて其を培養する田畑である。もし然らずして家庭並に国家もしくは社会が個人の生欲の墓場であり牢獄であつたならば吾人は殊更家庭を組織し国家もしくは社会を組織する必要がないからである。従つて吾人が家庭に於て国家並に社会に於て自己の要求を充たさんとするは当然の事である。けれども其れには一つの条件が付帯して居る。其の条件とは即ち「人を助けて我が身助かれ」と云ふことである。之れを云ひ換へれば自己の要求を充さんとせば先づ他人の要求を容れよと云ふことである。更らに云ひ換へれば自己の權利を主張せんと欲せば先づ自己の義務を盡せと云ふことである。

此の實行を伴はずして徒らに自己の要求のみ主張せんとするが如きはこれ家庭道德の破壊者社会道德の蹂躪者と云はざるを得ないのである。

何れにせよ利己主義者は共同生活の破壊者である。其れは家庭の幸福を破壊する計りでなく社会の幸福を破滅するのである。其の証拠には一家もしくは一国の不幸は多く其の内外的利己主義者によつて起つて居るからである。

例えば夫は汗水を流して働くのに妻は毎日お化粧して箸の倒れたのも起さぬとか妻は内にあつて台所に燻ぶって居るのに夫は毎日贅沢の仕放題をして内を外に飛び歩いて居ると云ふが如き家庭の不和合の原因は十中の八九迄其の分子中に自己の要求をのみ充実することを考へて他人の要求を容れないと云ふ利己主義者より起るのである。従つて、もし一家もしくは一国の全員が挙つて共同生活の精神一互ひ立て合ひ助け合ひの精神一を發揮したならば家庭乃至国家の不幸はありえないのである。従つて「互ひ立て合ひ助け合ひの精神」は人類相互の幸福を開く鍵である。

一例を挙げて云へば家庭の幸福の為めに頑張り力の限り働く勤勉なる主人がありとせよ。其の家は家族は此の主人に向つて決して不平を云ひ得ないであろう。勿論之れは其の労働の価値も小であるがこれは凡て一家に荒れ一国にあれば、其の国家の進歩発展は其う云ふ時に於て見られるのである。（天理教の最も発展した時も皆此の共同一致の精神に生きた時であつた。）

畢竟一軒の内に贅沢な人間貴族的の人間があつて其の家庭の幸福を毀損すると云ふのは其の者に自分さへ幸せであれば良いと云ふ利己心と他人に対する同情心の欠乏とに基因す

るのである。もしも真に其の者には自分に人とつて苦痛なるものは他人にとつても同時に苦痛で
あり自分とつて快樂の上なる安座の利便がある。他人を離れんと欲するに無情高き人類的地位より同情（同情のあるが
分は絹布の如き処にある。愛悪と同情（一名誠といふ愛とを結合する不思議の糸である。其れは火を水とし、水を火とす
衝の如き処にある。愛悪と同情（一名誠といふ愛とを結合する不思議の糸である。其れは火を水とし、水を火とす
とある。愛悪と同情（一名誠といふ愛とを結合する不思議の糸である。其れは火を水とし、水を火とす
反感増すに同情（一名誠といふ愛とを結合する不思議の糸である。其れは火を水とし、水を火とす
要するに同情（一名誠といふ愛とを結合する不思議の糸である。其れは火を水とし、水を火とす
個の相反せる思想と思想とを結合する不思議の糸である。其れは火を水とし、水を火とす
る魔力を有して居る。一家の不和を繋ぐものも同情であり一国の不平を繋ぐものも同情で
ある。全世界に於て同情に繋がる何物も必要であらう。足納も必要であらう。互ひ助け合ひも必要であ
の幸福を繋ぐ上には発散も必要であらう。けれども其れ等は同情即ち愛即ち誠の化現に外ならない
らう。日の寄進も必要であらう。けれども其れ等は同情即ち愛即ち誠の化現に外ならない
のである。

従つて吾人は先づ一家の中の反対思想云ひ換へれば反対の思想を持つた家庭の各員の要
求を十分に吟味し其れが真に容れ得る要求であつたならば喜んで之れを容れることに力
めねばならぬ。これが吾人共同生活者の相互の義務である。唯願くば其れをもつて単なる
冷かなる倫理的の義務とせずして真に愛と愛との結合たらしめんことである。何故なれば
人生の真の人情は唯其の中にのみ発見することができるからである。

（大正四年八月十四日）

小我の否定と大我の肯定

大平 良平

凡そ人類の人格的生長の階段に三つの時代がある。曰く小我の時代、曰く無我の時代、
曰く大我の時代である。これは天理教の新生面並に天理教々理より見たる人生の意義及び
価値の中に其の一端を述べて置いたが事吾人々類の生命に関する最も重大問題であるから
此処に再び此の問題を繰返して吾人々類の人格的発展の経路を明かにしたいと思ふ。善
古来如何なる宗教でも如何なる道徳でも殆んど異口同音に悪をなす勿れと云うこと、善
をなせと云ふことを云つて居る。之れは人類共通の目的である。天理教では之れを埃を払
つて誠を發揮せよと云つて居るが此の点に於て何等旧宗教旧道徳の精神と異なる所はないの
である。唯旧宗教乃至旧道徳と異なる所は其の内容に於て其の形式に於て一層完美したとい
ふことである。

然らば善とは何んぞや？ 又た悪とは何んぞや？ 善悪に大小の差別ある所以は如何？
これ吾人にとつて重大なる研究問題である。

普通世間では善とは吾人に幸福を与へる者であつて悪とは吾人に不幸を与へるものであ
ると云ふ風に解して居るが人生の最高善とは何うしても最大多数の最大幸福を助けること
であらねばならぬ。此の反対に人生の最大罪惡とは最大多数の最大幸福を破壊するもので
ある。

其れで問題は移つて人格の大小の問題に及ぶ。普通彼の人はいかゞ偉い人間だとか詰らぬ人間
だとか云つて居るの之れを云ひ換へれば偉大なる人格であるとか狭小なる人格であるとか
か云ふことになる。更らに云ひ換へれば大我的人であるとか小我的人であるとか云ふこと
になるのである。然らば如何なる人が大我的人であり如何なる人が小我的人であるか？
この區別は理論の上では明かなる區別を立てることが出来るが実際に於て之れを識別する
ことは甚だ困難の問題である。何故なれば大我であるとか小我であるとか偉大なる人格で
あるとか狭小なる人格であるとか偉い人間だとか詰らぬ人間だとか云ふことは比較的の言
葉であつて実際に於て大小の二種の人物が存在する訳ではないからである。

けれども之れ丈のことは感ずることも出来れば又た云ふこともできる。其れは一身の
利害を思ふものよりは一家の利害を思ふものよりはより偉大であり、一家の利害を思ふものよ
りは一村の利害を思ふ者よりはより偉大であり一村の利害を思ふ者よりは一郡の利害を思ふ者
よりはより偉大であり、一郡の利益を思ふ者よりは一県の利害を思ふ者よりはより偉大であり、一
県の利害を思ふ者よりは一国の利害を思ふ者よりはより偉大であり、一国の利害を思ふ者よ
りは全人類の利害を思ふ者よりはより偉大であり全人類の利害を思ふ者よりは神の利害を思ふ
ものはより偉大である云ふことである。之れを時間的より云へば一時の利害を思ふ者よりは
一日の利害を思ふ者よりはより偉大であり、一日の利害を思ふ者よりは一月の利害を思ふ者
よりはより偉大であり、一月の利害を思ふ者よりは一年の利害を思ふ者よりはより偉大であり、一
年の利害を思ふ者よりは百年の利害を思ふ者よりはより偉大であり、百年の利害を思ふ者よ
りは千年の利害を思ふ者よりはより偉大であり、千年の利害を思ふ者よりは未来永遠の利害を思

ふ者はより偉大である。神とは即ち此の時間と空間とに亘る永遠無限の絶対生活者である。

古来英雄だとか豪傑だとか聖人君子だとか云ふ大偉大の人物が雲の如くあつた。けれども其の中多しに徹底的に要する間ではないは即ち之れは

之れを警へし。其の如き然らばかとして庭潜く考へ一度はけれどもた壊つて我と異は利己的

然らばかとして庭潜く考へ一度はけれどもた壊つて我と異は利己的

然らばかとして庭潜く考へ一度はけれどもた壊つて我と異は利己的

然らば無我の状態である。従つて破壊を重ね即ち旧思想が倒れて

然るに宇宙の眞実を無視して凡俗の歡心を買はんが為めに天理教を改悪し

古来何時何処の地の人によつて破壊なしの新建設の行はれし例ありや？

唯彼女が過去の既成宗教が人生に与へた功績を認めて之れを尊重した

凡そ否定と破壊とは無数の種類がある。今其の一の重要な一二を挙げれば

一、言論の否定（破壊）

二、思想の否定（破壊）
三、行為の否定（破壊）

の如き其の主なるものである。

一、言論の否定の如きは必ずしも事実と何等の関係はない。二、思想の否定即ち心中の否定も亦其のうである。けれども無言の行為の否定はこれ争ふべからざる否定である。ミキ子は即ち凡ゆる旧思想旧道徳旧宗教に對して無言の否定を行つた人である。此の無言の否定を無視して唯に言論の上より之を論ずるが如きは余りに幼稚なる見方と云はなければならぬ。況んや彼女は明かに其れを言論乃至思想の上に其れを發表せるに於てをや。即ち

今迄も何のよな道もあるけれど月日教へんことはないぞや
月日より大抵何もだん と教へて来たることであれども
今度はまだ其の上の知らん事何も眞実皆云ふて聞かす

と云ふ消極的否定並に
今迄のことは何にも云つてくれな廿六日の始めかけるで

と云ふが如き積極的否定及び

今までは万世界は上のまゝもうこれからは文句變るで

の如き政治的革命思想

今迄は唐や日本と云ふたれどこれから先きは日本ばかりや

の如き地理的革命思想

これからは世界中の胸の中上下ともをわけて見せるで

これをみよ世界も内もへだてない胸の中より掃除するぞや

の如き精神的革命思想の如き至る所に発見することができる。わけて「埃を払ふて誠の心になれ」と教ゆる天理教の根本精神はこれ革命の破壊の聲にあらざる何んぞや？ こなれをしも破壊にあらずと云はば天下何物か破壊なるものもあらんや？ 吾人は彼の破壊なしの建設と云ふが如き机上の空論に賛成する能はず寧ろ破壊而かも根本的に現在の自己並に社会制度を破壊せよと叫ばざるを得ない。何故なれば眞の建設は根本的に破壊と相待つて始めて行はるべきものであるからである。一部の破壊や一部の改造の如きは到底吾人の中心の要求を満足すること能はざるなり。況して破壊なしの建設をや。之を例へて云へば破壊なしの建設を夢想するものは旧宅を破壊することなしに其の屋根の上に新宅を立て、峠に登らずして次の麓に降らんとするが如き類である。其の間何等現実界の事実を捕捉して居ないのである。

眞の天理教の道は障礙物を其の俛放棄して迂廻して行く道ではない。罪惡を隠蔽しつゝ君子面して通つて行く道ではない。障礙物があつたならば障礙物を除去し罪があつたならば中心より懺悔して進んで行く道である。即ち困難を困難として回避して行く道ではなく困難を打破して之れに打ち克つて行く道である。其処に眞の人格の生長と発展とがある。之れを例へて云へば絶えず人格の生長に向つて努力する者は恰度賽の河原の子供と同様である。朝に信仰の石垣を築いて夕に其れを破壊しつゝあるのである。けれども不斷の努力は彼をして一つの人格を建設せしめずに終ることはない。唯其の人格に大小のあること恰かも人間の家に大小あるが如し。

けれども自分の望は小なる茅屋の主人として一生を終る考のない如く小さな人格の主人として一生を終る考もない。云ひ換へれば世間の所謂「自分の家」なるものを持ちたくなぬ。又た、世間の所謂「個性」なるものを持ちたくはない。私の持たんとする家は世界である。私の持たんとする人格は神格である。

見よ自分の行く所建て並ぶ家屋は凡て我が家である。見よ自分の行く所至る所に展開して居る自然は我が庭園である。豈に全世界の善美より見ては尚ほ豚小屋に均しき王侯貴族の邸宅を求めんや。これ自分自身に与へられたる特権であると共に眞の信仰に生活しつゝあるものに与へらるゝ特権である。此の大なる特権こそ私をして今日迄自己の所屬として附与せられた凡ゆる地位財産門閥名譽を捨てしめたのである。乞ふ彼の詩人、哲学者、宗教家の住家の矮小なるを以つて卿等よりも貧なりとなす勿れ。彼等には俗人の入ることを禁ぜられたる広大無辺の邸宅と善美の極致を極めた庭園とがある。従つて世界に於て最も貧しきものは彼等ではなくて彼等の快樂を分ち得ざる俗人であるのである。

けれども均しく詩人、哲学者、宗教家と雖も尽く自然（神）の邸宅と自然の庭園との快樂を味ひ得るものではない。唯眞の詩人、眞の哲学者、眞の宗教家のみ味ひ得るのである。而かも神格の絶対境に達したる詩人、哲学者、宗教家のみが。従つて吾人にとつて一刻も怠るべからざることは人格の開拓である。（人格の開拓は自己の世界の開拓である）其れには常に昨日の小我を否定して今日の大我を建設し、今日の大我を否定して更らに大なる明日の大我を建設して行かなければならぬ。これが吾人々類に与へられたる唯一の事業である。彼の地位財産名譽の如きは此の人格の附屬物である。従つて吾人は朝起きて

夜寝る迄与へられたる唯一の仕事（人格修養）をなすべきである。而して他の附属物（地位、財産、名誉）に就て思を悩まざるにある。

唯慕地に神が新たに立てたる最後の目標 中山ミキ子 を目掛けて進め。夢にも前後を顧み左右を慮るなかれ。何故なれば手を鋏につけて後を顧みるものは神の国に叶はざる者であるからである。

吾人神国（神格）の開拓者は唯次の一語を知れば足るのである。曰く
掘れ、掘れ、掘れ、掘れ

と。

蓋し掘つて掘つて掘り抜いた処に無尽の泉（大神格）があり行いて行いて行き詰つた処に無上幸福の国（甘露台）があるからである。

（大正四年八月

十五日）

光明生活の第一歩

R O 生

吾等は凡て皆憐れむべき小なる自己を脱した時其処に何物にも煩はせられざる愛と力と光の生活の待つて居ることを知つて居る。けれども吾人の中の誰か白熱せる光明生活の真唯中に投じて愛の魅力を振つたものがあるか？ 吾人は近世に於て僅かに中山ミキ子と其の高弟の二三に就て之れを見るのみである。

憐れむべき吾等凡人は太陽の靈光に眩惑せられて其の白熱せる光明の真唯中に入り得ず徒らに其の周囲を廻転して時間を空費して居るに過ぎない。けれども時は迫つた。其の時吾等は一つ一つもぎとられて最後の残つた未熟の果物の悲、又其の友人は一人づゝ結婚して最後に残されたる独身者の悲、其の学友は一人づゝ卒業して自分のみ最後に残されたる落第者の悲を味ふべき時は迫つた。此処に於てか吾人の精神は苛立ち吾人の靈魂は悶く。けれども吾人は深夜泥溝の中に陥つた失脚者の愚を見ざる為に静かに夜の明けるのを待たねばならぬ。太陽は必ず自分の為めに一日の光を貸すことを惜まないであらうから。

憐れむべき私は枝に取り残されたる最後の未熟の果物の感と家に取り残されたる最後の独身者の感を永らく味つて来た。けれども時は私をして地上に落ちさしめ時は私をして独身者の悲を解いた。けれども其れと同時に恋の盃の如何に苦きものであることをも知つた。これは勿論自分の信仰の譬喩である。

世の愛と信と望とを真に味つたことのない人間は其れが如何に華々しき幸福の生活であるかの如く空想して居る。けれども誰も真の愛を胸に感じ、真の信を胸に握り、真の望を胸に抱いて居る者の苦みを知らない。

吾人は元より一歩一歩完成せられつゝ行く自己の人格の生長して行く姿を見ては中心の微笑を禁じ得ざるとするも同時に其れに付き纏ふ努力の影を見失ふことはできない。

女子を生む時新しき我の生まるゝ喜びの為に眼前の苦に向つて眼を閉づるとも其は苦痛を拭ひたるにてはない。忍ぶのである。彼の偉大なる宗教家が靈の新児を生む時の苦痛と歡喜も亦之れに均しいのである。

私は近頃故飯降御本席の逸話を其の愛嬢より聞いた。教祖没後彼は天啓に依つて本席と云ふ重大な職を継いだけれども其の晩年に於て身上に次ぐに事情をもつてし到底老後の身体其の苦に耐へざるを思ひ教祖に身上の引き取りを願ふと教祖は之れに向つて次の答をせられた。

「お前一身は其れで良からうが可愛い子供を何うして呉れる。子供の為めに幾ら苦くても踏ん張つて呉れ」

と。御本席は此の一言に感激して再び老軀を提げて世界救済の大事業に歸つたと云ふことである。

世の信仰の浅き者は信仰の大なる者の胸には大光明のあることを知つて居る。けれども大なる信仰の裏には大なる懷疑を伴ひ、大なる希望の裏には大なる失望を伴ひ、大なる愛の裏には大なる憎を伴ひ、大なる歡喜の裏には大なる悲哀を伴ひ、大なる満足の裏には大なる不満を伴ひ、大なる光明の裏には大なる暗黒を伴ふことを知らない。彼の机上の哲学者机上の宗教家が実生活に於て挫折する第一の原因は此処にある。

私は元より信仰の初学者である。従つて大なる光明生活の不斷の歡喜を知らない。けれども有難いことには真の信仰とは古い物語の中に画かれたる所謂高僧智識の生活の如き安逸なものではないことを知つて居る。これは第一に神に謝せねばならぬことである。

要するに信仰は物見遊山ではない。神聖なる精神的労働である。唯其れが懷疑と異なる所は懷疑は常に人生の暗黒面（欠点）に向つて精神を活動せしむるに反し、信仰は常に人生の光明面（美点）に近く面して進むにある。元より人生の暗黒面に対して故意に目を閉づ

るの謂ではないのである。

其の証拠には古来偉大なる信仰家は凡て皆社会の暗黒面に対する大なる洞察者であつたことである（釈迦然り、基督然り、ミキ子然り）。けれども人間は元来光を喜ぶ動物である。其は永く人生の暗黒面を凝視するの苦痛に耐へない。為めに漸次暗黒面に眼を閉ぢて強いて光明面のみ見んとするに至るのである。けれども眞の偉人のみは其うではない。彼は人生の暗夜を通りつゝも尚ほ光明に達する道を失はない。蓋し吾人々類の生命にとつて最大急務は一日も早く人生の暗黒面を切り開いて光明面に面せんことである。而して其の第一の幸福は眞善美を愛すると云ふことである。これが光明面に向つて生命を引き出す第一の牽引力である。此の第一の信條に従つて正面の力を出して行つたならば醜惡偽は自ら影を後へにかくすであらう。人生の快樂（光明、喜悦、満足）は其処にあるのである。唯呉々も吾人の注意しなければならぬことは上滑りのした光明に欺かれざることである。これが吾人光明生活に向つて第一歩を踏み出さんとするものにとつて第一の警戒である。

（大正四年八月

十五日）

教界の廓清（一）

大平 良平

私は新宗教七月号に第二天理教界革命の書を書いて暫時天理教の成行を静観せんと考へて居た。けれども目下の天理教界を見るに大小の塵埃が渦巻いて到底私の静観を許さない。よつて私は此処に再び立つて天理教界最後の廓清を帰せんとす。元より一身の利害は私の問ふ所ではない。唯身命のあらん限り一意もつて神意に奉答せんのみ。「汝いとけなき時みづから帯し意に任せて遊び歩きぬ。老ては手を伸べて人汝を束り意に欲はざる所に曳き至らん」基督今日の私は基督の所謂「汝いとけなき時みづから帯し意に任せて遊び歩きぬ」の時代の私ではない。「老ては手を伸べて人汝を束り意に欲はざる所に曳き至らん」の時代の私である。凡ては神意の俣なり。私は唯以心伝心の神の声を人に伝ふるのみ。敢て自ら帯して我が意に任せて遊び歩かうとは思はないのである。況んや鷄鳴かざる前に三度己が師を否定したペテロをや。これ吾が心の奥底に固く秘められたる信仰である。

其れに就て一般信徒未信徒に向つて一言して置かなければならぬことはシユンは近いたといふことである。之れに就ては一部の反対論者がある。けれども其等の人々を信ずる勿れ。何故なれば彼等は何れも己が臀の焦げる迄出火を知らざる近眼者流であるからである。わけて善にも移り易く又た悪にも移り易き比較的純なる青年天理教徒に望む

「悪言に誘はれぬ様。悪風に染まぬ様」

と。實際今日の天理教は墮落に墮落を重ね腐敗に腐敗を重ねて居る。今にして救はずんば到底如何とも手を下す能はざるに至るであらう。敢て心ある人の奮起を望む所以である。

信徒の掠奪

天理教の根本精神は人心の救済にある。さればこれを称して助け一條の道とも云ひ人助けの道とも云つて居る。これは教界の何人も知つて居る所である。然るに今日の天理教会を見るに其の多くは人を助けるにあらずして却つて人に助けられんことを求めて居る。此の墮落せる精神の生む所の結果は何うであらう？ 其は俗界に於てさへ見るべからざる戦慄すべき事実を生みつゝあるのである。就中信徒の掠奪の如き其の一例である。

私は曾つて利己的布教者と題して布教者の中には一人でも多くの信徒を作つて教会の経済的基礎を固め兼て自己の生活上の保証を作るを目的とせる布教師の多分にあることを云つて置いた。實際彼等の心中を解剖するに浅間敷いとも情ないとも言葉に云ひ尽されぬ戦慄すべき精神が動いて居るのである。而かも一刻の間断なしに。其の戦慄すべき精神とは世間に一人でも多くの病人があり一人でも多くの不幸者のあることを希望する心である。此の浅間敷き精神に生きて居る布教者にとつては他人の作つた信徒を掠奪するが如きは寧ろ日常の茶飯事である。

けれどもかくの如き俗界に於てさへ見るべからざる醜惡卑劣の行為を行ふものは日常の衣食にさへ窮して居る単独布教師の間にのみ行はるゝ仕事ではない。随分大なる教会と大なる信徒を有する大教会、分教会支教会の間に最も頻りに且つ大胆に公然と行はれつゝあるのである（単独布教師を窃盗とすれば之れは確かに強盗である）。殊に此の種の弊害の最も激烈に行はれつゝある所は三都を始めとして其の他之れに次ぐの大都市に於て最も多

い。天理教界の大なる恥辱である。抑も此の道は同じ同胞教会の信徒をまでも取つて自分の教会さへ盛大にすれば良いと云ふ様な道ではない。信徒にしてもし迷児となつて居る者があはせずして却つて何等の不平なく之れを悟して返してやるのが天理教道である。然るにさば贈物をもつて之れを自己の教会に引き寄せんとするが如きはこれ兄弟同志の勢力争ひにあらざりて何んぞや？ 而かもかくの如き卑劣なる利己的精神を以つて而かも尚ほ人心を救済し得べしと信ずる者あらば吾人は余りに其の乱暴に驚かざるを得ないのである。蓋し道の眼目は其の事業よりも其の精神にあるのである。其の精神にして既に金点を逸せんか偶然一時の成功は期し得べしと雖も其の最後に於ては憐むべき結果に墮するや云ふまでもない。之れに反して一時の成功は左程華々しくなく共眞実の精神をもつて何処迄も順序の道を歩むものには最後の成功や期して待つべきである。要するに此の道は互ひ立て合ひ助け合ひの道である。兄弟皆一致団結して世界の精神的救済に熱中するのが当然の行為である。然るに肝心の兄弟同士が鎬を削つて信徒の掠奪戦を行ふが如き状態にては到底道の発展は期して望むべからず。蓋し天理教界が今日の如く素乱を来した様々の原因は一日も早く一人も多くの信徒を作つて安心の地位に立ちもつて諸人より渴仰せられんとする天理教利用の野心家の流した害毒の伝播せるに基因するのである。彼の自分の信徒には厚くして他の教会の信徒に薄きが如きも今日は互の独立を尊重すると云ふよりも自分にとつて直接損失こそあれ利益はないと云ふ利己的精神より生れたのである。

之れに対して私の希望を遠慮なく述べれば形式的には教会詰所の区別はあつても精神的には何等彼我の区別を立てざることである。而して何れの教会も自分の家とし何れの会長をも自分の親族として自由に眞理の討究を行ひ得せしめるにある。これがやがて教祖の希望した教会制度である。此点より見て現在の教会制度わけて信徒の掠奪といふが如き非人道的行為には絶対に反対せざるを得ないのである。敢て全国の非天理教的天理教布教師の反省自縛を祈る所以である。

テンプラの天理教

世間では天理教も偉い物を建てた。偉いものだと云ふ天理教の内部では其れを本当に眞に受けてさも／＼偉い者に成り切つた様に思つて居る。何んぞ知らん其れは魂の抜けた金仏の天理教であらうとは。

成る程草生えの中にスポツと立つた六畳と八畳の二間の勤め場所と今日の神殿とを比較したならば見た眼には立派であらう。けれども之れを立教当時の教祖並に其の弟子の精神中に建てられたる無形の神殿と比較せば如何に憐れにみすぼらしいことよ！

之れを例へて見れば金の為めに舞台上につて舞つたり跳ねたりする役者の様なものである。又之れを例へて見れば金鍍金をした鉛の時計の様なものである。表より見れば金光燦爛として目を欺く計りであるけれども其の實質を見れば憐れむべし小供の玩具に作られた鉛の時計であらうとは。之れが浄玻璃の鏡にかけて見たる今日の天理教の眞の姿である。

凡て成り上り者の常として其れが眞に自分にとつて価値のあるものであるかないかを檢せず人のするわけて旧家とか名門とか云ふ者のすることを真似たがる癖がある。今日の天理教も其うである。何んでも錆の附いた様な型は仏教でも神道でも選まずに盗んで来て自分の身を飾つた。恰度巴里の場末の劇場に出演する女優が一夜借の衣裳をもつて観客の眼を欺くが如くに。こうして一個立派な成金が出来た。けれども之を家庭の内部に入つて觀察すれば成金は成金だけの実質さへ有しないのである。為めに沐猴にして冠せるの滑稽を見ること屢々である。わけて其の新思想を旧思想の盆に盛らんとする手つきに於て其れを見るのである。基督の名句に「新き布を以て旧き衣を繕ふ者はあらず蓋はつくらふ所のもの反つて之れを破り其の綻び最も甚だしからん。又た新しき酒を旧き革囊に盛る者はあらず若ししかせば囊張り裂け酒漏れ出で、其囊も亦壞らん。新しき囊に新しき酒を盛りなば兩つながら保つべし」

と。天理教は其出发点に於て確かに誤つて居る。彼は最初より新しき酒を新しき革囊に盛ることを力めなければならなかつた。然るに輕薄にも其の實質の完成に力めずして其の形式の完成を急いだ為めに遂に今日の如く名実相伴はざる醜態を暴露せざるべき場合に到達したのである。

けれども此の道は教祖御遺訓にもある如く「口先きの追従ばかり」の道ではない。又た外の錦を飾る道でもない。「眞の心に誠を養ふ道である。内の錦を飾る道である。この根本的精神を忘れて形式の完成（而かも借衣）に苦心した所が結局得る所のものは何物であらう。

諺に曰く

「人の借衣するものは途上にて剥がるることあり」と。私の今日の天理教に向つての希望は一日も早く自分自身の礼装を作つて途上に醜骸を曝すの愚を免かれんことである。

天理教を中山家より独立せしめよ

昔は家元とか本家とか云ふものがあつて代々一つの技術を独占私有して来た。時代の進歩は漸次此の弊風を打破しつつありとは云へまだ全然除去せられたのではない。今日の天理教を見るに恰かも此の古い陋習を繰り返へしつつあるかの観がある。

元より教祖は中山家の主婦であつた。けれども之れを天理教祖として見る時は彼女は既に単なる中山家一家の主婦ではなくて世界の主婦となるのである。即ち此の時代には天理教即中山家の宗教即世界の宗教の一元的時代である。けれども其の後教祖の昇天後

表大工に裏鍛冶屋の天啓に依つて天理教は二元的となり正法の伝統は高弟飯降伊蔵氏が継ぎ像法の伝統を故中山新治郎氏が継いだ。かくの如くにして天理教は内部に向つて発展する潜勢力と外部に向つて発展する表現力との二つに分たれた。

其の後屢々降つた天啓の中に「中山家盛なれば飯降家盛、飯降家盛なれば中山家盛。此の両家は末代天理教の存続する限り道と生命を一にすべし」といふ意味の天啓があつた。

然るに其の後飯降御本席の昇天するや天理教の主権は中山家に移つて飯降家は見るも憐れな鳶の様になつたのである。これには勿論飯降家にも欠点はある。けれども其れと同時に中山家にも亦落度がないと云ふことはできなかつた。かくの如くにして神が両眼両耳両手両足とした飯降家と中山家とは今や各々単独の行動を取るに至つた。これは心ある人の秘かに悲しむところである。

無神経な人間はこれをもつて世間有り勝ちの勢力争ひの類として看過するかも知れない。けれども天理教界の今日の分裂は実に此の両家の分裂にあることを神ならずして誰れも知るものはないのである。かく見來つたならば此の両家の感情の離隔は世間有りふれた尋常事として看過することは出来ない。依つて此処に吾人の齒に絹きせぬ偽らざる希望を述べれば両家共世界一列兄弟の心になり今日迄の私情を洗つて相提携して道の為めに奮奮努力せられんことである。これぞ神と教祖並に御本席の意に應ふる所以である。もし其れが円満に成就したならば或は分裂に分裂を重ねつゝある天理教界を昔日の統一状態に帰す因縁となるであらう。(元より今日の中山家並に飯降の提携が直接道の上に大なる効果を生ぜずとも此の両家の共同一致はやがて道の共同一致の原因となるのである。)これは心に感じつゝも誰も中山家を憚つて云ふものがないから特に云つて置くのである。

蓋し真理と云ふものは一人一家の為めの真理ではない。万人万家の為めの真理である。天理教も亦其うである。其れは中山家一戸の天理教にあらずして世界人類の天理教である。然るに今日迄は教祖の遺訓も神の天啓も皆中山家の倉庫に秘められ神前に捧げられる奉財は皆中山家の私有財産となり教界の重要な地位は皆一門をもつて埋められて来た。かくの如くにして天理教は万人の天理教とならずして中山家の私教となつたのである。

此の間に生ぜし弊害如何? 本部員を始め其の他部下の天理教徒中地位を欲し名譽を欲する人間は自分等が人に仕へるにあらずして神に仕へる人間であることを忘れて天理教徒らしくもなく中山家並に其の一門に媚びて一身の榮達に没頭し此の道が世界人心の救済教たることを殆んど忘れて居る。

更らに日々神殿参拝の都度吾人の眼神経を刺激する不快の影は神殿至る所に発見する中山家の定紋である。これ等は天理教をして中山家の家教とし、天理大神をして中山家の氏神とするものなりと非難せらるゝも恐らく逃るゝに言葉がないであらう。

此の他天理教をもつて中山家の一家教とする弊害は挙げて数へることができない。もし今日にして此の間の區別を立てなかつたならば将来必ずや大なる不平を教界の上下に勃発するに至るであらう。これ道の為め中山家の為めに天理教を中山家より独立せしめよと勧むる所以である。

公私の區別を立てよ

神の道には親族はない 天啓の声

私は前論天理教を中山家より独立せしめよの中に今日の天理教は中山家の一家教たることを述べた。其れと同時に今日教界の人物の配置が中山家の一門をもつて尽く其の重要な

る地位を占めて居ることも述べた。これは適材を適所に用ゆる神の人物使用法と全然相反した私情に流れた行為であるから此処に天理教とは抑も如何なるものであるかを述べて中山家一門の反省を促さうと思ふ。

抑も此の道は中山家の宗教でもなければ本部員の宗教でもない又た各大教会の宗教でもない。世界人類の宗教である。其の間に働く人間は凡て皆神の道具である。唯其の間上下の區別あるは其の人格的価値によるのである。

然るに今日の天理教界にては中山家の一門なるの故をもつて適材にあらざる者をもつて其の地位に置いて置く。これ私情に囚るゝものにあらずして何んぞや？ 苟くも中山家に於て真に活眼の人物があつたならばかくの如き片手落ちの処置をせずして広く適材を適所に適用するの拳に出づるであらう。

私は曾つて故御本席が其の親族より本部に採用せられんことを求められた時「神の道には親族はない」との言葉をもつて之れを拒絶せられたと云ふことを聞いて居る。これが真の道である。もし中山家に一人なりとも此の御本席の如き心をもつた人物があつたならば現在の如き私情に墮落した醜態を看過しないであらう。

今日の天理教界が一般に私情に流れつゝあると云ふことは単に本部のみではない。部下教会に於ても亦其うである。けれども私情をもつて人に親疎の區別を立つるは真の道ではない。真の道には親族はないのである。又た知己朋友もないのである。唯あるものは公平があるばかりである。(世界の公平は甲をも讃めず乙をも譏らざることである。けれどもも道の公平は善を善とし、悪を悪とし、正を正とし、邪を邪とするにある)何人に対しても偏せざる平等の理解と愛とがあるばかりである。其の間一点の私情の介在せるを許さない。これ真に人生より凡ゆる不平を除くの本であるのである。

熟々人間の興亡盛衰の歴史を觀ずるに凡そ私情の跋扈したる時代にして円満なる平和を保ち得た時代はないのである。今日の天理教界には未だ教祖の大恩に浴せし本部員各位をもつて満たさるゝが故に敢て公然中山家の処置を非難するものなかるべしと雖も将来教界の反乱は必ず此の私情の乱用に基因するであらう。これ上は中山家を始め下は一般天理教界に向つて公私の嚴別を希望する所以である。

財団法人を組織せよ

天理教が中山家の私教でないことは既に云つた其れに関して是非共断行しなければならぬことは財団法人を組織して本部の經濟を中山家より独立せしむることである。此の理由は至つて明かである。即ち本部に集る献金は神財(公財)にして中山家の私財ではないからである。此の教会經濟の獨立は部下の一般教会に於て現に行はれつゝある所のものにして独本部に於てのみ後れて居る。若し真に天理教の弊害を悲み其の自由の發展を望まば天理教を中山家より獨立せしむべきのみならず其の經濟をも中山家より全然獨立せしむることである。これ財団法人の組織を主張する所以である。

冷淡無情の天理教徒

人の喜をもつて吾が喜とし人の悲をもつて吾が悲とすることを教へつゝある天理教界にも身を切る様な木枯風が吹いて居る。其れは自分の反対者に対する呪誼の風である。

例へば此処に本部もしくは教会もしくは個人に反抗する一人の信徒があると假定する。其の時非難もしくは攻撃もしくは反抗の的となつた当事者の云ひ草が此うである。

見てる今にロクな事がないからと。偶々其の反対者が身上もしくは事情に罹ると彼等は「態を見たか」と云はん許りに得意の嘲笑を浴びせかけるのである

けれども教祖を見よ。彼女は未だ曾つて自己の反対者に対して其の人の不幸を喜びしこたがあるか？ 元よりかくの如きは道にあつて道の精神なきヒネくれた一部の人間に限られて居るとは云へ同情と親切とをもつて生命とする天理教界にかくの如き恐ろしき冷淡無情の人情の破壊者の存することは天理教全体の為めよりは寧ろ其の人個人の為めに悲まざるを得ないのである。此処に記してもつて冷酷なる人情の破壊者の反省を促す。

親心をもて

全国の天理教会々長の中には随分生みの親にも劣らぬ真の親心をもつて信徒に接しつゝある会長もある。けれども何地らかと云へば未だ真の親心を有せざる形式一遍の会長の方が多いのである。これは上は中山家を始め下は宣教所集談所の所長に至る迄深く反省熟慮

して頂かねばならぬ点である。

蓋し一軒の家に於て円満に治まるか治まらんかは主人の精神にある。即ち其の家の主人が家族の全員に対する理解と同情との念の行き渡つた家は円満に治まり其の反対の家は必ずや分裂し葛藤して居るのである。

之れを教会に就て云へば其の教会の会長にして真に如何なる信徒に対しても心の真底より出た、公平な親心をもつた教会は繁栄し、之れに反する教会は漸次衰微して行くのである。これは主として会長其の人の人格によるのである。

けれども今日の教界には真の親心に生きて居る人が少い。わけて權威だとか威厳だとかを標榜する上級教界に於て其うである。けれども私は信じて居る。

真の權威は愛其の者と云うことを。

然るに今日の上級教界では愛其の者を度外視して徒らに自己の偉大を飾らんとするの風がある。其れでは真に教祖難型の道を通つて居るとは云へない。教祖は如何なる人間に対しても一視同仁の親心をもつて接した方である。而して其の接して居る間に今日の権式振つてある人達の様な自己の權威とか威厳とかを信徒に向つて示さうと云ふ様なことは考へられたことはない。彼女の全心は愛其の者より外に何物もなかつた。而かも此の全心の愛こそ彼女に無限の權威を与へたのである。之れを世上に見るに彼の少年少女が打たれても叩かれても其の母親の後を追ふのは何故であろうか？ 彼等は母の不断の愛を知つて居るからである。実に愛は此の世の絶対の權威である。其の前には王者の威厳と雖も亦屈せざるを得ないのである。

然るに此の真の愛真の親心なくして徒らに信徒を威服せしめんとするが如きはこれ未だ親心の何者たるかを知らざる人々である。吾人は上は中山家を始め下は各宣教所の所長に至る迄先づ權威を示す前に先づ愛を示されんことを望む。何故なれば真の權威は愛其の者に外ならないからである。

要するに今日の教界の先達者はやゝ頭が高過ぎる。将来の天理教々師は最つと頭が低くなければならない。低き心より生れた愛何人にも偏破なく接する平等の愛其処に真の親心があるのである。而して此の真の親心こそやがて人を真実に導く力である。殊に此の改心の必要を感じるのは今日の道の上流社会である。吾人は最つと暖きやさしき真の親心をもつて吾人無階の信徒に接せられんことを望む。(身分ある者には逢ふが身分なき者には逢はぬと云ふ様な不公平なしに)

道を喰物とすることを止めよ

今日の天理教々師の中には大分不純な動機から道について居る者が多い。其れは道を食物として自己の私腹を肥さんとする者である。もしくは自己の生活の保証を握らんとする者である。此の傾向は随分上流社会にも跋扈して居るのである。彼等の云ひ草に曰く

我等はこれ神の道具である。日々神に奉仕することが我等の仕事である。且つ人に助けられることは自分の因縁を重ねる所以である。人を助けるこそ吾等の神より命ぜられたる天職である

と何んぞ知らん彼等の口と実際とは全然表裏である。其の実は神に仕ふるにあらずして神を使ひ、人を助けるにあらずして人に助けられつゝあるのである。彼のお助け／＼と云ひつゝも眼は常に信徒の財布を離れざるヒツタクリ的布教師は概ね此の類である。

けれども道は天下の公道である。寸毫もこれを私することを許さない。もし此の禁を犯して苟もこれを乱用するものあらば害は必ず其の身に返るであらう。これは彼の我を忘れて日の寄進的布教に従事しつゝある者の教会は日に／＼盛大に赴き我を考へて似而非なる日の寄進的布教に従事して居る教会の日に／＼衰微しつゝ行くに徴して明かである。其れが自然の制裁である。従つて私は道を喰物にして財産もしくは名誉もしくは地位を得んとする非望を抱ける人々に向つて忠告するのである。

財産もしくは名誉もしくは地位が欲しくば始めより此の道に入らざるに如かずと。蓋し此の道は名利を超越したるの道である。其の間一の私利私欲私情の混ざるを許さない。彼の道を足場とせる教師が却つて道の足場とせられ漸次教界以外に流れ出づる所以のものは泥土の混入を許さざる道であるからである。敢て道を乱用しつゝある誠意なき教界の上中下流の人士に反省を求む。

教界の分裂を統一せよ

凡そ教界の四分五裂せること今日より甚しきはない。今日の天理教は蓋をもぎ取つた花弁のやうに片々として分離し其の間に何等の統一がない。各自は自己もしくは教会の利害

を考へるのみにして天下の利害を考へる者がない。否な教界全体の利害さへ考へるものがない。

けれども昔は其うでなかつた。明治廿七八年即ち日清戦争以前の天理教には共力一致の精神が教界の隅々迄充満して居た。天理教が隆々として旭日の昇るが如く発展したのは此の時代である。然るに其後教界には漸次小なる自己即ち一身の利害を顧みる者あるに至つて全く其の精神的に墮落すると共に漸次教界の衰微を來した。これが教祖十年祭後の教界の有様である。けれども道の発展上今日は最早や此の四分五裂の状態を継続することを許さなくなつた。何故なればもし此の俛に教界の分裂を許して行つたならば天理教は全滅するを免かれないからである。

世人は彼の戦国時代の名将毛利元就が臨終の枕辺に子弟を集め一本の矢と数本の矢の比較に依つて共力一致の如何に大なる力を有するかを悟らしめた有名な教訓を知るであらう。其の後毛利家には此の教訓の力を實地に証明する時が來た。彼の天下の英雄秀吉をして尚ほ手に持て余さしめた所以の者は即ち之れである。吾が教祖御親の吾人々類に残した遺訓も亦之れと同一の内容と意義とを有するのである。曰く互ひ立て合ひ、曰く互ひ助け合ひと。今日の天理教徒は果して此の教訓を如実に實現しつゝありや否や？ 吾人は之れに向つて否と答へざるを得ないのである。

思ふに今日の天理教は天下の智者秀吉の大軍を引き受けた当時の毛利一家と同一の境遇にあるのである。否な其れ以上の苦境にあるのである。当時の毛利軍には外に秀吉の大軍を受け内に兵糧の欠乏に苦められつゝあつたとは云へ尚ほ共力一致の精神があつた。けれども今日の天理教には其れがないのである。即ち外は時代の病弊に対抗する力なく内は時代の病弊を救済する勇気がない。私をして天理教の将来に対して杞憂を抱かしむる所以は此処にある。

要するに天理教をして今日の如く四分五裂の状態に墮落せしめた様々の原因は道の禁制なる我が身の思案、我が身の欲で練り固めた元の地金に復つたが為めである。吾人は一日も早く全国の天理教徒が私利私欲を擲つて再び世界の救済の為に共力一致せられんことを望まざるを得ない。

貸物借物の理を復習して再び新生活の第一歩に入れ

熟々今日の天理教界を通観するに上は本部員より下は教師信徒に至る迄教祖五十年の努力に依つて漸く仕込むことの出来た人生の根本的定義である貸物借物の理は殆んど根本より洗ひ去られたかの觀がある。もし彼等の凡ての心に此の理が徹底的に刻まれてあつたならば夢にも私利私欲の觀念は出ない筈である。何故なれば此の肉体も肉体の生活に要する物質も一切神の所有にして吾が物とては一物もないからである。

然るに日々此の人生の根本的定義を説いて居る本部員を始め部下教師信徒に往々物質欲肉欲に囚はれて世道人心の救済を忘れて居る所以のものは何んぞや？ これとりもなほさず其の人に貸物借物の理が眞に体得し會得されて居ないからである。

蓋し天理教は一片の空文ではない。其れは口に語り心に知つて居るのみでは何にもならない。実行之れがあつて其処に始めて生命となつて働くのである。これに就て教祖と弟子との間に交換された實地の問答を紹介しやう。世人は須らく其の中より禪根を捕捉すべきである。

教祖立教の当初は長い間八つの埃、十柱の神の守護、貸物借物の理一点張りで通られた。弟子達は余り毎時も／＼貸物借物の理を説かれるから倦きて了つて一日相寄つて相談した。

何うも何時も／＼貸物借物の理では倦きて了ふ。今日は一つ何か珍らしいお話を聞かうぢやないかと。やがて其の中の一人在教祖の前に出て

「我々は長年の間貸物借物の理を聞かして戴いて最う大抵分つた様である。今日は何か珍らしいお話を聴かして戴きたい」

すると教祖は其の弟子に向つて

「其うだらう貸物借物の理は随分長く説いたから皆な分つたであらう。今日は一つ珍らしい話を聴かせる」

と云つて立つて居間に入られた。弟子達は何をお話になるであらう。何か珍らしい話を宝物でも見せて下さるのであらう、と思つて居ると暫時して一振の刀をもつて出て來られた。教祖は其れを静かに八足の上に載せ

「サア珍らしいお話をするから最つと近う御寄り」と云つて弟子達が進み出るのを待つて

突然一刀の鞘を払つて太刀を振り上げ一番前に進んだ弟子を目掛けて切り下げ様とした。其の弟子も其他の人達も余りに教祖の劍幕が恐ろしいので思はず後退りをした。すると教祖はカラ／＼と笑つて

「貴方方は貸物借物の理は永らく聞いてよく分つたから何か珍しい話を聞かして呉れと云ふから一つ珍しい話をしてやらうと思えば逃げて了ふ。これではまだ本当に貸物借物の理が分つたとはいへない貸物借物の理が分らないでは人の師匠とはなれない。最つと勉強せんければいかんで」

と云つて相変らず貸物借物の理を説き続けられたと云ふことである。今日の演説屋的教師は此の実話に学ぶ所が多いと思はれる。

要するに「貸物借物の理はこれ教の台」と云はれ「貸物借物の理がわからいでは何もわからないのや」とさへ云はれて居る。其の筈や貸物借物の理は神の与へた人間の根本的定義であるからである。

然るに今日の天理教々師を見るに上は本部員より下は単独の布教師に至る迄此の重要な教理は殆んど精神的に消されて居る。為めに私利私欲は延び出で、神が折角附けた天下の公道を塞いで了つた。これ貸物借物の理の復習を天下の教師信徒各位に望む所以である。何故なれば将来の道の発展は此の貸物借物の理の復習によつて始めて期し得べければなり。（大正四年八月十七日）

道の友記者 奥谷文智君に与ふる書

大平 良平

奥谷君！ 自分は個人として君に対しては別に親密でもなければさればと云つて全く疎遠でもない尋常普通の関係にあるのであるが此処に公人として是非共云はなければならぬことがある。其れは君が道の友八月に「事情がなければ心が定まらぬ」と云ふ題で書いて居る中の左の一節に対してである。今便宜の為め繁雑ではあるが挙げて而して私の意見を述べることにする。

『事情なければ心が定まらぬ』

松村教正の御入監後、前管長夫人よりは逸早く『御神楽歌』を差入れられ続いて間もなく拙著『天理教祖観』が東京から到着したので、直ちに之れをも差入れた。教正は独房の中にあつて読書を唯一の樂として居られるらしいが、其の書物も教正からの希望で、大概は本教に関するものばかりである。必ずや獄中私かに教祖を偲び奉り、深い教理の修養に耽らるゝ事であらう。『教祖に帰れ』とは数年以前から屢々耳にする処である。或者は其の聲に和して慌て者が火事に出会つたやうに『天理教革命の聲』などゝ叫び出したりして居る。教祖が豊田山に埋れておいでになると思へばこそ、そんな小細工も弄して見なければならぬ、なんぞ凶らん教祖は生き通しである。豊田山には御遺骸があるばかりだ。見よ教祖は我等の凡眼にこそ見えね、儼然として白日の中に立つて世界をろくちに踏み平らすべく大車輪の活動を日夜継続し給ふではないか。初代管長公の御帰幽も、広池博士の引退も、松村教正の収監も天理教徒の情眼を鞭撻し給ふ教祖の御働である。神の啓示である。

道の友八月号の一節

此の中で明かに自分とは名指してはゐないが或る者は其の聲に應じて慌て者が火事に出会つたやうに『天理教革命の聲』などゝ叫び出したりして居ると云つて居る「或る者」の中には自分も入つてゐることゝ思ふ。何故なれば自分は確かに新宗教の六月号乃至八月号に亘つて現今の天理教の確かに革命せざる所以を論じてゐるからである。従つて君が此処に或る者として発表した代名詞（複数の心算か単数の心算か知らないが）は同時に又た自分をも指したものである。

君は一体何う云ふ点より或る者が数年以前から君が屢々耳にした処の『教祖に帰れ』という聲に和して慌て者が火事に出会つたやうに『天理教革命の聲』などゝ叫び出したつてことを知つて居るか。これが直接自分のことを指したものであるとすると君は随分都合点な男である。勿論君の数年前とは凡そ何年以前のことを指したのであるか明かでないが自分が一昨年の春一人で天理教を研究した頃には其んな声があるのかないのか知らなかつた。又た知る必要もなかつたのである。然るに私が昨年七月より天理教の信徒として加盟し漸次教会に出入し教会の人々と接近し、且つ本部にも登参して天理教界の現状を見るに私が曾つて冥想し且つ研究した教祖の天理教徒とは殆んど雲泥の差異あることを発見した。これ自分が『天理教革命の聲』を叫ばなければならなかつた最初の原因である。

然るに君の書いてある所を見ると自分が数年前より影のあつた天理教革命の外部の聲に導かれて『天理教革命の聲』を叫び出した様に考へてあるがこれはちと推測がちがう。自分の場合は君が外部の聲に誘はれて国民としては云ふ迄もなく人類の一員としても厭嫌すべき大逆事件の陣笠に馳せ参じ而かも其の盟士の死を傍観して生を貪つてゐるものとは違ふ。自分の場合は外の聲に誘はれたのではなく内の聲に誘はれたのである。人の聲に應じて立つたものではなく自分自身の中心の聲に應じて立つた者である。従つて自分の眼中には自分以前に一人の天理教革命者なく自分以後にも一人の天理教革命者はないのである。此

の意味は、自分一人の先唱者なく又た追隨者なく（客觀的にはあつても）全く独立独行で
あることを云ふのである。此の如き不徹底の批評家を屢々藝術家並に芸術批評家の中に発見するのである。彼
の卑しい商売の元よりの「慌て者」と云はうが「うろたひもの」と云はうが君の勝手だが
今日天理教の革命もよく通じて居る筈だか、果して慌て者か、果して君の勝手だが
教界の内情に其の中での借金も亦少くないのである。此の原因は何であるか？之れを
教会が瀕死の状態に迫つて居るのには神に對する奉公の不足に依ると断言せざるを得ないのである（人
の本物の借金をして居るのには神に對する精神的借金をして居るからである）。此の他神の大使
命を帯びて世界の救済に日もこれ足らずして働かなくてはならぬ筈の會長役員教師が殆んど
何処にかある？君は豊田山にあるものは教祖の遺骸ばかりで儼然として白日の中に立つ
て世界をろくち踏み平らすべく大車輪の活動を日夜継続し給ふてゐると訳り切つたこと
を勿体らしく述べて現今の天理教を弁護しやうとして居るが神は幾ら働いても人間がヂツ
クリ腰を押し付けて働かなかつたら何うする？道は衰微するより外仕方あるまい。其れ
では上は大神の慈悲にもとり中は教祖の苦心を水泡に歸し下は吾人々類の大なる不幸であ
るが為めに禍を未然に禦がしたのが天理教界革命の聲である。其れが何の小細工であるか？
立ち返るべく覚醒を促がしたのが天理教界革命の聲である。其れが何の小細工であるか？
恐らく君等は天理教が墮落に墮落を重ね腐敗に腐敗を重ねてニツチもサツチも行かぬ様
になつてから立つて騒ぎ立てるのが大細工と思つて居るであらう。君等に任せて置いたら
其の理想の時は早晩来るのである。今来つゝある。見よ二十年前の信徒が神に尽す義務の
熱心と今日の信徒の熱心さとを。この俚にして十年二十年を継続して行つたならば本部は
元草叢に歸るも遠くはないのである。現に地方に於ける天理教の信用の失墜せることは
驚くべきものである。今日地方の人々は或る確実なる担保なくしては決して天理教会に金
を貸さないのである。もし之れを今日に於て救はずんば天理教は先づ經濟的方面より破産
せざるを得ないのである。

奥谷君！君も随分矛盾の人ですね。否、伶俐な人ですね。（其れは之れ丈けの短文を見
ても君の鰻的人格がすつかり窺はれる。）此う云はれた所で君の俗化した頭脳には余り強
く響きはしまいが然し響かうが響くまいが朝六ツの鐘と暮六ツの鐘は寺法として詰度つか
ねばならぬ。其の如く神の鐘樓に置かれたる者は衝くべき時には衝くべき数をつくのであ
る。

君は自分達（或は自分丈けかも知らない）を痛罵して或は其の聲に和して慌て者が火
事に出会つたやうに『天理教革命の聲』などゝ叫び出したりして居ると云つて居るが其ん
なら君が今年五月号か六月号かに書いた教祖に歸れと云ふ一文は一体何う云ふ動機で書
いたのですか？既に教祖に歸れと云ふ其処に教祖と離れたる何等かの点がなければなら
ぬ筈である。而かも其れと同一の目的を以つて實際に教祖の精神の復活者が表はれるや之
れを喜んで迎ふべきに却つて堂々たる天理教の機関雑誌の記者にも似合はず自己の人格を
無視し同時に相手の人格を無視した冷罵を浴びせかけて得々然として居るのは何の為めで
あるか？

私は君の如き不徹底の批評家を屢々藝術家並に芸術批評家の中に発見するのである。彼
等の或る者は口に新しい詩とか新しい小説とか新しい劇とか新しい絵画とか新しい彫刻と
かいふことを口にし常に其の出現を希望して居るかの如き口吻を漏しつゝも一旦真に新し
い美術もしくは文芸の表はるゝ時は彼等は直ちに之れを否定し去るを常とするのである。
即ち彼等は抽象的新其の者を希望しつゝも又希望するが如く装ひつゝも真の具体的新を批
評し鑑賞する能力がないからである。

君の場合も亦同一である。曾ては君の所謂「或は其の聲に和して慌て者が火事に出会
つたやうに「教祖に歸れ」などゝ叫び出してるのを見て其れは口先き丈けの要求で真に
教祖に歸る精神もなく又用意もない為に其処に真の教祖の歸依者が表はれるや一種の嫉妬
と羨望をもつて之に毒言を浴せもつて自分が先驅せられた腹いせにするのである。

君が言行の矛盾者口と腹との二重生活者たる証拠は其んな五月号だの六月号だのに求め
るに及ばない。現に今の文章中に発見することができるのである。即ち
「教祖が豊田山に埋れておいでになると思へばこそ、そんな小細工も弄して見なければな
らぬ。何んぞ因らん、教祖は生き通しである。豊田山には御遺骸があるばかりだ。見よ教
祖は我等の凡眼にこそ見えね、儼然として白日の中に立つて世界をろくち踏み平らすべ
く大車輪の活動を日夜継続し給ふではないか」

君は此んなマヤカしの言葉で革命の必要を否定し得ると信じて居るけれども其れは恰度

臭い物に一時蓋をする様なものである。従つて小細工を弄するものは天理教の革命者にあらずして君等一派の保守派ではないか。其れを言論の自由を乱用して白を黒と云ひくるとする卑怯さは宗教家として否な宗教雑誌の記者として風上に置くことのできない人間である。

元来道の友は天理教の機関雑誌である。其は教界の權威として信仰指導の地位にあるのである。然るに其の重大なる責任を有する雑誌の主筆からして真に真面目なる道を行かんとする者を妨害し且つ俗人と雖も吐くことを謹む冷罵を浴びせかけて得意然として居るのは一体何ういふ精神か？ これ第一に私の聞かんとする所である。次に君の言行の矛盾は君が自分の眼に見えざる教祖の活動を何うして人に見せるかの問題である。更らに大なる矛盾は前には天理教革命の声を否定しつゝも五五行たつかたゝぬかの中に「初代管長公の御帰幽も広池博士の引退も松村教正の収監も天理教の惰眠を鞭撻し給ふ教祖の御働である、神の啓示である」と暗に天理教界の腐敗と革命の時期の迫つたことを肯定して居る。

之れは君一流（否な現今天理教徒の大部分）の処世法より生れた君一流の文章であるが、私は宗教家として否人として絶対に此の君の態度を否定する。君は先づ人間の教へられたる唯二つの言葉を明瞭に発音することを学び返さなければならない。其の二つの言葉とは否と然りとである。

一体君は自分が今日迄発表した天理教革命の声に反対なのか？ 賛成なのか？ 反対ならば何の点が反対で賛成ならば何の点が賛成なのか其れを明かに指摘せられたいのである。何故なれば世の淺識者の所謂知つたか振りの概括的批評程世を誤り相手を誤り引いては自分自身を誤るものはないからである。君が道の友八月号に於ける陰險なる冷罵は全く之れである（正々堂々の論議ならば君等同人が拵つて来るとも歓迎する）。

私はこれまで君等の編集して居る道の友に対しては何等の非言を放たないのは其の中にも害があつても亦利もあるからである。且つ之をして道の雑誌として最も權威ある雑誌たらしめんとするのが私の中心の希望であつた。元より彼を傷けて自分の雑誌を売らんとするが如き卑しい野心は全然持つて居ないのである。然るに此頃の君等道の友の同人が新宗教に対する態度は全然仇敵視してかゝつて居る。少くとも自分が天理教革命の声を書き且つ其の実績を挙げんと努力しつゝある抑々の動機は道の上の塵埃を掃除して真に綺麗な道にしたい為めである。然るに本部を始め君等に至る迄自分並に自分の雑誌を厄介視して潰さう／＼に掛つて居る。其んな根性で此の大宗教が發展すると思ふか。胸に手を当てゝ反省して見たが良い。

わけて君一個人の為めに忠告したいことは今日の君の生活即ち神と人との二つながら仕へんとする生活をすてゝ其の何れか一方を選択せんことである。何故なれば今日の如く君並に君と生活の方針を同うして居る同人の跋扈して居ることは唯に道の精神、価値、權威を失ふ計りでなく世を毒し人を傷け果ては自分自身を亡すものであるからである。之れは君等計りに云ふのではない凡て金の為めに雇はれたる教師信徒に対して云ふのである。

要するに今日は名と利との為めに雇はれたる人々の解放せらるべき日は迫つた。人は神と財（もしくは名譽）の何れか一を選択しなければならない。君にも確か其の時期が迫つてゐる。（君は自覺してゐるか自覺してゐないか知らないが）君は道の友の記者たる權利を乱用して八月号に彼んな不真面目なことを書いて他人の生命がけの事業を冷罵してゐる時ではあるまい。君には自分自身の革命の時（一大事因縁の時）が迫つてゐる。其れを攫むか失ふかは君の未來に関する大問題である。敢て道の兄弟として一言の忠告を寄する所以である。暴言多謝。

（大正四年八月廿日）

地場より（二）

R O 生

私は地場に来て驚いた。地場とは最つと清淨無垢の処であらうと。何んぞ知らん。薄情、無知、偏狭、嫉妬、讒誣、中傷、悪口、陥穽、陰險、固陋、情実、因襲の巢窟であらうとは？ 而かも其れは俗界に於てさへ見るべからざる陋劣さを極めて居る。これでは泥屋敷であると云つた神のお言葉は尤もだと思はれる。

伶俐の修業は容易い。馬鹿の修業は六ヶ敷い。天理教は即ち此の馬鹿の修業の道である。

公平とは甲をも讃めず乙をも毀らざることではない。善を善とし悪を悪とし、正を正とし邪を邪とするを云ふのである。

人間最大の罪惡は愛を有せざることである。

私は責任ある当局者の言葉といふのを聞いた。
大平がもし何処までも本部を攻撃する様なら止むを得ず処分をしなければならぬと。何処迄も眼のつけ所耳のつけ所心の置き所の違つて居る当局者には忠言も攻撃と聞えらるであらう。其んな人達に向つて自分の誠意のある所を弁護した所が無益の業であるから弁護することとは止めるが一言当局者に正したいことは処分の名義と其の内容とである。もし単に本部を中傷し本教を讒誣したといふのみならば其れは何等の理由とはならない。何故なれば讒誣中傷といふことは其の事実のなくして而かも之れを事実あるかの如く非言非行を設くる場合にのみ適用すべきものであるからである。もし然らずして事実の有るを無しとして却つて其の真相を如実に語るものを処罰したならば正義は抑も何処にかある？ 法は抑も何処にかある？ 道は抑も何処にかある？ 私は眞の信仰を奨励すべき地位にある当局者が却つて偽の信仰に導かんとする 而かも強迫をもつて 当局者の精神に対して無限の悲哀を感じざるを得ないのである。
思ふに当局者の処分なる言葉の意味は信徒の除名にあるべしと雖も此んな処罰は私にとつては兎に等しい業である。何故なれば神と人とを繋ぐものは人間の書いた信徒名簿ではないからである。眼に見えざる心の糸にあるからである。従つて眞の信仰に生きる者には除名処分の如き風の吹いた程でもないのである。（其んなもので処罰し得るは三才の小児計りである）
此の他当局者が如何なる手段をめぐらして私に臨んで来るとも其れは唯彼等をして神と眞理に対する反抗罪を重ぬるのみ眞の信仰に醒めて居る私にとつては聊かの苦痛をも感じないのである。恐らく私をして徒らに当局者の無知と偏狭に対する憐愍の情を増さしむるのみである。兎に角全人類の信仰を指導して行かなければならぬ大責任を有する天理教当局者がこんな風では困つたものだ。

御本席臨終の間際のお言葉に本部を憂へた悲しいお言葉があつた。
よくも／＼今の本部員はぼけて了つたと。此の言葉は十年以前の本部員を指して云つたのではない現在の本部員を指して言つたのである。彼等のなす所を静観するに殊に此の感を深くするのである。

三軍の兵は指揮すべしされど匹夫の志は奪ふべからず。此の言葉の含める眞理が理解されなかつたならば他人の有する信仰に対して眞の尊敬を払ふことはできない。

三島よ！ 汝は未来の徳の都である。けれども現在は埃の捨場である。
私は現在の社会に於て人並の人間だと云はれることを少しも有難い事だと思はぬ。寧ろ馬鹿だとか仲間外れだとか云はれる時始めて自分が正當に説明せられた様な快心の笑を心に漏らすのである。
由来此の社会を伶俐巧面して通らうと思つたら苦勞でもあらうが馬鹿で通らうと思へば苦勞はない。此の点に於て自分は寧ろ幸福な人間に作られて居るのである。けれども理想眞の大馬鹿になることは未だ遠い。

今日の天理教はテンプラの天理教である。将来の天理教は血のしたゝる生の天理教でなければならぬ。

私の現在並に将来の事業は教祖の裸体像を此の地場に於て建立することである。

云はんとして云ふ人はある。けれども云はざるを得ずして云ふ人は少い。今日の詩人宗教家芸術家は皆な此の云はんとして云ふ人々である。

一犬虚を吠ゆれば万犬実を伝ふ。これが現在の天理教思想界である。

人を包有せよ（容れよ）。包有せられん（容れられん）ことを求むるなかれ。人を愛せよ。愛せられんことを求むる勿れ。前者は即ち自己を大ならしめ後者は即ち自己を小ならしむる所以であるからである。

天理教界には私をもつて第二の広池博士に擬して居る人がある相である。けれども安心せよ。私は未だ彼程老ひてはないことを。

私はゼラスな人間である。自分の信仰に対しては何人も手を触るゝことを許さない。独

立独行！　これが私の今日まで歩み来た道である。同時に又た将来に歩むべき道である。

私は或る人から私の身上にかゝらんことを希望しつゝある学者のあることを聞いた。私は其の学者に向つて告ぐ
喜べ汝の希望は叶へられたり
と。私は現に身上に迫つて居る。其の病名は曰く廉潔病曰く革命病曰く独歩病曰く孤独病。これぞ即ち我が心を悩ます病源である。

世界の八方美人は虚偽である。道の八方美人は正直である。

社会の真柱！　其れは最も正直な人である。

天理教は破壊なしの建設だと云ふ人がある。もし此の人の言を真理なりとせば天理教の神殿はエルサレムの神殿の上の建てられべきである。
真の信仰なくして単に言葉の遊戯に生きて居る学者は概ね此の類である。

世に学者程冗慢なものはない。彼等是一個のダイヤモンドを説明するに数千の頁を埋めて居る。

天理教界には信者と未信者とを区別する一種特独の用語がある。其れは信者を呼ぶに内の人と云ひ未信者を呼ぶに外の人、信者を呼ぶに道の人、未信者を呼ぶに世界並なる言葉を用ゆること即ち之れである。けれども此の言葉が彼等の口に上るや其処に一種気障な感を与へるのである。何故なれば彼等が自ら内と称して未信者と区別し未信者を呼ぶに外の人もしくは世界並なる言葉を用ゆる間には自己を一段高きに引き上げて他を見下ろす時に多く発せられるからである。けれども人間の真価は彼等の用語によつて分類されてはゐない。何故なれば彼等が呼んで外の人もしくは世界並なる言葉を以つて軽視しつゝある信者の間に却つて彼等よりも崇高偉大の人格者があるからである。

畢竟内といひ外といひ、道といひ世界といふも要は唯天理人道の実行者たると否とにあるのである。云ひ換へれば其の人の人格的価値にあるのである。従つて其の名はたとひ天理教信者たりと雖も其の実に於て天理教信者たる実がなければ道もしくは内と自ら称する特権はないのである。従つて将来の天理教徒は最つと活眼を開いて大きな立場より人間を見なければならぬ。然らざれば徒らに自画自讃に陥る恐れがあるからである。

未だ真の詩人の心なくして真の宗教家たり得たものは一人もない。又た真の宗教家の心なくして真の詩人たり得たものは一人もない。

私は春夏秋冬の中に万物の運命を読む。

春を好んで秋を悪み、夏を愛して冬を嫌ふものの生命はまだ真に客観化せられて居ない。真に客観化せられたる生命には春夏秋冬は皆同一の価値に映るのである。

大丈夫一度袂を振つて立つたならば生きて再び生還することを期してはならぬ。これは世界の勇士のみならず神の勇士の不断の嗜みである。

至誠！　至誠！　至誠はよく火を水となし、水を火となし、火を風となす。

或る一部の人は顕正が天理教で破邪は天理教でないかの如く信じてゐる。けれども其れは表を知つて裏を知らない人である。

人が偉かつたとか偉いとか偉くなるだらうとかいふ問題程自分にとつて退屈な問題はない。而かも凡人の話題といふものはこんな話より外にない。

吾人が貪婪、慳吝、邪愛、憎悪、怨恨、憤怒、強欲、高慢、嫉妬、讒誣、中傷、虚偽等の罪惡より解脱し得たならば如何に吾人は多くの時間と労力とを節約し得るであらう。何故なれば吾人の生活の半を占むるものは実に此等の不徳であるからである。

私は一面に於て無限の光明を認めると共に他の一面に於て無限の哀愁を感ずる。もし私の生活より神を奪つたならば私の生命は朝顔の如く枯れ果てるであらう。

真の孤独をもたざるものは真の信仰を有たざる人である。

世人は私の真価を買ひ被つて居る。私は一部の反対者の云ふが如く真に偉くも何んともない平々凡々の人間である。単に私の聊か他人と異なる処は私の真理に対する病的渴仰心である。これより外に他人の有たざる何者をももたないのである。

事実私の咽喉は炎天にサハラの大砂漠を横る旅人の咽喉の如く渴して居る。事実私の舌は熱病病みの舌の様に生命の泉に渴して居る。自分にとって焦眉の問題は此の靈の飢渴が医さるれば沢山である。自分を偉くしやうとか又た偉く見せやうとか云ふ問題は最初より私の問題ではない。

参詣人よ卿等は何故に強盜の如く強欲の祈禱を神に投げかけて己が勝手の仕事に向つて急ぐぞや？暫時止まつて神と教祖に快談せよ。これ子の親に対する真情である。

凡そ万人の主人たらんと欲せば万人の僕婢たらざるべからず。凡そ万人の父母たらんと欲せば万人の子女たらざるべからず。凡そ万人の友たらんと欲せば万人の敵たらざるべからず。凡そ万人の師たらんと欲せば万人の弟子たらざるべからず。

肉親の弟よ卿は祖先の家を継げ私は神の家を継がん。これぞ我等兄弟の先天的運命である。

今日の宗教家の大部分は殆んど名利の奴隷と化して了つた。人爵と黄金とは彼等の生命となつた。けれども記せよ
名利と糞尿とは溜れば溜る程汚くなることを
凡て此等のものは人格と生命との激烈な腐食剤である。

私の今日迄観察した所に依れば凡そ一つの教会を司つて居る会長にして神前に上つた献納物を箆笥もしくは戸棚の内に貯蔵して後日の私用に供せんとするが如き会長の教会の繁栄せる例を見ない。何故なれば彼等の心中には道の敵なる私利私欲が混合して居るからである。もし道をして真に盛大ならしめんと欲せば神のものは神に返し、人のものは人に返せ。然らば神は常に新鮮なる供物を以つて其の神前を飾るであらう。此の新陳代謝の活発こそ道の盛大なる保証である。

私の天理教信仰の動機は金儲けの為めでもなければ名誉のためでもない。自己の人格的成長の為めである。

世人は人間の大小を財産や名誉や才智や門閥や地位や衣服や家屋や食物やの大小美醜に依つて分類して居る。而して其れが人格と生命の附屬物に過ぎないことを忘れて居る。

私は天性平和の愛好者である。而かも何人にも劣らざる平和の愛好者である。然るに其の平和の愛好者たる私をして天理教界革命の書かしめざるを得ざらしめた様々の原因はよく／＼其処に黙さんとして黙し得ざる教界の危機があるからである。

然るに全然私を知らざる一部の人々は私をもつて好んで乱を構へるものとなす。誤解も亦甚しと云ふべし。もし疑はゞ直接私に接して私の面貌を見、私の音声を聞け。私の女性的面貌私の女性的体格私の女性的音声は私の言葉の真なることを証明するであらう。

私は此の頃大阪の或る読者より次の様な葉書を受取つた。
「私は何にも知りません職人ですが六年程前から御道に就かして頂いて居ります身上からでなく精神的苦痛から導かれたのですから信仰の樹立が薄弱ですから培ふ事を怠れないのです。食物に飢へて居りました所へ新宗教は誠に結構であります所で此の新宗教を第一の糧とさして頂く上に於て貴君様に御尋ね申度事は貴君様は御助は能く上りますかと云ふ事で是が私が将来新宗教の記事を信仰さして頂く上の必要条件でありますから紙上でも信書でも御答が願度候」

私は之れと類似の手紙を他よりも受取つた。之れに連関して私の常に迷惑を感ずるのは読者の中には往々私をもつて絶対に完成せられた人間であるかの如く信じて居る誤解である。

勿論私にも他の授訓者と同様にお助けの実は上げさして戴いて来た。けれども其れと之れ（新宗教の記事）とは全く別種のものであらうと思はれる。よし私にお助けの実が上ら

うが上るまいが新宗教の記事は記事として其の中より真理のある所をとつて信ずるのが真の真理の愛好者であらうと思ふ。けれども人間の自然の性情として人格と智識とは之れを區別して見るを許さない。其れが自然である。けれども私の場合にとつて一般の読者に希望して置きたいことは私をもつて絶対に完成せられた人間であるかの如き誤解を避けられんことである。何故なれば私は真に昨今道に入れて戴いた道徳修業の新米に過ぎないからである。従つて私は愛読者より同等もしくは同等以下に見られることをこそ至当とすれこれをもつて同等以上に見られることは甚だ恥しく感ずるのである。

實際私にとつては仏教の高僧中新日本に於ける最も近代的僧侶であつた親鸞と同じく同行者はあつても教ゆべき人は一人もないのである。従つて私の発行する新宗教の記事を見て人類に対する私の教訓と見る人があつたならば其れは私の雑誌を読み違へて居る人である。此は唯私の真理の研究報告に過ぎざるのみ。

次に同一の読者の同一の文書の中に次の文句があつた。これも前文と連関して居るから最一度紙上に於てお答して置かうと思ふ。

「貴君の夢物語りにありました如く貴君は神が自分の為に点ずべく命じた明りを人のために捧げんとしては居りませんか」

と云ふ文句である。之れは主として私の革命の声より思ひ附いた感想と思ひますが私は今日迄他人に対して私の要求（人間は生きる限り他人に対して要求をもたないと云ふ訳に行かない。唯其の要求が人によつて異なるのみ）を呈出したことはあつても未だ曾つて他人の為に灯明を捧げたことはない。これは私の雑誌を心読した人ならば何人も感ずることができることであらうと思はれる。尚ほ同一読者から私の言葉の荒いということを叱責があつたが感性と云うものは一寸人に彼れ之れ云はれた位で直るものでないし殊に私の如くに感電の度が人より強い人間にとつて今一時に之れを緩めよと云はれた所で仕方がない。これも時と所と人によりけりで一概に云はれないが教祖の如き円満なる性格と円満なる表現は元より私の望む所である。

此等の事項は折々読者の問題となることであるから一寸御断りまでに。

新刊批評

広池博士著

天理教々育主義 第一集

これは博士の天理教々育主義を述べたものであるがこんなクダ／＼しい消極的主義方針の下に教育せられる青年は禍なかなと云ひたい。由来中学生時代は雨後の筍の如く心身共に発達すべき時である。其の時代に際してなけれ主義づくめの消極的繁文縟礼を設けて青年の精神乃至肉体上の自由を束縛するが如きは所謂盆栽教育にして進歩せる教育家の取らざる所である。青年は須らく自由に発達せしめざるべからずこれ最も青年にとつて自然の教育法である。徒らに若木の活花を作らんとするが如きは吾人のとらざる所である。殊に甚しきは其の特典が教師に厚くして生徒に薄きことである。彼の博士一流の絶対服従主義の如き其の最も大なる弊害の一つである。

由来宗教学校はやゝもすれば人性の自由と自然とを奪はんとするものである。（人間の自然性を発揮すべき天職を有しながら）博士の天理教々育主義も要するに其の類である。これは博士が真の人類教育の本義を自覚せざる為めなることは云ふ迄もないが一方に於て博士が天理教々理その者を真に理解しない罪に歸するのである。

序に博士並に博士の説の実行者に迄一言して置きたいことは真の天理教々育を施さんと欲せば宜しくかくの如き複雑なる消極的教育法を廃止してもつと／＼新鮮と自由に富んだ積極主義によられんことを。真の天理教の精神は寧ろ其処にあるからである。

団 欒（七月号、八月号）

十八銭

大阪市東区横堀五丁目七番地 団欒社

団欒は友人石丸梅外氏の主幹の下に発行せらるゝ関西唯一の婦人雑誌である。其の内容は芸術哲学科学を始め料理裁縫家政育児に亘つて豊富なる記事をもつて充されてある。唯比較的等閑視せられて居るのは宗教であるがもし此の方面に向つても開拓を怠られなかつたならば真に深刻にして且つ円満なる理想の婦人を教養する一大有力なる教育機関となるであらう。其れは兎に角氏の天性の傾向と趣味とに合した理想的の事業を発見せられたるは氏の為めに喜ぶものである。

雑誌は号を重ねるに従つて刷新せられつゝある。氏の為め且つは関西婦人界の為に将来の発展を祈る。

御神楽歌の新研究

総論

凡て物には種といひ、葢といひ、中心といひ、核心と云ふものがある。例へば一粒の種には核があつて中心生命を形造くるが如く、宇宙には神があり、国には帝王があり、家には主人があり、人には靈魂があつて其の中心の核を形造る。

御神楽歌は天理教の核である。其れは恰度法華経が仏教の精華であり山上の垂訓が基督教の精髓であるに等しい。けれども御神楽歌が此等世界の宝典に優つて貴い所以は其れが畜に天理教の精髓である計りでなく実に世界文化の精華である点にある。

教養の足りない人間云ひ換へれば自己の生命の井戸を深く掘つたことなく又た自己の生命の広野を広く開拓したことの無い人間は此の十二下り二十余枚の御神楽を反古紙と同様に見るであらう。けれども一度自己の生命の井戸を掘り掛けた人間もしくは自己の生命の広野を耕し掛けた人間は其の中より己が力量通りの眞実を発見するのである。

カーライルは世界の大詩人シエークスピヤを評して十歳に於て読んで面白く七十歳にしして尚興味津々として尽きざるものはシエークスピヤであるといふことを云つて居るが私をして御神楽歌を評せしめば人生れてより死する迄は云ふ迄もなく死しては再び再生しつゝ行く未来永遠の後に於て読んで尚ほ興味の尽きざるものは唯一冊の御神楽歌であると云ひたい。否な其れは単に興味の深いと云ふ計りではない吾人の精神的飢渴を医しつゝ永遠に活動の力を授けて行く上に於て無くて叶はぬ精神的飲食物である。従つて其は単なる興味の中心であるばかりでなく久遠の光の中心永遠の熱の中心永劫の力の中心であるのである。

仏教徒は法華経を評して天地法界の秘蔵、世界群籍の帝王、亜細亜文明の中樞、仏教觀の実帰、思想界の最高指針なりと云つて居る。けれども御神楽歌は天地法界の秘蔵、世界群籍の帝王、亜細亜文明の中樞、天理教觀の実帰、思想界の最高指針と云ふ丈けのものではない。其れは実に宇宙人生の縮図、世界の光明、人類の糧、神の作つた唯一の宝典である。其れは単に亜細亜文明の中樞だけではない。全世界の文明の中軸、人生の帰趣である。将来の全人類全世界は必ずや天理教わけて其の神経中樞たる御神楽歌の思想に依つて統一せられなければならない。これは神の予言の誤らざる実現に徴して明かである。

けれどもかくの如き宝典 世界無二の宝典 も精神の盲者精神の聾者、精神の啞者、精神の跛者、精神の不具者には何等の意味をもなさないであらう。何故なれば人間は自己の精神的力量即ち見識を超越して物象を洞察するの力をもたないからである。

私が御神楽歌を知つたのは天理教を知つた最初の日である。云ひ換れば神の直接の匂ひ掛けを戴いた最初の日である。其の日 其れは一昨年春であつた 私は或る調べ物の目的をもつて大橋図書館 東京麴町 に行つた。調物の合間／＼には廊下に出で鬱結した気分を晴らすのであるが其の時公衆閱覧の爲めに見台の上に載せてあつた道の友こそ確かに私の天理教に対する興味を喚起す原因であつた。私は其れに依つて 今から見れば随分幼稚な記事であるが 天理教の大体の特色を握んで讀書室に帰り、研究の爲めに借り出した凡ての書物を返して館内にある天理教に関する書籍を借り出して片端から読破した。而して図書館を出る時には一角の天理教通になつたのである。

私は其の足で早速神田錦町の日本橋大教会へ行つて御神楽歌を一冊譲つて貰つた。かう云ふ理由に依つて御神楽歌は私の信仰 天理教信仰 培養の上に最初より誤ることなき眞実の友となつたのである。

之れは勿論私一個人の天理教信仰の動機である。けれども此処に感謝しなければならぬことは私が天理教なるものゝ存在を知つた抑々の最初の日より下らない天理教曲解者の手になつた第二手の異端的著書に迷はさるゝことなく直ちに其の第一手の思想に触れたことは私の天理教に対する獨創的解釈を助けた上に与つて力あるものであつた。

近來世間の天理教に対する注意は益々高まつて來た。其の中には物数奇ではあるが天理教を研究して見たいと云ふ希望者も亦少くはない。其の時に一知半解の天理教通の學者の書いた不徹底の印刷物を与へることは最も危険なる種子を蒔くものである。もし其う云ふ希望者のあつた時は黙つて御神楽歌一冊を彼の手に渡せ。而して静かに彼の顔色を眺めて居よ。其の者が其れに対して何等の興味を感じざるかもしくは侮蔑の色を浮べたならば其の者は生命の問題に対しては徹底した智識を持つて居ないことを悟れ。もし又た此の書を一見して驚愕して自己の信仰の未熟なりしことを嘆ずるものあらば其の人を一室に招じて静かに天理教々理の精髓を説け。彼は必ずや膝を打つて其の無限の眞理に敬服するであらう。(けれども其れは千百人中の一人である)

蓋し此の書は眞の信仰の試金石、眞の宗教的智識の最高試問である。之れに向つて完全の答案を書くことの出来る者は此の書を一見した最初の瞬間に於て分つて居る。眞に凡ゆる信仰の門を潜り凡ゆる智識の関門を通じたものは必ずや此の中に於て最後の参り所を発見するであらう。何故なれば此の書は人間の知らんとし得ざりし宇宙人生の秘密、人間の達せんとし得ざりし人生の最後の帰趣を最も簡単に最も明瞭に何人にも理解し得る様に縮写せられたものであるからである。

けれども智識の貪婪者と信仰の暴飲者は一滴の清水よりも一杯の濁水を喜ぶのである。其う云ふ人達にとつては此の蒸留し切つた一滴の清水は其の飢渴を医すに足らないであらう。何故なれば彼等は余りに多弁の宗教と巧智の信仰とに馴れて了つたからである。眞に此の書の価値を知るものは唯浄化せられたる人格と純化せられたる生命とあるのみ。

古来東洋殊に日本に於ては釈迦と基督と孔子をもつて世界の三大人格者とし其の思想をもつて世界の三大宗教と云つて来た。けれども之れは今日に於て当らない。私は彼の天上の神秘に一度も触れたことのない支那の倫理的偉人を以つて宇宙人生の最高秘密を握つて居る二大偉人と対立せしむることを許さない。これは後世の文明史家の等しく認むる所であらう（私は彼を旧世界の三大偉人として挙げるならば寧ろマホメツトを挙げる）

今日世界の三大偉人は釈迦と基督とミキ子である。今日世界の三大宗教は仏教と基督教と天理教である。此の分類に対しては今日未だ天理教の如何なる宗教であるかを知らざる学者は挙つて反対するであらう。けれどもこは遂に打ち消すべからざる眞理となるのである。

其の時世界は此の三大宗教の代表的教典一法華經、四福音書、御神樂歌一の中で何れか最も最高の眞理を包有せるものとなすであらう。其れは云ふ迄もなく御神樂歌である。蓋し此の三者の価値を比較すれば法華經は玄米である。四福音書は中白米である。御神樂歌は純白米である。其の中には凡ゆる宗教の精粹が取り入れられてあるのみならず更らに其れよりも重大なる先聖未説の眞実と神の最後の理想とが寓せられてある。

先聖未説の眞実とは十億万年の過去に於て地場（人間始め元の地場即ち大和庄屋敷現今の三島）及び地場を中心として行はれたる人間創造世界創造の事実である。神の最後の理想とは地場中心主義（地場を中心として靈肉共に健全なる一大家族の実現）である。此の二つは従来宗教の曾て説かなかつた人生の出発点と帰着点である。

御神樂歌の価値は此の二つの点に於て従来宗教に卓越するばかりでない。其の形式に於ても同時に他の宗教に於て曾つて見ることの出来ない最も進歩した形式を有して居る。即ち従来宗教は特殊の教養ある人間にあらざれば理解することのできない難解の形式をもつてゐたが御神樂歌はイロハ四十八文字と数字とを知る者には何人と雖も理解せられ得る様に書かれてある。此の普遍的形式こそ従来宗教の特殊形式に縛られて居た旧宗教に卓絶せる点である。

此等並に之れに類する特色は寧ろ天理教全体の特色であるから其れは天理教全体の研究に譲つて此処には其の精粹を詩化した御神樂歌の研究に問題を限らうと思ふ。之れは御神樂歌を研究する上に最も有効なる手段であると同時に又た必然の方法であるからである。

唯総論の終りに一言附け加へて御神樂歌に対する注意を挙げて置きたい。其れは釈迦が法華經の誹毀によつて衆生に罪を重ねざらしめんとしたと蓋し同一の老婆心に出づるのである。其の注意とは即ち

「法華經を罵る者は許されん。されど御神樂歌を罵る者は永遠に許さるゝことなし」と云ふことである。この意味に向つて一言の注釈を加ふれば御神樂歌は神の新たに制定したる新世界の新憲法である。其は人類の存続する限り永遠に遵法せらるべきものである。此の御神樂歌の有する無上の価値と絶対の權威を無視してもしくは知らずして罵るものはやがて憲法の破棄者であり、天理人道の破壊者の罪に問はるゝからである。

第一編 全体に関する研究

第一章 御神樂歌の著者

御神樂歌は誰が作つたか？ こんな疑問を突然今日の天理教徒に呈出したならば彼等は必らずや「馬鹿な事を云ふ男だ。彼は天理教に就て何も知らないのか」と云ふであらう。けれどもこれは其う一口に否定し去る問題ではあるまいと思ふ。現に天理教学者の中には御神樂歌は神が作つたか教祖が作つたかと云ふ問題に就ては少なからず意見を異にして居る。

即ち或る学者は御神樂歌は教祖の思想から湧いたものではなく全然神が著作したものである。教祖は唯其の筆記者に過ぎないと云ひ、或る学者は御神樂歌には神の思想の加はつて居ることは云ふ迄もないが其の根底には教祖の思想が潜んで居るといふ大体二派に分れ

て居る。之れに対しては何れも各々疑問を抱くべき理由がある。其れは御神樂歌を研究して行くと訳る。

其の第一の疑問は彼の朝夕の御勤めの文句の「ちよとはなしかみのいふこときいてくれ」以下「あしきをはらうてたすけせきこむいちれつすましてかんろだい」に至る間の発言者である。其れは神であるか教祖であるかこれは一寸判断のつき悪い文句である。

其の次は「よろづよのせかい一れつみはらせど」より「せかいのこゝろもいさめかけ」の発言者が誰であるかの問題であるが

「確かと聞け口は月日が皆かりて心は月日皆かしてゐる」の御筆先の言葉に徴しても亦泥海古記即ち天理教の新創世説を説く時なども其の度に神憑があつて説いたと云ふ点より見ても序歌第三節の「このたびはかみがおもてへあらはれてなにかいさいをとくす」の神と「かみがでゝなにかいさいをとくならば」の神とは第一人稱即ち神の自称であることと見ることもできるが同時に又た第三者の言葉とも取ることができる。兎に角疑問の深い一章である。

一下り目二下り目は神の思想とも教祖の思想とも何れに解釈しても差支へないが三下り目の八節

やむほどつらいことはない
わしもこれからひのきしん

の「わし」四下り目の九節

こゝはこのよのごくらくや
わしもはやばやまゐりたい

の「わし」七下り目の五節

いづれのかたもおなじくと
わしもあのぢをもとめたい

の「わし」同じく七下り目の九節

こゝはこのよのでんじなら
わしもしつかりたねをまこ

の「わし」は教祖自身を指したものであるか？ 其れとも世界から「わしもこれからひのきしん」をしやう「わしもはやまゐりたい」ものだ、「わしもあのぢをもとめたい」ものだ、「わしもしつかりたねをまこ」と云つて寄つて来る者があるともとれぬこともないが其の他の節に於て

「どうでもしん するならば
かうをむすぼやないかな」

の如き自ら陣頭に立つて信徒心を鼓舞して居る所を見れば如上の「わし」と云ふ一人稱も教祖自身をさして云われたものでもある様である。

兎に角御神樂歌の深遠なる所以は意味を二つにも三つにもとれることであつてこれは此うだと遽かに断定し難いものがある。如上の「わし」と云ふ言葉も一人稱であるか三人稱であるか単数であるか複数であるか云い換えれば教祖御自身を指されたものであるか其れとも世界から寄つて来る信徒を指されたものであるか又た教祖もしくは信徒の一人を指したものであるか或は多数を指したものであるかゞ明かでない。最後に例を挙げた

「どうでもしん するならば
かうをむすぼやないかいな」

の如きも厳密に云えば散文と違い名詞もしくは代名詞が略せられているから教祖自身の声ともとれゝば或は又た信徒の声ともとれるのである。

之れを要するに御神樂歌の著者を歌中の人稱に依つて定めることは困難である。然らば一体御神樂歌の著者は誰であるか？ 神か教祖か或は他の人かこれは何も其う頭を悩ます問題ではない。

教祖の著書となつて居るものは此の御神樂歌でも御筆先でも一つとして教祖自身の頭より創造せられたものではない。凡て皆な天啓に依つて成つたものである。教祖は要するにただ其れを記録したと云ふに過ぎないのである。

其の証拠には天啓があると教祖は夜中でも昼でも筆を取る。しかも暗夜灯火のない所で筆をとる。其れを昼明るい所で見れば昼御書きになつたものと少しも筆勢並に字形が異らなかつたと云ふことである。しかも其の間の出来事は多く記憶がない。

昨夜此う云ふものを書いた
と云ふて出されるものを見て云々のことが書いてありますと申上ると始めて

あゝ其うか
と気付かれる様子であつた。

此等の事実によつて見ても教祖自身が書かんとして書いたものではなく全く天来の声に相違ないものであることを信ずることが出来る。

其れにもう一つ教祖の著書が教祖自身の創造力に成つたものでない証拠は彼の御筆先である。彼れは明治二年より明治十四年にわたつて十二年間の著作であるに係らず其の内容を研究するに事件の発展と云ふものはあつても思想の発達と云ふ点はない。もしもこれが人間の労作であつたならば其の始めと終とに於て必ずや思想の変遷がなければならぬ。其れが見受けられないと云ふのは即ち神の著作たる何よりの証拠である。其れと同じく此の御神樂歌も神の胸の中に長く孕まれていた思想が因縁の時が来て生み落されたに過ぎないのである。従つて御神樂歌の中に教祖の思想が混入していると云ふ説は全然誤つてゐる。これは疑ふべくもない天啓の声である。教祖は即ち其の記録者に過ぎなかつたのである。従つて御神樂歌の著者はと云わば云ふ迄もなく神自身であると答ふるをもつて至当とする。

然るに此処に説をなすものあり。御神樂歌は神の著作にもあらず教祖の著作にもあらず橋本清の著作であると。これは勿論其の時代の状況を知らざる者の憶測に過ぎない。何故なれば教祖に御神樂歌の製作のあつた頃には橋本清の如きはお地場を覗いたこともない人間であるからである。これは当時お地場に居つた何人に聞いても明かなことである。且つ其の内容に就て観察するも此の深遠なる御神樂歌が到底一個人の力に成り得べき性質のものではない。其れは後世御神樂歌に擬して偽の御神樂歌を擬作したものもあるが其の構想と云い其の用語と云い到底真の御神人歌の脚下にも及ばないのにも見ても明かである。

其れから又た此の世界無二の聖典が心学道話より引用せられたものであると云ふ者があるが其れが浄土和讃か神樂歌からかかつたものであると云ふなら未だしも縁のない心学道話から取つたといふことは全然御神樂歌の内容を鑑賞批判することの出来ないものゝ云ふことであつて取るに足らざる僻説である。

御神樂歌は以上述べたる如く教祖の著作にもあらず勿論橋本清輩の著作にもあらず実に神自身の著作である。教祖は即ち其の筆記者であるのである。

此の一読して明瞭なる事実を名瀬に殊更此処に問題として論じたかと云えば此の聖典を教祖の著作とすると神の著作とするとによつて御神樂歌解釈の標準に大なる相違を生ずるからである。其れで以下本書の御神樂歌の態度は何処迄も天啓の声神の著作として解釈するのである。

第二章 御神樂歌製作の年代

御神樂歌の製作は慶応三年正月に始まつて八月に完成せられたものである。其の間に於て絶えず筆を執られた訳ではなく徐ろに一下りもしくは二下りづゝ筆をとられたのである。而して凡てが何回に書き上げられたかと云ふことは直筆を研究したらわかるかも知れないが現在の所これを明かに断言することはできない。

けれども御神樂歌が何回に書き上げられたかと云ふことは吾人にとつて余り必要なことではない。ただ吾人は其の内容を研究すればする程それは一氣呵成に書き上げられたものではなく神の頭脳の中にて精練に精練を重ねられたる結果教祖の筆端に文字となつて表われたることを知れば足るのである。

慶応三年と云えばお道も真の細道を通り抜けて道の前途に光明を認めるやうになりかけた時代である。即ち文久より元治にかけては此の道の元老である辻、仲田、山沢、山中、飯降、榭井の諸氏が信仰に入り飯降氏の発起で小さいながら勤め場所も出来道は益々前途に光明を認むるに到つた。其れがために大和地方の僧侶や神官の嫉む所となり種々妨害を加ふる者も多くなつた。慶応三年七月京都の神祇管吉田家の配下に属して布教の許を得たのは其う云ふ妨害を避くる一時の手段であつた。此等の事情を総合して見ても当時如何に膨張しかけて来たかを知ることが出来る。

更らに之れを当時の日本の国状に見るに寛政享和の頃よりしばしば外国と接触する機会が多くなつた鎖国主義の島帝国は嘉永安政にかけては諸外国の通商貿易を乞う者頻りにし遂に安政元年米国の仮条約を締結してより尊王党の幕府の横暴を鳴らす者多く国論は二派に分れて長い間葛藤を続けて来た。其の中に十四代將軍家茂が薨すると間もなく光格天皇も亦相續いて崩御になつた。其れが慶応二年十二月である。国民は其う云ふ不幸の中にあつて不世出の英主明治天皇の御踐祚を迎えた。其れが慶応三年正月である。

教祖はかくの如く道から云つても世界から云つても最も多事多端の際に万国万代の憲法となるべき聖典御神樂歌の製作を始められた。其れが日本の空前絶後の大革命家明治天皇御踐祚の当月であると云ふのは偶然とは云え其の間何等かの意味がありそうである。

思ふに天保九年十月二十六日教祖の天啓があつて根の教、元の教、だめの教、止めの教を啓ませられ始めてから此方明治維新の大業のなる迄の間は日本一国にとつても世界にとつても最も意味の深い時代であつた。

即ち日本はこれ迄長い間縛られて来た封建政治、専制政治を捨てゝ漸次立憲政治に向ふ

端緒を開いた。と同時に世界も天理教の創立に依つて靈界一新の時機に到達したのである。

しかも其れが色々の事情で行き悩んでいたのが天理教は御神樂歌の製作に依つて確固不拔の基礎を定め日本は明治天皇の踐祚に依つて万代不易の基礎を定めた。従つて慶応元年正月は道にとつても世界にとつても最も意味の深い正月である。

第三章 御神樂歌製作の目的

御神樂歌製作の目的はちょうど憲法を定めて国家万代の基礎を定むる如く万世の世界一列を統治する新政の大憲章として新たに起草せられたものである。

殊に其の霹靂に於て創世の神意より説き起して靈界の正月の到来せることを宣示し次第に新しき理想の世界の創造に及んでいる点はちょうど憲法が建国の精神より説き起して万代の国是を規定しあると同一筆法である。ただこれは其の目的万代の万国を統治する根本道徳であるから一国の憲法と異つて其の意味は一層普遍的であると共に更に一層根本的である。

御神樂歌一篇の趣旨これは元より廣大深遠として計り知るべからざるものである。とは云え其のこれを起草された目的はと云えば今迄隠れたる神の創世創人の目的を明かにし以つて今日迄の罪惡と欠陥とに満ちたる世界を全然改造して精神的にも肉体的にも乃至物質的にも健全にして幸福なる理想の世界を実現するにあるのは云ふ迄もない。更に之れを詳しく云えば理想の新人、理想の新仮定、理想の新国家、理想の新社会を実現せんとする目的を歌つたものである。従つてこれを小にしては修身、齊家の座右銘となり、これを大にしては治国平天下の無上の法典ともなるのである。されば信者未信者を問わず苟も人間なる以上必らずや一本を座右に備えざるべからざる人類共通の宝典である。

以上は御神樂歌一篇の大体の目的を語つたに過ぎないがなおその詳細にわたつては後章に於て一段の研究を試みんと欲す。

第四章 御神樂歌の地位

古来人間生活の羅針となつて来た宗教の教典中重なるものを挙げれば仏典、聖書、コーラン、四書の如きは其の主なるものである。

此等の聖典の著者並に宣伝者は或はインドに生れ、或はユダヤに生れ、或はアラビアに生れ、或は支那に生れたけれども其の聖典の中には一人としてインド人はかくの如く生活せざるべからず、ユダヤ人はかくの如く生活せざるべからず、アラビア人はかくの如く生活せざるべからず、支那人はかくの如く生活せざるべからずとは規定しなかつた。何れも人間は如何に生活すべきか？ 人生の意義及び価値如何と云ふ人類共通の大問題に向つて疑問と解決の歩を進めたものである。

けれどもこれを彼等の生れた時代と数千年隔たつた現代人より見れば其の人生に対する疑問も甚だ幼稚である計りでなく其の解決も至極単純であつたために彼等が生存して居た当時の人間はこれで満足して居つたかも知らないが今日に至つては到底現代人の深刻なる疑問を解決するの力がない。これ仏教なり、基督教なりマホメット教なり儒教なりが過去の情勢に依つて現在なお形の上の存在を保つて居るけれども其の實際に於ては何人も顧みざる所である。

これは必らず宗教に計り通じた現象ではなく人生百般の事凡て其うである。一例を挙げて云えば正宗の名刀も今日の如き砲弾との交換軍艦と軍艦との戦争に対しては殆んど用途がないと同様である。

天理教の教典御神樂歌は此う云ふ文明の程度の発達した現代に於て最も新しき人生の羅針盤として生れたのである。

然らば如何なる点が最も新しい人生の羅針盤であるかと云えば其の文字簡素にして他の聖典の如き煩瑣の説明を欠くと雖もしかもなお明瞭に神の新世界建設の理想を語つて居る。其の新世界建設の理想と云ふものは今日迄何れの宗教の教典にも説かれなかつた人間創造世界創造の地場（根源地）即ち大和の庄屋敷に宇宙の根本實在の神が顕れて所謂地場中心とせる世界一国家一族の理想の世界の建設を歌つた点にある。

更に其の形式より論じても従来宗教は室内に閉居して幾度も 繙読せざれば其の教典を暗記することは愚か其の意味さえ充分に了解することの出来ない程枯掘且つ難解のものである。然るに天理教の聖典御神樂歌は耳一度これを暗記すれば山であらうが野であらうが海であらうが川であらうが内であらうが外であらうが隨時隨所に於て感興の湧くが倅に歌いもし考へもすることの出来る様に節奏と振りとが陽気に面白く付けられて居る。其れ計りでなく御神樂本其の者も決して難解の文字を用いるゝことなくいろはと数字と

を知れるものには何人と雖も読み且つ理解することの出来る様にできている。かくの如く眼の見えぬものも耳の聞えぬものも口の利けぬものも皆なそれぞれ与えられたる器官を通じて神の意志を尻且つ行ふことの出来る様に組立てられている点は実に其の用意の周到なる至れり尽せりと云わなければならない。

殊に世界が文明になればなる程人間は複雑難解なる教典を研究している暇はない。其の点を達観して仕事をしつゝ真理を研究することの出来る様に簡単な俗謡の形式を選ばれたのは従来宗教の企て及ばざる特殊の地位を占めるものであつて真に新世界の理想の聖典である。

なお御神楽歌と御筆先との関係、御神楽歌と古神楽歌の関係、御神楽歌と俗謡や和讃との関係は章を追ふて研究すべし。

凡そ人間には二種の更生がある。其の一は肉の更生であつて他の一は靈の更生である。肉の更生とは云ふまでもなく死して再び他の母胎に宿り臨月来つて再び此の世に来る所謂世の誕生なるものである。靈の更生とは小なる靈より大なる靈に、醜なる靈より美なる靈に、偽なる靈より真なる靈に、悪なる靈より善なる靈に向上する世の所謂改心を云ふのである。世間ではよく不親切な人間が親切になり放蕩な人間が身の固まつたのを見て「彼の人間は生れ更つた」と云ふ。此の反対に親切な人間が薄情になり、品行の正しい人間が放蕩になつた時「彼の人もよくマア變つたものだ」と云ふ。これが靈の更生である。

何んな人間でも「進化せざるものは退化す」と云ふ宇宙の原則より見て其れが又た向上にせよ墮落にせよ何等かの變化を精神上に引き起さずに一生を終るといふ人間はない。其れは恰度肉体の上に来る生理的變化と同様である。

けれども此処に靈の更生と云つたのは其う云ふ日々刻々に精神上に起る小變化を云つたのではない。或る一の動機より旧人格を捨て旧生活を捨て、全然新しき新人格を得新生活に入る、精神上の大變動を指して云つたのである。釈迦は此の精神上の大變動期を称して一大事因縁と云つて居る。

元より人間には其の面の異なるが如く其の一大事因縁の時期に到達するも同一時ではない。或る者は昨日其の時に遭ひ、或る時は今日其の時に遭ひ、或る時は明日其の時に遭ふ。元より其の人に依つて異つてゐる。

けれども多くの人間は優曇華の花にも優りて遭ひ難き此の千載一遇の好機会に接しながら自分の精神的準備が出来て居ないが為めに遂に機会を失ふて時の流に押し流されて了ふ。私は此の実例を大悪党もしくは大放蕩家に見る。と云ふのは彼等が必ずしも高僧智識の説教に接する機会があると云ふのではない。親なきものは兄弟、兄弟なきものは妻、妻なきものは子、子なきものは朋友、朋友なきものは困難と窮迫に依つて屢々高僧知識の説教に優るとも劣らぬ説教を聞いて居るのである。而かも因縁は彼等を引いて何処までも墮落のドン底に引き入れなければ止まないのである。

けれども如何なる悪人でも一度は身上（疾病）の関を越すに越されぬことが出来るか或は事情（困難）の関を越すに越されぬ時に遭ふ。其の時彼等の心に浮ぶものは如何にして今一度自由の生活を享樂し得べきかといふことである。

彼の係蹄に陥れる鼠が係蹄の俛水中に投げられるや彼は如何にもして水の襲撃を免がれんとする。其れと同様に人間は元來生を愛する動物である。殊に悪人程其うである。彼等は悶躁きに悶躁いた結果遂に漸く自己の非を悟る。其れはまだ良い方である。大抵の悪人は幾度も牢獄の中に投げられつゝも遂に良心の目を開くことなしに彼の世に歸つて行くものもある。否其れが多いのである。

けれども更生を要するのは必ずしも監獄内の罪人計りではない。却つて法網を潜つて非人情的行為非人道敵生活を行ひつゝある道徳上の罪人に於て其の必要を見るのである。否な此の種の慢性患者こそ却つて救済の必要を痛感するのである。

人-世俗道徳に支配せられて居る人は道徳の仮面を冠つて専ら私利私欲を貪つて居る。而して世間の人其れを尋常普通の行為として怪まない。

彼等の道徳に従へば虚偽は自己の都合に依つて勝手に許されてある。唯其れが虚偽なることを悟られなければ良いのである。彼等の道徳は如何なる罪惡も人目を避けらるゝ限りに於て行ふのは何等の罪惡ではないのである。天理教が靈の更生を迫る所以のものはかくの如き半盲若くば全盲の靈魂に対してである。

天理教に於ける更生の要件は最も簡単である。其の要件とは人間の一切の疾病不幸の原因は八埃（をしい、ほしい、かわゆい、にくい、うらみ、はらだち、ゆく、こうまん）にあり、もし健全にして且つ幸福なる生活をなさんとすれば八埃を払つて誠を發揮せよと云ふのである。

御神樂歌 第一下り目に

- 一ツ正月こゑのさづけはやれめづらしい
- 二二につこりさづけもろたらやれたのもしや
- 三二さんざいこゝろをさだめ
- 四ツよのなか
- 五ツりをなく
- 六ツむしやうにでけまわす

とある中の三歳児心を定めと云ふのが更生の要件である。三歳児心とは所謂天真爛漫にして何物にも蔽はれざる精神にして之れを通俗的の言葉をもつて云へば誠である。

誠とは真実性である。自然性である。先天性である、真摯性である、誠実性である。其

れが自分自身に対して活く時は正直となり他人に対して活く時は親切となる。けれども等しく親切と云つても対者に依つて其の名を異にするのである。即ち彼の活く相手によつて忠と云ひ、孝と云ひ、仁といひ、義といひ、礼といひ、知と云ひ、信と云ひ、貞といひ、友と云ふが如き即ち之れである。

之れを例へて云へば誠とは清水である。埃とは泥水である。其の何れが飲用に適し、其の何れが快感を与へるかとは普通の常識あるものゝ直ちに判断し得る所である。然るに心の目失ひたる人間は此の二者の區別を鑑別することが出来ないのである。

けれども論議は凡て必要でない。人は唯之れだけを痛感すれば沢山である。曰く正直は最上の生活であるといふことを。正直には虚偽をもつて自ら欺きつゝある者の知らざる苦痛もあらうが又同時に彼等の知らざる楽がある。其は包むことなく蔽ふことなく虚偽をもつて味附けざる真実の生活の味を知る。唯其のみ真実の生活の味を知る、例へば正直の知る人生の真味は熟せる果実を枝より口にもぎとつて食ふが如く、虚偽の知る人生の真味は未熟の果実に砂糖の味を加へて喰ふが如きものである。前者には即ち後者の知らざる自然の味がある。此の自然の味こそ正直の特権である。

古来人生の大理解者中未だ一人として人生の自然味を味ふことを以つて最上の幸福と告白せざるものはない。人生の自然味とは之れを云ひ換へれば自然の人情味である。自然の人情味とは之れを個人的に云へば正直、之れを社会的に云へば親切である。人生の真味は此の中に在るのである。さればこそ未だ麻痺せざるの舌、未だ一度も不自然（虚偽、罪悪）の乳を吞まざる舌は常に此の味の中に生き且つ楽しんである。

けれども天理教に依つて救はれたる者乃至は他の宗教に依つて救はれたる者の中幾人か天真爛漫な白紙の如き心をもつて虚偽を以つて味附けられざる人生の自然の醍醐味を味ひ得たるか？ 恐らく其は指を屈する程であらう。寧ろ吾人は律法や戒律を知らざる野の自然児の中に多くの神（自然）の児を見るのである。

其れは何故であらう？ 曰く彼等は一時疾病の苦痛を医されんが為めに更生の誓紙に血判を押すと雖も其の心の底には自然の生活を要求する何等の根本的欲望がないからである。

けれども臨月は必ず入胎せるものゝ上に来る。又た不自然の女に育てられたる自然の児の自然の母の手に帰つて来る時は必ず来る。其の時は彼が不自然の女と自然の母と何れが真の情味に勝てるかを知つた時である。云ひ換へれば罪惡の毒酒の如何に苦がく美德の甘露の如何に甘きかを知つた時である。其の時こそ彼が自然の母に依つて再生の歡喜を与へられる時である。

短気なる宗教家、氣の小さい道德家は大なる罪惡に対しては対岸の火事の如く小なる罪惡に対しては自家の出火の如く騒いで居る。けれども私は云ふのである。

捨てゝ置け。彼等の墮落し得る限り墮落せしめよと凡夫の教育法は之れよりないのである。暴飲暴食の悪習を有するものは一度や二度の他人の忠告に依つて直るものではない。けれども胃も動かさず腹も働けざるに至つて始めて後悔するであらう。

罪を愛するものは其の報酬として罰を受けざるべからず。惡を愛するものは其の報酬として災を負はざるべからず。凡て虚偽と不自然との受くる所の報酬は自ら支払ひし代価と比例せるものである。彼等の中比較的早く此等のものゝ苦味にあきたる者は期せずして自然の真味を求むるであらう。其の時こそ彼の救はるゝ時である。

凡てにがきものゝ味を知らざるものは甘き物の味をも知ることができない。虚偽の空虚を知つて始めて真実の価値を知り、罪惡の苦痛を知つて始めて美德の快樂を知り、不自然の臭味を知つて始めて自然の甘味を知るのである。

古来靈生の名産婆と称せられたる人々は皆更生の自然の時を知つて居た。彼等の産婆術は皆自然であつた。分けて近代の名産婆中山ミキ子の産婆術こそ簡單にして最も要領を得たものであつた。曰く

三歳児の心になれと。

貪婪、吝嗇、邪愛、憎惡、怨恨、憤怒、強欲、高慢の為めに我れと我が靈魂を苦めつゝあるものゝ更生の臨月は迫つた。世人は一日も早く正直と親切とに生れ変らざるべからず。人生の真の幸福は唯此等の者の特権であるからである。

法律上の罪人と道德上の罪人

大平 良平

世人は全国至る所の監獄の近くの田畑に腰繩の附いた赤い着物を着た容儀の悪るい労働

者を見るであらう。而して其れを直ちに罪人だと認めるであらう。けれども大抵の人は世界に最う一種の罪人即ち病床の監獄、事情の牢屋に封じこめられて居る罪人を知らない。其れがたとひ自分自身であつても彼は決して自ら罪人とは思はぬ。けれども神の法律より見れば彼も亦明かに罪人である。唯兩者の差は一は人の法律即ち国法の罪人であり、他は神の法律即ち道徳の罪人の差である。

けれども此の二つの法律即ち神の法律と人の法律とは其の道徳的標準に絶対と相對との區別はあつても決して其の目的を異にするものではない。即ち人生の幸福の保証を異にするものではない。唯一方は相對無限の有象界の約束であり、他は絶対無限の無象界の約束たるの差のみ。

此の二種の法律の關係は恰かも理想と現實との關係である。又た影と形との關係である。凡て人間自然の法則として現實が進歩すればする程理想も亦進歩するものであるが、現實の社會を標準として立てられたる法律の進歩の前には必ずや其れと一歩先んじた宗教の存在するものである。古來政教二者は影の形に付き添ふ如く磨れつ纏れつして時代を無限の高さに導きつゝ來た。これは時代と法律との關係並に時代と宗教との關係を研究すれば明かなる事實である。

けれども私が此處に述べんとすることは道徳と法律との關係宗教と政治との歴史的關係ではない。吾人は生存の特權を得る為めに常に此の二種の法律わけて神の法律に従はざるべからざることを云ふのである。

古來一般人類の習慣として法律上の犯罪をもつて非常に重大視しつゝも道徳上の犯罪に對しては左程恥辱視せざる傾向がある。此の傾向は文明の發達に依つて破られ今日世界の最も進歩せる文明國は道徳上の犯罪者に對しては社會の制裁が非常に嚴格になつて來た。これは喜ぶべき現象である。とは云へ今日の文明程度にては未だ道徳上の罪人を法律上の罪人と同一程度に取り扱ふ迄に發達して居ない。これは無理かも知れない。何故なれば法律上の犯罪は云はゞ大埃にして道徳上の犯罪は其れに比して小埃の差があるからである。けれども「罪の価は死なり」と云ふ基督教徒の論法に従へば道徳上の犯罪に對して最つと人類の羞恥心を喚起する必要がある。私は天理教入信以來殊に此の感を深くするのである。

疾病や不幸が罪惡の報酬なりとの觀念は天理教に依つて始めて説かれたことではないが天理教程疾病と罪惡との關係並に不幸と罪惡との關係に對して穎敏な神經の働きを持つて居るものはない。此の點に於て天理教は病理の發見者不幸の原理の發見者と云つて過言ではない。況して此の事實は天理教の聖典御神樂歌十下り目に

七ツなんぎするものもこゝろから
わがみうらみであるほどに
八ツやまひはつらいものなれど
もとをしりたるものはない
九ツこのたびまではいぢれつに
やまひのもとはしれなんだ
十ドこのたびあらはれた
やまひのもとはこゝろから

と云ふ神の証言あるに於てをや。

天理教では病氣の事を一名「お障り」とも「御異見」とも云つて居る。蓋し神意に合せぬことをした結果忠告を与へられたるの謂である。この御障りもしくは御異見は天理教徒にとつて唯一つの恐怖であり、且つ唯一の恥辱である。従つて彼等の良心は其う云ふ恥辱に陥らぬ様に自然／＼と穎敏に働いて來る。かくの如くにして一見阿房の如き天理教徒も其の道徳的良心は却つて今日の高等教育を受けたものにも優さつて穎敏である。

私は自分としては此の十年間醫藥の味に殆んど接したことがないが其れでも自分の家族一自分の家族は天理教徒ではない一の為めに病院に行き待合室や診療室やを覗く毎に麗装した紳士や淑女が恰も此處を晴の場所でもあるかの如く洒々として振舞つて居るのを見て何時も「恥辱を知れ」と云ふ同情と憐愍の感に打たれないことはない。

實に世のなべての人が疾病の厭ふべきもののみならず更らに恥づべきものであることを悟つた時、病院は体裁の良い監獄なることを知つた時、病床は苦痛の監房であるといふことを知つた時は如何に彼等は病院の玄關に立つ事をきまり悪く思ふであらう。其ういふ時こそ真に世界が改善の途に就いた時である。

かう云つた所で疾病の原因、不幸の原因を全く偶然の機會に歸して敢て其の由つて來る所の根本原因を知らず又知らうとも思はぬ非天理教徒にとつては病院は教會よりも神聖に、医者藥は神よりも有難く疾病は生物普通の生理的現象だと思つて居るであらう。私は其う云ふ人達に向つて一日も早く疾病は腰繩を許されたる監獄の労働であり、病院は体の良い貴族的監獄であり、病床は開放せられたる監房であることを知らせたい。其うしたら

彼の傲岸を極めた車上の罪人は何時しか忍びの門を潜つて診察室に通る様になるであらう。けれども其の云ふ者も一人でもある中ではまだ真に道徳的に完成せられた理想の世界が実現せられたと云へない。真に理想の世界の実現せられた時は世界に唯一人の疾病なく不幸なく凡ての人皆平等に健全なる精神と健全なる肉体とを楽しむ様にならねばならぬ。其の時来らば世界にありと凡ゆる監獄、裁判所、警察、病院、兵營は取り払はれて其の後に聖堂が建てられらるであらう。其の時こそ我は神の鎌を手にしなごら我が仕事は了へたりと歡喜の叫を叫ぶであらう。

憐れにも悲しき人々よ何故なれば卿等は唯一碗の飯唯一片の衣の爲めに牢獄に自由の身を沈めんとするぞ！ 憐れにも悲しむべき人々よ！ 不自由を与へたるは神にあらざして卿等である。不足を与へたるは人にあらざして卿等である。理想の世界の実現は卿等の爲めに一日一日と延期されつゝある。思ふて此処に到らば監獄を恥ぢよ病院を恥じよ。凡そ世にありとあらゆる罪を恥ぢよ。然らば卿等と卿等の同胞は明日にも平和の光の下に欣舞することができるであらう。わけて私の望む所は病院をもつて道徳的罪人の監獄なりとの觀を呼び起さんである。何故なれば世はかくの如き自覚者の増加に伴つて漸次改善の域に近くからである。

小自然主義と大自然主義（自然の階級）

R O 生

自然主義と云ふ言葉は一時思想界の流行語であつた。けれども当時は自然主義を唱へる人も其れに反対する人も互ひに眞の理解なくして別な問題に移つた。之れが移り氣のする日本人の通弊である。

私は芸術に限らず実生活に於ても自然といふ言葉程生々とした感を与えるものはないといふことを知つて居る。自然！ 人は何時何処に於ても自然より美しいものはない、其れが不自然となるから醜となり悪となり偽となるのである。

けれども等しく自然と云つても其の中には無限の階級のあることを忘れてはならない。即ち等しく自然と云つても鉱物的自然もあれば植物的自然もあり、動物的自然もあり、人間的自然もあり、神的自然もある。然るに近来稱へられた人生上の自然主義の如きは全く此の階級を忘れたものであつた。例へば岩野泡鳴氏の半獸主義の如き其れである。其の中には生物進化の大理想が忘れられて居る。而してより低き自然即ち半人半獸といふ不徹底の生活に満足して居る傾がある。

凡て主義と云ふのは世間の論理的頭腦の考へて居る如く論理さへ正しければ何んでも良いと云ふものではない。又其の主義を実行の上に徹底せしむれば其れで人間として徹底したと云ふものではない。主義の中には善い主義もあれば悪い主義もある。正しい主義もあれば誤つた主義もある。其の中で最も善い最も正しい主義を徹底せしむるに依つて彼は主義の実行者として又人間として成功した人と云ひ得る。

けれども最も善いとか最も正しいとか云ふことは兎角自分の利害を中心として考へられらる傾がある。私の云ふ最も善いとか最も正しいとか云ふのは其んな自分の利害と結びつけられたる御都合主義ではない。全人類の幸福を中心として立てられたる主義を云ふのである。其れを博愛主義と云はうが、人道主義と云はうが、人情主義と云はうが、絶対個人主義者と云はうが其れは各自の自由である。唯何んな名前であるとしても人情を無視したる主義は絶対に賛成することはできない。否神情と云つた方が一層全的に私の要求を表現することができる。

世間の人々は自然と云へば田や畑や野や山や森や林や草や木やを計り自然と思つて居る。けれども其れは最も低き自然である。尚ほ其の上には昆虫の自然もあれば鳥獸魚類の自然もある。されど吾人々類の肉眼に映ずる限りに於て人間より高き自然はない。けれども其れは自然の極致たる神の自然に如かない。

私は人情を愛する。其れと共に人情といふ言葉も愛する。殊に英語の human nature と云ふ言葉程快感を与えるものはない。其れは多くの説明を与へずして此の世に於ける最高の自然であるといふことを語つて居る。動物にもあらず植木にもあらず況して鉱物にもあらぬ最も高き自然の存在を語つて居る。

けれども人間に無限の階級があるが如く human nature 即ち人情にも無限の階級がある。或る者は食ふ事、飲む事、着る事其れが最高の人生だと考へて居る。或る者は異性を求めて子を産む事、其れを最高な人生だと考へて居る。けれども其の人間の要求が其んな事に尽きて居るならば其れは動物と相離ること近き自然をもつて居る人である。私の考へたる否な教へられた最高の自然は全人類の最大幸福の爲めに活動しつゝある最高の精神である。

私は自然を愛す。其れが何んな低い自然であつても愛す。たとへ一塊の土でも一片の石でも愛す。けれども人間よりも近く神よりも深く愛する自然はない。実に神は凡ゆる自然の極致、宇宙の精華である。其は宇宙の最高の美、最高の真、最高の善、其の者である。

私の好き嫌ひの性質は此の世界に来てから未だ曾て之れが本当に好きだと思つたものに逢つたことはない。唯一時私の精神を磁石の如く吸ひつけたものが三人ある。けれども其れが何処迄好きであるか自分にも訳らない。

けれども私が見た自然の中彼の唯一人の者より高き自然を見たことはない。其の名は私が明かさなくても解つて居る。私は常に彼の最高の自然と一手に居たい。けれども其れはとても私の様な者には許されない。私の悲哀の源泉は其処にあり私の光明の中心も亦其処にある。

実に凡ゆる自然の中神ばかり高き自然はない。其の他の者は彼の牝鶏の胎内の卵の如く級数をなして彼に連つてゐる。元より自分は其の第何位の自然であるか知らない。けれども何時か時が来れば自分も亦外の卵と同じく胎外に生れ出て独立した雛となる時があるに違ゐない。私は其の時を待つて居る。

此の事は外の事を話して居るのではない。私の将来の理想を語つて居るのである。私の将来の理想とは現実の自己よりも一層高き自己、一層大なる自己に迄到達せんとする希望である。云ひ換へれば私の今日持つて居る自然私の今日持つて居る世界よりも一層高き自然一層高き世界に到達せんとする希望である。

私は木や石の生活をしたいと思はなければ鳥畜類の生活をしたいと思はぬ。又同じく人間の中にあつても他人の生活をしたいと思はぬ。唯私の味つて見たい生活が唯一つある。其れは天理教祖の生活した生活である。彼女は実に今迄生れた人間の中の最高の自然主義者であつた。彼女には何処と云つても無理な所がなかつた。云ひ換へれば一として不自然な所がなかつた。実に彼女の達した自然は人間の達し得る最高の自然に達して居る。従つて彼女の大自然主義より他の人の自然主義を見れば凡て無な不徹底な小自然主義に過ぎない。

彼等の自然主義には最高の人情美も説明せられて居なければ最高善も説明せられて居ない。唯動物衝動の命ずる低動物的本能の命ずる低に自己を表現すれば良いのである。其の自己の内容が何んなものであるかは彼等の問ふ所ではなかつた。

けれども真の大自然は彼等の理解の外にある。其処には最高の智力と最高の感情と最高の意志とが活いて居る。其処には道徳がある。最高道徳がある。神の精神内容がある。けれども彼等は其処に迄立ち入つて七重八重の底に包まれた本当の自然核といふものを攫ふとはしなかつた。唯手の触るゝ所足の届く所の自然云ひ換へれば官能の自然を攫へて自然だ！自然だ！と云つて騒ぎ廻つて居た。これは彼の道徳生活の落伍者が喜んで投じたのを見ても其の価値は大抵解つて居る。

けれども真の自然と云ふものは彼等の考へた様な浅薄なものではない。浄化せられたる自然の人情に従つて生活する。これが本当の自然主義である。基督やミキ子は実に此う云ふ本当の意味の自然主義者であつた。

此等の偉人の自然主義には獣物臭い所や人間臭い所はなかつた。神の香気が漂つて居る。又た其の中には酒樓や暗室の腐つた空気が混合して居ない。新鮮にして自由の空気が満ち／＼して居る。基督は良い弟子を持つて居た。彼の四福音書の中には彼の大自然主義が遺憾なく説明せられて居る。ミキ子には其れがない。けれども彼女は其の高弟飯降伊蔵によつて彼女の抱いて居た大自然主義を现实生活の上を実現せられたことをもつて当分の満足としなければならぬ、けれども其れはホンの一時である。時が来たならば世界中に彼女の大自然主義大人情主義（神情主義）は広まるであらう。其の時こそ世界に真の自然主義の理解せられる時である。

基督も其うであつたが彼女の自然主義の要領は人間は何処如何なる時に於ても三歳児の如く天真爛漫に生活せざるべからずと云ふことを教へた。唯彼女の論法は之れを通俗的に簡単明瞭な言葉をもつて云ひ表はしたに過ぎない。曰く神には「日の寄進」、人には「互ひ助け合ひ」、自分には「正直」にせよと之れを総合して彼女は誠と云つた。誠は真実である。自然である。天真である。之れが彼女の大自然主義であつた。

彼女の自然主義は官能を超越した実在の世界を領して居る。其れは人間はかくせんとしするものではなくて自然にかくあらねばならぬ必然の生活律に従つて居る。其の天真爛漫の自然の生活は外より来るものではなくて内より突出するものであつた。これが彼女の大自然主義の特色である。

結論として最う一度繰り返して置きたいことは自然には無限の階級があるといふことである。万物の位階は実に其の何れの階級の自然に属するかにある。今日迄説かれた所の自然主義は動物生活と余り遠くない本能生活をもつて唯一の自然主義であるかの如く説かれてある。けれども其れは私の求むる自然主義ではない。私の求むる自然主義は基督やミキ

子によつて主張されもし且つ実行されもして来た天然生活自然生活本性生活天真生活である。之れを一言にして云へば三歳児の如き生活其れが私の理想とし幸福の熊手として居る大自然主義である。

四方面の生活

R O 生

世間の人間が彼の人間は偉い人間だと云ふ人間に逢つて見ると大抵舌を二枚にも三枚にも使ふことの出来る所謂口先の八方美人である。

けれども眞の八方美人と云ふものは彼等俗人の考へて居る様な口先計りの人間の事ではない。唯一つの頭と唯一つの舌と唯一つの心臓を有して居る人の事である。私は其の人の名を誠又たの名を正直と名附けて置く。

正直とは之れを例へて云へば明月の如きものである。其の何れの方面より観察するも一点の曇を発見することができない。

不正直とは之れを例へて云へば雲に蔽はれたる朧月の如きものである。一方より見れば明皓々として輝くとも他の一方より見れば黒暗々である。

正直とは之れを例へて云へば明玉の如きものである。其の何れの方面より観察するも四方面の姿を有するのである。

不正直とは之れを例へて云へば化粧した癩病病みの女の様である。之れを遠くより観察すれば甚だ美麗なれども之れに近いて観察すれば唯腐肉あるのみ。

正直と不正直とは之れを又た粗服の美人と美服の醜婦に譬へることが出来る。前者は其の形は素朴なれども其の心は美麗に後者は其の形は美麗なれども其の心は醜陋である。

由来虚偽は元来無を有の如く有を無の如く見せ且つ信ぜしむるものなれば何時か一度は其の空虚を觀破せらるゝことあるも正直は始めより有を有とし無を無とするものなれば何処如何なる時に於ても決して矛盾を發見せられるの危険がない。

之れは主として正直の価値を客觀的に見たるものであるが之れを主觀的に見る時は正直は人生の精粹といふことが出来る。人は元来人に対して忠(親切)なると共に自己に対して忠ならざるべからざるものである。これは道德や法律が命ずる訳ではない。自己の生欲が而か命ずるのである。而かも生欲が強ければ強い程其うならない訳に行かないのである。

成程詐の吐ける人は世間的には成功するかも知らない。けれども彼は自分自身を欺いたと云ふ点に於て幸福を差引せられて居る。

世界と云ふものは虚偽吐きには都合よく正直には都合悪く造られてあるものではない。虚偽吐きは其の場、其の時、其の人、其の物、其の事には成功しても彼は其れに相当する或る者を失つて居る。其れでなかつたら誰も正直に此の世界を渡らうとするものはない筈だ。正直と云ふものは其の場、其の時、其の人、其の物、其の事には失敗しても不正直な人間の経験することの出来ない貴い経験を心の底より感ずることができる。例へば職人である。甲は其の棟梁に甘く取り入れて働かざるに一日八十銭の給料を貰つた。乙は唯仕事大切に働いて一日唯つた六十銭の日給さへ貰えなかつたとする。此の場合瞞着に依つて八十銭の日給を得たものよりも正直に働いて六十銭の日給を得たものゝ方が精神的に幾ら幸福だか知れない。

古来正直は最良の方便なりと云ふ事が云はれて居る。正直は方便でない。目的である。昔の人間が正直によつて人生の眞味を味ひ得なかつたのは正直を以つて他人より名譽や信用を博する方便と計り考へて居たからである。けれども正直の本当の価値は其んな対社会的に価値のある訳ではなく対自己的に本当の価値があるのである。

自己の要求を義理とか世間とか云う様々の煩るさい羈絆に煩はさるゝことなく思考する俛要求する俛に発表もし満足もさせる所に正直の価値がある。

吾等は何んな高貴な前へ出たつて腹の空いたのを空かないと云つて詐を云ふ必要はない。此の点に於て腹の空いたのを空かないと云つて誤魔化さなければならぬ鶴千代の生活は世にも最も憐れな生活である。

日本人は元来虚偽をつく事を何んとも思はない人間である。彼等は詐を吐かないでも良い様な所へまで詐を吐きたがる。其の爲めに世界至る所日本人の云ふ所を眞に受ける所がなくなつた。これは日本人にとつて最も悲しむべき事である。

不人情! これは嘆くべき事には違ひないが不正直! これは更らに嘆くべき事である。

凡そ人間にして自分を欺く様な人間に碌な人間はない。何故なれば自分を容易く欺く様な人間が他人を欺かない道理がないからである。

詐を吐く人間は本当に自分の要求を自覺して居ないからである。もし本当に自分といふ

ものを真面目に考へ本當に自分の生命を尊重して居たならば彼は其の場の都合で容易に自己を捨て得ない筈である。私は信ずる。

此の世は詐を吐いて迄も他人の機嫌を取つて生きて居なければならぬものとすれば住む価値はないといふことを。

私は何んな事があつても有を無とし無を有と信ずることができない。口では何うとも云へるであらう。心では何うしたつて曲げる事はできない。其れで私は口の法則を捨て、心の法則に従ふ。

欺かるゝことは辛いものであるが欺くことは尚更辛いものである。而かも生命と云ふものを粕か何んかの様に思つて居る人間は欺くことも平氣であれば欺かるゝことも平氣である。

けれどもアルコールに中毒した人間に水を以つて酒に代へよと云つた所で駄目である。彼の知つて居るのは酔後の水の味だけである。酔が醒めると再び酒が飲みたくなる。詐に馴れた人間も其の通りである。時々は良心の光を見ることがあつても亦直ぐ元の詐つきに歸つて了ふのである。

けれども此処に一つの極めて重大なる問題がある。其れは形の樂と心の樂と何れを選ぶかの問題である。其の選択の如何によりて其の人の快樂は小さくもせらるれば大きくもせられ、根本的にもなれば皮相にもなる。要は其の人の自由である。唯其等の人のおしなべて心得ふべきことは口の八方美人とならうと思ふ者は心の快樂を捨てよ又た心の八方美人にならうと思ふものは形の快樂を捨てよと云ふことである。何故なれば我等は心の八方美人であると同時に口の八方美人となり得ないからである。

吾等心の八方美人の憧憬者は内面の光明と自由と快樂と満足とをもつて満足しなければならぬ。苟も自分自身を欺いて外の名利を追求しやうと思つてはならない。正直！其れは人間の最上生活である。其の中には一切の快樂が円満具足せられてある。吾人は正直を樂まなければならぬ。其れは人生の精粹であるからである。正直の光明は十方遍照光である。其の姿は水晶の名玉である。四方正面の姿を有す。正直の価値は而かく大である。されど夢にも之れを以つて他の生活の方便として考へてはならない。何故なれば正直は其れ自身方便にあらずして目的であるからである。

正直に之れを例へて云へば一刀流の如きものである。其の切先きには全心が集中せられて居る。不正直は之れを例へて云へば二刀流の如きものである。論理としても気分は散乱して長く一刀流に敵し得ない筈である。

凡て一心不乱に全力を尽して事に従事する者の道は一直線である。何故なれば彼は他を顧るの余裕がないからである。凡て生を熱愛する人の取る所の道も亦其うである。此の世に於て其の道に屈折あるものは唯蛇あるのみ！

人間の進むべき道は原始時代より定められてある。曰く正直即ち之なり。之れを置いて人間の進むべき道はない。又た之れを置いて人間の生くべき生活はない。もし世に四方正面の価値なる者ありと仮定せんか？其は唯正直其の者に外ならないのである。もし世に四方正面の生活なるものありとせんか其も亦正直其の者に外ならないのである。従つて正直は最良の方便にあらずして最良の生活である。これが本當の真理である。これが本道の目的である。

(大正四年九月十日)

教界の廓清 (二)

大平 良平

神殿を改築せよ

凡そ今日の天理教には改革すべき多くの事件が累々として至る所に横はつてあるとは云へこれを一言にして尽せば神殿を改築せよと云ふ一語に尽きる。

私が此処に神殿を改築せよといふのには二様の意味がある。其の一つは中山家の氏神として建てられたる今日の神殿を取り払つて神の定紋を打つたる神殿を建築することである。其の二は各個人の靈魂に附与せられたる神殿を改築するの一事である。

第一の神殿改築に関しては恐らく此う云ふ愚痴が伴ふであらう。此の神殿は信徒十年間の苦心に依つて漸く完成せられた神殿である。其れを漸く完成した今日に於て取り払つて再び建築することは到底云ふべくして行はれないことである。と一応尤もな説である。けれども其の尤もは人間心としての尤もであつて神の心の尤もではない。

今之れを切りなし普請の理想より云つても現在の神殿が百年千年の後に残り得べしとは信ずることはできない。天理教徒の中には其う云ふ風に考へて居る人があるらしいが一恐らく三十年を出でずして再び改築せざるべからざるに至るであらう。唯現在の所現在の神殿を以つて満足すべきや否やの問題であるが思うに現在の建築に対しては神は決して充

分の満足を表し給はぬであらうと思はれる。其れには種々なる理由があると雖も神の社に神の定紋を打たずして中山家の定紋を打つたことは其の一である。御大祭其の他に教師のみ参拝して信徒の参拝し得ざる其の二である。

次には精神的神殿の改築である。これは何人も異議なき所であらうと思ひきや其の第一の反対者が本部であらうとは私は寧ろ意外の感に打たれざるを得ないのである。思ふに彼等の眼より見れば現在の天理教は恐らく完成せられた理想の世界教であるかも知らない。けれども吾人切り無し普請の要求を真に痛感するものにとつては自分自身の精神的改造の要求を常に感じつゝあるのみならず世界にも天理教界にも無限の改造修理の必要を痛感するものである。

一例を挙げて云へば天理教の大家族主義の実現である。其れは今日実地に感情として各個人の精神中に吸収されてゐないのみならず理論としてさへ撰取せられてゐないのである。かくの如くにして果して天理教が弘布せりと云へるであらうか！ 吾人は決して然らずと答ふるものである。

要するに今日は物質的にも精神的にわけて精神的にも神殿改築の必要に迫つてゐる。吾人は上本部員より下信徒に至るは勿論のこと全人類の精神上に建てられたる旧殿の改築を希望せざるを得ないのである。

婦人会を改良せよ

私が護国寺一小石川の近くを歩いて居た時東本分教会の部下で普段懇意にして居る熱心な天理教信仰の婦人に逢つた。其の人はこれから教会に婦人会費を納めに行くのだと云ふのであつた。私は其の婦人に訊いた。

婦人会費つて月幾らづゝ納めるのですか？

其の婦人は答へて云つた

一年一遍に纏めて納れば一円で良い相で御座んすけれども月々納めれば一円二十銭納めるのだ相でございます。教会では皆さんが婦人会に入つて居らつしやるけれども私丈け未だ入れて戴いて居ませんでした。此の頃漸つと蓄めて置いた金が其れだけ集まりましたから納めさして戴かうと思ひまして、

婦人は尚ほも婦人会の事に就て語り続けた。婦人会には特別と普通とあつて普通は一年に一円づゝ十年納める義務のある事や、又た賛助会員とかあつて身分の良い方が其れに入つてゐる事やらを。

私は其れ迄婦人会のある事は知つて居ても其の組織に就ては殆んど何も知らなかつたが此の婦人の言葉に依つて婦人会の組織に対して少なからず不審を抱く様になつた。其の不審と云ふのは何処迄も理と眞実とに従つて行かなければならぬ天理教婦人会が世界並の婦人会（例へば愛国婦人会の如き）のやうに金を以つて人間に等級をつける事、其れから外の婦人会なり兎に角苟くも一派独立の宗教の婦人会に賛助員のあるとは何たる事ぞ！ 賛助員の力を借りなければ心の研ぎ合ひが出来ないのかといふ様な事であるが中にも不審なのは義務の爲めに寄り集つてゐる他の婦人会なら兎に角精神の修養を目的として居る天理婦人会に十年の制限を加へるとは何う云ふ理由であらう？ 余り不審だから私は其の婦人に聞いた。

十年会費を納めれば其れで一生納めないで良いのですか？

此の私の疑問は同時に婦人にも疑問を起さしたと見え其の後私の家に見えた時彼女は私と別れてから他の婦人会なら兎に角神様の婦人会が十年と年を切つて納めるつてのは可笑しい事だ。嘸大平さんが笑つておゐでになつたらうと思つて一人で思ひ出して笑つたつていふ事を話された。

其れで私は考へるのである。道に特別の功勞のある人を特別会員にするといふのは未だ恕すべしとしても金を二円納めたから特別会員にする、金を一円さへ納めないから普通会員にさへしないといふことは何んといふ非天理教的仕方であるだらうと。其れから一生精神の修養に従事すべき婦人会員が年を切つて十年とは何んたる非天理教的仕方であるであらうと。私は婦人会とは関係がない。従つて其の内部の組織が何んな風に組み立てられて居るか實際の所は知らないがもし聞くが如くんば婦人会に向つても大なる改良を加へざるべからざる事を感じるのである。

其れに近頃は婦人会も七万円とか十万円とかの貯金が出来其の中四万円とかで天理女学校の敷地を買ふ爲めに本部へ寄附したとか云ふ事であるが今迄婦人会の事業であつた養徳院は本部に押しつける巡回講演は見合せる其れで此の先き婦人会は何をするであらう。（他の婦人会は社会的に色々な仕事をしてゐるが天理婦人会は一つも其れをしてゐない。往々しても慰問袋位のものである）お言葉に

「皆んな居る中に寄り合ふてる中に分らん所悟してやらにやならん。悟し合いは兄弟とい

ふ綺麗な屋敷神の屋敷に居てみつくりては鏡屋敷とは云はん。濁り屋敷とや土とや云はん。」

と、之れは婦人会の爲めに下された言葉であらう。今日の婦人会の状態を観察するに殊に此の感を深くするのである。

殊に憂ふべきは此の頃神殿参拝に来る婦人の氣風である。彼等の中には誠心誠意神に参拝を遂ぐるのではなく、自分の容貌や衣裳を参拝者に見せに来るものがある。此う云ふ形の上の華美を衒ふ悪傾向は独本部の婦人界のみではない。全国一般の婦人界の風潮である。けれども此の現代婦人界の悪風を矯正するこそ真に天理教婦人会の義務にはあらざるか？ 敢て会長以下全婦人会員の活動を望む。

本部員と本部の青年に飯を与えよ

凡そ地上に存在する国家にして其れが野蕃専制の国にあらざる限り国王と雖も憲法の條文を無視して國庫の收入を自由にすることは出来ない。之れは当然の事である。

然るに此処に信徒の献金を恰かも私財の如く処分して顧ざる宗教がある。其れは天理教である。此処にあつては管長は恰かも昔の王侯貴族の如く一切の公金は皆自己の所有に属するのである。従つて収入支出は其の意の俛である。

彼は宏壯華麗の邸宅に棲み其の衣食も亦求むる俛である。けれども顧みて其の本部員並に本部在勤の青年を見よ。彼等は信徒より御授訓の御礼と云つて持つて来る月に一円五十二錢乃至二円位の謝礼より外他に何等の収入の道はないのである。元より本部員には春秋二季に併せ五六十円の祝儀がある（青年にも多少の手当がある）とは云へ之れ丈けの少金をを以つて如何にして内に其家族を養ひ外に本部員としての体面を維持して行くことが出来るか？ 元より本部員にして大教会の会長を兼任するかもしくは大小に拘らず部下を有するものは其の衣食の費を教育費より得るとしても始めより全然部下を有せざる本部員の内面には蓋し思半ばに過ぐる苦衷があるのである。

更らに眼を転じて本部の青年を見るに彼等の収入は本部員に比して一層僅少にして一層窮迫して居る。其の内には家族を有する者も亦少くはないが自分の父兄が教会を有するもの以外の者は秘かに其妻に内職をさせて僅かに糊口を凌いで居る。かくの如くにして果して充分なる活動をなし得べしと信ずるや？ 彼の部下の教会（分教会以上）に於てすら役員は其の生活費を教会より得。青年又た衣食の支給を得て居る。然るに独本部のみ本部員並に青年に生活費さへ供給せざるとは何んぞや？

凡そ一國の大臣以下官職にあるものにして一人として月給を支給せられざる者はない。然るに独天理教のみ其の幹部に向つて衣食の資料を絶つて居る。之れに就ては故御本席も屢々本部員を思ふ親切の言葉を発せられたが故管長は敢て其れを用ゐやうとはしなかつた。

元より天理教徒は日の寄進の爲めに働いて居るものなるを以つて敢て吾人の関する所でないと云へば其れ迄であるが其は信徒の日の寄進と教師の日の寄進とを同一視する誤解より生じた謬見である。

蓋し信徒には各々自己の職業あつて収入の道がある。然るに本部員を始め部下の教師は一身を挙げて道に殉じた生活を行ひつゝあるが爲めに他に衣食の道を求むるの余裕がない。従つて勢ひ借財を作らざるを得ざるは自然の理である。かくの如くにして果して充分なる奉公を神に尽し得べしと信ずるや？

抑も此の道は親さへ樂をすれば良いと云ふ様な道ではない。親子兄弟相寄つて楽しむ道である。然るに今日の天理教は親は飽滿にあき子は飢渴に迫つて来る。之れが果して眞の親心か？ 私は未だかつてかくの如き不條理を見たことがないのである。

人誰か食はずして働き得べき？ 思ふて此処に至らば一日も早く本部員並に青年に対し一家族の獨立に足る生活費を与へよ。徒らに自己の邸宅の完美にのみ心を奪はれて子供に対する同情を欠くは親として大に反省を要する所である。

蓋し皇室には皇室費あつてたとひ天皇と雖も一定の皇室費以外に自由に國庫に手を染むること能わざるは立憲國の定規である。然るに元來立憲的宗教たる天理教に於て今尚ほ専制状態を繰り返しつつある。これ私が天理教の經濟を中山家より獨立せしめ、管長費、本部員生活費青年手当金の區別を立て各々安心して道の爲めに尽瘁する方法を講ずべく求むる所以である。

日の寄進を乱用する勿れ

日の寄進の要件は自由意志を伴ふといふことである。元より其の仕事の如何なるものたるを問はない。唯善業でありさへすれば良いのである。

然るに今日本部の日の寄進を見るにやゝもすれば之れを強制するの傾向がある。従つて日の寄進者も真に誠意をもつて神に寄進するの真実に欠くる嫌がある。此の点は最も注意を要する点である。

なすとなさざるとは各自の自由である。又た勉めて行ふも怠つて行ふも各自の自由である。敢て本部の関することではない。唯各自の永遠の利害に関するのみ。これに向つて忠告するはよし強制するは断じて不可である。敢て此の間の區別を望む。

独善を排す

私は天理教界革命の書いたについて周囲の人々から色々な忠告を受けた。其の忠告といふのをつゞめて見ると天理教は他人の是非を批評する道ではない。自分丈け治めて居れば良い道であると云ふことである。けれども私は天啓の研究と生の要求より全く反対の真理を教へられて居る。今其の一例を挙げると

「此の道前生から今の世又た生れ変りまで悟する理である。すれば元々はじめた地場と云ふ。皆んな治めにやならん。面々みな治めて居ればよいと云ふ様な事ではならん。これは皆んな心がないと云ふ心が感じにやならんまい」

又曰く

「サア誰は留守や彼れは留守やこれ一寸話したいものこれ三名五名あら／＼理心合せ指図とるは義理小言ない。又小言ないもの己等聞かずといふ理はない。指図とつて己等何うや此うや其んな事ではならん。いかんものには聞かしてやれ黙つて居てはならん。聞かん者は何うもならん。皆んな居る中に寄り合ふてる中に分らん処悟してやらにやならん。悟し合ひは兄弟といふ。綺麗な屋敷神の屋敷に居てみつくりては鏡屋敷とは云はん。濁り屋敷とや土とや云はん」

と。他人は此の天啓を何うとるか知らないけれども私の考へに依れば此の道は互ひに悟しつ悟されつする道である。従つて独善を忌むと云ふことになるのである。

もし独善が其れ程貴いものであるならば天理教は布教をやめたが良い。而して自分だけ治めて居たが良い。けれども私には其れが出来ない。自分は自分自身を治めたいと共に自分の住んで居る家庭、自分の住んで居る社会、自分の住んで居る世界を清めたい、而して綺麗な精神で綺麗な世界に住みたい。此の中心の要求に依つて自分は絶えず自己廓清を行つて居ると共に周囲の廓清を行つて居る。其れが果して間違つてあるか何うか私は知らない。私は唯其うせずに居ることの出来ない中心の要求に従つてするのである。従つて人が何と云つた所で自分は其れに従つて自分や自分の周囲の掃除の手を止めて汚ない塵埃の中に住んで居ることにはできない。此う云ふ意味より私は自分さへ道徳を治めて居れば人は曲つて居やうが直であらうが我関せず矣ときめ込んで居る所謂独善なるものを排斥する。

善は天下の善である。悪は天下の悪である。これを挙ぐるも退くるも衆の力に待たなければならぬ。

広池博士は天理教は個人伝道の道であつて団体伝道の道でない。又た天理教は個人革命の道であつて団体革命の道でないと云ふことを述べて屢々私に雑誌の発刊並に天理教界革命の聲の中止を求められたが私は遺憾ながら今日迄博士の説に従ふことができなかった。恐らく将来と雖も亦其うであらう。私の今日の理想は衆と共に善を樂み衆と共に悪を排すこれより外何者もない。私が独善を固守し得ざるはこれが為めである。且つ此の一事の為めに私が天理教徒の列外に排斥せらるゝも亦甘んじて受くる所である。

偽善なる学者と三島の人

凡そ天下の学者を通観するに天理教の学者程学に忠ならざる不徹底の学者はない。彼等が自著を天下に公表するや必ず先づ本部 管長在世中は管長 の検閲を経るのである。(これは勿論本部の飯を食つて居る学者の事である)これは本部が天理教の真の教理を世に公表せしめんが為めにあらずして天理教の内幕が世に暴露することを恐るゝからである。かくの如くにして無智と勝手の濾過器を通つて出て来たものは真実を抜いた粕である。而かも彼等学者は此の改悪せられた自著を公表して少しも恥ぢない。天下に之れよりも大なる恥辱あらんや。私は彼等の説を直ちに信ずるよりは小説を信ずるの優れるを思ふのである。

抑も学者が此の世に遣はされたのは真を真とし偽を偽として世界に一大灯明を点ぜんが為である。分けて宗教学者の責任は其の中で重大なる責任を有するのである。然るに今日の本部在任の天理教の学者は本部の忌諱に触るゝことを恐れて真理を天下に公表するの良心と勇氣とに欠けて居る。もし今日にして此の弊風が改められずば後世天理教はこれ唯一個の虚偽に過ぎざるに至るであらう。

基督は曾つて名利の外に何物もなき形式儀礼の徒に冠するに「偽善なる学者とパリサイの人」なる固有名詞を与へたが私は此の言葉を直ちに移して偽善なる学者と三島の人と云はうと思ふ。

凡て三島計りではない伊勢でも奈良でも善光寺でも凡そ善男善女の集まる所謂神仏の御膝元は其う云ふ参詣者を目的に私腹を肥さんとする所謂我利々々亡者の巢窟たらざるはなしい。三島も亦其うである。彼等の中には真に客の便宜を計らんとする所謂互ひ助け合ひの精神を以つて商業に従事して居るものは殆んどないと云つて良い。皆客の不案内を利用して暴利を貪らんとする人間が多いのである従つて其の口は巧みである。けれども其の腹は真の内実のあるものではない。これは自分計りではない。参詣者の何れも皆同感するところである。

もし彼の学者と三島の人が今日に於て悔悟せずんば私は天下の人の為めに偽善なる学者と三島の人を信ずる勿れと云はざるを得ない。これ彼等の云ふ所を信じて地獄（苦痛）の人とならざらんが為めである。

本部の青年に告ぐ

私は登本以来近々二ヶ月諸氏と相知ること決して深からずと雖も諸氏が専如何なる考を以つて生活しつゝあるかは一見して知ること必ずしも難くはない。諸氏の中には真に真面目に教理を究め以つて自己の人格を修養しつゝある人もあるであらう。けれども諸氏の大部分は唯年限の糸を伝ふて未来の本部員を以つて理想とする者も必ずや少くはないと思ふ。私は其う云ふ不真面目な思想を抱いて居る人達に向つて一言したい。

其の力なくして其の位に昇ることが諸氏にとつて幾千の名誉になるか？ と。私がもし諸氏であつたならば何等奉公の誠意もなく本部に頭を列べて本部員の鼻息を窺つて居るよりは寧ろ野に下つて秘かに人格修養の鎌を研ぐのである。富貴栄達は吾人の主要の目的ではない。吾人にとつて主要の目的は人格的価値の向上あるのみ。乞ふ下らなしい新聞や雑誌や碁や将棋に耽るよりも真面目なる修養書の唯一頁を読み。其の方が諸氏の将来を利益する幾千か大なるか知らない。

諸氏の眼から見れば本部員たることは無上の名誉かも知らない。けれども吾人の眼から見れば人格なき本部員は無智の信徒と異なる所はない。従つて私は本部員なるの故を以つて決して諸氏を尊敬しないであらう。私の尊敬する人は唯真面目なる大人格のみ。唯願くは本部を汚さざるの大人格たれ。これが諸氏に対する唯一の希望である。

天理中学職員諸氏に寄す

私は曾て天理中学改革論を書いて天理中学を以つて真に天理教主義を奉じた独立せる宗教学校たらしめんことを求めて置いた。今度書くのは校風の振起並に試験制度に関する諸項である。

聞けば貴校にては生徒に向つて一切の戸外運動を厳禁しつゝありとか。もし此事にして真ならば実に由々しき教育上の問題たらざるべからず。何故なれば身心の発達の旺盛なる青年を室内に封鎖することは彼等の身心の発達の自由を妨ぐることは医学士の判断を待たずして明かなる事実であるからである。聞けば野球庭球の選手にはやゝもすれば学術並に品行の上に劣等者を生ずるが為めなりと貴校は其の少数の失敗者の為めに多数学生の体育を無視せんとするか？ 吾人は余りに其の一を知つて二を知らざる貴校の処置を悲しむものである。

凡そ天下の事如何なる善事と雖も必ず其れに弊害の伴ふことを免かれざるものである。然るに其の弊害を恐るゝが為めに其の善事をも中止すると云ふに至つては其器宇の狭量なる失笑に耐へて居る。さらでだに宗教学校はやゝもすれば消極的に流れ易きものである。然るに室内に靴を穿くな、戸外運動をするなど、教師には是が非でも服従をせよと、貴校は其れに依つて青年のお姫様を養成する心算であるか？ かくの如き極端なる消極主義の学校は未だ見たことも聞いたこともないのである。

成程室内に靴も穿かず、戸外運動もせず、教師には是が非でも服従して居たならば室内は常に清潔にして生徒を扱ふには扱ひ易いであらう。けれども生徒は学校の器械ではない。又た教師の奴隷でもない。学校や教師こそ却つて彼等の奴隷である。其の主人の自由を束縛して置いて学校を清潔にする必要が何処にかある？ 教師の権利を振ふ理由は何処にあるか？ 私はこれをもつて天理とは信ずることはできない。

次には試験制度の一事である。聞けば貴校にては一科目に落第点ある時は如何に平均点が優等であつても之れをもつて落第者と認むる相である。学力の平均を主眼とする中学校としては或は当然の事かも知らないが吾人は余りに其の処置の酷ならざるかを思ふもので

ある。

由来人間には各々特長といふものがあると共に又た欠点といふものがある。従つて或る学科には優等でも或る学科には劣等なる事はあり得べき事である。其れを無視して只一筋に画一主義に押し嵌めんとするが如きは余りに人情を無視したる処置と云はなければならぬ。思へ彼等父兄が其の子弟を教育する為めに一年間の間費す所の心労を、然るに一旦或る学科の不成績の為めに生徒は一年の進歩を遅ふし父兄は一年の努力を空泡に帰するのである。之れを社会の上より見るも亦実に大なる損害と云はなければならぬ。尤も仮及第の制度がある相であるが此等は尚一層罪の重き制度と云わなければならぬ。何故なればもし其の生徒が第一学期の試験に於て落第した場合には仮及第を許されたる級の教科書と共に原級の教科書を買はなければならぬからである。かゝる二重の負担を生徒に課するならば始めより落第せしむるに如かないのである。これ学生に代つて試験制度の改正を希望する所以である。

此の他天理中学の教育方針として希望する所は多々あるが差し当り改正を望むのは現在の極端なる消極主義形式主義である。徒らに若木の盆栽をつくつて何にする。吾人は日に日に青年の意気が消沈し、却つて卑しき食欲の満足に向つて進みつゝ行くを黙して居ることはできない。もし当局者にして此等の点を改良するの勇氣なくば私は寧ろ文部当局に具申して青年に戸外運動を禁止するの可否を問はんと欲するものである。何故なれば此の一事と雖も五百の青年に取つて大なる關係を有する問題であるからである。

雇はれたる人々を解放せよ

今日の天理教本部を見るに教校でも中学でも本部でも純日の寄進的精神をもつて神に奉公して居る人は幾千もない。大抵は金の為めでなければ名の為めに雇はれたる人達である。

凡そ奉公人の通弊として自己の利欲の為めには一心なれども主人の為めを思はざるが普通である。けれども家族は其うではない。彼等は永遠に自家の利益を計る。今日の天理教に此の眞の家族の少くして徒らに雇人の多きは決して教勢を眞に発展せしむる所以ではない。吾人は一日も早く各方面の雇人を解放して眞に家族を以つて結合する日のある事を望む。而して今は其の時である。吾人は敢て当局者の英断を望む所以である。

外国布教を急げ

お言葉に

日本七十五年。唐三十年。残る外国二十年。

と。然るに日本七十五年は遠に過ぎて今は唐三十年の時期に入つて居る。此の唐三十年の中には外国伝道の時期の計算せられて居るのは云ふ迄もない。然るに今日の処外国伝道は愚か内地の伝道さへ碌に行つて居ない。もし此んな緩慢な手段で行つたならば外国伝道は何時の事か全世界に此の道を附け通すことは何時の事か？ 吾人は甚だ焦慮せざるを得ないのである。

聞けば外国語学校に一二名の生徒が行つて居るつて事であるが其んな者を当にして居ては此の道は後れる計りである。語学なんぞ訳つても訳らんでも良い。本人に眞の熱心あらば無言のお手振 お手振は万国語である よく彼等を感じることが出来るであらう！ 殊に外国布教にでも行く者の覚悟は将来世界一列に日本語化せしむる覚悟がなければならぬ。此の覚悟をもつて行つたならば如何なる処へ行つても屈する事はないであらう。

今日はツマラナイことをクヨ／＼思つて道にいつんで居る時ではない。正さに大勇猛心を振り起して全世界を救済の熱火に包まなければならぬ時である。敢て全天理教徒の覚醒を望む。

朝夕の勤めに本部員が総出しない様の事で何うする

凡そ道の最も隆盛なる時は上下共に一致した時である。然るに今日の本部を見るに朝夕の勤めには多くて六七人少くて四五人の本部員が型の如く来て型の如く勤めて去る。其の中には精神の緊張もなければ感情の高潮もない。全然小供の遊戯の様である。殊に甚しきは本部員に出勤者のなき時は準員をもつて僅かに欠を補ふといふ醜態である。本部員からして此んな勝手を極める様で道の隆盛が期し得るであらうか胸に手を当てゝ考へて見たが良い。

一部の精神主義者は朝夕のお勤めの如き形式のみ心の勤めを充分に行つて居れば其れで

沢山であると云ふ。成程一部の理由はある。けれども思内にあれば必ず色に表はれるものである。心に充実した奉公の精神が動いて居たならば自然とかゝる形式にも表はれるのである。

其れに元来朝夕の勤めを形式だと思つて居るのは間違である。形式にするから形式になるのである。又實質にすれば實質になるのである。要は其の人の精神次第である。

もし本部に充実した奉公の精神が動いて居たならば期せずして本部員総出の勤行を見るのである。凡て其の人其の家其の村其の郡其の県其の国其の社会に誠意の存するや否やは其の形的一端を見て判断することが出来るものである。今日の如き思ひ／＼勝手の本部員の勤め振りを見ては当局者は如何に天理教の盛大を強弁するも其の言の眞実なることを信ずるに由なかるべし。豈に教界の痛嘆事にあらずや？

かく云へばとて私は決して形式的の勤めを勧める者ではない。唯心に誠眞実があつたならば自然の結果として其れが形に表はれなければならぬ事を云つたのである。

実に今日の時代は天理教自身より云つても世界の大勢より見ても

真に之れ協力一致の時

である。徒らに女形の様に声色を使つたり身繕ひをして澄ましこんで居る時でもなければ荒武者の様に信仰上の英雄主義を振り廻して居る時でもない。唯誠心誠意協力一致の精神をもつて内には充実したる信仰を養ひ、外には世界救済の大事業に向つて発展すべき時である。

吾人の所感を忌憚なく述べれば新管長にして陣頭に立つかももし然らずんば幼主を奉じて故君の焼香に列した秀吉の出現を望むのである。其れでなければ到底いづみ切つたる今日の教勢を挽回するに由なかるべし。

あゝ教祖去つて三十年御本席去つて十年僅かに近々二三十年前の間に教祖五十年御本席二十年の苦心は水泡に帰せんとしつゝある。吾人真に道を思ひ世界人心の救済を思ふ者は豈に黙せよと命ぜらるゝも黙することを得んや。

時は近いた。天理教の運命を決する時は近いた。従つて吾人道の将来を思ふ者は上は管長故管長夫人を始め下は部下一般信徒に至る迄心の根締め

最う一段の馬力をかけよ

と希望せざるを得ない。かくの如くにして始めて吾人は上は神と教祖の聖意に答へ下は世界一列の救済の実を挙ぐることが出来るであらう。

時は近いた。教勢の挽回せらるべき時は近いた。

一日も早く勤めの人數、勤めの手振り、勤めの足並を揃へて世界一社の神殿建築事業に着手せよ。これ吾人が全天理教徒に望む唯一の希望である。

(大正四年九月十三日)

乞食の子 (小説)

大平 良

平

十月の末私は書店に用があつて大塚から割引電車に乗つて本郷三丁目に降りた。未だ時間が早かつたので元富士見町通りの書店は皆んな戸を閉めて寝て居た。仕方がないから私はブラ／＼と足先の向く俣に湯島の天神に向つて歩き出した。其処の境内で時間を消す為めである。

天神の裏の鳥居の傍には交番がある。私は其の前をスーッと通り抜けて鳥居の中へ逃げ込む様に逃げ込んだ。私が巡查だとか交番だとか警察だとか裁判所だとか監獄だとかを何時頃から嫌ひになつたか其れは訊らない。何んでも生れつきらしい。私は此ういふ者の前へ行くと全然地獄へでも行つた様にゾツとする氣分に襲はれる。これは何の為めだか訊らないが思ふに私は此う云ふものゝある世界に住む人間ではなかつた様の氣がする。其れが神様の楯の取り違ひで此んな無氣味な世界に船を着けたのに違ひない。私は何時も其う云ふ風に考へて此の世界から此う云ふ無氣味な物を取り退けて下さるか其れでなければ一日も早く自分を別な世界に移して貰ふことは願はぬ日は一日もない。

天神の境内には未だ早い故か鳩の豆売りの婆様も古本を商ふ若い男も店を出して居なかつた。けれども此処へ来る度に何時も見ると子守小供が早くから此処に一団彼処に詰めかけてベチャ／＼キヤツ／＼と云つて騒いで居た。学生や会社員は切通の電車道へ廻ると遠廻りだから此処を突き抜けて自分の会社や学校へ急ぐ。

私は天神の前に礼拝して神殿の横手の口ハ台に向つて歩いた。其処から市中を瞰下しながら飯よりも好きな空想に耽らう為めに。

口ハ台には子供を連れてお婆さんの散歩に来た近くの若い男やで所々塞がって居た。唯真中の口ハ台計りは誰も居ないで其の代り檻縷が広げられてあつた。而して其の左右の台は此の檻縷に対して敬意を払つて居るかの様に一台づゝ席が空けられてあつた。私は其の真中の口ハ台の檻縷に対して好奇心と嫌厭の念を感じながら其の右隣の空席に座を占めた。而して隣の席を見遣ると檻縷は檻縷に違ひないが其の中から蓬々と頭髪の生えた腫れ上つた頭が半分ころび出てゐるのは発見した。而して其の尾の方には頭と比べてはまるで福助の足の様な細い足が埃だらけの足袋を冠つて景物の様な具合に着いて居た。私は一見して其れが癩病患者の乞食であることを感じた。始めのうちは私も汚いもの穢わしいものを見る様な感に満たされて成るべく遠く離れる様の氣持で見て居たが如何に過去に恐ろしき罪業を犯して居るとはいへこれ兄弟である。人並の姿をして人並の生活をしたことは自分と同じであらう。其う思ふと汚いとか穢わしいとか云ふ感を忘れて唯あはれになつて寄らば抱き締めてやりたい様な氣分に迫つて来た。

私はイキナリ立つてツカ／＼と癩病患者の側へ行つた。と云ふのは彼に未だ良心の火影が消え残つて居たならば其を吹き起して元の心元の姿に歸してやりたかつたからである。私は長い間基督教の聖書の中に信仰の力に依つて癩病患者の医された話を読み、仏教の中にも其ういふ不思議なる物語の屢々あつたことを読んで知つて居る。而して天理教では其の医された人を見て居る。此の男だつて救はれない筈はないと思つたからである。此う云ふ考に誘はれて癩病患者の側に立ちは立つたがさて此の口ハ台の上に、青天井を屋根とし大地を床とした寝台の上に朝の太陽の光を浴びつゝ安かな夢を貪りつゝある所定めめ憐れなる漂浪者を揺り起すことの余りに罪深きを感じ暫時は躊躇して居たが何んだか救の時が後れるやうの氣持ちがして失礼とは思ひつゝも遂に一声挙げて呼び起した。けれども其の癩病患者はムクともしなかつた。其れから続けさまに三声四声呼び起したが癩病患者は起きやうともしなかつた。最後に私は其の癩病患者の前に廻つて

君！ 君！
と云つて二声三声呼びながら癩病患者の身体を揺り動かした。其うすると今迄石の様な硬い睡に入つて居た癩病患者はムク／＼と動いて寝反りを打つた。

私は其の余りに凶々しいのに呆れつゝも寝せてはならぬと思つて尚ほも二つ三つ続け様に呼び起した。心中では此の癩病患者詰度怒つて自分に喰つて懸るに違ひないと思ひながら。すると癩病患者はイキナリ頭へ冠つて居た檻縷をクルツと取つた。よく見れば何んぞ知らん其れは癩病患者ではなくて十一二の乞食小僧であつたのである。

其れが何故私に癩病患者に見えたかと云へば其の頭髪は半年も手を入れたことがないと見えて一寸四五分に延び其の顔は洗つたことがないと見えて土色をし何処といふこともなく寝るものだから蚊刺しの後が膨れ上つて腫物となり其の上栄養不良の爲めに水膨れのした様なプク／＼した顔は何うしても三十から四十代の癩病患者としか見えなかつたからである。

私は其の子に向つて
此んな所へ何時迄も寝て居ると今にお巡さんが来て叱るよ。最う日が出たから起き給へと云ふと彼は未だ充分寝足りないと思ふ様な顔をして眼をこすりながらムツクと起きて其の俣周章てゝ何処かへ立ち去らうとした。

私は此の児が癩病患者でなかつたことには見当違をして少なからず意外の感に打たれたが然し此んな十一や十二の小供が唯つた一人で此う云ふ処に寝起きをして市中に食物をあさつて生きて居るといふには詰度父親も母親もない子に違ひない。もし父親か母親があつて此うしてるのなら不良少年で家を勘当せられるか其れとも其れが継親で虐待に耐へないで家を飛び出したものに違ひない。これは由々しい社会問題であると思つて私はその子にマア暫時其処に腰を掛けるやうに命じた。と乞食の子は別に逃げやうともせず命ぜられる俣に再び其処に腰を下した。

周囲の口ハ台に腰を掛けてた人達は私が乞食の子を呼び起すにさへ不思議の眼をみはつて居たが愈々乞食の子と問答を始めたのを見て尚更不思議な感に打たれた様である。

私は其んなことは余り頓着せず此の乞食の子の素性を問ひ正すべく第一の尋問を開始した。

君の国は何処だ？
乞食の子は手に所々出来た腫物の跡をムサジリながら無愛想な顔をして答へた。

東京
東京！ という答へには一寸意外な感がした。何故かと云へば東京の人間が乞食をしやうとは一寸思ひ附かなかつたからである。

東京は何処か？
内は芝にあるの

芝！ 其処にやお父様やお母様が居るのか？

ン

乞食の子は頭を振つた。

其れぢや君にはお父様やお母様はないのか？

御父様は此の三月迄居たけれども死んじやつたの。

お母様は何うした？

お袋は六月迄私と一所に居たけれども私が学校へ行つてた留守に何処かへ逃げていつたの。

其う云つた時の乞食の子の顔は何処となく沈んで居た。私は此の不幸な乞食の児の身上話の一端を聞いて学校から何時もの元気で帰つて来て内へ入つて見ると肝心のなつかしい母親は居なくつて蜘蛛の巣だらけの空屋がシヨンボリとして残つて居たのを見た時の此の子の驚き！ 悲み！ 其れを想像して自分も恰度其の様な目に逢つたことのある様な痛ましい感に打たれた。内へ入つたり外へ出たり又た内へ入つたり外へ出たりしながらお母！

お母！ と泣きながら尋ね廻つた憐れな乞食の子の姿がアリ／＼と映じた。彼の内より露路へ出で露路より大道へ出て母親が帰つて来やしまいかと思つて探し廻る憐れの姿が映じた。而して幾ら待つても／＼帰つて来ないので結局は待ち疲れて母を失つた失望と悲哀の中にボンヤリとした此の子の姿が映じた。

何んといふ無慈悲なことをする母親もあるもんだらう！

私の心は両親に捨てられた不幸の子に対する同情より人情の蹂躪者たる此の子の母親に対する激怒に變じた。

其れじやお母さんは君を置いて逃げたのだね。可哀相に！ ………

其れからお母さんの居た所はわからないの？

ウム

乞食の子は手の腫物を弄りながら答へた。

其れじや其れ迄学校へ出てたのか？

ウム

君の名前は？

房吉。

幾つになる？

十一

君には兄弟はないの？

一人ある

幾つであつた？

まだ今年生れたばかりなの

其れじやお母さんは其の子を連れて君だけ置いて逃げたのだね

乞食の子は肯いた。

私は怒つた。此女詰度此の子の継母に違ひない。亭主の生きてる中には義理にも世話をして居たが亭主が死んだから男でも拵へて逃げたに違ひない。其う判断を下しては見たものゝ又思ひ直して見ると女一人の手で此の喰盛りの子を飼つて置くつて事はこの生活難の烈しい世の中に並大抵の苦勞ではない。これは詰度生活難の爲めに止むを得ず此う云ふ無慈悲な事をしたものに違ひない。此うも思ひ直して見た。けれども幾ら自營の爲めだとは云へ我が身の可愛い子供を置き去りにして迄自分の身を保護しなければならぬものか？

生活難といふものは此うも人間を浅間敷するものか？ と女の心中には同情しつつも女の仕方には未だ外に仕方があり相に思はれた。

其れじやお母さんが逃げてから君は今迄何うして居たの？

芝に

芝の何処に？

お叔父さんの所へ

其れじや何故其処へ居ないのか

叔父さんが居んなといふから

私はよく／＼薄情の人間が揃つたものだと思つた。其れと同時に此の子も決して人好きのする伶俐な子ではないから親や親類に見離されるんだと思つた。

其れじや其のお叔父さんと云ふのはお前の御父様様の兄弟か？ お母さんの兄弟か？

何んでもない外の叔父さんなの

外の叔父さん？ 其れじや何んでもないのか？

屑屋なの

ウム？

屑屋と聞いて私は考へ直さなければならなかつた。何故かと云へば親類でも身内でもな

い赤の他人が此んな普通の小供の二人前も喰い相な厄介物を一月でも二月でも飼うというのはよく／＼親切の人間でなければ出来ないことだと思つたからである。

其れから君は今迄何うして居た。矢つ張り食物を貰つて喰つてたのか？

房吉は頭を下げた。

此処へ来たのは何時頃かね？

直ぐ此の間

其れ迄何処へ居たの？

房吉は之れには答へなかつた。

君は其うして一人で貰つて歩くのかね？ 仲間はないのかね？

房吉はないといふことを答へたが私は彼の機敏な乞食仲間が此んな小供に自分等の畑を自由に荒さして置きはしない。キツト親方とか何んとかあるに違ひない。よし今の所其んなものがないとしても早晚其う云ふ者に攫まるに違ひない。其うしたら最うお終ひだ。生涯乞食で終るより仕方がない。目下の急務は此の児が其う云ふ魔神の手に落ちない中に親類か身内の手に亘して救ふのが第一だと思つた。其れで何うかして頼るべき親類を見附けなければならぬと思つて祖父さんか祖母さんは東京に居ないのかと尋ねて見たが訊らなかつた。

其れじや君のお父さんかお母さんの兄弟は東京に居ないのかね

此の意味は房吉にはよく訊らなかつた。其れで再び言葉をかへて訊いた。

其れじや君には本当のお叔父さんもお叔母さんもないのかね

お叔父さんか？ お叔父さんは宇都宮の方にあるつて事だけれども

其れは宇都宮の何処か訊らないの？

宇都宮の田舎の方だつて事だども何処だかわからない

名前は？

知らない

君は其のお叔父さんに逢つたことはないのかい？

ない

ない！

他に知つてる所はないの？

ない。

これで此の子を親族の手に歸してやりたいと願つたせめてもの希望は絶えた。今は養育院があるばかりである。其れだつて果して引き取つて呉れるか呉れないか訊らない。而うすれば此の子は再び野に捨てられなければならない。其うしたら最うお終ひだ！ 差当り困るのは着物の問題である。幾ら暖かいと云つても最う十月の末だ。これから先きは寒くなるばかりである。而うしたら此の子は何うして此の冬を過すだらう。これが一つの新しい私の心配であつた。其れで私は房吉に訊ねた。

君は寒くないの？

寒くない。

君は何枚着てる？

二枚。

其の着物はお母さんが残して行つたのかね？

ユ、ヤ叔父さんが呉れたの

其のシャツは何処で貰つたの？

叔父さん所から。

身体を大切にしなければいかんぜ

周囲には何時集まるともなしに私と乞食の児の会話を聴きに集まつた人間が黒山の様にしたかつて居たが其の中で己が此の児を救つてやらうと云ふ人間は一人もなかつた。其れは何も不思議な事ではない。何故なれば大抵の人間は自身一身の始末さへもて余して居る人間が多いからである。自分も確かに其の中の一人に違ひない。けれども自分には未だ両親も三親もついて自分を世話をして呉れる。然るに此の児は何うだ！ 未だ十一か十二にならないのに父親には死別れ母親には捨てられて居る。同じ人間でも何んといふ違ひだらう。其う思ふと自分の冥加の有難さ！ 一時も早く社会に有要な事をしなければならぬと云ふ感がムラ／＼と起つた。

私が此んな考に房吉の事を忘れて居ると群衆の中から寝巻を着た齒の欠けた五十計りの神主らしい人が出て来て房吉に向つて話しかけた。

君に俺が来ると何時も此処へ来て寝て居るが行く所はないのか？

ウム。

房吉は肯いた。

私は房吉に代つて房吉から聞いたことを此の人に話した。けれども其の人は其んな話は

別に自分の感情を動かすに足る様な話ではないと云ふ風に笑の中に聞き流した。私はこれが本当だと思つた。大抵の人間は何んな重大問題だつて其れが自分自身の上で直接降つて来たのでなければ対岸の火事程にも感じはしない。これが本当だ！ 私の考へる事は彼等の考より見れば皆んな間違つて居る。けれども唯一つ間違つてゐないことがある。其れは不幸な人間を救ふ意志である。之れだけは間違はない。然し其の者を天に運ぶ翼がない。意志は寧ろないと同じ事である。

話は途切れた！ 房吉は自分の周囲に余り人が簇つたので鈍感の彼も流石きまりが悪いのか黙つて了つた。周囲の人は此の乞食の子供が未だ何か芸があり相と思つたか容易に立ち去らうとはしない。其の時齒の抜けた神主さんは天神下の坂を上つて来た乞食子供の群を見附けて

ソラお前の仲間が来た
と云つて房吉に注意した。房吉は其れを見やうともしなかつた。けれども私は先刻房吉が仲間はないと云つた言葉を思ひ出して此んな奴等は何にを云つてるやら訳らないとあはれに腹立たしくも思つた。

乞食子供の群は三人連れである。其の中で一番大きなのは十五六小さいのも十三四である。何れも／＼キョト／＼として始終周囲を恐れて居る様である。然し何れも／＼身体も大きい皆な房吉よりは狡猾相である。

此の兎は乞食にしたつて良い乞食にはなれない！

私は其う思つた。けれども親に捨てられたといふのが何よりも不愜でどうか其の宇都宮の叔父と云ふのでも引き取つて育つて呉れたらと思つた。其れで駄目だとは知りつゝ

君も此うして居た所で仕方がないから宇都宮の叔父さん所を尋ねて見給へ。向ふへ行つたら又たわからんこともあるまいから

此う云つて白銅一つの彼の手に渡した。

これは彼奴等に取りられちやいけないよ。而して決して悪い事をしちやいけないよ。悪い事をするとお巡さんにつかまへられるからね。

彼は肯いたが白銅の礼は云はなかつた。又た頂きもしなかつた。黙つて平気な顔で其れをつかんで帯の間におさめた。神主さんを始め周囲の人も無駄な事をする人間もあるものだといふ様な顔をして私を眺めて居た。

私も此の上此処に居ても無用だと思つて立ち上つた。すると先刻から向ふの方に離れて待つて居た乞食の子供連が恰も魔界の謀叛人でも引き立てる様にバラ／＼とやつて来て

オイ行かう

こう云つて先きに立つて歩き出した。房吉は此の言葉に対して返事はしなかつたが恰度牛が起きる時の様に静かに口ハ台を立ち上つて誰に一言の挨拶もせずノソリ／＼と彼等の後をついて行つた。

其の中で十三四になる乞食の子は一寸神田へ降りる坂上の公衆水道で顔を洗つてから降りた。私は房吉の姿の見えるだけ見送つた。

矢つ張り仲間があるんですね

と私は神主に向つて云つた。神主は私の言葉を愛想よく受けたが流石に私の胸は一杯であつた。恰度マーテルリンクの劇にある弟を妖魔にとられた姉の悲の様の悲をもつて。

私は其の俣其処を立つて書店で用を済ませて雑司ヶ谷の自分の家に帰つたが房吉の事を思ひ出す毎に何時も房吉は今頃何うしてるだらうと彼の暗い運命を思ひ浮べないことはない。而して其の度毎に私は此ういふことを考へさせられる。

乞食！ これは成る程神にも人にも見捨てられた人間の屑に違ゐない。けれども此の屑を何んとか精製して再び元の人間に仕上げる工夫はないか？

と。これには差当り乞食收容所が必要である。其れには金が要る。けれども世間の貴族だとか富豪だとか云ふ人達は犬だの猫だの馬だのといふものには随分金も出すが乞食の為めに金を出さうと云ふ人がない。此う云ふ結果から論ずると人間は動物よりも劣等であると云ふことになる。これは由々しい問題だ。けれども私は此の結論を信じない。何故なれば幾ら乞食でも人間の形をして居る以上動物以下に待遇せられる筈はないからである。従つてもし私に動物愛護会を設立する余裕があつたならば先づ其の前に乞食愛護会を設立しやうと思ふ。生物進化の理想から見ても此の方が未だ余つ程必要な事だ。これが平素私の懐いて居る持論である。

故郷の祖母に

大和の地場にて 良 平

祖母様。

私は此の十六年の間といふもの今日是一日シミ／＼と貴女と話をしたといふ日はありま

せん。貴女計りではない世界のありと凡ゆる人に対して其うでした。けれども今日と云ふ今日は何もかも世間の事は忘れて彼の座敷で寝物語りに色々な昔噺を聞き惚れた小供の時の気分になつて云ひたいことを云ひ話したいことを遠慮なく話して見たいと思ひます。三十面下げてたわいもない事とお笑ひ下さらぬ様に願ひます。

祖母様

忘れたいのは年齢と苦勞でありますね。私は祖父に逢ふ時も其うでしたが貴女に逢ふ毎に何時も其う思はぬことはありません。貴女も随分若い時は生活の苦勞を通つておいでになつたといふけれども何時見ても元気で生々してお居でなさるには戰場生き残りの勇士は流石に異うものだと感じます。矢ツ張り一家を再興する様な人は細かい所にも眼がとどくが第一胸板の広いものですね。これは母も云つて居たことです。

私と来たら全然女の様に始終クヨ／＼と物思ひのたへた事はありません。其れであつて臆病かと云へば其うでもありません。なすべき事なさねばならぬ事は何んな事でもやり遂げるだけの力があります。これは父の女性的の血と母を伝つて流れて来た男性的の血の結合したものだと思ひます。

けれども何地かと云へば私は矢ツ張り温和しい男に違ひありません。温和しいと云ふよりも寧ろ陰気な男と云つた方が当つて居るかも知れませぬ。此の性質については祖母様も色々心配して下さつて

何処へ行つたつて押しも押されもしない何不自由のない身であるから大船に乗つた気持ちになつて広い心になれ

と云つて励まして下さつたが未だに祖父様や祖母様の様な豁達な氣象になれないのを恥敷く思ひます。

けれども有難いことには天理教に入つてから幾分か陰気な性分がとれました。これは天理教の教祖様といふ方が何時も晴天の様な晴々した慈悲豁達な方であつたから其の感化を受けた故でありませうが其の影には祖父様や祖母様の力も潜んでゐるのは争ふべからざる事実です。

本当に祖父様と云ふ人は偉い人でした。偉いと云つても学問が出来るとか才知があると政治的手段に優れて居るとか云ふ方面の偉い人ではなかつたけれども人間として彼れ程良く出来た人間は私も随分これまで偉人だとか傑士だとかいふ人を見もし逢ひもしました。がマア見受けないと云つて良い位です。

大抵世間で偉いとか何んとか云はれて居る人はやゝもすれば何処かに自分は人よりも偉いといふ良く云へば自尊心悪く云へば高慢心があるのですが祖父様といふ人には全然其れがなかつたのです。恐らく人に良く思はれたいとか悪く思はれたくないとかいふことは一生の中唯の一度も考へたことになつた人です。其れだから何んな高い所へ行つても云ふだけのことはズン／＼云へたのです。其れが名将だとか智者だとか云はれて人に一目置かれた所でせう。

其れから最う一つ祖父様の偉い所は先天的に詐をつく事を知らなかつたことです。其れだから彼の通り何時も夏の夜空の晴れた様な晴々した気持ちが續いて居たのでせう。其れは随分怒る時はグワン／＼怒りました。全然雷様の様に。其れでも怒つて了へば夕立の晴れた様にニコ／＼して今迄何があつたか知らぬといふ風にケロリと變つてゐました。私はこれがホンの三歳児の心を失はない人だと思ひます。祖母様も其う云ふ人の連れ合ひです。もの尋常一様の婦人ではないことは訳つて居ります。唯祖父様の様な三歳児の心のないのが違ひです。この違ひを本として私は祖父様を非常識の偉人祖母様を常識の偉人と分類して居るのです。

けれども此んな風に誰れは常識的な偉人だとか誰が非常識的な偉人だとか云ふことは祖母様にとつてはチツトモ面白くない問題でせう。私も實際面白くないのです。だから此んな話はやめて私の此の頃の生活を申上げませう。

年も九月の半ばと云へば旧曆では何月何日頃に相当するか知りませんが田舎では孟蘭盆も過ぎて彼地此方の村から盆踊の太鼓が陽気に聞える頃でせう。此方でも其う云ふ習慣があつて此の間此処から七八丁離れた丹波市には踊が立つたとか云ふ話も聞いて居ります。

今年は始めての土地に夏を過すのでどうかと思ひましたが胃腸を毀して一週間程厭な思ひをしました外別に何事もなくて済んだのは神様の御守護と有難く思つて居ます。これからは段々寒さに向ふのですが当地は東京辺りと比べて幾らか暖かだと云ふことですから貧血性の私には或は良いかも知れませぬ。

其れで此の頃の生活を申上りますと大抵朝の四時頃に眼を醒します。其れから二十分からは十分色々な事を考へて起きますが用事があつて十二時過迄起きて居たと云ふ様な時には御神殿の太鼓が鳴る迄眠り続けることがあります。本当は朝のお勤め 六時 前に教会へ行つて拭き掃除でもさせて戴くと良いのですが彼是すると直ぐお勤めになるので殆んど教会の御用はさせて戴かないと云つて良い位です。これは誠に申訳ないことと思つて居

りながら遂いで下さる人があるので其地任せにして居る様な次第であります。

お勤めには各教会から又村から参拝する者がヅン／＼詰めかけて来るのですがマア云はゞ善光寺の朝のお勤めの様なものであります。神殿も善光寺位のものか或は少し大きい位のものでせう。

神様を祀つて居るのは南側の北向きの祭壇であります但其の前に一間四方の穴があつて其処を甘露台地場と云つて居ります。世界中の人間は十億年の昔に皆此の地場で造られたといふことです。

お勤めは此の甘露台の前で始められるのです。祭主の祝詞がすむと太鼓、鐘、拍子木につれて満堂の信者が教祖のつくつた

「ちよとはなし神のいふこと聞いてくれ悪しきことは云はんでな。此の世の地いと天とをかたどりて夫婦を拵らへ来るでな。これは此の世始めだし」

と云ふ歌詞につれて所謂お手振りと云つて手踊りを始め出しますが随分綺麗なものであります。これがすむと次の歌詞を三遍づゝ三遍繰り返してお終ひになります

「悪しきを払ふて助けせきこむ一列すまして甘露台」

本殿のお勤めがすむと教祖殿の参拝ですが大抵の信徒は本殿から六十間程先きの教祖殿を拝して帰ります。

此のお勤めは朝夕二度ありますが夕の方が朝より人も多く賑かであります。

世間では天理教信者になると身上を潰して了ふやうに云ひ触らし穢多か非人の様に嫌ひ、現に私が天理教になつた時なぞは父は酒に酔つて殺すと云つてあばれられたが天理教と云ふ宗教は決して其う云ふ宗教ではありません。

天理教と云ふ宗教は人間として生くべき道を教へる宗教で其の教理を云つて見れば人間は皆な神の子供である。神の子供として勤むべき事は朝起きと正直と働きである。家業第一に親孝心をせよ。人は互ひに助けつ助けられつして行くべきものである。我が身勝手の思案を出すな。我身勝手の思案から埃が出る。埃から様々の病気を引き起す。身体は神の貸物。心計りが吾が物。其の我が物なる心の誠を日々神に寄進する。此れが人間第一の功德である。

此う云ふ風に教へて居ます。この通りにやつて人間が何んの喰はず吞まずの境遇にならうぞ其れは恐らく其の人の聞き違ひか感違ひかに違ひありません。

其れで此の教を縮めて見ると人間は何時も旭日の昇るが如き勢と晴天の様な陽気な心をもつて其の日／＼を通るべきものだと云ふことになるのです。

此の故か私も天理教を信じてからは物事をクヨ／＼思はぬ様になりました。と云ふのは人間が幾らクヨ／＼思つた所でなる様にさへならぬと云ふ事を悟つたからであります。つまりよく考へて見ると人間の一生と云ふ者は泣いて暮らすも一生笑つて暮らすも一生です。同じ一生を泣いて暮らすの馬鹿らしさを悟つたからであります。又た広い世界を我が心で狭める愚を悟つたからであります。

此う云ふ具合で天理教が人の生命や財産を奪ふ悪い宗教であると云ふ事は根拠のない事でありませぬ。けれども天理教其の者は結好なものでも天理教の教師や信徒は未だ尽く本当の教理を聞き分けたものでないから其う云ふ者が時々天理教の名前を傷ける様なことをするのです。其れで其う云ふ事のない為めに天理教内部の悪風を雑誌で書いたのですが其れが本部の忌諱に触れて只今では大分危険人物視せられて居ると云ふ事でありませぬ。

けれどもこれについては何も心配して下さらぬ様に願ひます。何教かと云へば私も何も盗人や追剥ぎをして人から嫌はれる訳ではないのですから同じ嫌はれるにしても罪は軽いのです。其れに神様のお守護か雑誌は非常に歓迎せられて四五月号は全部売り切れ其の他の号も好評をもつて迎えられつゝあるは有難い事でありませぬ。これも神様の御守護とは云へ祖母様と母上のお蔭と日々感謝して居ります。

(大正四年九月十三

日)

.

天理教信者諸氏へ

来年（大正五年）は皆様の御存じの如く教祖三十年祭、御本席様十年祭であります、就ては信者諸氏へ本誌の切なる御願があるのであります。其の御願と申すは外でもありませんが教祖御昇天後既に三十年御本席御帰幽後十年未だ完全なる一の教祖伝、御本席伝さへなきは遺憾の至りであります。今にして其の伝記逸話を蒐集しなければ悔を千載の後に残すことゝ存じます。依つて本誌は直接教祖或は御本席に親炙した方々は云ふまでもなく、たとへ一度なりと其の音容に接した方々より両聖者の記憶を募り、教祖の分は感謝と記憶と題し、御本席様の分は回想の御本席と題し、其々紀念祭を期して紀念号を出したいと思つて居ます、これ本誌一個の事業でなく、又た天理教徒（現在の）一団の事業ではありません。実に全人類の事業でありますから、何卒本誌の微意を御汲み下され続々御寄稿あらんことを切に祈ります。

大正四年三月

新 宗 教

社

発刊の辞

十八世紀より十九世紀にかけて全世界が旧信仰の大破産に遭遇するや、古き宗教の權威は全く地に落ちて而かも新しき宗教は未だ生れず 生れても成人せず 為めに其の信徒を挙げて一時科学宗唯物宗の為めに奪はるゝに至つた。けれども世人は長年の間の経験に依つて科学も亦何等人生の帰趣を解決するの能力なきを看破するや次第に新宗教渴望の聲が高まつて来た。現在は即ち其の信仰の復活期である。此の世界の氣運を受けて生れたのが雑誌新宗教である。

本誌は主観的に天理教主義を奉じて人心を改造し、社会を改造して健全なる黄金世界を此の現実の世界に実現することに努力すると共に客観的に洽く新宗教 現代人の信仰を研究して時代の要求の那辺にあるかを探知し、もつて人生の帰趣を誤らざらしめんとするにある。

本誌が天理教主義を奉じて人心の改造、社会の改造を行はんとする所以は其れが神の最近の人生観終局の理想を表象して居る為めばかりではない。実に人類が過去に於て歩み、現在に於て歩み、又た将来に於て歩まざるべからざる生の本道であるからである。（元より近代に於て勃興した新宗教は天理教のみではない。英のブースの救世軍の如き、米のエツデーのクリスチアン、サインスの如き、露のプラパツキーのセオソフイの如き、又た我が国の黒住教、金光教の如き新興宗教はあるが其れは神の所謂細道である、）これ本誌の依つて金剛不壞の信仰である。

けれども今日の社会は未だ天理教の真価を認識しない。従つて天理教が独新宗教の名を独占するの不遜を鳴らすものがあるかも知らない。其れは敢て本誌の意に介するところではない。何故なれば本誌の目的は神一條人間一條世界一條の真理 天理人道 其者を伝へるにあつて其の名ではないからである。けれども世人の疑惑と誤解とを解かんが為めに神が天理教祖を通じて語つた次の言葉を紹介して置かなければならぬ。曰く

「今迄も何の様な教へもあるけれども皆神が子供の成人に従つて教へて来たものである。今度の教は教へ始めの教へ終ひ、これ一つ充分に仕込んだら後に何も教へることはないぞよ」

と又曰く

「世界中蚊の鳴く様な時もある。真暗闇になる時もある……世界中皆な一つの光を親ふて尋ねて来る」と又曰く

「世界中の智者学者が思案に余つて今に天理教の誠を聞きに来る時がある」

世界は一大革新の時期に到達した。世人は活目して天理教の発展を見なければならぬ。最後に一言明言して置かねばならぬことは天理教は教祖一代の宗教でもなければ信徒一団の宗教でもない、人類永遠の宗教であると云ふことである。即ち神は教祖の昇天後其の高弟飯降伊蔵を起して更らに二十年の天啓を継続した。尚ほ将来必要に応じて神は何時にても予言者を起して人類に対する天啓の声を継続するであらう。神の言葉の中には『道の発達は世界の発達』と云ふ言葉さへある。これ本誌が天理教をもつて新宗教の中心生命とせる所以である。

大正四年三月十一日

今迄も何のよな道もあるれど月日教へんことはないぞや
 月日より大抵何もだん／＼と教へて来たることであれども
 此の度はまた其の上の知らんこと何も眞実皆云て聞かす

道の発端は仁孝天皇の天保九年（皇紀二四九八年西暦一八三八年）十月二十三日のことであつた。現今の奈良県山辺郡丹波市町字三島当時の大和国山辺郡庄屋敷村の豪農中山家には一大奇蹟が顕れた。

平常健康の主婦ミキ子は腰が痛むと云つて二三日前より炬燵の中に温もり主人の善兵衛も眼が痛むと云つて前日より苦しんで居た。然るに其の日麦蒔きに出て居た長男の秀司が小屋過ぎに足が痛いと言つて又た歸つて来た。こうして一家の中には忽ち三人の病人が生じたのである。

中山家では早速人を丹波市の医者に走らせて治療を受けたが少しも効験がなかつた。

当時の風習として医者薬の力に叶はぬ難病はこれを加持祈祷の力に依つて平癒を神に祈る習慣があつた。恰度其の日隣家の乾に有名なる長滝村の修験者中野市兵衛が亥の子に招かれて来て居た。市兵衛は中山家の招きに応じて来て見て

これは神の崇りだ

と云つて早速祈祷の用意をした。其れが翌二十四日の夜明前のことであつた。

然るに其の日は何時も市兵衛の加持台に立つ勾田村のおソヨが外出して行先が不明であつた。それで臨時ミキ子を加持台に直して祈祷に取り掛つたのである。

暫時するとミキ子の態度は次第に莊重を加へ持つて居た幣束がパチリと音して止まるかと思うと一人の神が降つた。市兵衛降つた神を尋ねるとミキ子は四辺を拂ふばかりの威厳に満ちた態度で

「我は天の將軍である。」

「此の屋敷は世界初めの源の地場、世界一列助けに天降つた。皆が心得。」

と。其の声は三軍を叱咤する様な凜とした声であつた。これが実に天啓の第一声である。

「由つて、此の地、此の家親子諸共に神が申し受ける。速やかにお受けせ……

「否応はあるまい……

「今云ふたこと違背はあるまい。今云ふたこと不承知あるまい。主人返答は何とある？」

と云ふ矢継早の催促に市兵衛を始め其の席に列したる一家の者は何れも突然の出来事に呆れて何んと返答して良いか訳らなかつた。其れで市兵衛より

「天の將軍とは何方様で御座います？」

と尋ね出ると

「天の將軍は日月じや。」

市兵衛は畳みかけて聞いた。

「日月と仰せられますと？」

「根の神実の神である……

「入込の身の因縁、屋敷の因縁に困つてシユン刻限をもつて世界一列助けに天降つた、由つてミキの体は神の社に貰ひ受ける。三千世界が助けたい。」

「屋敷の因縁と申しますと？」

「追つて知らせる。」

善兵衛も返答に困つて居ると神は急き込んで

「只今の詞を聞き入れねば当屋敷を一夜の中に黒焦にする。」

と云ふ強硬な居催促である。

異変を聞いて駆け附けた親類は何れも事の奇怪に驚いて如何にして神を退参せしむべきかについて相談した。

其の結果善兵衛より色々と一家の事情を述べて神の退参を求めたが

「我は退参する様な神でない。」

と云つて中々退参の模様がな。強つてと願ひ出ると

「神の命に背くとあれば家は断絶。」

今度は外の人が交つて願はうとすると

「余人の返答はならぬ。主人の口より承知の旨聞きたい。」

と云つて取り上げない。

此う云ふ押問答が神と人との間に続くこと二昼夜其の間ミキ子は水一滴飯一粒口にしない。其の様子を見ると眼をみはり、息をはづませて如何にも苦し相であつた。其れで二十六日の朝に至り止むなく善兵衛より神の要求通り田地田畑家屋敷親子諸共神に捧ぐる旨を

申上げだ。するとミキ子は
「キツト偽りはあるまいな。」
と念を押し善兵衛より詐のないことを聞ひて
「満足、満足。」

と云つて夢から醒めた如く元の意識に返つた。これが天理教の立教日である。此の一大奇蹟があつてから以後神はミキ子の身体を社として天理教と云ふ一大新宗教を啓示したのである。

天啓に依れば神 天理教でいふ神とは根の神元の神実の神即ち宇宙の原動力、万有の本元、人類の太祖国常立命面足命（此の陰陽両柱の神が人間始め世界始めの発起者他の八柱の神は其の補助者）以下伊弉諾伊弉冊命に至る十社十柱の社を指すのであつて此の十社十柱の神の分担の守護に依つて万物が生成発達するのである。総称して天理大神と云ふ。蓋し大自然力の別名である。が人類を生んでより天保九年に至る迄九億九万九千九百九十九年、八千八度の更生、魚介鳥獣の時代を経て今日の人間に発達した。（進化論は此の点に於て天理教と一致す。唯彼は科学的説明に属し、これは宗教的説明の差あるのみ）其の中九億九万年は水中の棲ひ、六千年は智識の仕込み、三千九百九十九年は学問の仕込み、其れに依つて十のものなら九つまで仕込んだ。後の一つ（人格）が仕込むに仕込まれなかつたからシユン刻限 時節 の到来するを待つて元なる地場 人間初生の地即ち現今の大和三島 に元なる神が現はれ因縁の身体（中山ミキ子）を神の社として今迄秘れたる宇宙の秘密を啓示し、もつて人心を改造（心のきりかへ）し世界を改造（世のたてかへ）して地場中心とせる平和にして健全なる理想の一家族（其の理想の世界を神は称して甘露台と云つた）を実現せんとするが天理教の因て起らざるを得ぬ必然の原因であり且つ将来の目的である。

其れで
「今迄何の様な教（仏教、基督教、儒教の如き）もあつたけれども其れは皆な小供 人類の成人に依つて神が（人間に姿をかへて）教へて来たのである。今度の教へが教へ始めの教へ終ひ、これ一つ十分に仕込んだなら後に何も教へることはないぞよ」と。依つて天理教はこれを一名だめ（大和方言最後）の教とも亦止めの教ともいふ、もつて天理教の目的、価値及び使命が如何に重大なる意味を有するか其の一斑を想像することができる。

三因縁説

一、シユン刻限（又た約束の年限、子数の年限ともいふ）とは、始め国常立命（男神、天にあつては月、人間身体では目胸水気湿ひの御守護、世界では水一切の御守護を下さる宇宙の第一神霊、始めて国床を発見し給ふたにより、国常立命称す）面足命、（女神、天にあつては日、人間身体では温味の御守護、世界では火一切の御守護、面足命と称し奉るは婦人は妊娠すると日々身重になる故面足命と称し奉つた）の二神が人類創造の合議なるや第一に伊弉諾（人間父親種、世界では種物一切の守護神）伊弉冊（人間種苗代、世界では苗代一切の守護神）の二神を引き寄せ

汝等兩人我々の天地創造人間創造の事業を助けて呉れるならば人類の成人後は一の神と崇めさすべし

と承諾させ（此の二神は天にあつては牽牛織星、地にあつては伊勢の内宮外宮）更らに六柱の神即ち

月読命（男神人間身体では骨突つ張りの御守護、世界では竹木一切突つ張りの守護神）

国狭土命（女神、人間身体では皮継ぎの御守護、世界では金銭縁談愛情一切継ぎの守護神）

大戸辺神（男神、人間身体では爪、毛、身長、誕生の御守護、世界では草木一切引き延ばしの守護神）

雲読命（女神、人間身体では飲食出入の御守護、世界では水気上下の守護神）

惶根命（男神、人間身体では息吹き分け、物聞き分け、言葉言韻の御守護、世界では風一切の守護神）

大食天命（女神、人間身体では生れる時親子の縁切り、死ぬ時此の世の縁切の御守護、世界では切れ物刃物一切切断の守護神）

を引き寄せ

汝等銘々我々両神の事業を助けたならば人類成人の後は元なる地場に連れ行き子供の陽気遊山を見せて共々楽しむ

と云つて約束した其の約束の年限が天保九年に到来したのである。

又た子数の年限と云ふのは人類の原母伊弉冊命の胎内に宿つた第一胞の子数の年限即ち九億九万九千九百九十九年である。（九億九万九千九百九十九人）これだけの年限経過した

ならば人類が今日の人類に成人することは予め月日両神の胸にあつたのである。
二、元なる地場とは現今の大和三島の天理教本部内甘露台上で伊弉諾、伊弉冊の二神が月日両神の精を受けて人間始めをした場所。人類の故郷（エデン）である。其の時生れた小供で長子は日本に止まり次子は水草を追ふて外国に移住した。日本は地理より云つても人種より云つても世界の根元人類の総本家である。凡て一本の草木にたとへても枝先（外国）の成長は早いものである根の発達は遅いものである。此の度は月日（神）元へと立ち帰り木の根確か表はすと云ふのが神の予言である。其れで今迄は唐（外国）や日本と云ふたれど最うこれからは日本ばかりやと予言せられて居る。従つて天理教は一面人類教であると共に一面日本教であるのである。

三、因縁の身体（中山ミキ子）と云ふのは天保九年十月二十六日に教祖ミキ子に降神があつて以来其の後刻限／＼の御話に国常立命面足命は泥海の中より顕れ出で、世界を創じめかけた根本の神である。此の屋敷は人間最初宿し込みの因縁ある故又ミキの心体を見るに世の中に我子程可愛い者はない。其れを我子二人までも差し上げ、其の上我が寿命迄も捨て、人の子（これより先きミキ子には足立源右衛門の長男照之丞を預つて黒疱瘡になつたのを助けたことがあつた）を助けるといふは人間を宿し込みたる根本の親、伊弉冊命の魂である故其れを天より見澄し十柱の神が天降つたのである。此の十柱の神の総名を天理大神といふ。ミキの心は天理に叶へど、人間に神名を付け置かれぬ故、此の屋敷の因縁に拠りて地名に天理王命の名を授け置く」と云ふ言葉がある。ミキ子は即ち人類の原母伊弉冊命の再来であるのである。以上時ご所と人との三因縁が合して始めて天理教といふ世界最後の大宗教が成立したのである。

今其の教理の一斑を紹介すれば人間の肉体及び肉体の生活に必要な物質は神が人類をして日の寄進的（献身的）生活、相互扶助（互ひ助け合ひ）的共同生活をなさしめんが為めに貸し与へたものであつてこれを神より云へば貸物、人間より云へば借物、人間の所有と云つては唯精神あるのみといふのが神の与へた人生の定義である。（これを貸物借物の理と称して天理教々理中最も重要な教理である）此の定義に合したる合理的精神をミキ子は誠と云ひ、此の定義に合せざる不合理的精神を埃と云つた。畢竟人間の上に落ち来る幸も不幸も健全も不健全も凡て皆此の二種の精神生活の結果として表はれるのである。従つて健全なる肉体と幸福なる運命とを享樂せんと欲せば埃の精神を払つて誠の精神を發揮しなければならぬ。云ひ換へれば虚偽性、不自然性を排斥して眞実性自然性に従つて生活しなければならぬ。此の方法を置いて運命開造の根本的方法はないのである。此の生活を置いて人生の価値はないのである。これが天理教々理より見たる人生の意義及び価値である。

其れで天理教の根本精神は何んであるかと云へば其れは誠一つが天の理と云ふ一語に尽くるのである。此の誠即ち眞実性、自然性、先天性、誠実性、眞摯性、純眞性、処女性の活動律を二つに分類した。其の二つの活動律とは理（神）を立て、身が立つ人を助けて我が身助かる（又た人を助ける理が助かる）との二大天啓の声即ちこれである。天理教々理の殆んど凡ては此の二條の眞理を父母として生れたものである。

例へばミキ子が高弟飯降伊蔵に向つて眞の信仰として教へた朝起き、正直、働きの三個人道徳の如き又た夫婦の和合、互ひ助け合ひ、日の寄進 日の寄進とは日々誠の精神を神に寄進するの謂である 家庭道徳、社会道徳、対神道徳の如きは即ち其の積極的教理積極的道徳である。

即ち理を立てると云ふ精神を主観的に観察すれば正直となるのである、又た人を助けると云ふ精神を主観的に観察すれば働きとなるのである。更らに之れを客観的に観察すれば理（神）を立てるといふ精神が日の寄進になるのである。又た人を助けるといふ精神が互ひ助け合ひとなるのである。従つて理を立てるといふ一個の精神は正直ともなり日の寄進

ともなり、人を助けるといふ精神は働きともなり互ひ助け合ひともなるのである。之れを今一步進めて云へば正直即ち合理的一元生活を置いて其の働き即ち人類的事業はなく、互ひ助け合ひ即ち相互扶助的生活を置いて日の寄進的生活はないのである。従つて正直といひ働くと云ひ、互ひ助け合ひと云ひ、日の寄進と云ひ、縦より観察すると横より観察すると個人的に観察すると社会的に観察すると主観的に観察すると客観的に観察すると時間的に観察すると空間的に観察するとに依つて其の名称を異にするに過ぎずして其主体は誠即ち眞実性其の者に外ならないのである。

以上は天理教の積極的教理の大体である。以下に其の消極的教理の概要を略述せう。

凡て仏教でも基督教でも乃至回教でも生活を連鎖した一つの律がある。其れは即ち因果律である。仏教ではこれを因縁とも因果とも説いた。天理教ではこれを因縁と云つて居る。

因縁とは云ふ迄もなく一つの原因には必ず一つの結果を伴ふと云ふ自然律をさしたものである。従つて因縁には善き因縁もあれば悪い因縁もある。人生の目的は此の悪因縁を消滅して善因縁を積むことである。云ひ換へれば埃を払つて誠を積むことである。此の連続的生活を称して天理教では懺悔の世尽しの世と云つて居る。

古来病は氣からと云ひ、失敗不幸を自業自得と称する精神的病理観もしくは唯心的運命観はあつた。けれども其の何れも天理教の如く科学的に進歩したものではなかつた。殊に最も幼稚なるは其の病理観である。

例へば此処に一人の肺病患者がありと仮定する。医者はこれを診断して物理的肺菌に原因せしむるのである。而して百人の中の九十九人迄は此の皮相の説明に満足している。けれども其の中に一人此の医者の説に満足しない者がある。其れは天理教徒である。

彼も元より肺病の原因は物質的肺菌にあることを認める。けれども其れをもつて肺病の第一原因とはなさない。彼の認めて第一原因とするものは精神的肺菌（潔癖で高慢で利己心が強く表面の体裁を飾ることに工みなるに反し内実を欠ける我侭の性格）である。

（元より肺病の種類にも種々あるをもつて一樣に断定することはできない。其の詳細なる科学的原因は直接其の個人と其の病に就いた上でなければ概括的に断定することはできない。何故なれば人間には類似の因縁はあつても各人同一の因縁といふものはないからである、又た類似の病氣はあつても其の分類は一樣でないからである）

これは単に病因のみならず幸不幸の原因についても同一原理の下に支配せられつゝあるのである。然るに世人は凡て疾病幸不幸の原因を偶然の外的原因、物質的原因に帰して敢て其れ以上に精神的原因、根本的原因の存在することを自覚しない。これは主として今日迄其の原因並びに其の根本的治療法根本的運命改造法が明かでなかつた為めである。今回天理教に依つて始めて疾病不幸の根本的原因と其を断滅する根本的方法とを与へられたのである。

ミキ子は凡て此等疾病不幸の原因を八つに分類した。而して其れを八埃と命名けた。八埃とは

ほしい、をしい、かはゆい、にくい、うらみ、はらだち、ゆく、こうまん
の八つである。

これを大にしては天災地変の如き人類的不幸これを小にしては症病不幸の如き個人的不幸は凡て此の八埃の混合錯雑して生む所のものである。

然らば如何にして個人の健康人類の運命を改造すべきか。其の唯一の根本的改造法は性格の改造である。もし人類全体の性格が平等一如に改造せられた暁には単に個人が疾病不幸より免かれ得るのみならず人類全体が等しく天災地変の禍害より免かれ得るのである。而して此の世界は四時の氣候が調節せられ飲食衣服に不自由なき昔のエデンの生活が復活するのである。其れで天災地変疾病不幸はこれを一面神の異見立腹ともいふ。（此の点は旧約時代の信仰と大に其の趣を等しうして居る）

けれども性格改造の根本的方法は万人が必ずしも同一ではない。何んとなれば、各個人には十億万年の過去と八千八度の更生との間に自ら作つた特殊の性格と特殊の病的素質があるからである。

例へば肺病を病む者には肺病を病む因縁と病的素質（精神的）があり、又た癩病を病む者には癩病を病む因縁と病的素質がある。

此等各個人の有する特殊の因縁病的素質を断除するには各個人の特殊の自覚と其れに伴ふ特殊の努力とに待たなければならない。ミキ子は個人の特殊の運命と特殊の疾病とに対して一々哲理的科学的に其の根本的原因と根本的改造と根本的治療との方法を説明した。此の科学的方法に依つて彼等の疾病不幸より救済せられたる人間の数は彼女の生前のみにても約百万に達した。更らに将来に何億何十億の人類が此の方法に依つて救済せられるであらう。

けれども世人の信ずるが如く肉体の疾病と物質的不幸とより人類を救済することは天理教の第一の目的ではない。天理教の第一の目的は精神病の救済、精神的不幸の救済にあるのである。即ち

「此の道は病癒しの道ではない。心直し（人格改造）の道、因縁切り（運命改造）の道である」

と。これは心の切りかへ（人格改造）世のたてかへ（世界改造）に依つて甘露台（黄金世界）を此の地上に実現せんとするのである。

而して人格改造運命改造の方法は足納をもつて其の消極的手段の第一とし日の寄進を以つて其の積極的手段の極的手段の極致とする。

足納とは天理教特独の宗教道徳であつて、これを世の忍耐と同視するは不可である。又た堪忍と同一意味にとるも誤つて居る。強みて其の意味を説明すれば一切の運命は自己の性格の所産であるが故に天を怨まず、人を咎めず、現在の運命に満足しつゝ更らに未来の運命改造の根本的事業に向つて丹精するの謂である。

天啓の聲に

足納、足納、足納は前生の懺悔と受け取る。

と云ひ、又たミキ子の言葉に

如何なることも足納して新たに因縁（悪因）を作ることはいかんで

とも云つて居る。

足納に関して説いた彼女の言葉は此の他にも多くあるが其の意味を直接もしくは間接に表現して居るものは如上の二語に尽きるのである。

足納の次ぎに来る第二の消極的天理教道徳は発散の理といふことである。

発散とは内から湧き出づる埃外から密り来る埃を発散し反発するの意味であつて悪因縁を作らざる為めの必要の手段である。これを足納と比較する時には足納は何れかと云へば寧ろ受動的気分を多く有して居るが発散は寧ろ能動的気分を多く有して居るのである。ミキ子の言葉に、

今日のことは今日忘れて了へ

真に悪かつたと心から後悔して来たならば最う何も前のことは云ふて呉れるな

と。此の二語に依つて発散とは自己に対し又た他人に対する如何なる精神をさして云ふものであるか、其の大体の意味を説明して居る。

此の足納の理と発散の理とは天理教の消極的道徳である。従つて其の価値も消極的価値を有するに過ぎない。けれども此の消極的陣地が堅固にして始めて互ひ助け合ひの如き、日の寄進の如き積極生活建設生活が創造せらるるのである。此の点より見れば其の客観的価値は凡て平等であると云はなければならない。

以上は天理教々理の大体観であるが今之れを現実の人生に即して説明せう。

第一は貸物借物の理である。

単に身上即ち肉体並びに肉体の生活に必要な物質は神の貸物にして心計りが我が物と云つては単識なる人は之れを真理として信ずることを否むであらう。けれども今日迄公然の秘密として一般人類の知らなかつた此の人生の大真実大真理は一度疾病もしくは不幸に遭遇した時に始めて其の真実なることを理解するであらう。

例へば此処に五体の自由を失つた一人の憐れな老人がある。其の老人は貧にして且つ寡である。従つて此の老人は肉体の自由権と物質の所有権とを失つて居る。けれども彼の精神のみは全く自由である。即ち彼は青春の夢を回想することもできれば金殿玉樓の栄華を夢みすることもできる。而かも肉体の自由と物質の所有とは彼の考へる如く自由にすることはできない。これ肉体及び肉体の生活に必要な物質は自己の所有にあらずして（神の貸物にして）心計りが我が物なる何よりの実証である。

然らば肉体の自由と物質の豊富とは如何にして吾人に許さるべきか？

神は教へて云ふ。

功を積んで功を戴け

と。此の功（誠）及び功を積む方法手段順序として説かれたものが天理教道徳である。

今其の主要道徳の一二に就て實際的価値を説明せう。

例へば朝起きの如き、これを朝寝と比較する時は朝起きをする者は朝寝をするものよりは自然多くの仕事をする事ができる。従つて其れ丈け自己の生活を豊富にし且つ安楽にすることができ。

又た正直に就て論ずれば不正直の者は一時不正の手段虚偽の方法に依つて社会的に成功するかも知らない。けれども其の不正直虚偽が一度暴露するや、以後何人も其の人を信用するものはなくなるであらう。従つて彼は未来の生活の保証を失はざるを得ない。もし又た最後まで他人を欺き了ふせたとする。而かも自分自身を欺くことはできない。従つて彼の

心中には常に何物かの不安を伴ふのである。然るに正直の人は常に社会的に其の生の保証（信用）を獲得するのみならず又た自分自身の中に中心の喜悦と満足とを禁ずることができないものがある。正直の眞価は寧ろ此の自己の眞実の要求を要求するが俛に満足する点にある。而して其れを置いて人間にとつてより以上の生の価値はないのである。更らに働きと懶惰とを比較すれば働くものは生の特権を得、働かざる者は生の特権を失ふ。而かも其の働きたるや自分一個の利益を目的としたものであつてはならぬ。人類全体の共通の利益を目的としたものでなくてはならぬ。これ働きの眞義であり、価値である。

最後に天理教の二積極的道德即ち互い助け合いと日の寄進と二消極的道德即ち足納の理と発散の理とに就て云へば互ひ助け合ひと日の寄進（正直と働きの別名）とは生命を進歩発展せしめ、足納と発散とは生命を保護し補導するのである。一は顕正を目的とし、他は破邪を目的として居る。此の積極と消極、進歩と保守の両面の道徳的生活に依つて始めて安全にして幸福なる人間生活が営まれるのである。

以上は要するに誠即ち眞実性の活動律であるが更らに天理教道徳の主なる特色は著しく順序を重んずることである。即ち

順序一つが天の理

と云ふ言葉は

誠一つが天の理

と云ふ言葉と対立して一は空間的活動律として一は時間的活動律として最も主要なるものである。

次に天理教が従来 of 貴族的宗教と異なる点は著しく家庭を重んじ国家を重んじ社会を重んずる点である。これは従来 of 貴族的宗教と全然其の行き方を異にして居る点であつてやがて時代の必然の要求を具体化するものである。

即ち従来 of 宗教の理想は家庭を離れ、国家を離れ、社会を離れて隱遁的生活を行ふことにあつたが天理教の理想は反対に家庭の一人として国家の一民として社会の一員として完全なる實際的人物を作るにあるのである。之れを云ひ換れば従来 of 宗教は山の仙人を作ることにあつたが天理教は里の仙人を作ることが理想である。

従つて教祖は家を持ち夫を持ち子供を持ち家事に従事しながら足一步も門外に出づることなく道を説いた。

これ従来 of 宗教家と全然其の人格並びに理想を異にせる点であつて如何に天理教が現代的宗教であるかを語るものである。

天理教の人生観は一にして尽きないが今其の主要なる特色の一二を挙げれば

第一、従来 of 宗教の男尊女卑の弊風を打破して男女同権を主張した

たことである。

これからは雌松雄松のへだてなし

如何なる木いも月日思はく

これが天理教の両性観である。

第二は従来 of 宗教の霊を尊とし肉を悪とした誤つた霊肉観を破壊した

天理教では

身上は神の建て流しの館

と云ひ、

穢れ不浄はこれ云はん。心の穢れが身の穢れ

心澄み切れれば神同体

とも云つて居る。天理教で肉体及び物質を尊重する観念は主として肉体及び物質は神の貸物であるからこれを尊重しなければならぬと云ふ観念より来て居る。従つて霊肉共に平等一如に尊重するのである。

要するに天理教は理想を現実生活以外に、幸福を日常生活以外に求めない。此処（現身現世）が此の世の極楽やと云ふのが天理教の現世観であり、幸福観である。此の幸福を全人類に一人も漏れなく享樂せしめんが為めに其の方法、手段、順序を何人にも理解し得る様に通俗平易に説いたのである。而して人類を現在の罪惡より現在の逆境より現在の不幸より救済する第一の順序として指を谷底の人即ち貧者弱者、不具者、不幸者に染めた。

此の二つの遠大なる人類救済の神の意志は却つて盲目なる俗人の嘲笑を買ひ、淫祠邪教の汚名を冠せらるゝに至つた。けれどもこれに就ては予め神に深き意志のあつてのことである。其の神意は即ち 六ヶ敷いこと云ふてはわかる人もあれば訊らぬ人もある。其れや道とは云へん。

此の道は仮名が道だ。柔らこい道だ。

柔らかいものは何んな老人でも若いものでも食べる。硬いものは若い者が食べても老人は食べられぬ。 六ヶ敷いことを六ヶ敷く云ふのは何も六ヶ敷いやない。六ヶ敷いことをやさしく云ふのが眞の六ヶ敷いのや。

真理と云ふものは本字で書いたら理がせまる。其れで仮名で書くのや。
真理はかたよつたものではない。何地らへも通れるのが真理や。

と云ふ教祖の言葉を通じて伺ふことができる。

従つてミキ子には神勅を自ら手記した神樂歌と御筆先との著書があるが其れ等は凡てイ
ロハ四十八文字と数字とを知つて居る者には何人と雖も理解し得る様に平易通俗の言葉を
以つて記されてある。更らに救済の第一手を所謂谷底の人、即ち貧者、弱者、不具者、
不幸者につけたのは

「今迄は道を上からつけた。上（上流）から附けるのは早いけれど其れでは助けの実が上
らぬ。今度は下（下流）からつける」

と云ふ天啓の声に尽きて居ると思ふ。此等の表面に表れた事実と其れを裏附けてある神の
言葉によつても此の全世界全人類を自由平等化せんとする神の意志の如何に徹底して来た
かを知ることができる。以上は天理教の純理的大体観であるが宗教は哲学ではない。又
た倫理でもない。従つて単に哲学的研究倫理的研究に依つて天理教といふ一個の有機体を
完全に理解することはできない。之れを全解するには時間と空間との上に永久無限に展開
せられたる天地創造の神の意志と其の発展の傾向とを知らなければならない。

世人は普通天理教とは天保九年十月二十六日に教祖ミキ子に天啓のあつて以来其の昇天
に至る五十年間の特殊の期限に於ける神の意志が天理教であつて教祖の昇天と共に天理教
は完成せられたかの如く信じて居るものが大多数である。

けれども天理教は仏教の如く基督教の如く、回教の如く其の教祖の昇天と共に中絶する
様な一時的の宗教ではない。天地開闢の原始より未来永遠に亘つて継続せられ発展せられ
つゝある神の意志の展開である。従つて教祖以前にも天理教は存し教祖以後にも天理教は
続くのである。

事実教祖の昇天後神は其の高弟飯降伊蔵を起して更らに二十年の天啓を継続せしめた。
明治四十年其の歸幽と共に一時天啓の声は中絶したが（中絶したのは神の言葉に依れば飯
降氏臨終の百日に十年の仕事させたと云はれてある。従つて十年間は天啓の必要がない
からである）必要あらば神は何時にても予言者を起しめて其の天啓の声を継続せられるの
である。

此の神の力の生きた連続的活動神の意志の生きた連続的発展は他の既成宗教に見るべか
らざる天理教独特の特色であつてこれを神の所謂細道なる他の既成宗教と同視すべからざ
るや云ふまでもない。其れで神は

今迄と道が變りてある程に
早く急き込め往還の道

と称せられ、

仏教も其の他の宗教も（拝み、祈禱、医者、薬、按摩、針、易判断、九星の如きも）神
が細道として附けたものであつて今度の教が往還道である。

と証明せられて居る。

古来仏教でも基督教でも回教でも皆其れ自身を無上道と呼んだ。けれども其は人類を或
る一点の高さに引き揚げんとする方便にすぎなかつた。今度の教が眞の無上道である。此
の事は教祖の遺訓にも顯はれて居る。

今迄は長い道中道すがら
余程たいくつしたであらふな

此の度は最う確かなる参り所
見へてきたぞへ得心をせよ

これから長い道中道すがら
説いて聞かす篤と思案を

此の言葉の如く今日迄仏教も基督教も回教も以下凡ての宗教の説かんとして説き得な
かつた天地開闢の当初より現在まで更らに現在より永遠の未来に亘つての宇宙の秘密神の意
志人類の歴史を浄玻璃の鏡に映して啓示せられたのである。

近世に興つた新興宗教乃至復活の宗教中にも最も有名なるは英の救世軍の如き米のク
リスチアンサインスの如き露のセオソフイの如き又た我が国の黒住教、金光教の如きあり
と雖も彼等の生命は単に宇宙の哲理の一端を捕捉し得たと云ふ以上其の全体を蔽ふ神の全
意志と世界人類の歴史とを遺憾なく説いた宗教は一つもない。これ神の証明を待たずして
其の何れが本にして何れが末、何れが實にして何れが虚であるか自ら明かなる所以であ
る。

教祖昇天の時期の迫つた時云ひ遺した言葉がある。

月日（神）あつて此の世界（地球）世界あつてそれぐ（万物）あり、それぐあつて身の
内（人間）あり身の内あつて律（法律）がある、律があつても心の定め（信仰）之れが第

と、此の簡單なる言葉の中には全世界の学者が共力して漸く知り得る否な知り得ない処の大事実大真理がある。

(之れを一面より見れば教祖一代の事業(天理教)は此の簡單なる言葉の布衍と見ることが出来る。)元より仏教にせよ基督教にせよ乃至黒住教金光教にせよ、其の教理と其の教祖の人格は群を抜いて居る。けれども万有は級数である。より小なる数より見て大なる数もより大なる数より見れば小なる数となる。

吾人無上無等々の真理を求むるものは第二流の真理第二位の宗教に満足することはできない。必らずや第一義深甚微妙の真理に徹しなければならぬ。これ我が織才微力を顧みず敢て此の道を治く世人に紹介せんとする所以である。

今其の特色の一斑を概活して挙げれば第一の特色は平民的なることである。これは教理の形式に於て其うである計りでなく其の精神に於て其うである。例へば朝起き、正直、働きの如き何人にも理解し得る様の通俗平易の形式を採つた計りでなく其の精神に於ても従来宗教の如き貴族的高踏的精神を踏襲して居ない。これは教祖立教の精神(真理の普遍化)に就て研究すれば尤も明かである。即ち従来貴族的宗教にあつては一部精神界の上流社会の専有物であつたがミキ子は之れを人類全体の共有物としたのである。

此の平民的特色を基本色として積極的、活動的、現代的、現実的、實際的、実行の、平和的、楽天的、向上的、進歩的、創造的、建設的、全力的、全我的、奮闘的、努力的、献心的、犠牲的、協力的、一致的、教育的、訓練的、軍隊的、規律的、自治的、独立的、個人的、家族的、国家的、人類的、社会的、精神的、科学的、一元的、合理的、實質的、内包的、根本的、徹底的、神靈中心的の如き特色が生れるのである。

之れを過去の貴族的宗教と比較する時は彼は恰かも山上にあつて迷へる旅人に道を教ゆるが如く之れは自ら谷底に降つて迷へる旅人を目的地に導くが如し。更らに一層簡單なる例をもつて説明すれば彼は料理書の如くこれは料理の如し。

以上は天理教の大体の特色であるが就中他の宗教の企て及ばざる特色は現在に於て濟世救人の驚くべき実力を有する生の宗教、力の宗教、価値の宗教であるといふことである。(盲者は見聾者は聞き啞者は語り、手萎えたる人は手を得足萎えたる人は足を得癩病は清まり中風は癒され肺病は助かる生きた宗教的事実である)

更に一つの重大なる特色は他の宗教は何れも教祖一代の宗教であるに反し天理教は常に道と人類との成長に應じ其の偉大なる後継者によつて天啓を継続せらるゝ永続的宗教發展的宗教である事である。最後に特筆しなければならぬことは天理教の世界統一の理想である。其の統一の理想とは全世界を宗教的にも政治的にも歴史的にも地理的にも精神的にも物質的にも日本化することである。これは従来宗教に見ることのできない天理教独特の大理想である。尤も回教の如き政治的に宗教的に世界統一を企つたものはあつたが其れは一片の空想で天理教の如き根底あるものではなかつた。天理教の世界統一の理想は日本は根の国であり人類の総本家であると云ふ先天的約束より生れたものである。従つて一片の空想ではない。神の予定の大理想であるのである。

此等並びに之れに類する天理教の特色は他の既成宗教に見るべからざる天理教独特の特色にしてやがて未来の世界教たる教名を恥しめざる価値と実力とを証明するものである。

現今の社会に於ては天理教は黒住教金光教の如き天理教より見れば寧ろ細路小路に属する小宗教と同視せられつゝあるが将来天理教が其の予定の目的、(世界を直路に踏み平らす)を実現した暁には現在人類の有する運命観、性格観、靈肉観、死生観、家庭観、国家観、社会観、人類観は其の根底より顛覆せられるであらう。此の理想の世界を称して神は甘露台と云つた。(此の精神的甘露台が実現せられると同時に天理教本部の甘露台敷地にも自然と物質的の甘露台が建設せられるのである)此の甘露台生活こそ吾人人類の最終の理想である。

其の時来らば世界に一人の疾病者なく一人の不幸者なく、争闘なく不和なく凡てが幸福と健全と平和とに満ち、全人類は無上の幸福を楽しむことができる。

教祖は云つた。

道つけかけて七十五年したならば日本国中はあら／＼といふてそれから先は世界中隅から隅まで天理王命の名を流す

と、其の時は吾人に明示されてはゐない。けれども

「日本七十五年、唐三十年残る外国二十年。」

これが新世界建設新神殿建築の慨普請であることだけは信ずることができる。

今日は精神的にも物質的にも世界の一大革新の時期に迫つて居る。世人は須らく天理教——神の終局の理想——を侮蔑することを止めねばならぬ。而して其の新しい精神と新しい形式とを学ぶことを怠つてはならぬ。然らざれば其の人は甘露台の享樂の最後者となるであらう。

教祖は常に其の信徒を督励して云つた。

道遅れなよ／＼

と。道は人類の生長と共に発達するのである。従つて一日遅るゝものは一日至上の幸福に遅れるのである。私は此の教祖の言葉を其の俤に全人類に向つて督励するのである（大正四年三月十一日）

附記、私は今年三月の早稲田文学に之れと略同一の内容で「未来の世界教」と題して不完全なる天理教一斑の紹介を公にした。今回自身で本誌を発売するについて事の順序として同じ様な概括的紹介を書くべく余儀なくせられた。之れは勿論天理教の概論である。以下号を追ふに従つて各論の研究を発表したいと思ふ。真面目なる読者の愛読を切に祈る次第である（R、O生）

我が宗教

世界は長い間靈界の暗黒時代を通つて来た。現代は即ち其の信仰復活期である。此際思想界の新人の信仰を聞くことは最も時宜を得た有益の企と思ひ数十名の知名の人々に向つて各位の信仰を求めたが真面目に御返答を下されたのは次の七氏である。此処に深く此等の人々に向つて感謝するのである。（RO生）

一、

相馬御風

僕はあらゆるものを信じようと思ふ。そしてその為めの努力を僕的生活としようと思ふ。

二、

中村星湖

トルストイ程な大自我大人格を持つてゐる人にも帰依すべき既成宗教はあつた。トルストイに限らず大方の欧米人には其れがあつた。そしてその信仰が現在まで引き続いて居る。日本にも嘗ては仏教があつた。神道があつた。また基督教なども入つて来たが、それ等は現在の日本人に何者をも遺してゐないと言つて好いほどである。現在の日本人はまさしく無宗教の状態にある。と云ふよりは宗教に対して・アジンである。私の如きは実にその一人です。そして炬火を前途に見ようとせずして自己の内部に見ようとしてゐます。あらゆる人間生活を縦に見、また横に見てその二つの線の交錯点に自己を置かうとしてをります。その意味は勿論時空を絶するのでもなければ我利々々亡者にならうとするのでもありません。宗教に対する・アジンだからこれからほんとの物を造り出さうと思つてゐるのです。だから今の所お前の宗教は？ と問はれれば「自分の生活その物を芸術にもし、宗教にもしようとしてゐる、これが私の宗教だ！」とお答へするより外はありません。そしてその「自分の生活」は宇宙生命の表象だといふことを信じてゐるのです。

三、

岩野清子

私は教憲を定めた且他人の作つた宗教など云ふものを信ずる気にはなれません。然しさう云ふ意味よりもつと根本的な広義なる意味でのものをさすなら自己の信ずる所即自己一人の宗教はもつてゐます。それは我れを生かすもの助くるものは我なりと云ふ信念です。

四、

生田長江

どんな新しい宗教でも既成宗教を度外に置いて作られるものではありません。

私の信仰は主として新旧約聖書から吹き込まれたものであります。
『爾心を尽し、精神を尽し、こころばせを尽して主なる爾の神を愛すべし』

と
『己の如く爾の隣を愛すべし』

とを第一にして大なる誠であると信じます。

今日の半可な思想家連に対してはベルグソンやオイケンなぞを軽視してでも黒住教祖、金光教祖、天理教祖なぞを尊敬して見せることが必要であらうと思ひます。

五、

中谷徳太郎

私には宗教といふことは解りませんし、自身にも信仰といふものを持つてをりません。従つて靈界に暗黒時代があつたか、今が信仰復活の時代だかさつぱり知りません。然し私のしてゐる生活が私の宗教で私の思つてゐることが私の信仰だとは考へられないことはありませんがどふも堂々と発表するには私自身の宗教を新に建設してかゝらなければなりません。今は其んなことをやつてゐるほど貧弱な境遇にもゐませんから当分見合せです。目下私のような墮落した暗黒裡に平気で、寧ろそれを得意として生きてゐるものには色道宗教と対女人信仰との外に何もありません。けれども私は心の不安なしに安心立命して酒をのんでゐます。さうして宗教だの信仰だのといつてさわぐ奴が大ばかに見えます。

六、

本間久雄

拝復小生は現在に於ては（将来は知らず少くも現在に於ては）何等の宗教的信仰をも把

持し居らず且つ過去に於てもまだこれといふ宗教的信念の経験無之候に付貴誌の御問ひに對しては小生には何等答ふべき資格無之候。

七、

石丸梅外

万朝報の消息で、君が「新宗教」と云ふ雑誌を出さるゝと云ふことを知つて私は直ちに何事かを云ひたい心持で筆を執つたのでした。然るに其の夜偶々妻が発病し、其後も引続きわるくて、今日では大阪府立病院の一室に専ら看護に力めねばならぬ身となつたので君へのたよりもそのまゝになつて居ります。

その後君からは重ねて、私の宗教に関する感想を求められたが、欺う云ふ折ですから、今日とても委しい論議をして居るわけにはまゐりませぬ。唯私の宗教に関する一端の感想は、私がかつて京都の宗教日刊新聞たる中外日報で、君に対して質問を發したときの数言によつて多少は了解せられたらうと思ひます。君の御説教も同紙上並に早稲田文学に掲げられた「未来の世界教」によつて略々知ることが出来ました。そして私の宗教は其根本思想に於て甚だしく君と一致するところの多いのを見出したのであります。

君の所謂「生欲の満足を説く生の宗教、自我の拡張と自我の創造とを説く積極的建設的宗教、現実生活を肯定する樂天的宗教、肉と物質とを尊重して行く文明の宗教」には同感です。私が中外日報に書いた「新生活と哲学」にもさう云ふ宗教を欲することを述べて置いたのでした。たゞ君が今日熱心なる天理教の信者にして且つ宣伝者を以て任じて居らるゝの對しては、私は天理教そのものを今少しく研究し考察して見なければ直ちに君の宗教に馳せ參することは出来ない。何れ病人が落ち付いたら、改めて申し上げたいと存じます。（三月九日——大阪府立病院一等館四室にて）

貸物借物の理の寓話

鈴木多吉

或る村落に誠に慈悲の深い大身の旦那があつた。又た其の村に非常に貧困ではあつたが極正直な義理堅い老爺があつた。此の貧乏な老爺は非常に旦那のお気に入りであつた。

老爺には一人の息子があつた。其れが嫁をとつて孫が出来た。兎に角老爺さんにとつては初孫のことであるから成らん中から工面をして親類を始め村の内の懇意の家へ何か御祝を配りたいと思つて準備をしたが重箱がない。其れで重箱を借りに慈悲深い旦那の所へ行つた。

すると慈悲深い旦那は

「暫く見えなかつたがアア良く来て呉れた。何か用があつて来たのか？」と云つてお茶を出しながら懇に待遇した。

老爺さんは

「実は旦那様にチト御願があつて上りました。実は此度内に孫ができましたが、初孫のことではあり何なりとも印計りの御祝をさして戴きたいと思ひましたが困つたことには内には其の御祝を配る重箱がありません。どうか此方様の一番悪い重箱で良いから貸して戴きたい」

其れを聞いて慈悲深い旦那は

「ハア其うかいなあ。其れは誠に易いことだ。何んなら内の一番良い重箱をつかつて貰ひたいものだ」と云ひながら番頭を呼んで倉から一番上等の重箱を出して来る様に命じた。

老爺さんは立派な蒔絵の重箱を見て恐縮して

「旦那様此んな結構なお品は勿体な過ぎて拝借して參る訳に參りません。どうか御宅で一番悪いのを貸して戴きたいもので御座います」

と云つて御辞退すると慈悲深い旦那は其れを打ち消して

「其うでないから持つて行つて使つてくれ、内には幾らも重箱があるけれども用がないから倉へ蔵つて置くのだ。サア／＼遠慮はないから持つて行つて使つたが良い。」

「其れから伏紗も要るであらうが、伏紗はあるか何うか？」

「伏紗も御座いませんから何うか何の様な品でも宜敷う御座いますから貸して戴きたいもので御座います」

「よし／＼。然し内のは内の定紋がついて居るが其れでも良いか？」

「結好で御座います」

其処で老爺さんは上等の重箱と上等の伏紗とを借りてニコ／＼して家に歸つて来た。而して翌くる朝一番早く起きて赤飯を炊き先づ旦那の所へ一番先きに上げ其れから近所へ配つて目出度く祝を済ました。

性来堅い老爺さんであるから配りがすむと早速其の重箱を丁寧洗ひ、塵一つ葉止まらぬ様に奇麗に／＼に拭いて旦那の所へ返へしに行つた。

元より貧乏であるから御礼と云つて何も持つて行く様なものはない。其処で仕方がないから途中で饅頭を買つて重箱につけて

「誠に有難う御座いました。此れは誠に粗末なもので御座いますが何御不自由ないところ坊ちやんに一つ上げて戴きたい」

と云つて出すと旦那は

「其れは滅相な事だ。己の内にあつても未だ一度も使つたことはないがお前の御蔭で彼処の内には良い物があると知らせて貰つて有難い。折角のものだから貰つて置く」

と云て反対に礼を云て老爺を歸した後で慈悲深い旦那は義理堅い老爺が重箱を返し来たことから村の作兵工（仮名）に貸して置いた重箱のことを思ひ出し番頭を呼んで重箱は返して来たか何うか訊ねた。番頭の云ふには、

「実は彼処の内は今迄二度も三度も催促にやつたので御座いますが未だ持つて参りません。今直ぐ丁稚に取り遣らせませう」

と云つて早速丁稚を呼んで作兵工のところへ催促にやつた。丁稚の行つた時は作兵工夫婦は外へ出て農事をして居たが上つて来て

「小僧さん、度々足を運んで誠にすまなかつたね。今直ぐ持つて行くから宜敷云つて呉れ」

と云つて早速内へ歸つて持つて行つたが其の内は物を粗略に扱ふ内であるから重箱の中には埃は溜まつて居る。赤飯の固まつたのはついて居る。前の律義の老爺とは雲泥の相違である。

番頭は大変怒つて主人の前に出で

「旦那様此の作兵工は何時内の品物を借りて行つても一度も満足のことをして返したことは御座いません。今度は彼んな者には何も貸さないが宜う御座います」

慈悲深い旦那の云ふには

「コレ／＼番頭や、其の様なこと必らず云ふものではない。もし己の所で物を貸さんと云へば村の者が差支へるではないか。けれども彼んな者には何時借りに来ても良い物を貸してやることはならん。悪い物を貸してやれ」

と仰つたと云ふことである。

此の話は教祖が梅谷様に話し、私は梅谷様から聞いたのでありますが此の慈悲深い旦那と云ふのはとりもなほさず我々の天の親様をさして云はれたものと思はれます。

天の親様の許には何んな結好なものもある。なれども此の作兵工の様なことをして此の身上を返したら又た結好なものを貸して戴くことはできません。充分に磨き上げて返したら親様も御喜びになりますし又何んな結構な身上も貸して戴けます。

「皆さん良う思案して戴きたい」と梅谷先生の御話でありました。

附記、基督は譬喩にあらざれば語らずと云はれた程巧妙なる譬喩家であつた。釈尊も亦種々なる譬喩をもつて一大事因縁を説き聞かした。我が教祖も随時軽妙な譬喩をもつて深遠なる宇宙の真理を暗示した。此の一挿話の如きは就中最も深く味ふべき傑品と思ふ（RO生）

道に入って

私は四日の午後一時に天理教東京教務支庁から本所外手町の東本分教会に電話をかけた。其れは同教会長中川よし子女史の天理教布教談を聞かんが為であつた。

同女史は明治三十年に夫と二人の小供を国に遺して乳呑児を負ふて单身東京に布教に出掛けた。而して僅々二十年足らずの内に二万の信徒をつくり、其れ等の人々から慈母の如くに仰がれつゝある人である。婦人の身にしてかくの如き成功者は寧ろ異例に属するのである。従つて天理教内部で中川女史と云へば誰知らぬ者なき模範的会長の一人である。

私も女史の声名は長い間同教会部下の信徒や他教会の教師方より聞いて居て秘かに其の人格を慕はしく思つて居た。而して折もあらば同女史に接して直接其の履歴談を拝聴したいものだと思つて居た。丁度此の度道の雑誌を出させて戴くについて電話で其布教談を聞かして戴ける何うか御都合を伺つたのである。

恰度其の日は女史が他に外出の約束があつて今日は御目に懸れないが今日でなければ何時なりとも御出で下さいとのことであつたから其れでは明日（五日）午前に伺ふことを約しさては翌五日に同教会を訪れたのである。

先づ入口より感ぜらるゝは陽気な充実した気分である。（陽気は天理教の生命である）其れが段々中へ入るに従つて濃厚になる。而して教会の隅々迄其の気分が充ち／＼て居る。

私は先づ中へ入つて第一に神前に叩頭してから入口の受附らしい方に刺を通ずると其の

方は更に事務所へ其れを待つて行く、事務所の役員が会長の許へ持つて行つた。会長といふのは入る時チラとの姿をと見て、即ぐと其れを感じたデツプリと肥つた婦人である。一寸待つて呉れと考へて居る。後で考へて見ると此の人々には凡て皆教会の教師方であつたのである。やがて詰めて居る。「此方へ」と云はれる奥の一間へ通された。此処は女史の居間兼応接間らしく掛物、額、置き物の如き装飾品、さては台筒茶筆筒火鉢の如き日用品まで拭き清められ整頓せられて塵一塵も止めぬ鮮か、さ奇麗さ其の一つ／＼が女史の豊満の趣味と綿密なる注意とを語つて居る。別けて嬉しかつたのは床の間に飾られた白梅の古木である。女史の性格は此の凜然とした白梅の花に更らに日本の花王桜の陽性を加味したものと云ふのが蓋し適評であらうと思はれる。

此処に暫時待つて居るとやがて目的の女史は出て来られた。身は分教会長であるが下手な大教会より富裕なる位置に坐しながら小学校の女教師にも劣る質素な服装をして、何うも御待たせ申しました。昨日支庁から電話を掛けて下すつたのは貴方で御座いますか。良うこそ御出で下さいました。実は未だ朝飯前で御座いましたので誠に失礼致しました。

これが女史の初対面の挨拶である。言葉はかくの如く丁寧であるが実際の女史は満身これ力と熱と光の象徴である。人の話に依ると女史は非常に多忙の身をもつて居られる相であるが此の日も教会の繁雑なる事務に取り巻かれて十時半だと云ふに朝飯も喫せられぬと見える。

訪問の意志を通じて、女史の布教談を聞かんことを求めると女史は非常に謙遜の態度で「皆様が時々其う仰つて下さいますますが道の中にはまだ幾らも立派な成功者が御座いますし、私共は御話する様なことは何も御座いません。」
「其れ所ではない。皆様が模範的成功者と仰つて居ります。どうか私一人の為めではない。皆様の参考になるだらうと思ひますから一寸でも宜う御座いますからお話して戴きたい」

「最う長年のことでありますから忘れて了いました」

功を忘れる。これが道の精神である。私は此の不用意の間の女史の言葉に益々興味を覚えて根掘り、葉掘り失礼とは思ひながら執念く其の履歴談を求めた。

次の談話は即ち特に本誌の為に語られた布教談で凡て女史の血と肉とをもつて築き上げられた実験談である。

其の中に於て最も私にとつて忘れ得ない印象を与へたのは女が東京地方へ布教に出掛けてから一年後女史の成功を聞いて態々女史を訪れた大教会長（高安）との再会である。

其処を語る時の女史（女史は万年新造である、永遠に老を知らぬ人である）は恰も二十三四の当時に若返つた気分で喜悅の涙を以つて語られたには聴いて居る私も思はずホロリとした。

此の間にも絶えず側の人々から用伺ひに来る。其れにも係らず一時間半余に亘つて熱誠をこめて懇切なる談話を下さつたのは実に感謝の辞がない。談話が済んだのは恰度十二時。帰る間もなく昼飯の用意まで整へられて勧められたには女史の行き届いた用意と部下の平常の訓練の宜敷きとに驚かざるを得ない。

凡て一家の特色は其の主人の人格の反映である。東本分教会の卓越なる特色は女史の人格の反映であるのである。其の中には数へ切れぬ多くの美点がある。就中其の大なる特色を女史が側の人に向つて命ずる言葉の中に認めた。其れは教務支庁へ日の寄進に行つた人々に向つてかけてやる電話であつたが。

今日は雨が降るから滑つて怪我でもすると悪いから皆様に帰つて来て下さいと云つておやりなさい。而して支庁の弁当を食べないで帰つて御いでと云つておやりなさい。

此の言葉の中に女史は部下を労はる無限の愛と他人の恩を着ない云ひ換へれば人の心配を軽減せんとする深い用意が見える。

天理教々師の中には信徒の迷惑をも顧みず平気で其の饗応を受けて何んとも思はぬ教師がある。これは道の精神より云つて一種の埃である。然るに同教会教師に限つて決して信徒の饗応を受けないのみか茶一杯さへ貰つて飲むことさへせぬ。之れを極端に実行したならば或は却つて一種の埃となるかも知らないが此の自分は有る限りの誠を施しながら人よりは未塵の恩をも受けまいとする独立独行の精神こそ道の精神であつて此精神がやがて又た東本分教会をして今日の盛大を来した原因であらうと思はれる。

私は折角の好意であるから昼飯の饗応は受けたが中心に於て秘かに矛盾せる自己の行為を恥づる所があつた。

帰りには来客のあるにも係らず女史はワザ／＼私を玄関迄送つて呉れられた。天理教信徒としては昨今の新米に過ぎない、而かも一面識のない——四海同胞主義が天理教の精神であるとはいへ——私にかくまでの親切を尽されるには感謝の辞がなかった。

神は永遠に女史の此の精神を忘れないであらう。私は永く同教会の繁栄を切に祈つて居る。(良平)

中川よし子

私が始めて東京へ参りましたのは私の二十九の年で御座いましたから明治三十年十一月で御座いました。私の信仰致しましたのは私の二十三の時明治二十四年頃で御座います。——御教祖様の五年祭の済んでからつけて戴いたので御座いますから極末つ子で御座います。

私が助けて戴いた動機は明治二十四年頃で御座いまして私には脳病もあり胃病もあり、又た子宮病も御座いました。私を此の道につけて呉れましたのは私の知り合で御座いました。其の知り合ひと申しますのは私の夫の姉で御座いまして前から此の道を信仰してゐてくれましたが私も其れまでは仏法の信仰で私が恰度奉公してゐた家の主人が大変熱心の仏教信者で御座いましたから法話のある時は聞きにやつて下さいました。其れで他の信心をする気にはなれなかつたので御座います。

此の天理教の信心は明日死んでも魂の土産になるから聞かせて戴いたが良いと云はれて、其んな魂の土産になる信仰なら聞かせて戴きたいと思ひまして聞かして戴くことになりました。

私も始めは先生から御話をして戴いても少しも有難いと思ひませんで御座いました。平常我が強いと姉から云はれて居りましたが其の時のお話は普通の人情話道理上の話を聞かせて戴いたので其んな道理上の話なら両親から聞かせて戴いて居ることで御座いますし、殊に父が酒飲み相手に引き寄せられて智者とか学者とか非常な聖人とかの話をして聞かせて戴いて居りまして、学問と云つて御座いせんけれど耳丈は大変肥えて居ましたから、此んな

親に孝をせんならん。君に忠をせんならん世界助け合ひと聞かせて戴いても其んな話はサンザ聞いて居りましたから御授けして貰つても此んなことで直るものか位に思ひました。

其の時夫が留守で御座りましたが帰りまして、今日は天理教の教師が来て結好であつたかと聞きますので

彼んな話など聞くに及びませんと申しますと夫が其れを姉に話す。姉から先生に話したもので御座いませう。先生が来て貴女は昨日の話位のこととは両親の酒飲み話に始終聞いてあるから彼んな話なら聞くに及ばんと仰つた相ですが其れが実行が出来て居たら今日の身上にはなりません。此の道は実行の教である。

と云はれた其の一言が私の胸に非常に感じ、成程今迄は親に孝、君に忠、夫に貞と云ふ様な人の話を聞かせて戴くとあゝ誠の人である。いとしい人である。いちらしい人であると情に駆られて夢中になつて感じましたが今日迄行をしてなかつたといふことを悟つて

恐れ入りましたと申しますと段々話をして聞かせて戴いたのが身上貸物借物の理で御座います。

人間の身体は道具や機械で出来上つたものではない。神様の御作り下されたもので水気温味の御守護を戴き万物の霊長であると云ひながら好き勝手の道を通るといふのは誠に申訳のないことである。貴女は我が強くて目上のものを不足に思つて居るから脳病になつたのだ又胃病になつたのは胃は天のあてがへの袋であるから、——天のあてがへと云つても食事許りが天のあてがへではない。何んな夫を持つも何んな親を持つのも天祿であるから結構であると思つて通らなければならない。夫れを天の与へを不足にし天祿を有難いと思はず通つて居るのは謂はゞ欲の理にはまつて居るのである。

貴女は不仕合せと思つて居るけれども貴女が今此処を切つて外へ行つても貴女の天の与へが変つてなければ何処へ行つても心配苦勞はあつて変りはないから何処でも天祿が有難いと思ひ心に誠を尽くして行かぬから胃病になつたのである。又た子宮と云ふのは人間の生れ故郷である。親兄弟を有難いと思はずして居るから身上に障りが来たると云はれて見ると

夫の家に嫁ぎましても夫のことを思はず唯親々と申しまして子供の時から物見遊山に出ることもなく漸く墓参りに出る位でありましたから親不孝とは思はなかつたが心の不足は神様が御存じで御座いますから心の中に日々嘆いたのを夫は許して呉れても親は許して呉れても天の異見を戴いて居るのを思はなかつたので御座います。

夫の家に嫁いでも自分が働くのに夫は其んな気のないのを怨んで居りましたが夫の為め、子の為めに一生懸命に働いて居たから夫は内の家内は働いて呉れると褒めて居りました

たが天が御存じで御座いますから、親が孝行と云ひ、夫が貞女と云ひましても何につけても自分の意見通りにならんことを不足に思つて居りましたから此う云ふ御意見を戴いたのであると思ひ又天理教祖様が何因縁のない身に人助けの為に御苦勞遊ばして下された御履歴を伺ひ、自分の心に比べて見ると一つとして天理に叶ふものがない。

私の様な者が知らず／＼通つて来た者が此の話を伺はずに此の佞罪の上塗りをして死んであつたが有難いことだと思ひ、又此の道は実行の道であると聞かせて戴き、実行ができねば此んな申訳のないことはないと思ひまして段々自分の心を調べさせて戴きまして居ると御話を聞いて居る中に頭も快くなり又胸の中も今迄は滋養物計り食べて参りましたけれども何の利益もありませんでしたが貴女の心に素直がないからだと聞かせられまして「自分達は其んなことを云つても其んなことをするものか」

と云ふ様な心で通つて来たのは申訳がないと御詫びをさして戴きました。全く此の道を知らして戴かねば心得違で通つて通つて行くのだが此の上神様に御苦勞をかけて居住ひばかりして居ては申訳がないと思ひまして、

誠に自分ながら愛素がつきた。人様を怨んで申訳がなかつた
と御詫びをしたら何時直るか知らぬスツカリ直つてしまひました。

又御教祖様の人を助ける迄に御徳の高い方であるのに様々の御苦勞を遊ばしたのに何うして我々は心に罪を造つて来て通るに通れん所を通らして戴いたのかと思ひ、又十柱の神が教祖様の身体に御宿り下さるも人間救済の爲めであること、天地開闢の大恩等考へさせて戴き、又教祖が世界助けの爲めに尽くして下されたことを考へさせて戴き、此の身上助けて貰つた計りではない、何んな者でも多少国家の爲めに勤めさせて戴かねばならぬと段々御話し聞かせて戴き又た

何うしても此の道の爲めに働かせて戴かねば何うしても安心と云ふ所はできん
と先生から聞かして戴き、

親もあり子もあり、夫もある故何うして尽さして戴かうか
と考へさせて戴きました——其の時は親は別居して居られました——身の内借物を実行させて戴くには死んで行つたことゝ覚悟させて戴きましたならば一時夫や子供に不憫を見せるかも知らないけれども教祖は玉の様な御子供が成人しても人様の子供助ける爲めに捧げられたのだが私は人様の爲めに上げるでなし、自分の因縁切らせて戴く爲めに教祖様の御足の跡を一足でも踏ませて戴いたなら子の代になつて天の助けを受けるであらうから目前計り可愛いと思ふても先きの子供が可哀相と自覚させて戴き、其れから夫に頼みました。

夫も其う云ふ訳ならばと承知して下さいまして教祖様の御話を取り次がして戴いて助けて戴きたいと覚悟した様な訳で御座います。

私の郷里は丹羽国船江郡東本梅村字赤倉、生れは笹山で御座います。嫁ぎました先きが中川で御座います。

其れから私も彼地の方此方の方に御話すると非常に助かつて戴きました。赤倉と申しますところに六年位働かして戴き其処の教会の閉会式が済みますと東京へ参りました次第で御座りまして、人様から聞きますと東京へ出て大層苦勞をした様に申されますけれども其うじや御座いません。東京へ出させて戴きましてからは自分の背中に負つた子供と自分の身体丈けであるから少しも苦勞は致しません。大教会の会長様へ

東京へやつて戴きたい
と願ふと

お前は女であるけれども熱心であるから行かうと思ふなら行つて見るが良い。今迄東京へ行つたものはお金を使つた計りで歸つて来たが東京へ行くなら死に行け。死んだら骨を拾つてやるから

と云はれて其の御言葉が身に染み
これは教会の爲めにさせて戴くのでない。自分の因縁を果させて戴くのに死ねば骨を拾つてやるとは有難いこと

と思ひまして、其の頃は夫は筑前筑後の方に南分教会長様の御供をさして戴いて行つて居て留守で御座いましたから一人の子供は親に頼み一人は大教会に一人は背中に負つて布教会に出させて戴きました。私は何処に何んな処でも神様の御用をさして戴けば良い。教会を建てやうか安心して通らうかと云ふ心は少しも御座いません。元より教祖が非常に御苦勞遊ばし一日でも安心はなかつたのに我々如き者が神様の御用をさせて戴けば結構と思ひましたのに、夫は彼方此方へ布教をさせて戴いて居りますし、考へさせて戴きますと、之れから何れ位の人が此のお道の爲めに働かせて戴くか知らん。今は夫も妻もチリ／＼バラ／＼になつても良いと云ふ程に夫も覚悟して居りましたのに私が此の佞居坐つて居ては彼処の内は天理教／＼と云つて居たが夫が死に家内が死んでは何処に何うなつたか訳らぬと云はれては誠の人の妨げとなる。其れでは申訳がないと思ひ、自分は自分夫は夫と銘々に

布教させて戴かうと決心して東京へ参りました。

東京へ参りましてからは自分一人ですから夫はなからうが親はなからうが何んとも思ひません御座いました。

夫れ迄も布教に使はして戴きましたから僅かありましたものは皆な失くして了ひましたし——元より幾らもないので御座いますが——親があつても親はお金を預けたら東京へ行くと思ひまして一錢の小使でも呉れませぬ。其の時大教会の会長様が十円錢別として下さいました。

元より親がなからうが親戚がなからうが覚悟の上で御座いますから親がお前の様な者が東京へ出たら何うすることも出来ないやうにならう。其れでも十年も経つたら裏店住ひ位はできるやうになるかも知らんかと申されませぬので

私は飲食の為めに行くのではない。安心を頼らうと思つて行くのでない。安心を目的として行く位なら夫に稼いで戴けば飲食位は出来ないことはありません。私の東京へやらして戴くのは神様の御用をさして戴く為めでありませぬ。

と申した様な訳で元より覚悟の上で参りましたから少しも苦しいとは思ひませんでした。内を出る時は何も御座いませぬでしたから随分其の時は困りましたが其れでもチヨツとも困ると思はず子供に強請れたり、親や兄弟の反対の中に苦しんで居るのに東京へ来ては反対者が無いので唯嬉しくつて／＼何も食べるものがないのに後から何か明るい者が追つて来る様で嬉しくつて／＼耐らぬのは神様の御蔭と思ひました。

今牛込の大久保余丁町で六十番地に本保支教会が御座いますが其処の佐津川亀太郎と云ふ人が本所の横網二丁目に爪革の製造販売の間屋をして居りましたが不思議の所から匂ひが掛り、其処の子供衆の頭に瘡が出来たのに結構なお守護を戴いたといふことから此方へ来なされたら寝泊りをして呉れと云はれませぬし、其の次では府下で南葛飾の大畑を歩いて居る中に一寸行く先きがないので其処の茶屋に腰を掛けさせて戴き小供に菓子を買つて食べさせましたが出る時手荷物や紙入を忘れて出て行き、後から呼び戻して下されたから戻りますと其処へ医者へ行つて来たといつて脊髄で足の立たないという子——其れは五つであつたか七つであつたか——を連れておかみさんが休んで居るから何うか助けさせて戴きたいと云ふと

貴女は何んですか？

天理教で御座います。御話一條で痛い思もしないで聞いて戴きさへすればよろしう御座います。

と申しますと

其んなら内へ来て戴きたい

と申しますから其の人の宅へ伺つて段々御話をさせて戴きました処三日目に一寸も足の立たぬ方が下駄をはいて歩く様になりました。

向ふへ行きますと向ふのおかみさんがひつくりかへつて喜んだ。其処の内では幾ら包で下されたか知りませぬが幾らか包んで出しまして

今迄お医者様にかゝつたけれども直らぬのに直して頂いて有難い。これで何うか下駄でも一足買つて下さい

と云つて出しましたが

私は御礼の為めではありませんから何うか私に志を供へて下さるなら之れで御茶菓子でも買つて近所の人を呼んで小供の助かつたことを皆様へ何うか伝へて戴きたい

と申しました処、其れでは

其うしませうから明日御苦労して頂きたい

と申しますから翌日参りますと藁寿司ごもく寿司を拵らへ近所の人を集めて

「皆様娘のことを色々心配して頂きましたが此の度上方より神様より豪氣の方が御いで下され助けて頂きました」

と泣き／＼申されました。すると彼方からも此方からも彼処が悪い此処が痛いと云はれる人があつて俄かに其処に忙がしくなつて遂に只今では大品宣教所となつて居る其処の家へ寝泊りする様になり、其うなると彼方へも此方へも助けて呉れと云ふ人ができて宿に不自由はなくなりました。

其の中に外手町の四十番地に本保様も色々御心配下され、六畳と四畳半其れに台所のついた家を借りたのが此の教会の始まりで御座います——只今は教祖様を御祭りして居る処が其れで御座います。漸く翌くる年二月の二十日に高い所を持たして頂きました。一生懸命で御座いましたから随分方々で助かつて頂きました。

七月の十六日かに大教会の会長様がフツト御訪ね下さいましたが、近所の腰抜けになつて居る人の所へ行つて居ますと四十番地に中川と云ふ者がいないかと御尋ねなされるのを見ると会長様ではないかと思ひ出て見ると平常からなつかしく御慕ひ申してる会長様なので嬉

しくつて／＼飛んで出ると会長様は人の噂に依ると中川は立派にやつて居ると聞いて居たが実地を見なければ訳からないから何うして居るかと思つて出て来た。と申されますので何んとも彼とも嬉しくつて早速役員方へ手紙をやると佐津川さんも涙一杯ためて居るから妻君が尋ねると会長様はかねて大教会の会長様を慕はれて居たが今日は御出で下されたと思つて手紙を寄来された。さぞ会長様が喜んで泣いて居られるだらうと思つてと早速役員方へ車で迎にやつて戴くと早速皆様が来て下さいましたから大教会の会長様が今迄何うして居るかと思つて来て下されたと思つてと申しますと皆様が何が有難いか夢中になつて頭をすりつけました。其処で帳面を出して御覧に入ると会長様はこれだけの實力になつて居るなら早速教会の手届をしたら良からう。此うして居ては看板なしに商売する様なものだ。看板を受けると思つて認可を受けるが良からうとの御話で其れから早速手続して東京へ出ました。翌年の十月の一日に認可になりました。

其れですから其の時は役員方が寄るとたかると教理の研究で夜明しで御座いました。其の頃は役員方は私が年頃の人だからもし平日に来て何かの噂でも立てられると折角道の為めに此れだけの決心をもつて来て御出での方に御無理をかけては済まぬから用があるなら内へ出て来て下さい。といふ様な話で祭日でもなければ何方も出て来ません。来ると云へば三人五人づゝ一手になつて参りました。

其んな調子で御座いましたから始めの内は銘々勝手の話で御座いましたが段々神様の話になると夜明しすることが度々で御座いました。

三十二年か三年に出張所の引き直しになりました。私の三十三の時明治三十四年に此の教会を新築させて戴くことになりました。其れから二十年祭の年（明治三十九年）に支教会に直りました。其れから独立祭に分教会と直り、其れ切り居座りになつて居りますが今では年々五千六千戸計り殖えて居りますが其の半分位の正味としても今日では信徒の数も二万戸になつて居ります。

毎日お助けに出るのが九十人位居るので御座います。其れで今日は御蔭様で毎晩には御祭日で御座いませんでも此の会堂は一杯になるので御座います。

マア神様の御恵み又大教会長様の御恵みに依り此んな者まで御勤めさして戴きまして日々有難いと思つて居ります。何うぞ行き届きませんでも神様の御奉公をさせて戴きたいと思ひ、せめて御教祖様の万分の一の足跡でも踏ませて戴きたいと思つて居りますけれども其の一も通らして戴けぬのを日々御詫をさして戴いて居ります。（文責在記者）

天啓の声

R O 生

谷底に落ち切れ。其処から本道が見えて来る。

これは教祖中山ミキ子が宇宙の根本實在の神靈に感応して以来第一に受けた天啓の声であるが此の言葉の内容は同一であつても其の形式は人に依つて其れ／＼違つて居る。或る人は

「今より貧のドン底に落ち切れ、其の上には珍らしい世界の救けをさす」

とも云ひ、或る人は単に

「世界助けの為め谷底に落ち切れ」

とも云つてゐる。

其の言葉の形式は何うであるにもせよ、此の言葉を第一に教祖に降した神意は世界には因縁の為めとは云へ、難儀な道、苦勞の道、不自由な道を通つて居る者が沢山ある。其等の人々に眞の足納をさして各自の因縁を切らせ、結構なる道へ導くには、教の親の親たる者より難儀不自由の道を通つて置かぬことには眞の足納の心をもつて日々勇んで通らずといふことはできない、又た其ういふ幾重の困難の道を実際通つた人でなければ弱者、劣者、不具者、貧者、病人に対する同情の念を味ふことができない。

以上は谷底生活の客観的価値であるが之れを主観的価値より論ずれば世には精神的乃至物質的に様々の不幸者がある。其れを救済する当人が利欲にからまれて慈善を行へ得ぬ様では其の精神が既に濟世救人の価値がないのである。此の二重の意味より第一に此の天啓の声が教祖の上に降つたのである。後に教祖が人に向つて

「難儀をせよ、難儀をせよ。難儀の底に落つるでなくば神の意を知ることができぬ」と云つたのは自分自身が直接経験した谷底生活の深刻なる告白と見て差支へない。

此の道は難儀の仕勝ち、不自由の仕勝ち、

天理教を信仰して金持ちにならうの、高位高官に昇らうの、世間的に成切しやうのと思つたら間違ひである。此の天啓の声は明治三十七八年の頃の御言葉であるが此処に難儀の仕勝ち不自由の仕勝ちと云つたのは其う云ふ利己的方面の難儀不自由をさして云つたのではない、又た各人の因縁より来る難儀不自由をさして云つたのでもない。其んな名利や名利の生んだ悪因縁の理に依つて何んな難儀や不自由をしやうと其れは自業自得であつて何の功勞にも功德にもならないのである。

神の為め、道の為め、世の為め、人の為めに我を忘れて難儀を難儀と思はず不自由を不自由と思はず誠一つの心をもつて何処までも純日の寄進的相互扶助的生活を人よりもより多く行ひ得たものが勝利者である。此の意味を間違ひて難儀不自由さへすれば良いと云ふ様な貧苦をもつて人生の理想としたストイク派とは全然違ふのである。言葉は勿論違ふが此れと同一の意味のことを基督も其の十人の弟子に向つて云つて居る。

「異邦の領主は其の民を主り、大人どもは彼等の上に權を操る。これ汝等が知るところなり。されど汝等の中にては然すべからず。汝等のうち大ならんと欲ふ者は汝等に使はるゝ者となるべし。又た汝等のうち首たらんと欲ふ者は汝者の僕となるべし。此の如く人の子の来るも人を役ふ為めにはあらず反つて人に役はれ、多くの人に代つて生命を予へ、其の贖とならんが為めなり」と。蓋し其の意味に於て同一である。

心の往還路、形の小路

これと同じ意味の言葉を基督も云つて居る、曰く「窄き門より入れよ沈淪に至る路は濶く、其の門は大なり。此れより入る者多し。命に至る路は窄く、其の門より小し。其の路を得るもの少なり」と。

我俥勝手の道を通つて行つたならば一時は其れで良いやうなものゝ理がまわつて来たら終には神にも人にも捨てられて誰一人相手にするものもなく従つて難儀不自由をしなければならぬ様になる。之れに反して形の上では難儀不自由に見えても神の為め、道の為め、世の為め、人の為めに働いて居る人間は何時も青天白日の下にある様な氣持で日々通ることが出来る。其れで心の往還路形の小路と天啓されたのである。

「樂は一代先きを心懸けよ」

「樂すると思ふ心は違ふでな苦抜けて眞の樂」

此等並に之れに類せる天啓の言葉は沢山あるが何れも以上掲げた二つの天啓の声と姉妹の關係を有するのである。

敵を敵にして呉れな。味方を味方にして呉れな

世の中は敵千人味方千人と云つて敵もあれば味方もある。けれども一時の利害より云つて敵と思つたものが必ずしも敵ではなく、又味方だと思つたものが味方でないことがある。

昔から

良樂は口に苦し、忠言耳に逆ふ

と云つて居る通り眞に自分の為めを思つて色々心配して呉れる人が煙たく思ひ、之れに反して人の機嫌を迎へる様な無責任の甘い言を云つて来る者は詐と知りつゝ好い感を与へるのが人間の弱点である。

此の弱点を超越して眞に永遠の利益永遠の幸福を基礎として世の中を見たならば其処に始めて反対者も却つて自己を磨く砥石となるのである。従つて此の御言葉は永遠の幸福と精神の修養に志す人の見逃がすべからざる金言である。

往還路で怪我せぬよふ

人間は解つた様で解らぬ者である。これを道で云へば道に入つて長年を閲し、教理の上には殆んど通じない所はないと人も許し我も許して居る人々でも自分の思ひ違ひ考へ違ひの為めトンダ道に外れたことを仕兼ねないものでもない。其れで道を歩くには念にも念を

入れて歩かなければならぬ。其れでなければ欲と云ふ敷石高慢といふ並木に衝き当つて飛んだ怪我をすることがある。

世に立つて人の誉は神が望む

凡て世に我が子の立身出世を喜ばない親はない。天の親様とて同じ事である。彼の人は真に感心な人だ、偉いものだと社会から賞讃せられる者があつたら目にこそ見えない神の喜びは何の様であらう。畢竟天爵と云つても人爵と云つても其の極致に至れば差別ないのである。但し此処に注意して置かねばならぬことは何んな不正の手段を用ゐても立身出世をし高位高官を得れば神が喜ぶかと云ふに其は其うでない。唯正当の報酬を仕払ふて立身出世をしたものを見て人も感心し神も喜ぶのである。

理が理に治まれば火の中、水の中いかなる処も云はん。神が働らく

本当の天理教信者になると随分不思議な御守護を頂く人が多い。例へば隣家が火事になつて焼ける。其れと軒を並べて居て不思議に助かつたとか、洪水にあつて人は倉を流し家を流しても天理教信者に限つて塵一葉も失はないとか、人は凶作で苦んでゐると云ふに天理教信者に限つて充分の収穫があつたとか不思議は枚挙するに遑まない。其れが即ち理の報酬と云ふものである。其れで「理が理に治まれば火の中、水の中いかなる処とも云はん。神が働く」と仰せられたのである。

聖壇に立ちて

大 平 良 平

私も今年は三十歳になつた。——三十歳は而立の年齢である——而かも社会的事業に対しては全くの処女である。実は私も最つと早く社会に出で活動したかつた。けれども実力と生長が許して呉れなかつたから仕方がない。——凡ては実力と生長とにある。赤児の生るゝや第一に其の呱呱の声を挙げて其の誕生を宣言する。其は彼が此の世の光を見た歓喜の叫びであると共に父母に対する自己紹介である。釈尊の生るゝや三千大千世界に向つて獅子吼して曰く
天上天下唯我独尊三界皆苦我今之れを救はん
と。私は元より救世主にあらず予言者にあらず、唯精神的生命の為めには一切を賭して顧みざる真理の熱愛者である。此の一篇は元より私の信仰の一端である。而して私は之れを世の為めに書いたのではない。自分自身の為めに書いた懺悔報謝の記録である。

一、

私は明治十九年の四年八月釈尊と日を同うして北国の山村に生れた。此の偶然の一致は早くも幼き私の胸に将来必ずや世界の大神者たらんとする一大信念の種子を布植した。釈尊は実に当時私の理想の人物であつたのである。明治四十一年の春私が未だ早稲田大学の寄宿舎にあつた時私は自己の永遠の行路を暗示せられた一大不可思議の神夢を経験した。当時私の胸中に去来した問題は——に救世の一事に懸つて居た。私が連日連夜の間断なき思索と冥想とに疲労し果てゝ——当時の私は身心共に憐むべく衰弱の極に達してゐた——交睫の夢に入つた一夜私は白衣を纏ふた慈顔白髪の一人の老神に依つて忽然全知全能の神の御前に導かれた。全能の神の左右には十四五才の二人の神童が燭を守つて侍してゐた。神の周囲は光明燦爛として仰ぎ見ることができなかつた。私は思はず全能の神の御前に跪いて何時の間にも何処から持つて来たか手に持つて居た蠟燭を神前に捧げて「全人類の為めに神の御前に捧ぐ」と云ひながら神童の手に亘さうとした。全能の神は其れを受けやうともせず非常に御不興の御容子で「何故汝は其れを汝自身の為めに捧げないのだ……」「悪い奴だ。我は汝に世界を与へて置いた。今汝から取る……」

大神の叱咤は恰も強い電流に打たれたかの如く私の全身を麻痺せしめた。
私は罪人が死刑の宣告を受けた時の如く、不正の官吏が上官の懲罰を受けた時の如く強直と興奮とをもつて此の聖断を拝聴した。私の胸は恰かも掌中の玉を奪はれた時の如く悲をもつて一杯であつた。私は何んと返答し奉るべきかを知らず茫然と自失して立つてゐた。と私を導いて行かれた神——全能の神を權威の権化とすれば私を導いた神は正さに愛の化身であつた——が私の為めに私に代つて全能の神にむかひ、「未だ何分若年のことだから此の度は許してやつて戴きたい。」と種々懇願して下された。
全能の神は其れを容れられて、「然らば此の度は許すによつて今一度出直して参れ。だがな唯一つ汝にとるべきことがある。其れは女子を弄ばないといふことである。」
私は変なことを宣はれると思つたが神の言葉は正さしく事実であつた。事実私は未だ女史といふものを全然知らなかつた。今も尚一人の妻なる女子より外知らない。恐らく未来に於ても亦其うであらう。
私は私を導いて下された神の言葉に依つて保釈せられて全能の神の御前を下つた——と忽然夢から醒めた。私の全身にはビツシヨリ冷汗を浴びて居た。
私は先天的に一種敬虔なる宗教心を有し、屢々宗教的經驗に接したが未だ曾つてかくの如き嚴肅なる宗教的事実に接したことはなかつた。
暫時の間私は自己の存在を忘却してゐたが次第／＼に自意識の復活するにつれてやがて其の中より確實なる自己の本道を発見したやうに思はれた。
「古の学者は己の為めにし、今の学者は人の為めにす」——孔子
支那の聖人は既に三千年の昔に於て修養の正路を発見してゐる。
世界の統治は神の権能に属す。人間第一の義務は自治独立——私の宗教は自治独立宗である——にある。自治独立は神より与へられたる人間の特権である。
私は何よりも先づ自分自身の為めに理性の光明を発揮しなければならなかつた。吾等人類が神前に供ふべき眞の燈明は唯之れのみ。

二、

之れより先き私は次の如き夢を見たことがある。
其れは私の故郷であつた。私が家の前に立つて居ると世界——地球——が弾丸の如く西に向つて急転しつゝ突進して来た。其れが私の家の前に来ると私は私と世界との相互引力に依つて恰かも磁石に引き寄せらるゝ鉄粉の如く軽々と引き寄せられた。世界は私を載せ私は世界を馭して村外れまで行くと思はれる頃二個の電気が相反発するが如く軽く反発して私は世界を捨て世界は私を捨てゝ無限より無限の空間に向つて回転しつゝ消え失せた。——此の夢の世界の帝王は正さしく私であつた。
私は之れと神夢とを連想して其処に自己の運命の神秘を感じた。

三、

「汝ユダヤ人と称へ、律法を恃み神あるを誇り、其の旨を知り、律法に習つて是非を弁へ、暗愚に居る者の光、愚かなる者の師、童蒙の伝と思ひ、又た律法に於て真理と知るべきことの式を得たりとせば何故人を教へて自己を教へざるか、汝人に窃む勿れと勧めて自ら窃むか。汝人に姦淫する勿れと諭して自ら姦淫するか。汝偶像を悪みて自ら殿の物を犯すか。汝律法に誇つて自ら律法を犯し、神を軽しむるか。神の名は汝によつて異邦人の人に謗■されたりと録されしが如し」——ポーロ
世には往々他人の畑に鋤を入れながら自己の畑を耕すことを閑却して居るものがある。私は此の種の賢明なる愚人を屢々第一流の思想家の間にさへ発見するのである。
凡そ思想家の生活には二面の価値を有す世の所謂思想家は其の客観的価値を偏重して屢々其の主観的価値を閑却してゐる。
客間を清掃して居間を清掃せざることは少くとも私の主義ではない。居間と共に客間を清掃せんことこそ今日私の奉仕しつゝあるところの主義である。
私が多少なりとも此の種の「賢明なる愚人」たり「不謹慎なる流神家」たり「瞽者の手引する瞽者」たり「不養生の医者」たることを免かれたりとせば其は全く神の聖訓の力に其因するのである。

四、

凡て自ら持たざるものは与へることを得ず自ら集めざるものは散ずることを得ない。未だ自ら学ばずしていかで他人を救ひ得るものぞ。修身齋家は即ち治平天下の基礎である。「人を議すること勿れ。恐くは汝等も亦議せられん。汝等が人を議する如く己も議せらるべし。汝等が人を量る如く己も量らるべし。汝兄弟の目にある物屑を見て己が目にある梁木を知らざるは何ぞや。己の目に梁木のあるに如何で兄弟にむかひて汝が目にある物屑を我に取らせよと曰ふことを得んや。偽善者よ先づ己の目より梁木をとれ。然ば兄弟の目より物屑を取り得るやう明かに見ゆべし」

——基督

世界改造の第一歩は自己改造にある、世界救済の第一歩は自己救済にある。

私は未だ「盲者の手引」と「跛者の車力」と「啞者の通弁」と「貧者の施与」と「愚人の教化」と「弱者の救済」とを知らない。

古来「人生の大医王」たり「世界の救済主」たり、「社会の革命家」たり「人類の教育家」たりし東西古今の聖人君子は凡て皆「自己の医者」たり「自己救済者」たり「自己革命家」たり「自己教育家」たらざるものはない。「世界の改造」と「社会の革命」とは個人我の独立を待つて後始めて行はるべき自己拡張の道である。

私の第一の目的は理想の人間たることである。私の第二の目的は理想の家庭を造ることである。私の第三の目的は理想の世界を造ることである。私は常に此の目的に向つて歩み、未だ曾て最初の目的を捨てたことがない。

五、

凡そ大なる精神と大なる物質とは私有の性質を脱して公共の有に入るべきものである。学者と富豪とは精神上乃至物質上に於て大なる特権を神より賦与せられている。其は即ち善事——人類的事業——をなすの特権である。

善良なる学者と善良なる富豪とは其の特権を利用して社会に善事をなすつゝある。然るに不良なる学者と貪婪なる富豪とは其の特権を乱用して却つて大なる害毒を社会に流しつゝある。

私はいふ。

「盲目なる学者と貪婪なる富豪とは天下のバチルスである」

と。

世人は恐るべきものを恐れずして却つて恐るべからざるものを恐れてゐる。危険は伝染病ではない、天下に瀰漫せる危険なる思想と暴力とである。

「唯善事（人類的事業）をなせ。善事をなし得ずんば悪事（非人類的事業）をなす勿れ。」

之れが今日迄私の奉仕して来たところの主義である。

私が幼稚なる思想と未熟なる信仰とを社会に発表することを急がなかつたのは此の主義の為めである。

六、

凡そ人生に与へる利害の大なること精神的事業より大なるはない。別けて時代思潮の趨勢に干与するものは其の社会に与へる感化の大なると共に其の責任も亦従つて重大である。就中其の最も重大なる責任を有するものは宗教家である。

彼は単に眼の人であつてはならぬ。彼は単に耳の人であつてはならぬ。彼は単に心の人であつてはならぬ。彼は単に筆の人であつてはならぬ。彼は単に口の人であつてはならぬ。彼は単に手の人であつてはならぬ。彼は単に足の人であつてはならぬ。宜しく身をもつて社会の柱たり、身をもつて天下を化する大典型たる覚悟がなければならぬ。彼は人生の無限の向上力でなければならぬ。彼は社会の不断の進化力でなければならぬ。之れやがて自他に忠なる所以である。苟も人生を退化せしめ、社会を墮落せしむる有害無益の宗教家は既に社会に存在の権利を自失したのである。

基督曰く

「汝等（宗教家）は地の塩なり塩もし其の味を失はゞ何をもつてか故の味に復さん。後は用なし、外に棄てられて人に踏まるゝのみ。汝等は世の光なり。山の上に建てられたる城は隠るゝことを得ず、灯を燃して斗の下に置くものなし。燭台に置いて家に在る凡ての物を照さん。かくの如く人々の前に汝等の光を輝かせ、然らば人々汝等の善行を見て天に在す汝等の父を榮むべし」

凡そ人間の中の中の間人わけて精神家中の精神家は宗教家である。彼は人天の導師であり、神の代表者である。其の生命は人格の崇高偉大にある。其の天職は人類の精神的教化にある。

然るに墮落したりや近代の宗教家は、彼等は人格修養の大道場——宗教——に住しながら哲学の前に跪き芸術の前に跪き、科学の前に跪き政治の前に跪き、実業の前に跪きアマツさへ凡俗の衆愚の前に跪いて彼等の食ひ残したる残飯を食ひ、人間救済の大使命を帯びながら却つて他人の恩恵に縋りつゝある偶像崇拜家たらざるはない。

此の宗教界の墮落を救ふべく天理教は現はれ、此等墮落せる宗教家に代るべく天理教の使徒は遣はされたのである。

七、

「春になれば何う。秋になれば何う。此の心スツキリ要らん。草の中でも埃の中でもかまはん。トント一つの心定め（信仰）」——天啓の声

凡て智識は得易く信仰は得難い。其れを得るには全身の努力を要するのである。

美伎子曰く

「今一時の事に運んで六ヶ敷いといふこと何もない。六ヶ敷いといふのは真の治定（自治）じや、真の信仰（独立）じや」

と。

安価なる信仰は生の回避であり、墮落であり、滅亡である。

私が今日迄苦悶の中に悲惨の時を消費しなければならなかつたのは寧ろ智識欲（客観性）の満足され難きにあらざりて真に信仰欲（主観性）の充実され難きためであつた。

「翼の未だ調はざる鳥は飛ぶこと能はず」

之れは謀叛人由井正雪の言葉である。

儒者曰く、

「信なければ立たず」

と。

もし釈迦にして、もし基督にして、もし美伎子にして未だ精神上の真の独立を得ざるに先だつて救世の事業を急いだならば彼等は必ずや精神的事業の失敗者たる運命を免かれなかつたであらう。

凡そ事をなすには其の時がある。

「早い早い立たん。遅いが遅いに立たん。じつくりしばらくじつとじつめてあるが理といふ」

—

——天啓の声

私が早稲田を出たのは明治四十二年の夏であつた。私の同窓は何れも籠より放たれたる小鳥の如く嬉々として広い世界に飛び去つた。而かも私が一人神の翼の下に止まらなければならなかつたのは未だ社会に立つて公人として活動し得る程の自信ができなかつたからである。（何人も自信なくして精神的事業を完成することはできない）

恐らく私は最も晩熟の種子に属してゐたのであらう。私の外皮は固かつた。其れを破つて全く新芽を吹き出すには少くとも尚ほ五ヶ年の時日と他人の百倍の努力とを要したのである。

此の間私は絶えず郷党の嘲罵と無理解なる家人の怨嗟と督促とを聞いた。而かも尚ほ進んで物質的独立を計らなかつたのは何よりも先づ精神的独立の急務を感じたからである。

八、

凡て人は食はんが為め、衣んが為め、住まんが為めに生きてゐるのではない。生きるが為めに食ひ生きるが為めに衣、生きるが為めに住むのである。之れ生の意義である。

凡て人は物質に富まんが為めに生くるのではない。精神に富まんが為めに生くるのである。之れ生の価値である。

然るに俗人は常に精神的労働（第一義的労働）をもつて不生産的労働とし、精神的労働者をもつて不生産的人物視し、物質的享樂以外に至純至粹の精神的享樂の存在を知らないである。

凡そ生あれば即ち食あり。食は肉体と共に神が生産的労働（人類的労働）をなさしめんが為めに人間に貸したるものである。従つて精神的労働に従事するものは物質的飢渴を恐れてはならない。又た肉体の逸樂を求めてはならない。

美伎子曰く

「難儀をせよ。難儀をせよ。難儀の底に落つるでなくば神の心を知ることができぬ」と。又曰く

「身体は神の貸物じや。水を呑んでも死ぬことあるまい」

又曰く

「私は道で生きてるぜ。不浄の弁当では生きぬぜ」

と、私は盗泉の水に依つて此の聖職を洗さうとは思はない。従つて私は当然の覚悟として餓死を予期してゐる。(其れは神が私を不用になつた時である) もし神の無限の愛と両親の深厚なる慈とが私を蔽はなかつたならば私は当然の餓死を免かれなかつたであらう。

九、

私が肉身の父母に受けたる大恩は実に広大無辺である。けれども人は母乳と飯のみにて育つものではない。更らに渴せざるの水と飢えざるの飯とが最も必要である。私は更らに大なる養育の大恩を神と精神界の諸先輩とに負ふてゐるのである。

凡て未知の世界に旅行するに当つて最も良き旅行案内者は其の世界を踏査せる経験を有せる大先達者である。私が天国(幸福界)の旅行に於て大恩を受けたる此の道の先輩は釈迦と基督と美伎子とであつた。就中美伎子は私をして信仰の結論に導いた最大の恩人である。

凡そ有史以来未だ釈迦——釈迦は私の智育者であつた——より大なる智能(智)的大神格者は起らなかつた。彼は世界の産出した最大哲人である。

凡て有史以来未だ基督——基督は私の情育者であつた——より大なる本能(情)的大神格者は起らなかつた。彼は世界の産出した最大詩人である。

凡て有史以来未だ美伎子——美伎子は私の意育者であつた——より大なる活能(意)的大神格者は起らなかつた。彼女は世界の産出した最大宗教家である。

此の三大聖人は其れ／＼違つた意味の印象と感化とを私に与へた。即ち釈迦は其の明智に於て私を広くした。基督は其の深情に於て私を深くした。美伎子は其の強意に於て私を強くした。此の三者(私は美伎子を母と呼び、釈迦を伯父と呼び、基督を叔父と呼ぶのである)は私の精神的生命の生長の上に未来永劫忘るべからざる三大恩人である。(つゞく)

編集室より

私が大体の編集を終へた時私に雑誌発行の企てがあるといふことについて大教会(山名)より懇篤なる注意を与へられた。其の注意と云ふのは今迄道の雑誌を出した人も一二あつたけれども尽く失敗に歸して了つた。實際かゝる事業は大なる資本と大なる実力とを有しなればできないことである。其れに道の友と云ふ天理教の機関雑誌もあり、其の他のものは寧ろ蛇足に属すると思ふから中止したら良からうといふ意味であつた。

私は之れに類する注意を他からも与へられた。元より私には大なる資本もなければ大なる実力もない。又た大なる後援もない。唯私の資本と云つては誠一つがあるのみ、私の実力と云つては誠一つがあるのみ、私の後援と云つては誠一つがあるのみである。而かも貧弱なる誠が。けれども此の雑誌を出すについての最初の目的は此の貧弱なる誠の全部を施すことによつて唯一人の信者を作ることを得ば私の目的は既に達せられるのである。従つて雑誌の成ると成らざるとは元より天に一任して置いたのである。

次に大教会では道の友と云ふ機関雑誌もあり他は寧ろ蛇足に属する感があると云はれたが其れは或は其うかも知れない。けれども私には発表を主とするよりも研究を主とする雑誌、布教を主とするよりも修養を主とする雑誌、内を相手とするよりも外(未信者)を相手とする雑誌が欲しかつた。従つて道の友の存在とは何等の抵触はないのである。

其れから天理教は話一條の道であるから印刷物は余り歓迎せられぬ傾向があると云ふ意味のことを云はれてあつたが其れは道も発達せず真理の発表機関も不具であつた当時のこととて将来世界の学者が寄つてたかつて此宝の山を発掘する時代のことではないのである。

私の卑見を述べれば将来の天理教は単に目のみならず五輪五体に具つた凡ての発表機関を通じて世界に宣伝せられねばならぬと思ふ。其れには個人伝道の必要なるのみならず又た公衆伝道の必要を切に感ずるのである、否寧ろ今日天理教に於て最も遅れて居るのは此の方面である。これ私が微力を尽して聊か此の方面に向つて働かして戴きたいと思ふ所以である。

以上は大教会に対する大体の御答であるが折角好意の御注意を容れないで親不孝の様ではあるが何卒悪しからず思召して戴きたい。

(以上大教会へ)

此の雑誌は営利が目的でない研究が目的である。従つて断片的事実の羅列よりも極真面目なる生きた真理の研究を主とするのである。従つて一つの問題研究の為に一号を費すことはあるかも知らない。本誌の目的は生命（真生）を熱愛する唯一人の真面目なる読者（願くは信者）を作りたいのである。不真面目なる読者を求めない。従つて思想と真理と生命とを熱愛する人は何人にも喜んで歓迎するのである。本誌の目的について云ひたいことは唯其れ丈けである。

.

序 論

近代科学の進歩は地球の発達並に人類の起源に関しては不完全ながら一個の体系を有せる学理を立つるに至つた。元より今日の科学の力をもつては正確なる地球の年齢（或る学者は七十万年と云ひ、或る学者は九千五百万年と云ひ、或る学者は二億年と云ひ、或る学者は六億年と云ひ、或る学者は六十億万年と云つて居る。けれども其の何れも正確なる計算でないことは云ふまでもない）及び其の歴史を違算なく説明する特権を与へられては居ない。これは人類の起源並に其の発達の歴史に関しても亦同一である。

けれども今日の学者中地球の父母が太陽であつたことと人類の祖先が微生物であつたこととを疑ふ者は何人もないであらう。これは既に今日世界の学者の定論である。而して此の定論を顛伏し得る新発見は科学界にも宗教界にも乃至哲学界にも一つとして生れないのである。

然るに神の天地創造と人類創造とを説いて其の発達の過程を説かなかつた従来の宗教は其の説明の不備よりして此の自明の科学上の真理を容るゝの余裕がなかつた。為めに宗教と科学とは長い間此の問題を中心として葛藤を続けて来た。けれども従来の宗教の力をもつてしては此の科学上の真理を明かに否定するの能力がなかつた為めに科学派の人々は既に科学が宗教を征服したと信じて居る。けれどもこれは科学派の人々の早計である。

由来宗教と科学とは先天的に各々其の世界と其の出発点とを異にして居る。即ち一は無象界の開拓に従事し、他は有象界の研究に従事して居る。一は内より向つて進まんとし、他は外より内に向つて進まんとして居る。一は原因より見、他は結果より見る。其の間一致すべくして一致しないのはまだ各々自己の使命に徹底して居ないからである。

従つて科学が一步進んで宗教上の真理（神の天地創造人間創造）を根本的に否定するか或は宗教が一步進んで科学上の真理（地球並びに人類の自生的進化論）を根本的に否定するかにあらざれば宗教の勝利とも科学の勝利とも断言することはできないのである。此の宗教と科学の間に長い間続いて来た矛盾葛藤を円満に解決したものが天理教である。

天理教では其の根底に於て神の創世説と神の人類創造説とを主張すると共に他の一方に於て科学上の進化説を捨てない。但し科学上の進化説と異なる点は科学は自然の発達に帰し天理教は神力の守護に帰するのである（これ天理教が従来の宗教と全然其の面目を異にせる最も進歩せる理想的新宗教たる所以である。）。

「サア、月日（神）あつて此の世界（地球）、世界あつてそれ、（万物）あり、それ、あつて身の内（人類）あり、身の内あつて律（法律）がある。律があつても心の定め（信仰）之れが第一」

これは天理教祖中山ミキ子が臨終に迫つて其の弟子に向つて神樂勤めを要求したが弟子達は何れも官憲を憚つて教祖の言葉に応じなかつたから神と人と信仰と法律と何れか本にして何れが末であるか其の間に存する本末始終大小軽重の差を自覚せしめんが為めに偶然に発した言葉である。

けれども此の簡單なる言葉の中には世界の学者が協力して漸く完成した凡ゆる学理の結論が簡明に説き尽されて居る。

例へば月日の年齢は地球の年齢よりも古いと云ふことや、地球が太陽の分身であると云ふことは何れも今日の学説と一致して居ることである。又た地球の温度が冷却するに従つて隠花植物の如き下等植物アミーバの如き微生物が発生し、次第に地球の温度が漸次高等動物高等植物の生活に適するに至るや魚介鳥獣の如き高等動物、梅桜の如き高等植物顕花植物を生じ遂に人類の如き最高等動物が発生するに至つた。更らに人類生活の歴史的研究に徴しても野蕃未開の時代より法律期に入り更らに信仰期に向つて進歩しつゝ行く人間生活の自然の径路は何人もこれを否むことはできない。

元よりこれは天理教教理の断片に過ぎない。けれども此の断片的教理の研究に依つてすら天理教が如何に科学的宗教であるかといふ事実を証拠立てゝ居るのである。

一、神の人間創造の動機

天啓に依れば此の世の元始まりは泥の海、中に神と云ふは月日両神居るばかり。其処でお月様（男神。姿は頭一つ尾一つの大龍、始めて此の世界の国床——基礎——を見定め給ふた理をもつて国常立尊と云ふ。又始めて国を見定め給ひし理を以つて一名国見定之尊と云ふ。又た宿仕込む時上より衝く故に月と云ふ月様が先に立つ故に月日と云ふ。又た三十日を一月と云ふ。始めて此の世界を始めた神である故に此の世界の一つの神であつて常に

万物の上に注意を配り給ふ。分けて人間身の内にあつては目、胴、水気湿ひの御守護、世界では水——水は世界の一の神である——一切の御守護。仏教で云へば釈迦牟尼仏。人間の罪悪世界の悪気を清めんが為めに人間の姿に化して仏法を弘布せるも皆子供可愛い一條の為めである。かくの如く諸仏諸聖に先んじて世に出て法を始め給ふた理をもつて釈迦牟尼仏先生とも云ふ。方角は北子の方。（普通方角を呼ぶに子丑寅卯と呼ぶのは子は根であり国常立尊の座所であるからである。）凡て草木を始め万物の始めを根といふは此の世界は即ち国常立尊より始まつたからである。又た此の世界を此の世といふは夜は国常立尊の御支配し給ふ世界である。即ち夜即ち国常立尊が此の世界の元であるから其の理に依つて此の世といふ。又た此の世界を娑婆といふは娑婆とは釈迦といふことである。此の世界は釈迦即ち国常立尊が主宰し給ふ故に娑婆世界と云ふ）より
お日様（女神、姿は十二頭の大蛇、方角は南午の方、此の神は人間宿し込み給ふ後は日々身が重くなる故に此の理をもつて面足尊と云ふ。尾に三つの剣がある。此の理にて悪気の女を蛇剣——邪見——と云ふ。又た十二頭の頭が一時間又た一ヶ月又た一ケ年毎に代つて此の世界を守護し給ふ理をもつて一日を十二時に定め一年を十二月に定めた。十二支と云ふは此の神の十二頭の名であつて此の世界を取り巻いて一頭づゝ交代に守護し給ふ理をもつて十二支と云ふ。仏教にては三尊弥陀如来、又一名心澄んだる理をもつて勢至菩薩とも云ふ。大きく見える理をもつて寛大といふ。又た観音と云ふも同理である。人間身の内では温味の御守護、世界では火一切の御守護、国常立尊と並んで宇宙第一位の神である。此の月日両神が人間と万有との実の親生命の根源である。）に向つて相談するには「我々両神居たばかりでは世界中唯一人神と云ふて敬ふ者もなく、従つて何の樂もなき故今度人間と云ふ者を拵らへて其れに万づの守護を与へ、其の者共の陽氣遊山を見て樂まうじやないか」と、其処で両神の相談が一決した。何分始めて無い人間無い世界を造くことであるから神の苦心は想像に絶して居る。先づ人間を拵らへには道具雛型がなければならぬ。

二、人間創造、世界創造の道具雛型

其処で泥海中を見澄すと魚と巳（蛇）とか居る。其の中ゲイギヨ（又た人魚とも岐魚とも云ふ）と云ふ魚は顔は人間の顔、肌は人間の肌、鰓もなければ鱗もない。又た見澄せば巳（又た美）といふ白クツナ（白蛇）が居る。之れも顔は人間の顔、肌は人間の肌で鱗がない、二人共性質は正直且つ素直である。此の両者を引き寄せて月日両神の云ふには、「我々両神此の度人間を拵るに就ては道具雛型となる可きものが要る、汝等兩人を見るに心と云ひ姿と云ひ誠に人間種子苗代に適當して居る。依つて兩人が人間の種子苗代になつて呉れぬか。其の代り世界を拵らへ、人間を拵らへた上は汝等兩人を此の世の一の神と崇めさせ、人間よりは親神様と云ふて拜まますから」と厭がるものを無理に承諾させて人間の父親母親とした。今日伊勢の内宮外宮と称し奉るは此の両神であつて、天の川を隔て、顕はれる牽牛織星は即ち此の神の魂である。此の約束に依つて月日両神を除けば三千世界に並びなき皇国第一の神である。
前者の神名を伊弉諾命（鱗なき魚の意味、伊勢の内宮即ち天照皇大神宮は此の神）と称し、後者の神名を伊弉册命（鱗なき巳の意味、外宮即ち天照大神宮）と称し奉るのである。前者は男神にして人間身体では父親種の守護神、世界では種物一切の守護神、後者は女神にして人間身体では人間種苗代、女の雛型、世界では苗代一切の守護神。
次に泥海中を見澄ますと鱈が居る。此の者を引き寄せ食ふて其の味を見且つ其の心の勢を試して人間の魂とした。
次に泥海中を見澄ますと乾（西北）の方に鯨が居る。鯨は勢強く変にしやく張る者であるから骨突つ張りの守護神とし又男一つの道具に仕込んだ。男性の生殖器を一名勢の子と称するは此の理（力の子、勢の子の意味）によるのである。又た男子は宿仕込みの時に上より衝く故此の理に因て月読命と神名を授けたのである。仏教にては八幡大菩薩（蜂八万寄ると怖ろしき故に勢の猛烈なるを形容して八幡と云つた）とも聖徳大師ともいふ。天には破軍星として表はれ、人間身の内では骨突張りとし男一つの道具の守護神、世界では竹木一切突張りの守護神である。大工も此の神の守護。
次に見澄ますと巽（東南）の方に亀——赤亀——が居る。亀は皮強く且つ地に密着して踏ん張るにも強く倒れぬものであるから之れを以つて人間皮継ぎの道具雛型として又た女一つの道具に仕込んだ。依つて女子のことを一名おめ子（亀の子）とも云ふ。人間身体では皮継ぎの守護神、世界では金錢縁談愛情等一切継ぎの守護神、其の土色なるよりして神名を国狭土命と命名けた。天には源助星となつて表はれて居る。仏教で云へば普賢菩薩、達磨大師、弁財天縁結びの神、黄檗山の如き神と云ひ仏と云ふは皆此の神の守護である。
次に見澄すと東卯の方に鰻が居る。鰻は頭からも尾からも出入をする魚であるから人間

身の内では飲食出入の守護神とし、世界では水気上下の守護神とし、神名を雲読命と命名した。仏教で云へば文珠菩薩、龍王親王、薬師如来、水神、天に在つては暁明星、医者、薬、智恵、書物の守護神である。以上挙げたる国常立尊、面足尊、月読命、国狭土命、雲読命の五柱の神の御守護に依つて人間の肉体の根本要素なる水気味の調和、目、胴、湿ひ男女の生殖器、消化器、筋骨、皮膚の五輪五体が完成せられたから此の五柱の神を称して五輪五体と云ふ。

次に西南未申の方を見澄すと鰈が居る。鰈は身が薄きものである。身の薄きものは風を生ずるに便である。依つて此の者を人間身の内では息吹き分け、物言ひ分け物聞き分け、言葉語韻の道具雛型と使ひ、世界では風一切の守護神とし、神名を惶根命と命名した。世に所謂風神と云つて居るのは此の神である。仏教で云へば大日如来に円光大師は此の神の御守護、天に在つては坤集正星となつて顕れて居るのである。宗門にては禅宗。

天啓に従へば此の世界では火（面足尊）と水（国常立尊）とが一の神。火（面足命）水（国常立尊）風（惶根命）の外に神はないとも云つて居る。

これは勿論宇宙の元素を三元（天理教では宇宙生命を一元天理王命）とも説けば二元（国常立尊と面足命との消極力と積極力）とも説けば三元（国常立尊、面足尊、惶根命の消極力、積極力、中極力）とも説けば五元（国常立尊、面足尊、月読命、国狭土尊、雲読命）とも説けば六元（以上の五柱の神に惶根命を加ふ）とも説けば八元（以上の六柱の神に大食天命と大戸辺命とを加ふ）とも説けば十元（以上の八社八方の神に諾冊の二尊を加ふ）多元（人間と万物）とも説く。従つて天理教は一元説にもあらず二元説にもあらず三元説にもあらず多元説にもあらずして同時に一元説でもあり二元説でもあり三元説でもあり多元説でもあるのである。）と見た上の分類であるが要するに人間の肉体は以上六体（国常立尊、面足尊、月読命、国狭土命、雲読命、惶根命）三神（国常立尊、面足尊、惶根命）の化現（貸物）である。仏教では此の人間身の内六体のことを南無阿弥陀仏と云つて居る。南無とは即ち目に温み、阿弥とは即ち皮に骨、陀仏とは即ち飲食出入に呼吸即ちこれである。此の六体三神の守護（貸物）が揃つて始めて人間身体の自由自在が叶ふのである。

次に東北丑寅の方を見澄ますと鰻が居る。鰻は其の体内に一種の毒素を有つて居るから鰻を食ふと其の中毒の爲めに往々生命を失ふことがある。此の特性を利用して人間身の内では生るゝ時親子の縁切り死ぬ時此の世の縁切りの道具雛型に使ひ、世界では切れ物刃物一切の守護神とした。由来鰻は鰻の大きいものである。従つて大食をする——人間も大食する生命を失ふ——其の上体内には一種の毒素を有して之れに中毒すると生命を失ふ。此等理をもつて神名を大食天命と授け給ふた。仏教で云へば虚空蔵菩薩、妙見菩薩、鬼子母神、儒来山、阿南陀山、橋詰山、宇治縣山は此の神の御守護。天に在つては良集正星、丑寅鬼門之神にして世界の剪を振る。

以上挙げたる国常立尊、面足尊、月読命、国狭土命、雲読命、惶根命、大食天命の七柱の神を称して天神七代と云ふ。仏教では此の七柱の神を総称して南無阿弥陀仏と云ふ。

今之れを字別すれば
ナ、国常立尊
ム、面足尊
ア、国狭土命
ミ、月読命
ダ、雲読命
ブ、惶根命
ツ、大食天命

となるのである。更らに普通天神七代、地神（神祇）五代と云つた地神五代即ち神祇五代とは

国狭土命、月読命、雲読命、惶根命、大食天命の五柱の神をさして云ふのである。

次に西酉の方を見澄せば黒クツナ（蛇のことを今日クチナワと云つて居る。クツナはクツナの原形である。ツナとナワとは古代には同一の意味に用ゐられたものと見える。従つて黒クツナと云ふのは黒クチナワ即ち黒蛇のことをして云つたのである。）が居る。黒クツナは勢強く引いても千切れぬ故凡て引き出し、引き延ばしの道具雛型に使つた。即ち人間身の内では爪、毛、身長の発達、誕生の時母の胎内よりの引き出しの御守護、又た智恵の引き出し、工夫の案出は此の神の御守護。世界では草木一切引き延ばしの御守護。農作守護の神（作り神）である、神名を大戸辺命と命名し給ふたのは物を引き出すには芋綱が要る、且つ大手で延べんことには引き出されん。其処でをゝとのべの命と命名したのである。仏教では不動明王、弘法大師、役行者は此の神の御守護、天に在つては宵明星即ちこれである。（人間の出生の時は大戸辺命が胎内より引き出し、大食天命が母胎との縁を切

みが濟み岐様（伊弉諾命）が先きに起ち向つた方を北（オキタ）と云ふ。次に美様（伊弉冊命）が起きて向つた方を南と云ふ。又た目は神人の本心である故宿込む時附けたものである。西の起源は月日両神の目の向きたる方をさして西と云つた。又た東の起源は東は日を東より西に貸す故東（日貸し）と云ふ。これが東西南北の起源である。

五、人間と云ふ名の起源

次に人間と云ふ名の起源は人間の父親の雛型を人魚と云つた。人とげんがよいと云ふげんとの二つの理を象徴して人間と命名けたのである。

六、地場の起源

又た地場の名を庄屋敷と云つて来たのは生屋敷即ち人間最初の故郷を意味するのである。又た庄は正であり、主であり、初であり、元である。庄屋敷は人間始め世界始めの元の地場であるから此の理に依つて庄屋敷と命じたのである。又た此の屋敷を一名四方正面鏡屋敷といふのは嘗に十柱の神の鐘座所であるのみならず人間始めの世界始め根源地であり、中心地であるからである。

七、人類の出生

臨月来つて最初産み降ろした場所は奈良初瀬七里四方、此の日数七日、残る大和は四日、之れを十一日の産船といふ。

山城伊賀河内の三ヶ国は十九日かゝりて生み下ろし、残る日本国中を四十日かゝつて生み下ろし、生み下ろす毎に親の息を吹きかけた。之れに要した總日数七十五日、今日でも七十五日を産屋中といふは此の人間元生み下ろした元なる母親が七十五日に日本国中を経巡つて九億九万九千九百九十九人を生み下ろしたる元の縁起に因めるものである。

今日各国の神社のある所は元なる母親の日本国中経巡つて生み下ろしたる小地場である。

此の際人間の元なる父親伊弉諾命も俱に諸国を経巡つてあられたが子供の生み下ろしがすむと同時に崩御になつた。

最初生れ出した人間の身長は五分から、九十九年目に三寸迄成長して皆死んだ。其処で元々人間を生み下ろした人類の苗代伊弉冊命は一度教へられてあつた守護によつて再び元の人類を同じ胎内へ宿し込み、十月経つて以前の場所に生み下ろし廻つた。此地場は今日各地の墓地となつて居る。

此の二度目に生み下ろしたる人間の身長も最初は五分であつた。而して以前と同じく九十九年目に三寸五分迄生長して皆死んで了つた。

三度目にも同一の守護にて元の人数を同じ胎内へ宿し込み、又た十月目より以前の所に産み下ろした。此の地場は今の宮寺様の参り所になつて居る。一宮二墓三参り所の起源は同じ人間三度産み下ろした地場の因縁に依つて生じたのである。

三度目に生み降ろした人間も五分から九十九年目に四寸迄生長した時に母親伊弉冊命は之れを見て「これ迄生長したならば追々五尺の人間に成るといふ月日両神の御言葉であつたが成る程其の通りである」

と莞爾として御崩れになつた。今日人間の死ぬことをシニと云ふのは人間四寸になつた時ニツコリ笑ふて死んだ理によつて四二と云ふ（人間の生るゝ穴が四寸に二寸、又た死にて葬るゝ穴を四尺に二尺の数をとるは皆人類元生み下ろした時の理に則るのである。）

八、人類の生長と神の守護

三度目に生れた人間は九十九年目に四寸迄生長して親の後を追つて死んだ。夫から人間は昆虫魚類鳥蓄類の異形の者に生き変り死に変わる事八千八度。最後に残つたものは猿である。これが即ち国狭土命である。此の胎内へ男五人女五人づゝ生れた。此の人間も五分より生れ五分五分として成人をし八寸迄に生長した時に泥水に高低が出来かけた。而して一尺八寸に迄生長した時に親が子となり子が親となり元の人数（九億九万九千九百九十九人）生み揃へ、其れと同時に水陸の区別が付きかけた。其の後は男一人女一人づゝ生れて三尺迄生長した時に言語を語り始めた。

其れから人間の生長に応じて天地水陸山野が分割し、五尺に成長した時最初伊弉冊命の生み下ろした人間九億九万九千九百九十九人の中、大和に生み下ろした人間は日本の地に止まり、其の他の国にて生み下ろしたる人間は唐天竺（外国の意味）へ行つた。

神が人類を生んでより天保九年に至る迄の年限は九億九万九千九百九十九年度
び人間の姿に顕はして今迄説かなかつた人生宇宙の秘密を啓示すると云ふのである。
其れで今迄何の様な教へもあつたけれども其れは皆子供（人類）の成人に依じて神が西
に廻り東に回り此処に表はれ彼処に表はれて教へて来たものである。
然るに人間は元々無い世界無い人間を始めてこれ迄長の年月の間影となり形となつて養
育して来た元なる神元なる親の大恩を知らず何もかも一人手になつた様に思ひ、己れが己
れが高慢と我倨勝手の欲とが増長して折角神が丹精してつけた精神の道には草木が生え
て見境もつかぬ様になつて居る。此の倨放つて置いたならば遂には親子兄弟の見境もつか
ぬ悪鬼羅刹の国と化するであらう。其れでは折角之れ迄丹精した神の苦心は水の泡とな
る。神の残念、此の神の残念は此の世を一夜の中にも元の泥海にもすることが出来る。な
れども其れでは気の毒故此の度神が表へ顕れて心得違ひの道を説き聞かし、人間の改心次
第に依つては尚ほ此の上幾重の守護を与へて神の予定の黄金世界を此の地上に實現せんと
するのである。
其れで今迄八埃（ほしい、をしい、かはゆい、にくい、うらみ、はらだち、ゆく、こう
まん）を仏ふ為めの一時の小路として教へて来た拜み祈祷や按摩、針、医者、薬に易判断
を始めとし、神道、仏道、儒道の如きも凡て皆精神の小路として神がつけて来たものであ
る。今度の教へが眞の住還道。これ一つ充分に仕込んだなら後に何も教へることはないぞ
よと云ふのが神の天理教立教の序論である。其れで天理教は一名だめの教（世界最後の宗
教）とも亦止めの教へとも稱せられて居る。

九、教祖の著書を通じて観たる 天理教立教の由来と人類創造の起源

今天理教教祖中山ミキ子が天啓に依つて起草した御筆先並に御神楽歌に就て天理教立教
の由来と人類創造の起源とを研究すれば御筆先の開巻第一に書かれてある言葉は次の神歌
である。

万づ世の世界一列見晴せど胸のわかりたものはないから
その筈や説いて聞かしたことはない何も知らぬのが無理でないぞや
この度は神が表へ顕はれて何か委細を説いて聞かせる
此の所やまとの地場の神館といふて居れども元はしるまい
此の元をくはしく聞いたことならばいかなものでも皆な恋いしなる
聞きたくなたづね来るなら云ふてきかす万づいさいにもとのいんねん
神が出て何か委細を説くならば世界一列心いさむる
一列に早く助けを急ぐから世界の心も勇めかゝりて
だん／＼と心いさんで来るならば世界世の中とて繁昌
此の先は神楽勤めの手をつけて皆んな揃ふて勤め待つなり
皆揃て早く勤をするならば側が勇めば神が勇むる

御神楽歌の禱頭にも之れと同一の意味の序歌が殆んど同一の文句をもつて述べられてある
が唯御筆先の序歌と御神楽歌の序歌との異なる点は御筆先は五七五七七調を以つて述べら
れ、御神楽歌は五七五七五調を以つて述べられて居るの相違があるのみである。

例へば御筆先には「胸の分りたものはないから」とあるを御神楽歌には「胸の分りたも
のはない」で切り、御筆先には「何も知らぬが無理でないぞや」を御神楽には「何も知ら
ぬが無理でない」で切つてある如き類である。

此の序歌並びに次に挙ぐる神歌は皆に天理教の目的、価値及び使命を知るに重要な価
値を有するのみならず、天理教の天地開闢説並に人類起源論人類発達史世界発達史の価値
を裏附ける有力なる言葉である。

今迄は神学古記あるけれども元を知りたるものはないぞや
其の筈や泥海中の道すがら知りたる者はない筈のこと
此の度は此の世始めてない事を何んなことでも皆あらわすで
又曰く

今迄は学問なぞと云ふたとて見へてないこと更らに知るまい
此の先は見へてない事だん／＼とよろづの事を皆なといて置く
何もかもない事ばかりとくけれど是に間違ふ事はないぞや

此等は勿論御筆先にあらはれた一二の例に過ぎないが此等並びに之れに類する他の神歌
と神勅とに徹しても天理教の新創世説の如何に根底の深いものであるかといふことを想像
することができる。

十、各国の神話の一般と天理教の新創世説

古来各民族の間には各々自国の建国に関する伝説が伝はつて居る。其の多くは其の一地方の開拓者を中心とした郷土史とも見るべきもので人類的価値の稀少なるものである。其の中に於て比較的古く且つ多少研究の価値ありと思はれるものは我が記紀、基督教の創世記、印度、希臘の神話の二三に過ぎない。(埃及の如きは歴史上には最古国として考へられて居るが地質学上より云へば埃及の地質は地質として最も新しい地質に属し沖積層期以上には出ないのである。従つて人類生活も其う古いものと見ることが出来ない、為めに神話の如きも神話学より見て左程価値あるものではない) 就中最も耳を傾けるに足るものは我が国の記紀と基督教の創世記とである。

今記紀と天理教の新創世説との関係を見るに其の最も密接の関係を有するものは古事記よりも寧ろ日本書紀の記事である。

古事記では天神七代の外に造化の三神として

天之御中主神

高御産巢日神

神御産巢日神

を挙げ、更らに

宇摩志阿斯訶備比古神

天之常立神

の二柱の神を加へて別天神五代と称して居る。日本書紀では此等の神を挙げない、此の点に於て日本書紀は天理教の創世記と最も密接の関係を有して居る。

今天理教の天神七代と記紀の天神七代とを対照すれば

天理教
国常立尊(男)
面足尊(女)
月読尊(男)

日本書紀
国常立尊(男)
国狭槌尊(男)
豊斟淳尊(男)

古事記

国之常立神(男)
豊雲野神(男)
・宇比地迺神(男)
・妹須比地迺神(女)
・角材神(男)
・妹活材神(女)
・意富斗能地神(男)
・妹意富斗乃弁神(女)
・面足神(男)
・妹阿夜訶斯志古泥神(女)
・伊邪那岐神(男)
・妹伊邪那美神(女)

国狭土尊(女)

・泥土煮尊(男)

・沙土煮尊(女)

雲読尊(女)

・大戸道尊(男)

・大戸辺尊(女)

惶根尊(男)

・面足尊(男)

・惶根尊(女)

大食天尊(女)

・伊弉諾尊(男)

・伊弉册尊(女)

である。

此の中三者に共通もしくは類似の神名を挙げれば

一、国常立尊
二、面足尊
三、雲読尊
四、惶根尊

の四神である。

此の外記紀の七神として挙げた中に天理教の神を求めれば

一、大戸辺尊
二、伊弉諾尊
三、伊弉册尊

である。

次に天理教と日本書紀として挙げて古事記に説かない神は

国狭土尊

である。

また記紀に神名を列ねながら天神七代の中に入らない神は

月読尊

である。

最後に天理教に於てのみ説いて記紀に其の神名を発見することのできない神に

大食天尊

がある。

更らに此等の神を性に依つて分類すれば、古事記は

国常立尊
豊雲野神

とを独化神と称し、日本書紀は
国常立尊
豊狭槌尊

の三神を独化神と称して居るが国常立尊の男神たることは三者共通としても面足尊、国狭土尊、雲読尊をもつて男神とし月読尊、惶根尊、大戸辺尊をもつて女神とせる如きは記或は紀の神性観と天理教の神性観との一致せざる点である。

次は天理教の地神五代と記紀の地神五代とを比較すれば天理教では
国狭土命、月読命、雲読命、惶根命、大食天命をもつて地神五代と称して居るが記紀では全然之れと異なつた神を挙げて居る。

元より天神七代地神五代の起源に關して天理教の説く所は明かでないから其の眞の縁起を知ることはできないが記紀の挙ぐる所の地神五代なるものは思ふに比較的最近（八千八度の更生がすんで国狭土命の胎内より生れ出した人類が五尺の身長に発達し最初大和にて生れた者は日本に止まり其の他の国にて生れたものは外国に移住した過渡時代のこととは思はれる。随つて記紀に挙げて居る所の天神七代と地神五代との間には非常に大なる時間的距離があるものと見なければならぬ。

由来古事記と云ひ日本書紀と云ふも古くより人口に伝つて居た伝説を安麻呂や阿礼に依つて綴合せられたのであるから彼等が天理祖の如き天啓人であるかもしくは予言者でない限り其の口もしくは筆に誤謬がないと云ふことはできない。随つて此等を以つて太古の神話傳説の一種として見る時は興味の深いものではあるがこれを太古史として見る時は其処に大なる批評眼が必要である。（事實の骨子は天理教にある）

例へば彼の須佐之男命が母伊弉册命のある根之堅洲国（黄泉）へ行くについて姉天照大御神に暇乞ひに天上に昇つて行くところの有名な傳説の如きは伊弉册命即ち天照大御神（天理教より云へば）を母と姉とに分けて別人として説いて居る。

此の他詳細に亘つて論ずれば三者の所説は各々異つて居るが同時に一致せる点も亦少くない。

天理教では人類の起源を説く必要上世界が既に雲霧期を過ぎて人類（当時の人類を今日の人類と同一に思つてはならない）の生活に可能なる泥濘期に入つてから説き起して居るが此の点に於ては記紀の説く所も大体に於て一致して居る、殊に三者の有つてゐる類似の記録は諾冊の二尊が天神の意を受けて世界創造人間創造の事業に従事した一事である。

これを創世記に就て云へば伊弉諾伊弉册の二尊は人類の原父原母たるアダム、イブである。

元より創世記も記紀と同じく一篇の神話傳説の記録であるから其の中には多くの想像が混入して居る彼の原罪説の如きも現實の人生の欠陥と矛盾とを説明する方便として詩人の想像になつたものと思はれる。

次に創世記では天地創造を神が七日にして完成した様に説いてあるが天理教に於ける神の天地創造の事業は無始無終の間に於ける漸進的創造である。

更らに人類の創造に關しても創世記は始めより今日の人間の姿を有せる原人を神が一日の中に創造せるが如く書いてあるが天理教の原人は決して今日の如き人間ではなかつた。或る形に創造せられたる人類が漸次今日の人間に発達したのである。

元より其の原始的姿は何んな姿であつたか其の詳細なる説明は与へられては居ないが前後の所説に依つて想像すれば原人は魚類に近かつたものゝ様に思はれる。少くとも水中動物の共通の特徴をもつた生物であつたに違ひない。（此の点は後の科学と天理教の新創世説の部に於て説明せうと思ふが）此の原人即現人と見る基督教の見方と原人を一種の微生物動物として神の守護に依つて漸次今日の人間に進化せしめたと説く天理教の見方とは其の間に大なる相違がある。

此等の相違こそやがて科学の発達しない未開野蕃の時代に於てのみ勢力を占むることのできた旧宗教と科学の発達した文明時代に於て新信仰を鼓吹する新宗教との境界を画する一線でなければならぬ。（勿論旧宗教と新宗教とを區別する大なる境界線は他にあるが）

最後に一言附け加えて置きたいことは、印度、希臘の多神教と天理教との關係である。中にも神の天地創造の有様を宛然に吾人の眼前に彷彿せしむるものにホーマーの絶唱がある。其の説く所に依れば

天地初発の時、蛇の形に宛然其俛自分の尾を自分の口に啣みながら海路陸路をぬた打ち繞つた海流なるものがあつた。之れが万物の始めである。

と。又たヘシオットー（神統記の著者）は云ふ、
「創世の折柄限も知らぬ深淵混沌凝つて氣象未だ表はれず暗黒は雜然として蔽ひ重れり、是より造化次第に成り、国土を産して、美しき愛は神と人との心を支配し始めぬ。さて又た混沌界よりエリーバスこそ生れたれ、こは大地の下に在る神秘なる暗黒にして遙か彼方

日没の国に住むてふ夜の姿なり。次に母たる大地よりは蒼穹の星屑生れ、天雲のさわたる丘に神々ぞ住み給ひける。大地は山を成し、野を造り海を造り、又た植物獸物をさへ養へぬ。」

これは彼の創世紀に優るとも劣らぬ偉大なる空想詩であるが今此処に述べんとするは神統記の著者の処謂天雲のさわたる丘に住み給へる神々と天理教の神との関係である。

希臘神話では或はジュノであるとかプルートであるとかネプチューンであるとかジュピターであるとかミネルヴァであるとかマアスであるとかヴァルカンであるとかアポローであるとかダイアナであるとかヴィーナスであるとかマーキュリーであるとかバツカスであるとか云ふ所謂オリムパス山の重なる神々は皆個性と一つの分業とを有つて居る。之れは印度の神話に於ても同一である。印度の神話では火の神の如き、風の神の如き、一々神の分業と守護とを異にして居る。

此等伝説の神々と天理教の神々とは元より同一視することはできないが神々に一個の個性あり分業ある点は多少類似の点がないでもない。

けれども印度希臘の神話は我が国の記希や旧約の創世記にも優して想像の産物であるから其の比較研究より積極的に大なる利益を齎らすといふことはできない。(一般に神話と云ふものが其うである) 従つて天理教の新創世説の真価を確かめるには直接科学の試金石に当てた方が一層適確であり且つ有効である。

十一、科学と天理教の新創世説

カントとラプラーズの説に従へば我が太陽系統の諸天体は最初は高温の一大瓦斯球であつて太陽は其の中心の核を形造つて居たのである。此の瓦斯球の大きさは非常に巨大なるものにして其の周囲は太陽を去る最遠の遊星たる海王星の規道以外尚ほ遙かの距離まで達して居たもので西より東に向つて廻転して居た。然るに其の温度の冷却するに連れて大球は収縮し、収縮するに従つて其の廻転の速力が早くなつた。

凡て球の廻転速力が早くなれば早くなる程赤道の部分の遠心力の増大するのが自然の法則である。けれども其の速力が或る度に達すれば赤道の遠心力は却つて球の引力に打ち勝ち赤道の部分は球より分離して此処に環を造り出すのである。

彼の瓦斯球も此理に依つて遂に赤道部が離れて環を生じ、更らに其の速力の増進するに連れて分離した環は更らに分離して幾條の環を生じた。而して其の分離した新球は旧速力を維持して西より東に向つて廻転して居たのである。けれども其の新球も冷却収縮するにつれて其の或る部分が分離した。其の切れた個所は一箇所のこともあれば数ヶ所のこともある。一箇所の時には切れた環が一塊に凝集し、数個の時には数塊に団結したのである。斯くの如くして分離した球が団結して出来た球が今日の遊星であると云うのである。

其れで月とは遊星が同じ方法にて環を生じ、其の環が分離して更らに団結したものであり、太陽とは環が出来てしまつた跡に残つた中心の部分の凝集したものである。次に月でも太陽でも其の他の遊星でも西より東に向つて廻転するのは母体の瓦斯球が西より東に向つて廻転したものであるからと云うのである。

元より一二の月には東より西に向つて廻転する除外例がある。けれども此の事実はカント以後の発見に属して居る且つ其の他一二の例外があるけれども今日星霧説を動かす有力なる新発見は生れないのである。

而して以上の星霧説を確むる事實は沢山ある、就中遊星の道は皆偏心の度の少なる楕円で互に相似たる形を有すること、軌道面は皆互に小角度をなすのみにして大角度を以て互に相横切らざること、土星には現に環あること、太陽の今尚高熱体なること、太陽系統の諸星の殆んど皆同一の物質より成れること等である。

天理教では月日は宇宙の本心とも宇宙の両眼とも云つて居るが蓋し月日とは宇宙の消極力と積極力との二個の力の具体化せるものであつて天地ともなれば陰陽ともなり遠心力ともなれば求心力ともなり男女ともなり、冷熱ともなり、暗明ともなり、正義ともなれば博愛ともなる。これを生格化したものが国常立尊と面足尊とである。

要するに宇宙は神(宇宙生命)の肉体であり、神は宇宙の生命である。其の間の関係は人間の精神と肉体との関係の如く両々相待つて発達するものである。従つて神の進歩は宇宙の進歩であり、宇宙の進歩は神の進歩である、これは人間あつて世界あり世界あつて人間あり世界と人間と平行して発達して来た事實より推測することが出来る。随つて太元には陰陽二個の生命の萌芽があつても其れは未だ漸く芽ぐめる種子の如きものであつたに相違ない。其れが宇宙の発達と共に発達して二元的(其の実一元)に分離したものが月日(国常立尊と面足尊)である。

独逸の星学者チエルネルはカントの説を基礎にして瓦斯球より出来た天体の発生期を五つに分けた。第一期は発光瓦斯の状態を呈する時期にして現に此の時期を代表する天体は

霞雲星と称する星である。

第二期は発光液体の状態を呈する時期にして現に此の時期を代表する天体は間断なく明光を放ちて輝く恒星である。

第三期は表面が冷却して殻を生じ、無光に變ずる時期である。

我が太陽の如きは第二期より第三期に移り行く過渡時代にして其の表面に時々斑点の生ずるのは即ち殻の出来んとする為めである。又た既に第三期に移り行いた恒星の例は時々其の光力を変じ且つ赤色をもつて輝く所の恒星である。

第四期は表面には全部殻を生じ、為めに無光となつた時期である、然し内部の高熱部は時々皮殻に激して破裂を起し、之れが為めに其の都度光を発するのである。天には従来赤色を以て輝いて居た星が俄かに滅することがある。これは第三期より第四期に移り行くものである。又た天には突然現れて突然消滅する星がある。此等は第四期に属するものにして其の現はれた時は内部の高熱体が破裂して光を発するのである。

第五期は皮殻が益々厚くなり、水蒸気が凝結して水となつた時期である。

我が地球は既に第一期より第四期を経過して第五期に入つたものであるといふのである。

以上の天文学上の学説より天理教の進化説を見るに

(一)「月日あつて此世界、」

と云ふ教祖の言葉が如何に今日の天文学上の学説と一致せるかを知ることができる。

けれども今日の天文学地文学其の他の科学の力をもつては到底月日の年齢を測定することが出来ないから地球が月日の母体より分離したのは非常に曠遠なる過去の事実と見なければならぬ。(九十万年説、九千五百万年説、二億年説、六億年説、六十億年説の如き元より取るに足らない)

次に研究すべき問題は

(二)「世界あつて其れ／＼(万物)あり」

と云ふ地球発達史と万物創生史とである。地質学では今日の所地質時代を大凡そ五代十三紀に分つて居るが太古代の生物は化石を以つて研究することはできないから如何なる生物が生存したか判然しないがよし生存してもアミーバの如き微生物や雲母の如き下等植物であつたに違ひない。

其れから古生代の動植物として今日化石になつて存在して居るものに直角石がある、寒武利亜紀、(より石炭紀)に入つては三葉虫、志留利亜紀に入つては筆石、海林檎、楯頭魚、石炭紀に入つて鱗木、封印木海蕾等である。

次に中生代の動植物として今日化石になつて存在して居るものに蘇鉄、アンモン界魚龍、蛇頸龍等であるが中にも魚龍、蛇頸龍は中生代殊に侏羅紀の特有である。更らに白堊紀に入つては馬尾介、禽龍、有禽鳥の如き種類があつた。最後に来る者は新生代である。新生代の第三古紀の特有物にはパレオテリウム、張角獸があり第三新紀の特有物にはマストドン、旧象の如きがあつた。馬、鹿、鬣狗、猿の如きは第三新紀より現代にかけての特有物である。

更らに地史時代を動物に依つて分類すれば、

- 一、原始時代(太古代に相当す)
- 二、無脊椎動物時代(志留利亜紀に相当す)
- 三、魚類時代(泥盆紀に相当す)
- 四、両棲類時代(石炭紀に相当す)
- 五、爬虫類時代(中生代に相当す)
- 六、哺乳類時代(新生代に相当す)
- 七、人類時代(現代)

となるのである。

これによつて見ても天理教の

(三)「夫れ／＼(万物)あつて身の内(人類)あり」

の言葉に動物学、植物学、地質学、考古学は一致するのである。

次に来る問題は人類の古さの問題である。

古来欧羅巴には古くより人類六千年説があつた。けれどもこれは旧約の宗教的信仰に基いて立てた所の独断説にして何等實際的根底がないのである。

人類学の推定によれば人類は其の根源の祖先を別にし其の住地を異にしたものではなくて一地方に住んだ本源人類(原人)が時と共に分布移住し其の間自然に人種的區別を生じたのであると云ふのである。

然らば僅々六千年間に一地方に生活した本源人類の子孫が全世界に散布して今日の人種的區別を生ずることが出来るであらうか? これは歴史的に世界の最古国と称せられて居る埃及一ケ国の研究に拠つても其の何等根拠ある確説でないことを証明することができ

る。

則ち埃及には早くより種々の絵画、彫刻、建築が発達して居た。其の中の壁画には数千年前の各国の人種が描かれてある。其の中亜弗利加は色黒く縮れ毛に描かれ、其の他桃色の者、黄色の者等明かに示されてある、之れに依つて見ても埃及の全盛時代より今日迄に著しき変化は見えなかつたと云ふことができる。

元来埃及は其の歴史としては最も古い国に属してゐるのであるが其の土地は地質学上最も新しい地質——沖積層——に属して居るのである。従つて其の建国の当初より人類が住居したとしても其う古いものとは考へられないのである。

けれども今日地質学や化石学、考古学の研究に依つて人類は沖積期よりも古い洪積期に於て既に仏蘭西、欧羅巴地方、南北亜弗利加、亜弗利加の東南部、亜細亜の印度地方及び濠太利亜の諸地方に居り更らに其れよりも古い第三紀に生存して居たことを知ることができた。

第三紀はそれ／＼学者に依つて其の分類法を異にして居るが最も普通の分類法に従へば最も新しいのが最新世、其の次が中新世、最も古いのが始新世である。其の中最新世、中新世には人類生存の形跡を発見することができるが最も古い始新世に至ると人類の足跡は絶えてあるものは猿である。

之れを天理教の進化説によつて見ると始新世は人類が魚介鳥獸の時代を過ぎ猿類時代に入つた時である。

然らば今日人類に最も類似した骨格を備へて居た原人の生存して居た中新世とは何万年以前であるか？ プリットは此の時期を百十六万年乃至七十万年以前と計算して居るが此の年代が果して正確であるか何うかは地質学上の研究のみにては十分に満足することが出来ない。

次に当然起つて来る問題は如何にして概略の年数を知り得ることが出来るであらうかと云ふ問題である。其れを知る拠り所が唯一つある。其れは地球の大氷原時代である。これが解れば第三紀も解かる。第三紀が解れば人類——原人——の生存した年代を知ることができる。

大氷原時代とは第三紀の終りと洪積期との間に欧羅巴の北から中央にかけて積つた雪が固つて氷となり高い所より低い所に対つて滑つて広い面積を掩ふたことがあつた。其れを称して大氷原時代と云ふのである。

これは曾て北亜米利加の一地方にもあつた。現に端西にもある。南洋のニュージーランドにもある。亜弗利加の或る地方にもある。山上に積つた雪が融解し了らない中に後から続いて雪が降る。降つた雪は自ら重量に堪へないで滑る。これが氷原の現象である。然らば大氷原時代とは凡そ何れ程以前の事に属するのであらう？ これは地質学の力をもつては計り切ることができぬ。依つて天文学の力を借りて推測すると或る時代には地球の軌道が今日の如く円くなくて最つと細長い時があつた。其う云ふ場合に於ては其の遠近の差が甚しければ甚しい程暑い時は非常に暑くて短く寒い時は非常に寒くて長い。此の軌道の変化は地軸の変化（地軸は二万一千年毎に変化するのである。其の二万一千年は地軸が変化して元の位置に帰る迄の年限であるから吾々の現在の位置が全然反対の位置になるのは一万五百年である。かくの如くして地軸の変化は大氷原を作る一つの原因である）よりは氣候の差を生ずることがもつとも著しいのである。其れで今より遡つて凡そ何程以前が最も軌道の細長い時であつたかと云へば其れは今より凡そ二十一万年前と云はれて居る。

其れで地球の軸の変化と軌道の変化とが出会して氷原を起したといふのが今日の大氷原起源説である。始め此の説の出た時は次の如き反対があつた。

其れはもしも此くの如き原因に依つて大氷原を生ずるとせば地球の開闢以来何遍かあつたに相違ない。其れを唯一度と云ふのは他に原因あることを告白するものである。

と、然るに其の後の研究に依つて右の大氷時代の前に同様の事が二回あつたことが知れて来た。かくの如くにして今日最も確実なる説は此の説である。

其れで今大氷原の始を二十一万年前、大氷原の終りを五六万年（これは英国リバプール辺の大氷原に依つて出来た低地の測量より得たる年数である）とすると氷原の期間は非常に長い。

之れに依つて見ると欧羅巴の大部分は久しい間雪や氷で埋められてゐたが其他の土地には其れ程の事なしに人類が生存することができた。其れで人類の遺物の最も古いものが第三期の中新世であるから其れは大氷原の始まりよりは更らに数万年以前である。依つて原人の生存せる時代を概算すれば今より二十五万年以前と云ふがやや正確に近い説である。

次に吾人の知りたい問題は原人の形である。今日迄人間の化石として発見せられたるものは十一二である。其の中最も古いものは数年前独逸のハイデルベルヒ市に近きマウエルと云ふ村より掘り出された化石であるが其れは唯下顎部の骨のみである。其の顎の全体の形は猿の下顎に似、唯齒のみは人間の齒である。此の次に最う一つ古いのは英国のピルト

タウンから掘り出した人類の化石である。此等並びに其れ以前に発掘せられた化石に依つて原人の特徴を研究すれば其の頭の著しく小さいことである。勿論非常に長い間の人類発達の径路を此等少数の化石に依つて知ることは困難である。従つて或る化石との間には非常に大なる空間があることを記憶しなければならない。其の間の空間を埋むるものは唯想像があるのみである。

次に来る問題は人類は第三紀に突如として表はれたものであるか其れ以前に人類の祖先である生物より発達して来たかの問題である。此の問題に関しては進化論も天理教の所説も大体に於て其の骨子を同じくして居るのである。則ち兩者共其れより以前に人類は猿人（今日のゴリラの如きもの）であつたといふことに一致しておる。更らに其れ以前に人類の祖先はと云へば兩者共に異口同音に昆虫魚類鳥獸であつたと答へるのである。今進化論に依つて生物発達の歴史を最う一度大略ながら研究する。地球の地質時代は人に依つて各其の分類法を異にするのであるが今普通の分類法に従つて五代十三紀（もつと詳しい分類法がある）に分つのであるが今其の大体の區別に従つて五代の特徴を再び略記すれば

第一、原始時代の岩石は恐らく元と化石を含んで居たものと思わるゝけれども其の後に出来た地層の爲めに熱と圧力とを生じて其の質を変化して了つた爲めに今日其の中から化石を発見することはできない。従つて原始時代の動植物は明かに断言することはできない。

第二古生代、之れも余程古い岩石の層であるが其の中からは種々なる生物の化石が出る。古生代の岩石から採掘された化石の中で一番高等動物は魚類であつて、魚類より上位する獸類、鳥類、乃至蛇蛙といふ如き種類の動物の化石は全然出て来ない。

植木は勿論今日の植物ではない。木賊、土筆、菌朶、蕨の種類で非常に大きな幾抱へもある大木の形になつたものである。魚類も亦今日の魚類と異り身体の表面が恰も鎧を着て居る様に堅い甲を持つて居るものが多い。

第三中生代。中生代に全盛を極めたものは蜥蜴類である。けれども中生代の蜥蜴類は今日の蜥蜴類とは比較すべからざる程巨大ものにして身長十間乃至十五間を有し宛然今日の鯨の如き身長と鯨の如き生活をして居たのである。

亜米利加より掘り出せる有名の化石は其の大きさ鯨よりも大きく陸上を歩いて居たものと思はれる。中には恰度今日のカンガルーの如き形にて長い尾を有し、後足にて立ち、前足を挙げて歩いて居たと思はれる物もある。中生代の植物としては松、杉、桧の如き無花植物であるが勿論其の形は今日の松、杉、桧と異つたものであることは云ふ迄も無い。

第四。新生代、新生代は獸類全盛の時代である。其の化石の中には大象、三間位の角鹿、一尺位の牙を有せる虎がある。植物は葉の幅の広い顕花植物。

第五は現代である。

さて如上に挙げた五代の中根元人類は何時発生したか？ これを天理教より見れば何うしても古生代即ち魚類全盛期以後である。従つて其の時代の根元人類の形は何うしても魚類少くとも水中動物の共通の特徴をもつて居たものに違いない。其れより世界が漸次より以上の高等動物の生活に適する様に進化するにつれ、人類も亦其の時代に於ける最高動物として進化して来たものである。

即ち古代の魚類全盛期には魚類の共通の特徴を有し、中生代の爬虫類全盛期には爬虫類共通の特徴に生き、新生代の獸類全盛期には獸類の一般的特徴に生きて来た。これは胎児の解剖学的研究に依つて知ることができる。

（人類発生の当時は如何なる時代に属したかの問題は当時の神として最高生物であつた国常立尊面足尊の姿が大蛇もしくは大龍であつたこと乃至伊邪那美命、大戸辺尊、国狭土尊の姿が何れも爬虫類の姿であつた点より見て爬虫類全盛期であつたらうと思はれる。次に爬虫類に次いで勢力を振つて居た高等動物は魚類であつた。これは人類の父母乃至祖父母伯叔父に当る神々の当時の姿が何れも爬虫類にあらざれば魚類であつた点より想像することができる。けれども当時は今日の人類より見て下等動物に過ぎなかつた人類の祖先——鱧——が世界の発達と共に漸次今日の如き高等動物に進化して来た点より見ても当時の神々が何時迄も進化せざる元の姿であるとは思はれぬ、従つて当時の最高生物の形をとつた神々は今日に従ても吾人人類以上の最高の智力と最高の形式とを有するものと想像することができる。）

今、

「生物の一個体が卵より其の生物として完成するに至るまでの発生の状態は其の生物の属する種類が其の過去より今日に至る迄次第に進化し来れる道程を繰り返すものである」と云ふ生物発生の原則に基いて人類の胎内期を研究する時は人類以前の生活を不完全ながら理解することができる。

凡て新たな一個体として人類が完成するには其の始め如何なるものより出来るかと云

へば其れは他の獸類鳥類と等しく必らず母親の体内に出来た卵細胞即ち女性生殖細胞と父親の体内に出来た精虫細胞即ち男性生殖細胞とが結合して一個体の基礎となるのである。換言すれば茲に一個の人間の卵が出来たとする。其の後は母体より栄養分を受けて次第に發育し、或る一定の時期に達すれば母体を離れて生れ出るのである。尤も動物には胎生と卵生との二種があるが此の區別は唯其の産期の形に就ての分類であつて人間も母体に発生した最初は鶏と同じく卵である。唯鶏と異なる点は鶏は卵として生れ母体外に孵化して雛となるが人間は母体内で卵より人となつて生れる丈の相違である。元より人間の卵は鶏の卵の如く大ではない。僅かに日本尺の一分の三十分の一弱である。従つて人間の幼卵を一直線に三十もしくは四十を並べなければ一分の長さには満たない。

人類発生の第一期、

然らば人類発生の第一期は如何、これは前に述べた如く精虫と卵細胞と結合した時である。此の時の構造は他の顕微鏡で見得る生物は同一のものにして屢々彼の下等動物の代表者として引証せられるアミーバと等しく非常に簡單なる生活力と生活機能とを有し、頭部、手足、眼鼻の如き機能を全然欠いて居る。

依つてこれを生物発生の原則に照す時は人類発生の第一期は其の数万年数億年の以前に於てはアミーバの如き簡單なる構造を有しアミーバの如き單純なる生活を営んだ時代を繰り返すものと見なければならぬ。

人類発生の第二期、

次に卵が胎内で發達するに従ひ漸次海月、珊瑚、イソギンチャク等の如き生物と類似の構造を有するに至る。これが人類発生の第二期である。依つて之れを生物発生の原則に照せば人類の祖先は何千万年何億万年の過去に此等の生物と類似の構造と類似の生活を営んだ時代を繰り返すのであると見る事ができる。

人類発生の第三期、

之れは説明を省略する。何故なれば以上述べた通り人類の胎内期は何千万年何億万年の過去の生活を短期に繰り返すものであるから人類の外界生活と胎内生活とは自然に其の生活に相違を生じ従つて如何なる程度迄人類の過去の生活を繰り返へし如何なる程度迄子宮内の生活に適応した生活形式をとるか明瞭に區別し難いからである。これは今日の學問上には未だ一定して居ないのである。

人類発生の第四期、

第二期の海月珊瑚虫と類似の身体構造の時代から第三期の不明の時代を通過して略明瞭な構造をとつて来るのは魚類と同様の身体構造を有する時代である。

此の時期に於ける身体構造は全体の形が概略魚に似て居るのみでなく頭の両側に數個の鰓の孔がある。これを「生物発生の原則」に照して見る時は人類発生の或る時期に於ては魚類と同様の生活を営んだ時代があつたことを証明するのである。

人類発生の第五期、

次に来る時期は蛙若くば蜥蜴の如き身体構造の時期である。(尤も蛙と蜥蜴とは分類上異つた動物であるが人類発生の途中極く短期間に一寸蛙らしく蜥蜴らしき時代を通過するのである)

人類発生の第六期、

次には犬猫等の獸類と同じ構造を有する時代に達する。其の時代は人間にも尻に尾が生え、獸類に比して識別することの出来ない性質を具へ、人類の児か獸類の児か區別することができない。これを生物発生の原則に照すと人類の祖先は其の過去に於て犬もしくは猫の如き身体構造を有つて居た時代のあつたことを想像することができる。(序であるから天理教の退化説を紹介する。天理教では癩病患者の如き恩と怨に呪はれたる業病者が其の姿の俛で死ぬと来世には牛となつて生れると云つて居る。牛は幾ら働いても人間より感謝もされなければ湯も使つて貰はれない。其れから次には馬となつて生れる。馬は人から湯を使はして貰うことができる。次は犬となつて生れる。犬は馬よりも一層忠実に人の為めに仕へる、其の功德によつて遂には白狗となつて生れる。白狗より再び人間となつて生れる。けれども其の性質は愚鈍であつて動物を去ることは遠くないと云ふのである。これに依つて見ても人間進化の過程には犬猫牛馬の時代があつたのである。)

人類発生の第七期、

これは獸類と同様の性質を有つて居る第六期の隣次期であつてこれから人間らしくなり他の獸類の胎児と比して慥かに人間の胎児であることを知ることができるようになる。人間の胎内期は満九ヶ月である。其の間幼卵より第七期に達する迄僅かに其の初期の一ヶ月余の變化であつて其の後の八ヶ月は人間として發達するのである。

今人類発生の徑路を簡単に云へば

第一期 アミーバ様

第二期 珊瑚虫様
第三期 不確実様
第四期 魚類様
第五期 蛙蜥様
第六期 獸類様
第七期 人間様

となるのである。地質学上の研究と云へ、人類学上の研究と云へ、又た解剖学生理学上の研究と云へ、総合する所天理教の人類進化論と殆んど符節を合する如く一致して居る。これに依つて見ても人類が今日の人類に発達する迄には天啓の指示する如く所謂八千八度の更に行はれたらうと信ずることが出来る。属する故今後科学が奇蹟的に発達して来たとし元より此等の事実は凡て記録以前の事に属する故今後科学が奇蹟的に発達して来たとしても人類の長い過程に於て順次如何なる形に向つて進歩したか、到底其の一々の形を知ることはいかゞも思はれる。又た其れは左程重要なことではない（知り得れば其れ程のことはないが）吾人は現在の所唯其の大体の歴史を知ることがをもつて満足しなければならぬ（或は天啓が発達して其の更生の過程を知り得ることがあるかも知れない）以上天啓と科学との研究に依つて人類の起源並びに其の大体の歴史を知ることができた。唯一つ最後に残されたる重大問題は此の世界並に人間は神に依つて創造せられたか又は自然に発達して来たかの問題である。古来宗教と科学の間には此の至難の姿を取つた平易の問題に就て絶えず論争を続けて来た。けれども此の問題は神と自然、もしくは神力と自然力とを一元的に解するか二元的に解するか依つて自ら解せらるゝ問題である。由来宗教と科学とは同一の目的（人生問題の解決）を有しながら屢々衝突を免かれないのは各々其の出発点と其の研究の世界を異にして居るからである。即ち宗教は精神界より出発して現象界に向つて進み科学は現象界より出発して精神界に入らんとして居る。一は内より外に向つて進み他は外より内に向つて入らんとして居る。一は原因より見、他は結果より見る。其の間一致しないのは未だ各自の使命に徹底しないからである。けれども吾人の見る所に依れば将来宗教も科学も人生の発達に伴つて発達することは云ふまでもないがたとへ如何に科学が発達しても其の研究範囲が既に現象界、結果界、物質界に限られて居る限りは如何に奮闘努力しても宇宙人生の根本原因を捕捉することはできないことが分つて居る。それはスペンサーの如き大学者も亦承認せざるを得ない事実であつた。将来の科学者とも其の研究が徹底すればする程或る不可知力の存在に打つかるであらう。其の時こそ真に宗教と科学との一致する時である。

天啓の声に「今に世界の智者学者が思案に余つて天理教の眞実を聞きに来る時がある」と。この眞実とは単に倫理的、哲学的、宗教的の狭義の眞実ではあるまいと思ふ。最つと広い深い眞実其れは宇宙人生の発達して来た又た発達して居る更らに生成発達して行くであらう生ける客観的眞実をもさして云はれるのであらうと思はれる。凡そ如何なる科学でも如何なる哲学者でも其の人が偉大なれば偉大なる程人間の知力をもつては到底測り知るべからざる一種不可思議なる力の存在を認識せざるを得ないものである。其れを科学者は自然と命名け宗教家は神と呼んで居る。畢竟自然と云ひ神と云ふも同一主体の別名であつて一は無生格化して自然と云ひ一は生格化して神と呼ぶに外ならないのである。既に科学者が目に見えざる一個不可思議の力を認め其の力の発展を商人したならば彼は其の力を神と呼ぶことを商人しない筈はない。強えて其れを商人しないと云ふのは恰かも習慣上仏教徒は神を仏と呼び神信徒は仏を神と呼んで其の同一の主体であることを故意に商人しまいとす類である。従つてかくの如き論争は第一義に徹底した人の問題ではない。事實眞に医大なる科学者は此う云ふ末枝の問題をもつて問題として居ないのである。彼も亦吾人と等しく神を認める。而して此の不可思議なる宇宙の第一原因を神に帰するのである。これは不可測の大自然力を認めた大科学者にとつて至難の事ではない。寧ろ当然の事である。けれども神の存在——生きて働いて居る超人間力の存在——を認めやうと認めまいと其れは個人の自由である。又た此の世界が神に依つて創造せられ現に創造せられつゝあり、又た将来無限に創造せられて行くであらうと信ずるも將た又た此世界も万物も人類も自生し自然に発達した又た発達しね発達して行くであらうと信ずるは自由である。けれども後の如く信ずるものは未だ現象界の研究を超越して眞に宇宙の第一原因に遡つて其の眞実に徹底した者ではない。これは彼等自身の精神力の発達に伴つて自然に見えて来る。吾人は唯吾人の信仰に従つて其の所説を展開して行くまでである。

十二、人類学上より見たる 本源人類の根源地と天理教の地場

以上述べた所の科学上の諸説に依つて人類の祖先は如何なるものであつたか人類の起源並に其の発達の歴史は大略述べた。次に研究する問題は原人少くとも現在の人類に近く接近して来た原人は如何なるものにして何処に生活したかの問題である。

第一の原人は如何なるものであつたかと云う問題に関しては概略述べた。今日の所では彼れ以上に深く知ることはできない。即ち今日最下級の野蕃人と猿人との中間に位するものが原人の状態であらうと想像される位である、其の骨格と云つても勿論明かに解つては居ないが化石の骨に依つて知り得たことは額が後方に押し附けた様であること、眉骨の凸起が甚しいこと顎は後方へころけて居ること位のものである。

天啓に依れば九億九万年水中の棲ひと云はれて居る点より見れば一万年以前の人類は水中生活少くとも両棲生活を続けて来たものであるから水掻きを有つて居たであらうと思はれる。これは今日でも往々水掻きを有した畸形児の生ずる点より想像することができる。

次に原人は如何なる皮膚の色をもつて居つたか？ 今日世界の人種の共通色を求めれば其れは黄色である。黄色味は欧羅巴の白人間にも亜弗利加の黒人の間にも発見することができる。けれども白色又は黒色は世界の諸人種に通じて発見することはできない。これ原人の皮膚の色は白色にもあらず黒色にもあらずして黄色であつたと思はれる理由の一である。

尚一つの理由は混合児の研究である。混合児の研究が何故原人を知るに役立つかと云へば家畜や家禽の種々の変種を混合すると元へ戻つて了ふ。此の理を人間に適合したのである。

元より混合児をもつて直ちに原人に近い者と云ふのではない。唯彼等の性質は原人の性質を考える一つの典拠となると云ふ迄である。其れは何故かと云へば彼等の皮膚の色は黄色であり、其の頭髮は赤色である、これが種々の混合児に屢々見る所の性質であるからである。

今日の日本人を見るに本源人種の特色たる黄色味を多分に持つて居る。勿論日本人の髪の毛は黒いが赤色は混合児の特徴と云つたまでで原人の特徴と断言することはできないから何れの色が原人の髪の色であるかはまだ明かでない。或は黒が原人の髪の色でなかつたかと思はれる。此の点より見て日本人種が本源人類の直系であるとする天啓に符合するが如く思われる。

次に之れと連関して知りたいことは原人の発生地である。これは種々の学者に依つて様々に論ぜられてある。或る学者は印度洋の亜弗利加に接した所に昔島があつて此処が元となつて其の住民が亜細亜、亜弗利加、欧羅巴の諸地方に広がつたものであると云ひ、又た或る学者は北極が元であつて其れから人類が諸地方に分布したものであらうと云つて居る。これは何れも皆其の地点が諸大陸の集合点であるといふ所より生み出した一元説である。

尚一つの説はアトランチス説即ち亜米利加と亜弗利加との間に大なる島があつて、其処を根拠として一部は亜米利加へ行き一部は亜弗利加へ広がつたのであらうと云ふ説である。（此の想像の島をアトランチスと云ふ。）

此の説の起りは古代秘露墨其西哥辺に開化した人種の住居した根拠であるが其の遺物は古代の埃及人の遺物と似て居る。これが此の説の起りである。

以上の諸説の外に独逸のライン河、仏蘭西のセーヌ河、埃及のナイル河、小亜細亜のチグリヌーフラテス河、印度のガンヂス河、支那の黄河、亜米利加のミスシツピー河の如きをもつて人類の発生地であるとする複元説もあるがこれは何れも確實なる事実に基づいて主張するものにあらずして凡そ一個の想像説である。

何故なれば今日吾人の知つて居る世界の地形は沖積期以後の地形であつて、其の太古に於ては決して今日の地形を有して居たものではないからである。従つて今日のサハラ沙漠は往昔は海底であつたこと亜拉比亞が島であつたこと、印度の先端が島であつたこと等は略推測することはできるが今日大洋になる所になんか島があり、陸があつたか兎ても第三紀以前乃至第三紀以後沖積期に至る間の世界の地図を満足に描くことは不可能である。従つて今日の世界の地図を開いて人類の根源地を想像するが如きは地形の変化といふ事実を度外視した一種の妄想説に過ぎないのである。

けれども強めて如何なる地帯に人類は生活したか？ 即ち寒帯地方に生活したか熱帯地方に生活したか？ これは人間に最も類似した獣類即ち類人猿の住居地より推測して略熱帯地方であるといふことだけは断言することができる。

以上述べた理由に依つて今日の所科学者は人類の発生地を知ることには殆んど絶望して居る。此の際に突如して起つたのが天理教の日本根源説である。

元来日本根源説は彼の猶太人がアダム、イブの直系であると信じて居たやうに日本国民の精神を暗々裡に支配して来た。事実今日——支那思想、印度思想、西洋思想の洗礼を受けた今日——でも尚ほ此の信仰は日本人を継いで居る。

即ち日本は神国であるといふこと日本国民は神の子孫であること、此等の信仰は折に触れ、時につけて直ちに發揮するのである。従つて天理教の日本根源説は日本国民にとつて敢て珍らしい説ではないのである。

古来日本国民の間には大和地方をもつて旧高天ヶ原の所在地と考へて居た。今回天理教の天啓に依つて其れが事実であることを確められたのである。

御神楽歌の序歌に

このところやまとのぢばのかみがたと
いふていれどももとしらぬ
このもとをくはしくきいたことならば
いかなものでもこいしなる

と云ふ歌詞がある。

かみがた（上方）は即ち神館である、神の鎮座所であるこれに依つて見ても古来の日本民族の靈の故郷であつた高天原は大和であつたことが明かになつたのである。

次に一言しなければならぬのは天理教の地場——地場とは所謂人間始め元の地場を云ふのである——である。これは従来宗教も科学も曾つて説かなかつた所のものであつて天理教に依つて始めて説かれたのである。

今回天理教に依つて始めて其れが東方の神国にして且つ自然の最恵国たる日本であつたことが明かになつたのである。

御筆先に

此の世の始まり出しは大和にて山辺郡の庄屋敷なり
其のうちに中山氏と云ふ屋敷人間はじめ道具見えるで
此の道具伊邪那岐と伊邪那美と国狭土と月読となり
月日より其れを見澄し天降り何か万を仕込む模様を
此の所何をすにも何のよふな事をすのも皆月日なり
何の様な事を云ふにも皆月日側なる者は真似をして見よ
此の世を始めてからに今日までは本眞実を云ふた事なし
今日の日は何のよな事も眞実を云はねばならぬ様になるから
此の道は何ふいふ事と思ふかな甘露台の一條の事
此の台を何う云ふ事に思ふてゐるこれは日本の一の宝や
これをばな何んと思ふて皆のものこもとなるを誰も知るまい
此の度は此の元なるを眞実に何うせ世界へ皆教しへたい
此の元は伊邪那岐と伊邪那美と身の内なるの本眞中や
其の所で世界中の人間は皆其の地場で始めかけたで
其の地場で世界一列何処までもほれば日本の故郷なるぞや
人間を始めかけた証拠に甘露台を据へて置くぞや
此の台が皆揃いさいしたならば何んな事をか叶はんでなし
今までは此の世始めた人間の元なる地場は誰も知らんで
此の度は此の眞実を世界中へ何うぞ確いかり教しへたいから
それ故に甘露台をはしめたい本元なるのところなるぞや
月日には世界中らを見渡せと元始りを知りたものなし
此の元を何うぞ世界へ教へたさそこで月日があらわれて出た
確かと聞け此の世はじめを眞実と云ふて話しは説いてあれども
世界には誰か知りたるものはなし何を云ふてもわかりかたない
其の筈や此の世始めてない事をだん／＼口説きばかりなるから
此の世の始まりだしの眞実を知らして置かん事に於ては
今までも助け一條とまゝ説けどほん眞実を知らぬことから
何のよふな事でも月日云ふ事やこれ眞実と思て聞くな
何のよふな事もだん／＼云て聞かすこれを眞実と思て聞き分け
此の世の本元なると云ふのはな此の所より外にあるまい
此の話し何う云ふ事に思ふかな何も眞実聞かしたいから
此の世を始め出したる眞実を皆一列は承知せへねば
何の様な助けするにも人並の様なることは云ふでないから
今までに見えたる事やある事は其んな事をば云ふてないぞや
これまでにない事計り云て聞かし眞実よりの助けするぞや

と、これに依つて吾人は始めて確実に吾人人類の最初の故郷（靈肉の）を知ることができ

る。更らに御筆先より神の総領世界の大本家たる日本国民に対する神歌を一二拾つて見れば
日本見よ小さい様に思たれど根があらはれば恐れ入るぞや
枝先は大きに見えてあかんものかまへば折れる先を見てゐよ
元なるを小さい様で根が偉い何の様な事も元を知るなり
同じ木の根へと枝との事ならば枝は折れくる根は栄いでる
今迄は唐は偉いと云ふたれどこれから先きは折れるばかりや
此の力人間業と思はれぬ神の力や之れは叶はん
上たるは何も知らずに唐人に従ふ心これがをかしい
日々に神の心の急き込みは唐人ころり之れを待つなり
何にても神一條を知りたなら唐に負けそうな事はないぞや
此の先は唐と日本を速かにだん／＼分けるもよふばかりを
これさへが早くわかりた事ならば神の残念晴れることなり
だん／＼と万つ助けを皆教しへ唐と日本を分けるばかりや
日々に唐と日本を分ける見よ神の急き込みこれが一條
だん／＼と何事にても日本には知らん事をばないと云ふ様に
此度は何んぼ唐やと云ふたとて日本が負けるためしないぞや
これまでは唐やと云ふてはばかりてこれも月日が教しへ来るで
此の度は月日元へと立ち帰り木の根確いかり皆あらはすで

此等の神歌は勿論御筆先に表はれた日本に関する神の思想の一部分であるがこれに依つ
て見ても日本は人類の根源神の長子にして如何に深く日々神の大なる恩恵を蒙りつゝある
かを知ることが出来る。最後に一言付け加へて置きたいことは「九億九万年水中の棲
ひ、六千年が智識の仕込み、三千九百九十九年が学問の仕込み」と云ふ天啓の声と「身の
内あつて律がある、律があつても心の定め之れが第一」と云ふ教祖の遺言である。此等の
言葉（九億九万年水中の棲ひといふ言葉は例外であるが）は比較的人間の智力を以つて推
測し得らるゝ近代の事に属するから教祖の後天的智識に依つて組織せられた言葉であると
信ずる人があるかも知らない。けれども教祖中山ミキ子は世人の知る如く文字の素養は極
めて貧しい人であつた。従つてかくの如き近代的の事実迄も組織的に述べ得る後天的智識
はなかつたのである。従つて勢ひ之れを先天的智識に帰さなければならぬ。

神は更らに現代人の地位を説明して
「今日の間人はこれを一人の人間に譬へたならば恰度十五歳になつたのである、人間十五
歳と云へば一人前の人間である。今迄は子供の事であるから何を云つても訊らないから差
控えて居たが今度は充分生長して一人前の人間に生長したのであるから人間一人前の仕込
みをする為めに今度の教（天理教）を始めたものである」
と云はれ、更らに

「世界中子供の成人待ち兼ねる神の思はくこればかりやで」
世界中の子供が之れ丈けに成人するのを神は待つて待つて待ちあぐんで居たと云はれて居
るが要するに今日迄の人間は予備教育時代であつた。今後の人間が本当の本科教育である
のである。

今「六千年が智識の仕込み、三千九百九十九年が学問の仕込み」と云ふ言葉に就て研究
するに人類が始めて文字を創作し書物を編纂するに至つたのは漸々四千年前後である。支
那の如き比較的文化の早く発達した国に於ても三千年以前（孔子時代）には未だ竹に文字
を彫刻して綴つた様な不完全な状態であつた。従つて三千九百九十九年が学問の仕込みを
云ふ天啓の言葉は事実に符合して居る。

次に「六千年が智識の仕込み」といふ言葉である。アルフレッド、ラツセル、ウオーレ
ースは智能は他より与へられたといふ説を唱へて居るが、智識其の物は漸次他より啓発せ
られたとしても智能其の者は微生動物の過去より先天的に人間の生命に潜在した力であ
る。其れが生命の発達と共に発芽したものである。ウオーレースの説は現在の間人と動物
とを比較して立てたる説であつて動物より今日の間人に迄発達した過渡時代の間人を忘れ
た説である。従つて此処に六千年が智識の仕込みと云ふ天啓の言葉を狭く取つて今より約
一万年以前から始めて神が人類に智能を授けたと誤解してはならない。これは当時の人間
は体育も既に完成したから次に智育期に移つたことを語るまでゝある、此の天啓の言葉も
学者の研究と一致して居る。

次に研究すべき言葉は「身の内（人間）あつて律（法律）がある、律（法律）があつて
も心の定め（信仰）それが第一」と云ふ言葉であるがこれも人類発達史より見て当然の事
実である。即ち現在は未だ法律時代を脱しないが来る可き時代は信仰時代道德時代でなけ

ればならぬ。それは精神家の等しく認むる所の事実である。

結 論

以上述べた所に依つて大略天理教の新創世説は如何なる内容と如何なる価値とを有するかを理解し得る筈である。

私は此処に今迄吾人人類の誕生の歴史に関する吾人人類の父母（神）の物語の間接の例証として一つの譬喩を挙げやうと思ふ。其れは吾人人類の一個体の誕生の歴史である。

吾人は三才にして始めて言語の初歩を解し、七才にして始めて文字の初歩を学ぶ。而して覚束なくも言語と文字の一端に触れるのである。吾人が漸く記録を読み乃至記録を残すは其れ以後十五歳以後の事に属するのである。其れ以前の自己の歴史即ち胎内期と誕生後の歴史——に關しては何等の記録を有せざるのみならず其れに対する明瞭なる記憶さへないのである。これが吾人人類の幼少年時代の自然の生活状態である。

吾人の未成人時代の記憶は而かく不完全である。けれども吾人を生んだ父母は吾人の誕生以前乃至誕生以後の歴史を詳しく知つて居る。何故なれば彼等は吾等子女に先つて存したからである。之れと同一の理が吾人人類と神との間に行はれて居る。即ち神は吾人人類以前に既に存在した不生不滅の全知者であるから明かに吾人人類の発生並に其の発達の歴史を知つて居る筈である。

今回天理教に依つて啓示せられた事實は實に人類の記憶以前人類の記録以前の歴史である。従つて吾人は其れを否定することもできなければ肯定することもできない。其れは恰かも吾人の幼時に關して物語れる父母の物語を否定することもできなければ肯定することもできないと同一である。吾人が其れを事實として信ずるのは父母に対する信仰と後天的に他人の個体の発達の觀察より得たる予備智識に依つてである。

世人は云ふ。吾人は眼に見えざる神の天啓に依つて吾人の過去を知るよりは目に見ゆる科学によりて吾人人類の過去を知る方が一層確實にして安全であると、其れは其うかも知らない。けれども科学に依つて吾人人類の過去を知ることとは自分以外の他の個体の発達の歴史を見て自分の過去を類想する様なものである。恐らく眞の自分の歴史を知ることとはできないであらう。

けれども私は元より事實に即して確實なる研究の歩武を進めて行く科学の努力を無益の業として退けるものではない。否な寧ろ其の眞面目なる努力に対しては多大の尊敬を払ふものである。けれども私が今日迄科学の研究より得たる僅かの経験と智識に依つても科学の吾人に教ゆる所のものとは皮相の断片的事實に過ぎないといふことを知つて居る。恐らく将来科学が長足の進歩をした後と雖も亦此の不備より脱することはできないのであらう。これは少しく科学の能力と其の与へられたる世界とを知る者には容易に承認し得る事實である。

従つて私は目に見ゆる外面の事實に關しては科学の研究に信頼し、目に見えざる内面の事實に關しては宗教の啓示に信頼するのである。これが吾人宇宙人生の眞実に徹底せんとすものゝ取るべき又取らざるを得ない唯一の態度である。

今日の学者は未だ古き書齋より出で、此の新しき書齋に入つて今日迄公然の秘密として秘められたる古くして而かも新しき宇宙人生の秘密を探らうとしない。更らに其れよりも密接なる關係を吾人の日常生活の上に有せる天理教の新思想を研究することに依つて今日既に信仰と生命とを失つた旧思想旧道徳旧信仰より救はれやうとはしない。これ纖才微力をも顧みず聊か天理教の新創世説の一端を世に紹介せんとする所以である。尚ほ詳細なる研究は他日天理教全体の新研究と相待つて漸次社会に発表したいと思つて居る。

終りに臨んで一言、人類を十億万年の長日月の間不斷の守護を加へられたる神に対して未だ人類の知らざる記録以前記憶以前的人类生活の歴史を啓示せられたことを、全人類に代つて深く感謝するのである。（大正四年三月廿七日脱稿）

附 説

ミキ子が此の新創世説を説き出した年間は明かでないが天保九年（西曆一八三八年）十月二十六日に天啓のあつて以来間もなく国常立命面足命以下十柱の神が彼女の肉体を神の社とし刻限／＼に泥海以来の道程を説明せられたと云ふのであるから彼女が此の説を唱へ始めたのも殆んど立教と同時であると思つて良いのである。

今日では進化論の元祖と云へば普通ダーウイン（Charles Robert Darwin 1809-82）を指す。けれどもミキ子は既に今日の進化論の萌芽の表われざる二十有以前に於て進化論を発表し人類起源論を説いたのである。

ダーウインが人種の起源（The origin of Species）を書いたのは一八五九年である。

又た人類の起源 (The Descent of man) を書いたのは一八七一年である。即ちミキ子が天地開闢説、人類起源論、人類進化論を唱へ出してより前者は二十二年目、後者は三十三年目である。

此の驚くべき宇宙人生の眞の歴史が当時西洋の学説とは殆んど何等の交渉もなかつた日本の片田舎 (大和三島) の一婦人によつて唱え出されたといふことは實に学界の紀元を顛倒せしむべき驚くべき事実たると共に實に人類史上の一大出来事と云はなければならぬ。将来天理教が全世界に普及した暁には今日宗教界、哲学界、科学界の新学説の元祖は必ずや彼女をもつてするであらう。其の時に於て最も学界の大問題となるのは此の創世記である。之れを完全に理解するには最も大なる補助学科即ち科学、哲学、芸術、宗教に関する予備智識がなければならぬ。然らざれば此の最も重大なる宇宙人生の根元的事実の誤解より彼は恐るべき異端邪教徒の群に墮せねばならぬやうになるであらう。

就中最も複雑なる問題は神觀である。これは他日更めて論ずる心算であるが教祖はこれを説くに或は姿よりし或は心よりし或は体よりし或は用よりした。従つて之れを正當に理解するには八方自在の智識がなければならぬ。

教祖は月日が神である。水火が神である。天と地とが元の親、そよ吹く風は月様の息さし引く潮は日様の息 (又た吐く息は月様引く息は日様ともいふ) といふやうな説明より男は上よりつくより月といひ、女は下よりひく故日と云ふ又た月は国常立命であり、日は面足命であるといふ事又た龍は国常立命の姿であり、蛇は面足命の姿であると云ふ様の説明並に冷熱、暗明、夜昼剛柔北南といふが如き神の八面觀を述べて居られるが。畢竟陰陽と云ふも、男女と云ふも、冷熱といふも、暗明といふも、夜昼といふも、剛柔といふも、北南といふも、天地といふも、月日といふも、水火といふも、宇宙生命の兩極性を實質的に説明すると作用的に説明すると空間的に説明すると時間的に説明するとの差異に過ぎないものであつて其の主体は全然同一である。

例へば之れを最も簡単な例に就て説明せば寒暖計の零度を代表するものは国常立命であり、百度を代表するものは面足命 (これは女は懐妊すると日々身が重くなるといふ理の名称であるから重足と書くべきものである) である、而かも此の冷熱の温度は性質の差別ではなく程度の差異である。之れは善悪幸不幸健不健に就ても同一である。即ち善悪といつても二種の間があるのではなくより小なる善を大なる善より見る時に於て始めて悪となるのである。又た幸不幸と云つても其の間劃然たる性質上の區別があるのではなくして唯より幸福なる者より見てより小なる幸福の人を見る時は不幸となるのである。健不健も亦同一である。普通病氣であるとか健全であるとか稱するのは唯比較的の言葉であつて實際の人間に就てかくの如き劃然たる分類法を採用することはできないのである。

此の点より見て最も興味深い教祖の人性觀は

世の中にあしきといふて更らになし

一寸の埃がついた計りや

といふ一元的性善説である。

此の教祖の人性觀を神觀に應用せば神即ち宇宙生命の实体は一元的のものであるが其の兩極性をとつて比較する時は一見二元的の觀を呈するのである。

之れを物理学より説明せば宇宙の遠心力を代表するものは国常立命である。宇宙の求心力を代表するものは面足命である。之れを人間の精神より説明すれば前者は智となり、後者は情となる。男性が外部に向つて発展せんとするは此の遠心力の権化であるからであり、女性が内部に向つて発展せんとするは此の求心力の権化であるからである。智は冷なり、情は熱なり、男は水性であり、女は火性であり、男の精神作用が複雑なるは男の父なる遠心力 (国常立命) は分裂を司る力であるからである。女の精神作用の単純なるは女の母なる求心力 (面足命) は統一を司る力であるからである。男性の表象は武勇であり、女性の表象は慈愛である。けれども此の二元的の自然現象、又は人間的現象は全然別種のものでなく宇宙生命といふ一つの力が内に向つて発展すると外に向つて発展すると、表に向つて発展すると裏に向つて発展するととの相異に依て起る差別である。

由来生命力は四方面のものである。凡ての方面に向つて拡充せんとする性質を有して居る。其れが内に面すると外に面すると表に向ふと裏に向ふとに依つて陰陽男女の差を生じ積極力と消極力との別を生ずるのである。之れが大宇宙的に表現せられたものが国常立命と面足命とである。此の一元にして二元的なる大宇宙生命力の分靈と分身とを受けたものが人間である。

ミキ子は男女兩性の由つて起る根元的原因を男神即ち国常立命の食つた鱈 (教祖は此の鱈は今この尺でさすと三寸やと云つた) の魂が男となり面足命の食つた鱈の魂が女となつたと説いてあるが之れを形より見ては到底、其の眞義を理解することの出来ないのである。此処に国常立命乃至面足命が鱈を食ふたといふ事は鱈といふ宇宙生命の分靈を国常立命即ち男性的宇宙生命力が合一したのである。又た面足命が鱈を食ふたといふのは面足命とい

ふ女性的生命力が鱧といふ宇宙生命の分霊を合一したのである。例へば北極に向つて流るゝ一滴一滴の水を北氷洋に合し南極に向つて流るゝ一滴一滴の水を南氷洋に合せしが如くに、かくの如く鱧の靈魂は一は男性化せられ一は女性化せらるゝこと北氷洋に流れ出でし水は北氷洋化され、南氷洋に流れ出たる水は南氷洋化せらるゝが如きものである。けれども此処に一つの疑問の生ずるのは同じ鱧の魂が国常立命に食はれたるが為めに男性化し、面足命に依つて食はれたるが為めに女性化し得るかの問題である。自分一個の考を述べれば鱧は神の靈化を受けない以前に既に性の差別を有したものであらうと思はれる。其れが宇宙生命の自然の法則（神の意志と云つても良い）によつて男性的生命力は男性的宇宙生命力即ち国常立命に合せられ、女性的生命は女性的宇宙生命力即ち面足命に合せられ改めて分離したものであると思はれる。要するに生死といふも個体の生命力が大宇宙の生命力と合すると離れるとによつて生ずる現象をさすものに外ならないのである。昔から龍は水吹き、蛇は火吹くといひ、又た龍は天に昇り、蛇は淵に棲むといふ言葉が伝つてあるが此の龍といひ、蛇といふのを直ちに画家の手に描かれたる龍や蛇の姿をもつて其れであると想像してはならない。教祖は月即ち国常立命の姿（龍）は此の世は理の世（理世）であるといふことを表象せるものと説き、又た日即ち面足命の姿を大蛇と云ふは面足命（地）は此の世の台じや（台である）といふ意味を表象したものであると説明した。此の土地を大地といひ又た土台といふ。要するに理が台（基礎）となつて此の世界此の人類が始まつたものであるといふ。宇宙生成の根本原理を具体せられ表象化せられたものと見るべきである。

教祖は理が親だぜといひ又た神は理やぜ理は神やぜとも云つて居る。仏教では理生觀を説き、基督教では神生觀を説いて居るが天理教は其の両面より説明して居るのである。これ天理教が四方正面の宗教たることを証明立てる一例である。

御筆先にも此の世は理いでせめたる世界なら何か万を歌の理でせめといふ御言葉があるが此の世界に有りと凡ゆる物は一として天然自然の理に基いて生れたものでないものはない。云ひ換へれば一として理の表象でないものはない。天理教は即ち其の根源に遡つて宇宙人生の一切の起源より説き起し、もつて未来永遠の人生の帰趣を知らしむるところの宗教である。従つて其の説明は在来の宗教や哲学や科学の説明せんとして説明し得なかつた天理教独特の境地をもつて居る。為めに世の浅識者は其の半面を見て深くも其の眞実を探らうとせず此の深遠なる新説をもつて、往々牽強附会の説として一笑し去る者が多いが凡て曠世の過去に於ては其の理も亦単純であるから今日より見れば或は牽強附会の説とも見れば見られるものが沢山ある。けれども其れを眞に理解するには今日の智識を離れて遠き曠世の過去に身を置いて見なければならぬことを記憶せねばならぬ。例へば人間の指が五本あるのはこれは人類の父岐魚即ち伊邪那岐命の鱗にあつた五本の肋骨が発達したものであるといふ（又た一説には両手併せて十本の指は十柱の神の象徴ともいふ）が如き、又た人類の母親美即ち伊邪那美命の尾鱗（一説には岐魚の尾鱗ともいふ）の厚さを一分と定めたといふが如き、又た人間の中指を曲げた眞中の節より節の間を一寸と定め（其の内側を五分と定め）人間の身長を其の五十倍と定めた（一人によつて身長に長短あるは節と節との間に長短があるからである）が如き、又た人間の身体を身といふは元の母親の美を台として生れたから身の内といふ、身方といひ、又た身上が台ともいふが如き又た命といふは美が此の世の始まり、美が事の始まりであるからミコトといふといふが如き、又た七十五日を帯屋中といひ、三十日を半帯屋といひ、十一日を産明と云ひ、七日を七夜といひ其の間腹帯をしたり毒厭みをしたりして普通の人の如く外出することのできないのは元の親が此れ又けの日数の間産で苦勞をした報恩の為めであるといふが如き。又た此の世の元始りは夜即ち国常立命であるから子供を宿し込むのも夜であるといふが如きは其の一例である。

此等並びに之れに類する縁起由来は一見何の価値なき牽強附会の説と見れば見られるのであるが、此の人生の根本的原理と根本的事実とを知らなければ到底眞に人生の帰趣を解決することはできないのである。教祖は人に向つて

「根を掘れ／＼」

と勧め分らんことは何でも聞けと云つたが当時は彼女の門弟中に教祖の所謂根を掘つて／＼掘り抜くに足る実力がなかつた為めに今日遺つて居るのは教祖の口より漏れし断片語に過ぎないのは千載の遺憾である。

(教祖は仏教を始め其の他諸宗教との関係並びに各宗の教理に関しても深い先天的の宗教的智識をもつてゐたがこれも門弟中に熱心なる研究者がなかつた為め真に其の該博なる先天的宗教的智識の一部にしか接することのできないのは残念である。)

此の説が始めて門外(信徒以外)に出たのは恐らく明治七年十一月十五日山村御殿に於いて円照寺の宮の質問に対して答へたのが始めてであらうと思はれる。

其の時ミキ子は辻、中田、松尾、大東等の諸門弟並に婦人としては佐藤政子を伴つて行つたが当時の訊問役であつたところの奈良県社寺掛稲尾某の質問に対し流暢なる快弁をもつて泥海以来の道程を説明したので役人も一言半句の言葉なく却つて宮様より茶菓を頂戴して歸つたといふことである。

越えて明治十九年神道本局の幹事古川内海の兩人が視察に来た。其の時教祖は上段の間にあつたが、どれ／＼私が聞かしてやる

と云ひながら泥海以来の道程を一言半句の淀みなく説き流した。兩人も始めは無学の老婆と侮り、言葉に渋濁があつたら突き込んでやらうと思つて内心刃を研いで居たが教祖の態度といひ、言葉といひ、一点の非の打ち所がなかつた為め却つて恐縮して引き退つたといふことである。

之れが此の説の公然門外に出た始めであらうと思はれる。其の後天理教本部にあつては不徹底の俗人の毀笑を恐れてか今日では却つて此の天理教の根であるところの最も重要な教理の説明を隠蔽して居る。けれども此の問題こそ将来斯教を発展せしむべき大責任を有する青年天理教徒否な全世界の学者の進んで研究せざるべからざる所の大問題である。

(恐らく今日の学者中一人として天理教の創世説を否定し得るものはないであらう。然るに天理教当局者が獵師に苛責せられたる苦き経験を忘れ得ず穴中に蟄居せる臆病なる兎の如く萎縮して居るのは教祖立教の精神を汚すの大なるものである。)

私は常に感じてゐる。

道が遅れた、布教を急げ

と。私の見る所に依れば天理教は神の最初の予定より少くとも十年乃至二十年遅れて居る。殊に最近十年間の天理教徒の萎靡沈滞は驚くに耐へて居る。

もし今日にして反省せずば近き将来に於て鼓膜を擘く天の霹靂を聞かねばならぬであらう。私は切に今日に於て天理教当局者の覚醒を希望する。

と思ふ。

其の第一の問題は今日の人類の数は十億万年の過去に於て伊邪那美命の胎内より生れ出でたる子数に殆んど二倍するの事実である。此の問題に関して参考の為め教祖と或る人との間に交換せられた応答を紹介せう。

或る時門弟の梅谷氏より仲田山本の諸氏に人間は九億九万九千九百九十九人と聞かせられて居るが其の中に牛馬に墮ちて居る者もあるとの事であるから現在の人間の数は殖へて居るか其れとも亦減つて居るかと云ふ質問を呈出したことがあつた。

其の時質問を受けた諸氏は

「其んなことは知らないから神様に伺つて見やう」

と云つて教祖の前に出て仲田氏から右の質問をすると教祖は暫時の間天に向つて御伺の体であつたが「其れは殖へてあると仰やる」

と云はれた。其の理由の説明には

「人間の数は九億九万九千九百九十九人で中に牛馬に落ちて居る者もあるなれども此の世始めの時より後の生物が出世して人間とのぼつて居るものが沢山ある。其れは鳥でも獣でも人間を見てあゝ羨しいものや人間になりたいと思ふ一念よりして生れ変り出變りしてだんく機能を積むで天に其の本心を顕してやる。すると今度は人間に生れて来るのやで。其ういふ訳で人間に引き上げて貰ふた者が沢山あるで。」と。

之れに連関する第二の問題は生物の進化に関する教祖の直話である。

本部定詰の役員中仲田、山本、高井の如き諸氏は閑暇の折には折々打ち揃ふて釣りに出た。其の時は常に教祖の許を乞ふのが例であつた。請暇の御願に出ると教祖は

「捕つて来たら必ずわしの処へ持つてくるのやで」

と云つた。其れで釣りに出掛けた人達は鱈やモロコエビ等を釣つて歸ると早速其れを甘煮にして教祖へ進めると教祖は其の中で一番大きいのを取つて

「此ういふ者に生れてくるさかいに人間に喰はれてしまはにやならん。早う人間に引き上げて貰へよ」と云ひながら口に入れ、やがて一同に向つて

「サア皆さんおいしう喰べてやつて下され」

といつて其の後を下げるを常とした。

或る時教祖は側の人々に向つて其の中で一番大きい魚を選択する理由を説明して

「こふして此の中で一番大きいものを得心さしたなら後は皆な得心する道理やろ。講を結

ぶにも同じ事やで、一村の中で大頭の者が得心したと云ふたら後は皆な随いて来るやろ。よし随いて来ぬにしても邪魔をするやうな事はあるまいがな」

といひ、又

「生物は皆な人間に食べられておいしいなあといふて喜んで貰ふて生れ変わる度毎に人間の方に近うなるのやで。其うやからして何んな者でもおいしくと云ふて食べてやらにやならん。なれども牛馬と云ふたら是は食べるものやないで。人間から落ちる心の汚れたものやでな」

と云つた。

時々講社の先から兎や雉子山鳥を神様——其の頃は教祖の事を神様と云つてゐた——へ上げて戴きたいと持つて来る者がある時は教祖は三度其れを撫でゝ

「此う云ふ者に生れてくるさかいに人に喰はれてしまはにやならん。早う人間に引上げて貰へよ」

と云ひ、其れから一同の者に向つて

「必ずおいしう食べてやつて下され」

と云つて下げるを常としたといふことである。

此の教祖の逸話は往々教祖の無限の慈愛を語る絶好の材料であると共に教祖の生物観の発表である。次に来る第三の問題は世界の発達並びに人類進化の加速度と時の問題である。

或る人は九億九万九千九百九十九は無限の数の表象であると説くけれどもこれは種々なる方面より見て文字通りに人類の数及び年齢を表現せるものなることを証明し得るのである。

普通原人より猿に進化する迄の間を八千八度の更生（今日迄九千九百九十九度の更生）と説いて居るけれども其間の年数は明かでない。一説には九千九百九十九年と云つて居るが、これは何等の誤聞ではないかと思はれる。といふのは現人の発生は少くとも二十五万年以来の事実属して居る。其れ以前に於て猿類が生活して居たとしても今より九億九万年以前に猿類が生活して居たといふことは殆んど信すべき根拠がないからである。

伝説に従へば八千八度の更生がすむと後の残つたものが猿である。其れが即ち国狭土命の魂である。此の胎内へ宿つたのが男五人に女五人。一度に十人づゝ宿し込んだ。（これを十人組といふ。）十月経つて生れ出したのが五分から。五分くとして成人して八寸迄生長した時此の人間も子を産むやうになり男五人女五人合せて十人づゝ生み下ろした。かくの如くして親は子となり子は親となり一尺八寸迄に生長した時元の人數九億九万九千九百九十九人が全部揃つた。

爾來人間は生れ変り出變はるに従つて男一人女一人を宿し込むやうになり漸次生長して三尺になつた時始めて物を言ひ始めた。（今日の人間が三歳になると物を言ひかけるのは生物発生原則を胎外に於て繰返すのである）といふのである。

翻つて世界発達の歴史を繰れば泥海中に高低の出来かけたのは人間が八寸に生長した時である。三尺の時から天地海山が分かれかけ五尺の人間になつた時天地海山速かに分かれたと云われてある。（人間の陸上生活は此の時に始まつたのである。）教祖は此の世界発達の状態を説明して、「恰度紙袋に風を入れるやうなもの、風のはいる程段々と膨らむ如くや」

と云つた。

以上の説明によつて世界の発達と人類の進化とは相平行して進んで来たものであることは明かであるが此処に研究したいのは其の加速度の問題である。

普通九億九万年水中の棲ひ、六千年が智識の仕込み、三千九百九十九年が学問の仕込み（一説には今より六千年前に学問の仕込みを始めたが未だ時期が早かつた為め四千年前に再び始めかけたといふ）と云つて居る点より見れば最近一万年間の人類の進化は驚くべき速力を以つて進歩しつゝあることを知ることができる。これは恰かも彼の無限の高さより或る物体を投ずる時は

1

墜落秒數

($e \times 16 \cdot \cdot$
feet)

21

の加速度をもつて墜落するのである。従つて墜落の時間が大なれば大なる程其の最終の加速度は大である。人類進化の速度も此れと同一の法則に支配せられて居るのである。

此の点より見て人類創造の第一年と十億万年後の今日に於ける一年とは同じ一年であつても其の一年間の人類発達世界発達の速度は比較すべからざる程大なる距離を有して居るのである。従つて今日の一年と原始時代の一年とは之れを人間進化の實質より見て同一に

論ずべからざるや云ふ迄もない。否な今日の一年は或は何千年乃至何万年に相当するかも知らないのである。従つて数字の上よりのみ見て時間的価値を論ずることはできないのである。

私は疑ふ。最近一万年の人類生活は既往に於ける九億九万年の長年月に相当するのではないかと。此の想像は当らずとも遠くはないと思はれる。

第四は人類の起源に関する問題である。

此の問題も本文中に一寸触れては居るが之れを教理の上より説明することを逸したから一言云ひ添へて置ふと思ふ。

抑も人間生活に何が一番必要であるかと云へば第一の要素は食物である。(教祖は之れを一の樂と命名けた。)これは人間の生長に應じて神より其れ／＼泥海中に与へて来たが人間三尺になつた時には欲心が生じ、其の爲めに彼方此方と自ら食物を求め廻り各自好みの土地に上陸した。其の中大和に生れたもの丈けが日本に残つたのである。其れで日本は日の本又は大大和ともいひ、日本民族を大和民族ともいふ。

之れが天理教より見たる人種起源説であるが此處で吾人の知りたいことは人間三尺に生長した時は今より何億何万年以前であつたかと云う問題である。此の問題が明かになれば人種の起源の根本問題は解決せられるのであるが今日の所は天啓も科学も其れ迄に進んで居ないから止むを得ない。

第五の問題は地場の問題である。

或る人は天理教の地場をもつて単に靈の故郷と見やうとして居るが其れでは此の世界に二となき天理教独特の靈地を普通一遍の他の宗教の本山若しくは靈地と同一価値に墮せしめんとするのである。これ吾人が此の不具の邪説に組し得ざる原因である。

抑も天理教の天理教たる価値は其の教理の卓逸せることは云ふ迄もないが更らに其れよりも大なる潜勢力は此の地場の歴史である。更らに詳しく云へば此の地場を中心として全人類が一苗一苗代として生れたといふ歴史的事実である。此の地場の歴史を剥奪して了つたならば神の与へた人生の根本定義である所の貨物借物の理の根底を失ふのみならず天理教々理の殆んど全部を恰かも肉を離れた靈の如く宙間に迷はしむるのである。

もし抽象理想をもつて此の人生を真に理想化することができるならば天理教の出現以前に既に／＼此の世界は理想の黄金世界化せられた筈である。然るに今日に至る迄其の実蹟の拏らざりし理由は何んであるか？之れを何處迄も徹底的に研究して行つたならば其れは靈の故郷を有して肉の故郷を有しないことに基因することになるであらう。云ひ換へれば靈の発生源と帰着点とを現実に有して居ないといふことになるのである。

由来神靈中心主義の如き四海同胞主義の如き、主義としては古くより宣伝せられて居る、而かも其の主義が単なる論理の遊戯と墮して了つたのは何の爲めであるか？其れは真に神と人とが如何なる関係より父子であるか？人と人とが如何なる関係より兄弟であるかと云ふ生きた根本的事実に即してゐなかつたからである。これ天理教が他の宗教に優りて靈界の接待權威者たる所以である。

要するに天理教の終局の理想は此の地場を中心とした平和にして且つ健全なる世界一家の大家族を復現せんとするのである。

然るに一部の一知半解の天理教徒は此の靈の故郷であると共に肉の故郷である所の地場の意義の一半を抹殺することによつて生命なき一個の宗教哲学を作らんとして居る。これが即ち教祖の精神を汚すことの甚だ大なるものである。と共に天理教立教の基礎を危くするものである。

此の他天理教の新創世説に連関して述べたいことは沢山あるが、其れは他日を待つて順次発表しやうと思ふ。

最後に一言言ひ添へて置きたいことは本文は先月三十日本部に向つて出発する以前に脱稿して既に印刷所の手へ附して居たのであるが其の後本部に於て秀才の譽の高かつた山名前会長の唯一の令息であつた故政一氏の苦心の結果蒐集した材料の一部を特に御令妹より呈示せられたので此の附説を書くに就て少なからぬ利益を受けたことを故人並びに故人の肉親の方々に向つて、深く感謝するのである。

古来東西古今の偉人傑士にして或は政治的に、或は軍事的に、或は宗教的に、或は倫理的に、或は哲学的に世界統一を企つた者の数は数ふるに違がない。けれども等しく其の目的を世界統一に置くと雖も其の理想の広狭浅深大小高下に依つて自ら其の間に無限の階級があるのである。今、之れを大体二種に區別すれば其の一は形式的世界統一主義者にして、他の一は精神的世界統一主義者である。前者に属する者は古くは秦の始皇帝の如き、アレキサンダー大王の如き、シエーザーの如き、仁吉斯汗の如き、近くはナポレオンの如き其の主なる者である。後者に属する者は古くは釈迦の如き、基督の如き、孔子の如き、ソクラテスの如き、マホメットの如き、近くは我が天理教祖の如き其の主なる者である。今此等の人々の世界統一の理想の内容及び価値を研究するに其の何れも根本的なる点に於て、徹底的なる点に於て、實際的なる点に於て、合理的なる点に於て吾が教祖に及ばないのである。

例へば秦の始皇帝の如き其の志や大なりと雖も、要は唯武力を以つて政治的軍事的に世界を自己の機能の下に統一せんとする利己主義的思想であつて其の人歿し、其の力去ればやがて再び元の如く分裂すべき性質のものである。之れ彼と其の志を等しうした者の受くべき共通の運命である。

けれども釈迦の如き基督の如き孔子の如きマホメットの如き、精神界の偉人の企つた世界統一の理想は其の焦点が欲にあらざりて徳にあり、肉にあらざりて靈にあり、物質にあらざりて精神にあり、形式にあらざりて実質にあり、虚偽にあらざりて眞実にあるが為めに其の人歿しても其の理想は永遠に人を繋いで居る。我が教祖の世界統一の理想も其の主調は世界の精神的統一にあつたとは云へ、其の間自ら區別のあつたのは時の発展に伴ふ神の大理想の進化を語るものである。

今吾が教祖の世界統一の大理想を東西古今の有形無形の世界統一主義者の理想とを比較するに吾が教祖の世界統一の理想には二つの大なる主義が流れて居る。其の一つは時間的世界統一の理想であつて他の一つは空間的世界統一の理想である。之れを具体的に云へば教祖は

第一 神靈中心主義者であつた。

第二 地場中心主義者であつた。

此の二つの理想が交錯し、化合したのが彼女の所謂大日本主義（云ひ換へれば世界主義）であつた。天理教は即ち此の大日本主義教（世界教人類教）である。

第一の神靈中心主義。之れは教祖の独創ではない。又た基督の独創でもない。古へより世界の民族の間を流れて居る主流である。之れは猶太の宗教史を繙く者に肯かるゝ事実であると共に又た我が神代史を繙く者に肯かるゝ所の事実である。けれども仏教と云へ、基督教と云へ、儒教と云へ、回々教と云へ乃至我が天理教と云へ、其の理想とする所は世界の精神的統一にあるとは云へ、彼等の何れも具体的の世界統一の中心点を欠いてゐた。其れは即ち天理教の地場である。教祖の遺訓に

「此世は神の世界と云ひながら何んなことでも芯は知らんで」と。芯とは地場並に地場に行われたる人間創造世界創造の事実である。これは如何なる宗教も有せざる天理教独特の霊地であると共に如何なる宗教も説かなかつた天理教初説の事実である。而して人生問題の根本的解決は此の地場一つの理に依つて始めて解決せられるのである。従つて地場一つの理は世界、人生の秘密を開く鍵である。

天啓に依れば天保九年を遡ること九億九万九千九百九十九年の過去に於て、伊邪那岐伊邪那美の二柱の神が国床立尊、重足尊の両神の命を受け国狭土尊、月読尊、惶根尊、雲読尊、大戸辺尊、大食天尊の六柱の神の助力を得て、現今の大和の三島に於て人間始め世界始めの基礎を立てたと云ふのである。

其の時人類の原母伊邪那美尊の胎内に宿つた原人の数は九億九万九千九百九十九人。臨月来つて現在の畿内を中心として日本国中に生み下ろした日数が七十五日、生れ出したは五分。五分／＼として成人して三尺の人間になつた時欲が生じ最初大和に生み下ろされた者は日本に止まり、其の他の国に生み下ろされた者は水草を追ふて外国に移住した。其の後生活状態の変化によつて生じたのが現在の人種別である。けれども其の元は一苗一苗代にして全人類は凡て神の子供であり兄弟である。唯其の間自ら長幼の序のあるのは現在の純大和民族は其の昔現在の和に最初生み下ろされた所謂神の長子であり、其の他の人類は大和以外の国に漸次生み下ろされた次子であるからである。（今日日本民族の精神を称して大和魂と云つて居るのは之れを詳しく云へば大和に生れた魂の謂である）天理教祖の抱いた大日本主義は此の人類の原始的關係を基礎として生れたのである、

之れを御筆先——教祖の遺著——に徴するに、
 万世の世一列見晴せど胸の分りた者はないから
 其の筈や説いて聞かしたことはない何も知らぬが無理でないぞや
 此の度は神が表へ顯れ何か委細を説いて聞かせる
 此の所やまとの地場のかみがたと云ふてみれども元は知るまい
 此のもとを詳しく聞いた事ならばいかな者でも皆恋しなる
 聞きたくば尋ね来るなら云ふて聞かす万づ委細の元の因縁
 神が出て何か委細を説くなれば世界一列心勇むる
 確と聞け此の元なるを云ふのはな国床立に重足様や
 此のお方泥海中を見すまして魚と巳とを側へ引き寄せ
 此の者に徳を寄せてだん／＼と守護教へた事であるなら
 此の道具国狭土と月読とこれ身の内へ仕込みたるなら
 雲読と惶根多いと大斗の弁大食天と寄せた事なら
 其れからは確しか世界を始しめよと神の相談しまりついたり
 是からは神の趣向と云ふものは並大抵の事でないぞや
 今までにない事ばかり始るは何を云ふのも六ヶ敷き事
 此の世を始めかけたる真実を誰か知りたる者はあるまい
 是からは何の様な事もだん／＼と云ふて聞かす詐と思ふな
 人間を始めかけたは魚と巳と是苗代と種に始めて
 此の者に月日胎内入り込んでだん／＼守護教へ込んだで
 此の子数九億九万九千九百九十九人なるぞや
 此の人を三日三夜さに宿しこみ三年三月止りて居た
 其れよりも生れ出したは五分からや五分／＼として成人をした
 此の者に一度教へた其の証拠同じ胎内三度宿りた
 此の世の真実の神月日なりあとなるは皆道具なるぞや
 人間を始め様とて段々と寄せて使ふた之れに神名を
 伊邪那岐と伊邪那美とが一の神これ天照皇の大神宮なり
 確かと聞け此の世始めを真実と云ふて話は説いてあれども
 世界には誰か知りたるものはなし何を云ふてもわかりかたない
 其の筈や此の世始めて無い事をだん／＼口説きばかりなるから
 此の世の始まり出しは大和にて山辺郡の庄屋敷なり
 其のうち中山氏と云ふ屋敷人間始め道具見えるで
 此の道具伊邪那岐（善兵衛）と伊邪那美（教祖）と国狭土（小寒子）と月読（秀司）

となり

月日より其れを見澄し天降り何か万づを仕込む模様を
 今迄も助け一條とまゝ説けど本真実を知らぬことから
 何の様な事もだん／＼云て聞かすこれを真事に思て聞き分け
 此の世の本元なると云ふのはな此の所より外にあるまい
 此の屋敷甘露台を据へるのは人間始めかけた証拠
 此の台を何う云ふ事に思ふてゐるこれは日本の一の宝や
 これをばな何んと思ふて皆のもの此の元なるを誰も知るまい
 此度は此の元なるを真実に何うせ世界へ皆教しへたい
 此の元は伊邪那岐と伊邪那美と身の内（人間）なるの本真中や
 其の所で世界中の人間は皆其の地場で始めかけたで
 其の地場で世界一列何処までも掘れば日本のこうきなるぞや
 人間を始めかけたる証拠に甘露台を据へて置くぞや
 此の台が皆揃いさいしたならば何んな事をか叶はんでなし
 其れ迄に世界中を何処までも胸の掃除をせねばならんで
 此の掃除何処に隔てはない程に月日見分けて居ると思へよ
 月日には何んな所に居るものも心次第に皆受けとるで
 今までは何んな心でゐたるとも夜の間に心入れかへ
 真実に心すきやか入れ換へば其れも月日がすぐに受け取る
 月日には世界中は皆我が子可愛い一杯思ふてみれども
 情ない何のよな思案するとて人も人を助ける心ないので
 これからは月日頼みや一列は心確つかり入れ更へてくれ
 此の心何う云ふ事であるならば世界助ける一條ばかりを
 此の先は世界中は一列に万づ互ひに助けするなら
 月日にも其の心をば受け取りて何んな助けもすると思へよ

月日も心引き受けするかからは何んなど事でも働きを
働きの何う云ふ事に思ふかかな善と悪と我が身を
今日までは何ん悪事かすかふたとて我が身に知
此の心は真実云て聞かす皆と云ふは更らにないぞ
世界中一列は皆兄弟や他人はないのでな其れが月
此の元を知り高山やとて谷底を俣に俣にせうな
確かと聞け月日變りて出る程に俣に俣にせうな
これは教祖の真実觀並に平等觀を述べたものである
以上は教祖の真実觀並に平等觀を述べたものであるが以下に其の差別觀相對觀を挙ぐ

る。

これからは唐（外国）と日本の話する何を云ふともわかりあるまい
唐人が日本の地へ入り込んで俣にするのが神の立腹
だん／＼と日本助ける模様立て唐人神の俣にするなり
此の先は唐と日本を分けると唐とわけるもようも之れも柱や
珍らしい此の世始めの甘露台これが日本の始まりとなる
高山の日本のもとの唐とわけるのは火と水とを入れて分けるで
唐人と日本のもとの唐とわけるのは火と水とを入れて分けるで
真実に掃除をしたる其の後は神一條で心勇むる
だん／＼と世界の心勇むなりこれは日本の治りとなる
今迄は唐が日本を俣にした神の残念何んとせうやら
此の先は日本が唐を俣にする皆一列は承知してゐよ
だん／＼と月日胎内入り込んで自由自在をしてかゝるでな
したるならなんぼ唐やと云ふたとて日本の者に之れは叶はん
これからは日本の者はだん／＼と月日引き立て之れを見てゐよ
何にも彼も何のよな事も皆教しへ知らぬ事をばない様にする
日本には柱を立てた事ならば病まず死なずに弱りなき様に
今迄は唐やと云ふてはびかりて俣にしてゐた今度かやしを
これまでも月日を知らぬものはないなれど本元知りたものなし
今迄も大小無数の思想家があつた。けれども本場の思想をもつて居る者は一人もなかつ
た。吾人は吾が教祖に於て始めて之れを見るのである。
だん／＼と日々心勇むでな何んとやまとは偉い豊年
日々に早く勤めを急き込めよいかなる難も皆免がれるで
勤めでも何う云ふ勤めするならば甘露台の一條の事
この台を何う云ふ事に思ふかなこれ日本の親であるぞや
こればかり何処尋ねてもない程にこれ日本の真の柱や
これさいか確しか見へ来た事ならば何んな者でも恐るものなし
何のよふな事もだん／＼知らしたさ日本の綱紀皆拵へる
此の話し何にの事をば云ふならば日本も唐も天竺の事
此の道を何ふいふ事と思ふかな甘露台の一條の事
此の台を何う云ふ事に思ふてゐるこれは日本の一の宝や
これをばな何んと思ふて皆の者此の元なるを誰も知るまい
此の度は此の元なるを真実に何うせ世界へ皆教しへたい
此処はエデンの花園である。人間の故郷である。世界無二の靈地である。
日本見よ小さい様に思たれど根があらはれば恐れ入るぞや
枝先は大きに見えてあかんものかまへば折れる先を見てゐよ
元なるを小さい様で根が偉い何の様な事も元を知るなり
同じ木の根へと枝との事ならば枝は折れくる根は栄いでる
今迄は唐は偉いと云ふたれどこれから先きは折れるばかりや
此の力人間業と思はれぬ神の力や之れは叶はん
上たるは何も知らずに唐人に従ふ心之れがかしい
日々に神の心の急き込みに唐人こるりこれを待つなり
何にても神一條を知りたなら唐に負けそな事はないぞや
此先は唐と日本を速かにだん／＼分けるもよふばかりを
これさいか早く分りた事ならば神の残念晴れることなり
だん／＼と万づ助けを皆教しへ唐と日本を分けるばかりや
日々に唐と日本を分ける見よ神の急き込み之れが一條
だん／＼と何事にても日本には知らん事をばないと云ふ様に
此の道をだん／＼親ひ行くなれば何んでもむかうに見える本道

是までに通り来るの道筋は唐も日本も分かりないので
此の先は何んぼ唐やと云ふたとて日本が負けるためしないぞや
これまでは唐やと云ふてはびかりてこれも月日が教しへ来るで
此の度は月日元へと立ち帰り木の根確つかり皆あらはす
此の世の地と天とが実の親それより出来た人間である
これからは唐も日本の知らぬ事計り云ふぞや確かと聞くなり
何事も月日の心思ふには日本に綱紀欲しいことから
日本にも綱紀を確しか慥へてそれ弘めたら唐は倭なり
此の話何んと思ふて皆の者日本のものは皆我が事や
其れ知らず何んと思ふて上たるは胸が分らん月日残念
此の所何のよな綱紀したるともこれは日本の宝なるぞや
だん／＼と子供の出世待ちかねる神の思はく之ればかりなり
子供さへ早く面へ出したなら唐を日本の地にするなり
此の道は何か六ヶ敷珍らしい道であるぞや確か見てみよ
此の道を通り抜けたら其の先は唐は日本の地理にしてある
唐の地を日本の地理にしたらならばこれ末代のいきとうりなり
今迄は日本が唐に従ふて倭にしられて神の残念
此のかやし神の働き之れを見よいかなものでも真似はできまい
此の道についたるならば何時までもこれ日本の綱紀なるのや
日本にも綱紀が出来たことならば何んでも唐を倭にするなり
日本には今まで何を知らいでもこれから先の道を楽しめ
今迄は唐や日本といふたれど之れから先きは日本ばかりや

今如上に掲げたる神歌に含んだる思想を分類すれば大体二種に分類することが出来る。
即ち其の前半の思想は人類の人格的価値の平等化にあつて其の後半の思想は人類の日本化
である。更らに云ひ換へれば前半の思想は人類の平等観絶対観を述べたものであつて後半
の思想は人類の差別観相對観を述べたものである。更らに詳しく云へば前半の思想は人類
相互の精神的關係を述べ後半の思想は人類相互間の形式的關係を説いたものとも見ること
が出来。

此の二つの思想は一見矛盾の如く見えるけれども其の実何等の矛盾を含むものでない。
其の帰着点は地場一つの理にあるのである。云ひ換へれば全人類は十億年の過去に現今の
大和三島に於て国床立尊と面足尊とを靈親とし諾冊の二尊を肉親として生れたといふ原始
的事実に帰納せられるのである。これは未だかつて宗教も哲学も科学も説かない天理教独
特の新説であつて天理教が其の世界統一の理想に於て又た實力に於て他の既成宗教に一歩
を進めて居る点は此処にある。

蓋し世界統一の理想中最も理想として浅薄なるものは軍事的統一である。次には政治的
統一である。次には倫理的道德的統一である。此の理想は其の価値に於て軍事的統一政治
的統一より一歩を進めて居る。けれども其は唯人間相互の形式的關係を結んだまでとあつ
て未だ第一義的根本的の統一ではない。眞の根本的統一は宗教的關係に於て始めて統一せ
られるのである。(倫理的統一、道德的統一の如きは其の結果として表はれるものに過ぎ
ない。)

けれども等しく宗教的統一と云つても其宗教の含む人類の価値に依つて多少の相異なき
を得ない。否な此の相異こそやがて宗教の価値を決定するものと云つて良いのである。従
来の宗教も其の自力教であると他力教であるとを問はず人類相互の關係を結合する一種の
力をもつてゐた。其は引力即ち愛である。けれども基督教を除く他の宗教は愛を唯抽象的
哲理的非現實的遊離的に説明したに過ぎないのであつて何等其の間に現實的要素を含んで
居ないのである。独基督教は此の間にあつて神人父子主義、四海同胞主義を創世記の仮説
を立脚地として述べたが天啓と科学の進歩した今日に於ては最早創世記の価値を信ずるこ
とはできない。従つて其の理想は「砂上の家」に過ぎなかつたことを知る。又た幻の蜃氣
樓に過ぎなかつたことを知る。之れに反して天理教の世界統一の理想は人類創造世界創造
の根源地に其の創造神が表はれて説いた神人親子四海同胞の原始的事実に即して立てた理
想であるから之れを基督教の神人父子主義四海同胞主義と同一視すべからざるは云ふ迄も
ない。況して其の他の單純なる抽象理想を説く哲理的宗教をや。

教祖は其の一生の事業として左の二條の大宇宙立憲帝国の憲法を体現した。其の二條の
憲法とは

誠一つが天の理(時間的活動律)

順序一つが天の理(空間的活動律)

の二大不文律である。

(此処の二條の憲法が主観的に表現せられたものが

神靈中心主義

と

地場中心主義

とである)

天理教の大日本主義は此の二つの天理の具体理想化せられたものである。蓋し天理教(教祖)の目的は全人類をして神人親子四海同胞の原始的事実に即して人心を改造し、世界を改造し、もつて地場——地場は十柱の神の鎮座所であり、且つ人間靈肉の故郷である——中心とせる平和にして健全且つ自由なる理想の一家族を再現するにある(教祖は其の理想の一家族の主婦である)此の理想の社会状態もしくは個人の理想の精神状態を称して神は甘露台と云つた。将来天理教が全世界に普及した暁には独全人類の精神に無形の甘露台(無上の幸福)が建設せられる計りでなく、同時に有形の甘露台が地場に建設せられるのである。此の有形無形の甘露台の建設せられたる時こそ神の予定の黄金世界の実現せられた時である。教祖一生の事業は要するに此の有形無形の甘露台の基礎工事を完成するにあつたのである。

之れを要するに天理教祖の抱ける世界統一の理想は始皇帝の世界統一の理想とも異つて居る。シーザーの世界統一の理想とも異つて居る。ナポレオンの世界統一の理想とも異つて居る。釈迦の世界統一の理想とも異つて居る。基督の世界統一の理想とも異つて居る。孔子の世界統一の理想とも異つて居る。又たマホメットの世界統一の理想とも異つて居る。更らに一層徹底的にして更らに一層根本的である。之れは地場一つの理に徴して明かである。これ天理教が他の宗教、哲学、倫理、道徳と離れて世界統一の実力の上に於てユニークの位置に立つ所以である。

今彼女の世界統一の理想を聊か具体的に説明すれば単に個人と個人との間を隔てる私欲の障壁を取り去る計りでなく家族と家族との間の障壁、国家と国家との障壁を取り去るにあるのである。云ひ換へれば

世界直路に踏み平らす(平等化)

のが彼女の理想であつたのである。其れには全人類をして一切片寄りたる個人的欲望、団体的欲望より脱せしめて相互扶助的共同生活の精神に復活せしめざるべからず。彼女の教義の中心生命は此処(互ひ助け合ひ)の理にあるのである。而かも真に此の精神を復活せしめんとせば何うしても全人類をして神人が親子であるといふ根本的事実人類が兄弟であるといふ原始的事実を自覚せしめなければならない。之れ一面に於て神の最も苦心を要した所であると共に他の一面に於て天理教が凡ての宗教の上に独特の地位を占むる所以である。

蓋し彼女の理想は現在の国家制度を破壊して全世界を大日本とし全人類を日本国民とし世界より国家的差別国民的区別を一掃せしめんとするにあるのである。云ひ換へれば世界を打して一丸とし人類を打して一丸とするにあつたのである。

之れを一面より見れば彼女は人類主義者であり世界主義者である。けれども之れを他の一面より見れば大日本主義者であつた。而かも彼女の大日本主義は旧日本即ち島帝国を唯一の国家と信じて居る小日本主義者と全然範囲を異にしてある。彼女の大日本は世界其の者である。彼女の大日本国民は人類其の者であつた。従つて世界主義と云へ大日本主義と云へ彼女にとつては其の内容は全然同一である。

古来世界統一を企図した大小の偉人は雲の如くあつた。而かも其の一人として吾が教祖の如く物心二面より根本的統一を企つたものはない。其の多くは単純なる精神的統一主義者でなければ単なる形式的統一主義者であつた。

釈尊(即ち国床立尊)の予言に

吾が後に来るものは月光菩薩である。けれども月光菩薩の時代は未だ世界に悪気が充滿して善はかくれて非が栄えるであらう。けれども其の後に弥勒の世が来る。弥勒の世が来たらば此の世界は黄金世界と化するであらう。

と。今は即ち弥勒の世である。恐らく近き将来に於て天理教が全世界に普及し、世に一人の悪人一人の利己主義者がなきに至らば神の予言の如く「提灯要らず笠要らず鎖さぬ御代にするが一條」の時代が来るであらう。

其の時来らば四季の氣候は調和せられ、自身もなければ大風もなく、海嘯もなければ噴火もなく、稲電もなければ雷鳴もなく、あるものは昼の微風と夜の微雨草木茂り人畜栄え、人は一人の男子と一人の女子とをもち又た一人の息子と一人の娘とを持ち、争闘なく不和なく互ひに愛と信と望みに満ち一月三十日は陽気的笑をもつて梁木をゆずる時が来るであらう。其の時全世界は一軒の家となり全人類は一つの家族となるのである。これが即ち天理教祖の画いた理想の世界である。吾人天理教徒の努力は其の実現の時期を一日も早めんことである。吾人の希望は要するに唯之れのみ。

(大正四年五月)

総論 教祖に帰れ

月日より教へることは皆消してあとは人間心ばかりで

凡そ近代の新興宗教中其の内容の進歩せる、其の膨脹力の偉大なる天理教に匹敵し得る新宗教はない。けれども之れを内部より観察すれば現今の天理教は著しく教祖立教の当初の鬱勃たる熱と力と光とを失つた様である。

一例を挙げて云えば其の教典である。即ち今日行はれつゝある所の天理教々典は教祖自身著書でもなければ其の高弟等の著書でもない。全く一時官憲より天理教独立の公認を得んが為めに天理教とは殆んど何等の關係のない神道の教師等を雇つて書かせたる曖昧模糊の記録である。従つて其の中には天理教立教の精神と其の由来とが説かれて居ないのみならず天理教々理中最も重要な貸物借物の理さへ説かれて居ないのである。更らに最も甚しきは神の賦与した神名さへ古典になきを名として徒らに改竄せられてあることである。此の世俗本位の受動的気分、迎合的精神こそ天理教墮落の第一原因である。

凡て新興宗教（新興芸術、新興哲学、新興科学）の由つて起らざるべからざる必然の原因は在来の宗教にては最早や人心指導の任務を果し得ないが為めである。然るに天理教の如き世界最後の宗教と称し且つ其の實質を備へて居る一大新宗教が其れ自身の新しき特色と新しき使命とを忘れて既に信仰と生命とを失つた過去の既成宗教と其の保護色を似せることに依つて一時盲目なる社会の攻撃を免かれんとするは抑も何んぞや？ 神の立教の精神は此処に於て此等劣弱なる信徒のために汚されたりと云はざるを得ない。

凡て何物にもあれ其れが未だ其の眞価を治く世に認められざる間は無智の群衆より非難攻撃せらるゝは当然予期せざるべからざる現象である。然るに一時此の凡俗の非難を免かれんが為めに其の眞価を自ら隠蔽し、凡俗の仮面を冠つて俗衆と伍せんとするが如き偽悪者は抑も其の最初より新宗教乃至新發明を鼓吹するの資格がないのである。今日の天理教は誠に／＼かくの如き偽悪者に属す。彼等は一時官憲の圧迫と俗衆の攻撃とを免かれんが為めに恰も盜難を恐るゝ長者の如く其の財宝（眞理）を徒らに土中に埋没し、一時の窃安を貪つて居るのである。此の天理教当局者の貧弱なる二元的形式的消極的精神こそやがて道の發達を阻害した根本的原因である。

凡て眞理は黄金と等しく其を流通せしむることに依つて其の価値を發揮するものである。然るに今日の天理教当局者は一時の安心を買はんが為めに自ら神の宝を埋めてある。彼等にして今日自ら進んで積極的に天理教の眞価を發揮することに力めずんば悔を百年の後に遺すのみならず、一は神の聖旨に反き、一は教祖一生の努力を空泡に帰し、引いて未来の人類の大なる禍害を残すであらう。これ吾人々道の熱愛者の一日も黙過し得ざる所以である。

抑も道と世界とは何れが重き？ 更らに云ひ換へれば信仰と法律とが何れが重き？ 吾人は今更ら此の問題を此処に再び繰り返さうとは思はないのである。けれども私は此処に天理教当局者の反省を促がさんが為めに教祖臨終の遺訓を再び高唱せう。

「サア／＼月日（神）あつて此の世界（地球）、世界あつてそれ／＼（万物）あり、それ／＼あつて身の内（人類）あり、身の内あつて律（法律）がある。律があつても心の定め（信仰）之れが第一」と。

此の言葉は云ふ迄もなく天理教当局者の熟知する所であらう。然るに今日の天理教界は悲しいかな吾人をして此処に再び此の教祖の遺言を繰り返さざるべからざる危地に瀕して居る。

これ後進私の如きものをしてかくの如く呼ばしめざる可からざる所以である。忌憚なく云へば今日の天理教徒の一部分は一種の偶像崇拜家である、勿論彼等は仏教徒の如く仏像を彫刻して其の前に跪拝しはしない。又た基督教徒の如く聖像を模作して其の前に礼拝はしない。けれども人間の作つた教典をもつて唯一の教典とし、教会及び教会に属する儀式を以つて第一義的信仰と信じてある。これぞ即ち一種の偶像崇拜家たる所以である。これぞ即ち一面に於て教祖立教の精神を流し、引いては自分自身を破滅の淵に導くのである。

此の他今日の天理教界を見るに精神的に形式的に改革すべき多くの悪弊がある。其を改善し、改良して教祖立教の精神——助け一條の精神——を復活せしむることこそ吾人天理教徒の焦眉の急である。従つて私の云はんとする所の言葉は左の一語である。

教祖に帰れ
と。蓋し吾人々類の精神的飢渴を医し得べき唯一の靈泉は教祖の胸より直接流れ出でたる濁りなき母乳より外にないからである。
以下号を追ふて述べんとする所の天理教革命の声も要するに此の母乳を求むる声に外ならないのである。

一、教典廃止論

凡そ如何なる宗教にもあれ、其の宗教の唯一の教典は教祖自身の人格と記録である。之れ以外の記録は教典として何等の価値がないのである。

由来天理教には御神楽歌と称する神自身の著作せし世界無二の宝典がある。又た御筆先と称する神の叙情詩的叙事詩がある。又た「おさとし」と称する神の天啓の記録がある。何を苦んで不完全なる人間力をもつて編纂した不具の教典を要せんや。誠に之れ吾人真の天理教の真理を熱愛する者の暫時も忍ぶ能はざる所のものである。

凡て真理は抽象化せらるゝことによつて其の流動せる生命を失ふのである。天理教々典に関する第一の非難は著者の用意の此処に及ばなかつたことである。

蓋し天理教には御神楽歌と称する神自身の著作に係はる世界無二の宝典がある。之れを置いて人為的に新たに天理教々典を作らんとするが如きはたとへ其の著者が何人であれ僭越至極の沙汰と云はなければならぬ。

由来此の道は智者の開いた道でもなければ学者の開いた道でもない。席の開いた道でさへない。神が教祖を立て、神の代表者として開いた道である。其の意志は神の意志にして其の言葉は神の言葉である。然るに天理教々典の著者は第一手の神の思想の記録があるにも係らず其を度外視して第二手の非天理教的思想を鼓吹せんとす。何の面目あつて神と教祖の聖旨に応へんや。吾人が著者の行為を僭越と称するのは此処にあるのである。

次には其の文体である。

教祖は「此の道は仮名が道だ。柔らこい道だ」と云つた。蓋し「やりこひもの。やりこひものは年老も若きも小供も皆食ふであらう」からである。けれども教祖の言葉の如く「固いものは若い者が食べても老人は食べられぬ。其れや道とは云へん」のである。蓋し教祖が仮名を選んで漢字を使はなかつたのは所謂「本字で書いたら理がせまる」計りではなない。実に世の教化の範囲を狭めるからである。然るに天理教々典の著者は故意に晦渋な漢字を用ゐて却つて教祖の深い用意を裏切つて居る。これ吾人が著者の為めに又た道の発達の為めに惜しむ所以である。

以上は天理教々典に関する大体の批評であるが以下に其の内容を略評せう。

天理教々典を繙けば其の開巻第一は敬神章であるが著者は第一に天理教々理として霹頭第一に説かなければならぬ十柱の神の人間創造、世界創造の事業と其の地場並に其の分担の御守護を説くことを忘れて居る。之れ教典の著者の霹頭第一の失敗である、此の霹頭第一の失敗は第二節に至つて著者が天理教々理に関する無智を語つて居る。曰く、

「而して主宰の神あり分掌の神あり各其の靈徳の妙用によつて神名を表彰す概して是を天神地祇八百万神と云ふ」

と。天神地祇八百万神を認めるのは神道のことである。天理教には唯国床立尊重足尊以下伊邪那岐伊邪那美尊に至る十社十柱の神があるのみ八百万神なるものゝあることなし。此処に至つて著者は神道家にして真の天理教を知らざる者であることを自ら暴露して居るのである。更らに其の末尾に著者の小主観を加へて

「蓋し造化の大原にして万有の根本也誰か尊仰敬事せさらむや」

と強制的教訓的命令的に説明して居るが如きは全然天理教が自覚教であり、自発教であり、自由意志教であることを知らない過去の貴族的宗教家の口吻である。

第三節

「然れとも八百万神悉く其名を称へて崇拜せむことは人の能くせざる所なり。故に靈徳の最も顯著なる十柱の神を挙げて奉祀す即ち国床立尊、国狭槌尊、豊斟淳尊、大苦辺尊、面足尊、惶根尊、伊弉諾尊、伊弉册尊、大日・尊、月夜見尊是也之を総称して天理大神と云ふ」

之れは最も非難のある節である。由来天理教では「八百万神悉く其名を称へて崇拜せむことは人の能くせざる所なり。故に靈徳の最も顯著なる十柱の神を挙げて奉祀す」るのではなく十柱の神より教祖に天降つて教祖の身体を神の社としたのである。従つて此の説明は全然誤謬である。

次に見逃すべからざるものは其の十柱の神の神名と其の並列の順序である。之れは後に述べる神名復活論に於て詳論する心算であるが此処に一言云つて置かねばならぬのは教祖の所説の神名を消して天理教の祭神とは殆んど何等の關係のないもしくは類似の神名をも

つて之れに擬したことである。即ち雲読尊を豊斟淳尊と改称し大食天尊を大日・尊と改称せるが如き其の一例である。

之れは天理教对内務省の意見の衝突の結果天理教より妥協してかくの如き自殺的行動を取つたものであつて之れを一面より云へば新神道たる天理教が古神道に屈服した敗残の歴史を語るものであると云つて宜いのである。

次には十柱の神の並列の順序である。之れも神道家の見たる天理教としては何等の不思議もないのであるが之れを天理教々典として見る時は其処に大に異議がある。由来国床立尊と重足尊とは宇宙の第一神靈であつて第一に挙げなければならぬ神である。然るに教典にあつてはこれを大苦辺尊の次に列挙してある。次に月読尊であるが之れは古典より云へば天神七代の後に来る神であるから之れを最後に挙ぐるのは何等差支はない。けれども之れを天理教より云へば此の神は天神七代の神であるから之れを最後に列挙する謂がないのである。此の他凡ての神の順序が古典的に並べられてある。かくの如きは一見一小些事と思ふ者があるかも知らないが順序を重んずる天理教々典としては大なる欠点と云はなければならぬ。

第二章は尊皇章であるが此の章も全然神道家の皇室観を述べたものであつて、天理教的思想は片影だも伺ふことができないのである。例へば

「神は万有を主宰し皇上は国土を統治す国土は神の経営し給ふ所皇上は即ち神裔にして皇上の此土に君臨し給ふや實に天神の命に依り其生成せる蒼生を愛育し給ふにあり」

の如き

「世界の広き古今国を建つるもの無数にして其帝たり王たるもの亦多しと雖も我皇室の如く神統を継承し天佑を保有し国土綏撫の天職を帯び給へるもの何処にかある即ち知る我皇室は君主中の真君主にして宝祚の天壤と共に無窮なる所以を」

とか

「故に須く我皇上は天定の君主なるを確信し造化生育の恩を神に謝すると同一の至情を以て誠忠を皇室に尽さざるべからず」

とか云ふが如き即ち之れである。之れを数千年間日本独特の古典思想に養はれて来た日本人には何等の不思議はないのである。けれども之れを今日迄国体を異にし、風俗習慣を異にした外国人に理解せしむるには此くの如き説明なしの高圧的手段に訴へて心服せしむることはできないのである。これは第三章の愛国章に於ても亦同一である。

由来天理教は一面に於て大日本教であると共に他の一面に於ては世界教である。即ち

今迄は唐や日本と云ふたれどこれから先きは日本ばかりや

といふのが天理教祖の抱ける世界統一の理想であると共に神の抱ける世界統一の理想である。然るに天理教々典の著者は教祖並に神の此の精神を全然理解せざるが為めに其の説明は全然在来の小日本主義に墮して居る。殊に第三愛国章の

「国土は神の経営して人類蕃殖の地と定め給ひ其神裔たる我皇上をして統治せしめ給ふ所なり」

とか

「是を以て凡臣民たるものは此の神意を奉し皇旨を体して神を敬し皇上を尊むと共に之を愛護し常に其世運の発達を図りて修理固成（修理固成は神道の生命である）の功を収めむことを期すへし」

とか

「況んや我祖先は神恩皇沢の下に此国土に栖息し義勇報国の誠を致し世々皇運を扶翼し来れるをや」とか

「是神に事へ皇上に仕ふるの道にして抑も亦我祖先の志を濟す所以也」

とか云ふが如きは最も此の主義を露骨に表現せるものにして折角の大日本教を再び小日本教にして了つたのである。

此の他第四章の明倫章以下安心章に至る七章の思想を概評すれば神道家の見たる天理教と云ふのが蓋し適評であらうと思はれる。之れを詳しく云へば五分の神道三分の儒教二分の天理教と云ふことも出来る。就中祓除章の如き立教章の如き神恩章の如き神楽章の如きは最も神道趣味を發揮したるものにして明倫章の如き修徳章の如き安心章の如きは最も儒教趣味を發揮したるものである。

吾人は元より之れに向つて一々の批評を加へやうとは思はない。何故なれば吾人は思想を度外視した形式（文章）一つをもつてしても全然天理教の特色と相反せるものたることを知るからである。況して其の内容の研究の結果をや。

（天理教々典の不完全の立証は天理教々理中最も重要な十柱の神の神名の誤謬、其の御守護の省略並に貸物借物の理の脱漏に徴しても明かである）

従つて吾人の希望は一日も早く此の虚偽の教典を廃止して神自身の著作たる御神楽歌にかへんことである。敢て天理教当局者の英断を望む。

二、祝詞改作論

次に天理教の精神と全然反対の形式をとつてゐるのは天理教の祝詞である。此等の祝詞は神道の祝詞としては左程非難すべきものではない。けれども之れを神道とは全然独立した天理教の祝詞としては全く無意味の空文に過ぎない。

由来天理教は平民的現代的宗教である。従つて其の祝詞も亦可及的華麗の文字を避けて平民的、現代的、実質的文字を選択すべきものたるや云ふまでもない。

教祖は常に云つた。
「此の道は中が道だ。柔らこい道だ」と。通俗平易は天理教の生命である。

然るに今日の天理教祝詞は其の形式に於て啻に貴族的の神道の祝詞である計りでなく其の精神も亦神道の祝詞である。其の間些の天理教的特色が表はれてゐないのである。

凡そ人と人との間に於ける最も詐らざる真情を表はすものは日常の作らず飾らざる言葉である。其れが親密なれば親密なる程日常の方言（現代語）に近き、其れが疎遠なればなる程敬語（もしくは古語）に近くのである。けれども極端に上品の言葉を用ふるは極端に粗雑の言葉を用ゆると等しく真情を去ること遠いのである。其の距離は上代の言葉に至つて極まるのである。

私は此処に天理教祝詞を天理教的精神に改作せよとは云はない。何故なれば其れは今更ら云ふまでもない当然の事であるからである。私が主として此処に云はんと欲することは吾人が日常使用しつゝある現代の敬語を用ゐんことである。これ吾人人類と神との最も親密なる交情を表現する所以にして同時に天理教の平民的現代的特色と一致する所以であるからである。

次に祝詞に次いで改作もしくは削除すべきものは例祭もしくは大祭に各教会に於て読まると所の教典の一節（尊皇章）と所謂神道本局の三條の教憲（一、敬神愛国の旨を体すべき事、二、天理人道を明にすべき事、三、皇上を奉戴し朝旨を遵守せしむべき事）なるものである。凡そ此等の儀式は宗教を以つて政治の従とした旧宗教家の常套手段にして天理教の如き大日本的人類的宗教の倣うべき事ではないのである。

更らに全然凡ての宗教と独立して彼等の総本家たるべき宗教中の宗教たる天理教の爲めに惜しむことは其の形式に於て天理教独特の形式を採用することなしに全然人類的自覚を欠いた古神道の儀式を其の倣踏襲し、何事も彼等神道派と一致の行動を取らんとする非自覚的没理想的行為である。

此等並びに之れに類する現今の天理教の仕事は凡て独立した絶対無上の新宗教としての自覚を欠いて居る。これぞ即ち今日の天理教徒の深刻なる自覚を促さざるべからざる所以である。

三、神名復活論

天理教と神道とを画する一線は神道は古神道であり、天理教は新神道であり、一は国民教であり、他は人類的であり、一は旧日本教（小日本教）であり、他は新日本教（大日本教）であるの相違である。従つて其の祭神の異なるに何等不思議はないのである。

然るに当局者は其の初め天理教の祭神は神道にも仏教にもなき全然新しい名なるの故をもつて全然之れを削除せしめんとして激烈なる圧迫を加へた。其の爲め十柱の神の集合名詞である南無天理王命は消されて或は天理王明神となり或は天輪王如来となつた。今日は幸にして天理王命の称名は公認せられて居るけれども尚ほ宇宙の実体を指したる南無（梵語、眞実）の二字は制約せられて天理王命と云ふ宇宙の理体のみ称へることを許されて居るに過ぎないのである。従つて今日の天理教の神は霊体を持つて実体を有たざる不具の神である。之れ神名復活の第一の要件である。

次に神名復活の第二の要件は人類創造、世界創造の副神に附したる固有名詞の復活である。其の復活せらるべき神名とは「くもよみのみこと」と「たいしよくてんのみこと」とである。今日豊斟淳命と大日・命とに改称せられて居る所の此の二柱の神は南無天理王命と同じく歴史上（記録上）に存在せざるを名として当局者より強めて削除せられた所の神名である。就中当局者の再三再四の改称の要求に依つて原名とは似ても附かぬ全くの別神と類称せられて居るのは大食天命である。

蓋し当局者がかくの如き暴行を独立せる新興宗教に加へた根本的原因是天理教をもつて世道人心を蠱惑する淫祠邪教と同視せる没批判力と宗教の性質並に天理教立教の由来に対する無智より来たのである。

抑も天理教は世人並に当局者の誤解せるが如き人為的淫祠邪教的宗教ではない。全く宇

発達を遅滞ならしむる障碍物に過ぎずして之れを一層高き標準即ち人類主義世界主義の上より見る時は人道のバチルスと云はざるを得ないのである。けれども時代は常に進歩するものである。私は当時の当局者が今日尚ほ頑冥固陋の古典主義を以つて天理教に臨むものとは信じない。もし今日尚ほ十年以前乃至二十年以前の小日本主義に即し頑冥固陋の古典主義を以つて未来の世界教たる天理教に臨む者があるとすれば其の人は将来の日本将来の世界の趨勢を知らざる近眼者流と云はなければならぬ。吾人が敢て世道人心の保護指導を委任する政治家とするに足らないのである。

天啓の聲に
「道の中の反対は肥料をする所後流して了ふ様なもの。此んな事があつたかは鮮か分かる程に／＼必ず悔むやない／＼。悔むだけ心を注げ心を注げ。今日から何ふでも皆集めたる程に山が崩れる。水が衝く。大風や。何処へ駆け着く所がないと云ふ様なもの。泥水／＼スツキリ流して了ふ。泥水の間は何んな思案しても何もならぬ。心一つの理を継げ／＼。いかんと云へばハイと云へ。ならんと云へばハイと云へ。何んな事も見て居る程に／＼」

抑も天理教当局者は此の言葉わけて此の最後の言葉を如何に理解して居るであらう。此処に「いかんと云へばハイと云へ、ならんと云へばハイと云へ」と神の教へたのは「これより外にはひ上る道がない」からである。元より盲従を意味するものでもなければ中止を意味するものでもない。唯一時其れより外に進むべき道がないからである。神名の削除も亦此れと同一である。たとへ無智の官憲の圧迫に依つて一時神名の削除改称を行はせらるゝも機会を見て敢て神の命名せし神名を復活せんともせず何時迄も世界の理に支配せられもつて姑息の安心を求むるが如きは「心一つの理を継ぐ」とは云ひ得ないであらう。貫徹し得ない迄も貫徹せんとするのが眞の誠である。而して之れ眞の信仰者の止むを得ざる行為である。

然るに天理教当局者は所謂神の何も知らない子供のなす俣に任せて敢て宇宙人生の眞実を徹底せしめやうとしない。之れ吾人天理教信徒の常に遺憾とする所であるのみならず又た神の残念とする所である。私は誠に天理教当局者に切言す。

「今日は誠に其の時である」

と。其の時とは神名復活の機会であるの謂である。恐らく之れは天理教当局者も亦常に感ずる所であらう。敢て天理教当局者の猛省と猛進とを促す所以である。

四、道八分教会二分論

道盛なれば世界盛。世界盛と云ふは元があるからや——天啓の聲

基督がエルサレムの神殿を見て
「我よく神の殿を毀ちて三日の中に之を建て得べし」
の教会たらしむるにあつた。此の度天理教祖を通じて表はれたる神の意志も亦此の連続に外ならないのである。

凡そ教会に二種ある。其の一つは有形教会にして他の一つは無形教会である。有形教会とは云ふ迄もなく普通教会と称して居る物質的建築物である。無形教会とは教化せられたる精神即ち之れである。神の最初にして且つ最終の目的は後者即ち精神的教会を建築することにあつた。其の後教勢の発展に連れて物質的教会の建築の必要を感じ道八分教会二分の条件の下に教会の建設を許可せられたとはいへ、其の本来の神の意志は宏壮なる多数の建築物を全世界に治く建築せんとするにあらずして目に見えざる精神的教会を全人類の精神の中に建築せんとするにあるのである。然るに其の後歳月の推移に伴つて天理教布教者の或る者は唯教会——有形教会、物質的教会、第二義的教会——を盛大ならしむることを以つて唯一の目的とし神の天理教立教の大精神を忘却して居る。

抑も神が教会の設置を許可したのは助け一條の爲めである。教会の繁栄は助け一條の精神に伴ふ結果のみ。之れを砕いて云へば教会の盛大に赴くは信徒の団結に基くのである。従つて其の信徒の数の多数なればなる程又た其の信仰力の大なれば大なる程教会の盛大に赴くは必然の結果である。之れを教会若しくは寺院の興亡盛衰の歴史に徴するに未だ曾つて教会もしくは寺院を盛大ならしめんことを企てゝ一度も最後の成功を収め得た者はないのである。此の理は至つて明かである。何故なれば物質的教会の建築は助け一條の精神に伴ふ結果であつて原因ではないからである。もし此の原因を忘れて只管教会の繁栄を希ふものがあらば其の者は既に宗教の眞髓——助け一條の精神——を失墜せるものと云はざるを得ない。従つて其の活動は全然反宗教的——世界並——の活動に過ぎないのである。

熟々現代各派の宗教界を通観するに其の十中の八九は宗教の根本生命たる人類の精神的救済の初一念を忘却して唯其の形式の完成に向つて忙殺されてゐる。けれども私の悲しむ

ものはかくの如き信仰と生命とを失つた過去の既成宗教に対して云ふのではない。将来世
界を一新せんとする天理教の如き新しき生命と新しき使命とを人生に齎らせる理想的新宗
教に於て此の現象を觀るを悲しむのである。彼等——私の彼等と指すものは助け一條の
為めに献心的に活動せざるを忘却して只管教会の維持擴張の為めに信徒の献金もしくは献納物を
助け一條の精神——を忘却して只管教会の維持擴張の為めに信徒の献金もしくは献納物を
目的として布教に従事する利己的布教者をさして云ふのである。——の大部分は人を助け
るのではなく、自ら助からんが為めに働いて居る。而かも物質的に。けれども間違つた前
提より正しき結論は決して生じないのである。彼の自ら助からんとして自ら助かつた例な
く教会を繁栄ならしめんとして教会を繁栄ならしめた例はないのである。何故なれば之れ
原因と結果とを顛倒せるが為めである。教祖の言葉に

理（神）を立て、身が立つ

人を助けて吾が身助かる

と、自教も教会の繁栄も道の精神に従つて人類の救済に献心せる結果のみ。然るに今日大
多数の天理教布教師の精神を解剖するに彼等は名を人類の救済に借ると雖も其の実は信者
より人頭税を徴収して以つて教会の繁栄と自己の安楽とを貪らんが為めである。かくの如
くにして何時の世にか神の大意志を実現することを得べき。且つ又た何時の世にか自己を
救済し人類を救済し得べき。眞の天理教の害虫は外部の迫害者でもなければ他宗でもない
實に此等腐敗せる天理教布教師である。

凡そ人間の弱点として目に見える物質に支配せられて目に見えざる精神を閑却し易きも
のである。比較的精神的生命に生きて居る宗教家と雖も亦此の弱点より免かれぬのであ
る。彼等の大部分は俗人と何等異なる所なき物質主義者、形式主義者である。今日の天理教
界も亦此の種の不徹底なる俗人に充ちて居る。これぞ即ち天理教の運命を誤る害虫である
のである。

抑も神が教会を許可したのは道八分教会二分の條件の下に於てである。

けれども其の元の意志は其うでなかつた。人類の各個体の一つ一つを一つの教会とする
にあつたのである。然るに今日の天理教は神の最初の目的も神の第二の目的をも度外視し
て教会八分、道二分に墮落して居る彼等の大部分は上は大会長より下は単独の布教師に至
る迄表に人類の救済を唱えながら裏には教会の維持擴張にのみ腐心して居る。此の中にて
我は除外例なりと云ひ得る者が幾千あるであらう。誠に其の大部分朝夕の衣食住に追はれ
て居る天理餓鬼に過ぎないのである。御言葉に

「表大工（本席）に裏鍛冶屋（管長）」

と。之れを云ひ換へれば天理教の第一義は精神にして形式は第二義である。又た靈は第一
義にして肉は第二義である。又た道は第一義にして教会は第二義である。道とは助け一條
の精神即ちこれである。基督曰く、

「われ汝等に告げん。殿より大なるもの茲に在り。われ矜恤を欲みて祭祀を好まずとは如
何なることか之を知らば罪なき者を罪せざるべし」

と。教祖立教の精神も亦此処にあるのである。然るに今日の天理教徒は此の第一義根本的
精神を忘れて唯形式の完成即ち教会の繁栄、献金の豊富をのみ求めて居る。けれども私は
云ふ

教祖立教の精神（助け一條）を没却して教会の繁栄は絶対に望むべからず

と。何故なれば教会其の者は何等独立せる意義を有するものではなく、助け一條の必要上
設立せらるゝものであるからである。従つて眞の天理教徒としての覚悟は眼中助け一條の
精神より外何物もない筈である。もしあらば其れは眞の天理教徒ではない。唯天理教の仮
面を冠れる教界の寄生虫のみ。

けれども今日は既に有形教界の設立を見た時である。今更ら神の最初の目的に歸つて現
在の教会——教会は道の伴侶、道の妻である。其は無くて不自由、有つて厄介な足弱であ
る。——を壊つことは出来ない。従つて今日吾人の取るべき態度は何処までも道八分教会
二分の精神に基いて第二義的の教会を設立する前に第一義的の教会即ち精神的教会（人
格）を建設するにある。之れぞ今日天理教徒の守るべき唯一の信條である。

要するに今日の天理教は余りに形式主義、事大主義、事功主義に流れて居る。吾人は天
理教徒が一日も早く助け一條の精神に復活して教祖立教の精神を體現せんことを希望せざ
るを得ないのである。

五、教務支庁改革論

サア／＼尋る事情／＼こら何ふとも云はん。まあそら修理肥料の内である。修理肥料
は何処迄もせにやならん。蒔き流しでは何も取れるものやない。修理肥料と云ふはせにや
ならん。又人と云ふ。十名と云ふは其ら願通り許るし置かふ。中々未だ余程の理改めてせ
にやならん。面々勝手の理あるで。これを十分取り調べてくれにやならん。

これは明治三十五年全国に十教区を置くことを願つた指図であるが其の後天理教は教勢の発展するに連れて十四教務支庁に管理を有するに至つた。将来も教勢の発展に伴ふて益々教務支庁の増設を見るであらう。けれども今日の教務支庁の事業なるものを見るに吾人は多額の費用を注入してまでも敢て設置するの価値を見ないのである。即ち今日の教務支庁の事業否な仕事と云つては唯僅かに本部よりの訓令を部下の教会に伝達し、下部の教会の請願書を本部に取り次ぐに過ぎない。其の他巡回講演の制度ありと雖も多くの支庁には其の費用を却つて無益のことに支出し、もつて神の所謂修理肥料を部下の教会に施すことを怠つて居る。更らに一つの苦情は支庁長である。彼等は何れも本部にあつて唯空名を列ねるに過ぎないのである。かくの如くにして果して支庁としての懸命の仕事が出来らうか？ 吾人は其の成績を疑はざるを得ないのである。吾人は元より教務支庁の全廃を唱へるものではない。けれども苟も教務支庁として之れに多数の費用を注入して設置する以上は其れに相当する事業がなければならぬ。今日の如く本部と部下と教会との間の訓令もしくは請願書の取次のために特に設置するの必要を見ないのである。否此の種の制度は却つて手数を複雑ならしむるより外に何の利益もないのである。

次には巡回講演の制度である。これも今日の所は唯形式に止まり實際真面目に此の制度を執行しつゝあるものは僅々一二の支庁に過ぎないのである。其の他の支庁にては形式的に第二流第三流の宣教員を使用して僅かに申訳的に実行するに過ぎない。苟くも支庁の事業として部下の教会を教育せんとせば少くとも本部員もしくは之れに相当する実力を有するものでなければならぬ。今日の如く第二流第三流の宣教員を使用して申訳的に講演を執行しても殆んど有利の効果は収め得まいと思はれる。吾人が当局者に対する希望は今日の如く教務支庁を一見本部の別荘として空けて置くならば宜しく之れを公共事業慈善事業の為めに寄附せられんことである。何故なれば今日否な将来はもはや別荘や廢寺のため地面を塞ぐ余地がないからである。もし其れが嫌ならば宜しく其れに相当する事業を起すべきである。之れ天理教徒としての今日の急務である。此の他図書館の設立、孤児の養育、貧人の救済、労働者の慰安、矯風会の設立の如き支庁として起すべき事業は多々ある。更らに是れを教界内部の事業に就て見るに教師講習会の如き、信徒講習会の如きなすべき事は幾らもある。畢竟今日の教務支庁は支庁としてなすべき事業がないのではない。しないのである。吾人は天理教当局者に望む所は教務支庁をして単なる本部の別荘、本部の取次所、無用の建築物ならしめざらんことである。荒野も之れを耕し之れに肥料を施せば良田となすことを得るからである。

六、教校学制改革論

御言葉に「道の発達」は世界の発達」と。然るに今日の所未来の世界の灯明たるべき天理教の発達は連に後れたる提灯持ちの如く遙かに世界の発達に遅れて居る。現在の教校制の如きも亦其の一である。其処には何等の新智識の供給なく、其処には何等の新人格の教養（云ひ換へれば天理教的教育）がないのである。あるものは八分の神主的教育と二分の天理教々育がある計りである。抑も天理教々校設立の意義は単に天理教布教師を養育する以外に天理教的真人を養育するに於てはならぬ。然るに今日の天理教校の学科（教義、神代史、倫理、礼典、祝詞、作文、宣教実習、実行信念）並びに其の實際の教育法を見るに単に一個の教職といふ職人を作るの外殆んど人間としての教育（之れが宗教教育の第一義である）を閑却して居る。

例へば神代史の如き、倫理の如き、礼典の如き、祝詞の如き、作文の如き其の主なるものである。此等は或は小日本教なる神道派の神官教師を養成するには必要であらう。けれども大日本教即ち世界教たる天理教々師を養成する学科としては余りに固陋に失して居る。もし此等小日本教的形式的学科に貴重時間を浪費するの余裕があつたならば最つと純教理の研究と宗教に關する一般的知識（例えば宗教概論の如き宗教発達史の如き）の收穫の為めに時間と労力とを裂くべきである。然らば半ケ年の短月日に於て最つと活用的頭脳と純理的人格を養成するところができるであらう。之れ人格教育を生命とせる宗教学校として最も注意を要するところである。況して新人格の養成と新世界の建設とを目的とせる世界的大宗教家の養成を目的としなければならぬ天理教校に於てをや。

けれども吾人は元より僅々半ケ年をもつて一期とせる今日の所謂講習会的教校別科制に對して多くの期待を有つて居るものではない。否殆んど全然期待を有せぬのである。従つて一日も早く純天理教主義と其の研究に基く天理専門学校（大学）の創立を唱へるもので

不拔の方針なくして漫然として社会の事業を模するが如きは天理教普及の意義を没却したものと云はなければならぬ。敢て天理教当局者と天理中学職員との協定を望む。

八、天理大中小学創立論並に日曜学校創立論

私は常に信じてゐる。天理教普及の暁には全世界の学校は天理教主義の学校に改められらるであらうと。而して現在の所謂修身科（第二科）は廃せられて宗教科（天理教科）が加へられるであらうと。世界の進歩は実にかくの如き結論に到達しなければならぬからである。蓋し育英の事業たるや一見すれば殆んど閑人の閑事業の如く見ゆれども何んぞ知らん未来の人生の継続発展せらるゝと否とは一に彼等の良否に依るのである。従つて人類社会の第一の事業は政治でもなければ軍事でもなく一に教育事業にあるのである。然るに今日の天理教布教師は罪惡もしくは疾病もしくは不幸に苦められつゝあるものに対しては其の救済の方法に就て油断なき注意を払いつゝありと雖も白紙の如き少青年等が漸次社会の悪風に感染して漸次第二の罪人、病者、不具者、不幸者になるのを知らないで居る。かくの如くにして永遠に病菌と病毒との根絶せらるゝ時はないのである。之れ私をして全世界の天理教徒に向つて各地に天理教主義の大中小学の設立を促す所以である。けれども今日の所此の企ては容易に實現することはできない。（学制上乃至經濟上の事情より）従つて其の一時の方便として全国に日曜学校を設立し、其の義務教育年限を満十歳迄とし、之れを一般信徒の義務とするのである。而して信徒は如何なる事情あるも其の子弟を満十五歳迄日曜学校に通学せしめ其を卒業せしむるの義務があるのである。（十五歳以上は一人前の信徒の数に加入す）かくの如くせば現在の所特に天理大中小学（殊に天理小学校）を治く設立するの必要なく而かも可成の効果を収め得るであらう。（けれども之れは道が全世界に普及しない過渡時代の一時の方便である。）然らば日曜学校の設立並に其の経営法は如何にすべきか？之れは至つて容易の問題である。即ち日曜学校の教場は之れを各地の教会に宛て其の経費は各教会の事業費として負担するのである。此の方法を力めて実施したならば未来の人類をして第二の罪人、第二の病者とならしむることより免かれるであらう。

九、公共事業並に慈善事業論

今日の天理教界に於て具体的に公共事業乃至慈善事業に向つて活動しつゝあるのは僅かに婦人会があるのみである。けれども之れを彼の基督教界の婦人の事業に比すれば創立の日尚ほ浅き為めとは云へ又た甚だ大なる遜色あるを免かれないのである。熟々今日の天理教徒の対社会的活動を觀るに其の精神的事業に於ては他の宗教の企て及ばざる破天荒の事業をなしつゝありと雖も其の具体的社会事業に於ては殆んど見る可きものがない。強めて之れを挙げれば婦人会の養徳院であるが之れも亦其の名の美しきに反し其の実績は殆んど挙げないものである。従つて今日天理教徒に依つて経営せられつゝある事業はと問はゞ殆んど絶無と答へざるを得ないのである。之れを教祖が一面に於て精神の全部を施すと共に他の一面に於て物質の全部を施して所謂有形無形の慈善と其の一生の事業とに鑑みるに今日の天理教徒は正さに懺死に価するものである。何んとなれば今日の天理教は必らずしも公共事業に向つて多少の貢獻をなす得る資力に欠けて居ると云ふことはできない。否な今日の所本願寺の如き財源の豊富なる宗派と雖も天理教に劣るとも優ることはない財力を有するからである。然るに今日の天理教内部の声を聞くに常に其の資力の欠亡を訴へて居る。思ふにこは信徒の義務の不足よりは寧ろ教会の經濟組織の怠慢に基因するにあらざるか？蓋し天理教は近時其の教勢の発展するに連れて其の上級教会は次第に教祖在世当時の苦心を忘れ漸く貴族的奢侈に流れんとしつゝある。一例を挙げて云へば婦人總會の如きを催すに當つて徒らに会の景氣をつけんが為めに信徒の血によつてなる多額の費用を空費するが如き其の一である。此の外見を裝飾することに腐心して内実を充実するの努力をかき、虚榮に失して慈善を忘れんとする傾向は漸次教祖立教の精神を離れて世界の理に墮しつゝある凶兆を示すものであつて吾人教祖の精神を思ふ者の悲まざるを得ないところである。凡そ宗教の価値は個人的人格的価値を決する場合と等しく其の社会的価値の大小に依つて決するのである。之れを彼の救世軍に見るに其の教理上の価値より云へば彼れと之れとは天地の差異があるけれども其の運用上に於て彼は悔る可からざる勤勉と努力とを持つて居るのである。私は敢て天理教徒に向つて救世軍を模せよとは云はない。けれども教祖立教の精神に帰つて考へたならば単に人心救済のみが天理教徒の唯一の事業ではない。公益を弘め幾重の因縁事情の内に封ぜられて修羅の苦患に悶へつゝある不遇の人間をして一時の慰安なりとも与へることも亦天理教徒としてなさざるべからざる事業である。之れ実に個人の善因を積み、教団の善因を積む計りでなく教祖立教の精神に副ふ所以である。

従つて私は天理教徒別けて天理教本部に向つて希望するのである。

内努を節して外用を充せ

と。此の不斷の用意なくして道の永続的發展は期すべからざるからである。又た此の不斷の用意なくして世界の革新は期すべからざるからである。此の不斷の用意なくして甘露台の建設は期すべからざるからである。

結論 本部を改革せよ

サア／＼尋る所／＼尋ねにやならふまい。又た一日の日何んでも何ふでも尋ねにやならん。尋ねるから一言の理悟さんならん。何う云ふ事悟すなら前々より傳へたる情に流れなよ／＼情に流れてはならんで前々より度々悟したる如何な事も聞き分けてくれ。悪い事下さん。悪るいこと悟してない。何よの事聞き分けてくれ。これまで何ふしてなりと此うしてなりと何ふ云ふ事も運ぶ。此ふいふことも運び中に此ふ物入れてはといふことも運び、中に此ふ物入れてはいかんと皆々の者の思ふ。情に流れなよ／＼と度々悟したる中に世上の理に流れる。如何な事も良ふ聞き分けて又た候皆々の所改めよくとり直して改めてくれ／＼改め附いたら日々の理であるこれ第一改めたる心ないかよ。残念のことやはいなあ

サア／＼最う此ふして何うしてとづゝない道は通ふり悪い。しんどい道は通ふり悪い。楽な道は通り良い。情に流れるは通ふり良い／＼言葉下すは容易やない。此の道は席の言葉下すと思ふな。天より悟す。

サア／＼心一つに取り直して真の心に此ふいふ事、何ふ云ふ事と心に一つ理を定めてくれ。いかなる事も改めてくれ。

サア／＼これ良ふ聞き分け。くどふ／＼話し傳へたる智者や学者ででけた道やない。情に流れなよ／＼

サア／＼楽々定約結んであれみよ。もふかい／＼成つても良し成らんでも良し。一つ心紋形ない所から出来た道良く心結んでならん時には何ふせにやならんといふやない。心にある。これ聞き分け。何れだけの器械ある。これだけの器械ある。器械あつても人なかつたら器械動かん。これ心にもつてくれ。良ふ聞き分け。何処に何ふ云ふ事あつた。此ふいふ事あつた。あつてから何ふ云ふ事も改めてくれれば良い。筆にとつた限りといふはそれじまいのものである。

サア／＼確つかり日々の所に運んでいるうちに声止まり一日の勤めもでけんなれど神が使へば何ふ云ふ言葉も下す。何ふ云ふ声も出す。此処の事多く兄弟分兄弟できてある。其の兄弟きいしり心合せ取り換へて此ふ云ふ事改めたならば真は此ふ云ふ事である程にこれから定めて皆々の所へ談示で取り極つて呉れにやならん。——天啓の声

以上述べたる所は現在の天理教界に横はる主なる形式上の欠陥もしくは弊風の一二を指摘してもつて信徒並に本部員の反省力に訴へたに過ぎない。要するに私が今日の天理教界に対する希望の要点は宜しく小宗教家的（旧宗教家的）根性を脱して大宗教家的（新宗教家的）自覚に生き、小国民的根性を脱して大国民的自覚に生き、小日本的根性を脱して大日本的自覚に生き、個人的もしくは党派の根性を脱して人類的精神に生きんことである。蓋し此の道は情実因襲を超越したる新しき天国の道である。然るに今日の天理教徒は余りに自教の宗教史的価値並に其の特色と人生に対する使命とに對して盲目である。更らに云ひ換へれば今日の天理教徒は余りに旧套的である。余りに盲従的である。余りに小乘的であり、余りに相対的である。余りに小国民的であり、余りに神主的であり、余りに迎合的である。余りに消極的であり、余りに形式的である。将来の天理教徒は最つと／＼自覚的、進歩的、開発的、向上的、積極的でなければならぬ。更らに詳しく云へば最つと大国民的、大宗教家的でなければならぬ。これぞ第二の天理教徒の生命と事業とである。

要するに今日の天理教は小日本的より大日本的へ、小宗教的より大宗教的へ、古神道的より新神道的へ、国家的より人類のへ進む過渡時代に立つて居る、真の天理教の事業は全然将来に属して居る。而かも其の事業たるや一に吾人青年天理教徒の双肩に懸つて居る。従つて吾人青年天理教徒の責任は又た重大と云はなければならぬ。

忌憚なく云へば私は本教の根本的改革に關して現在の本部員に多大の期待を抱いて居る者ではない（勿論其の中には一二の信賴するに足る人があるけれども）。彼等は余りに官権と世評とを恐れて居る。可笑しい程官権と世評とを恐れて居る。吾人は殆んど彼等の心理の理解に苦しむのである。

彼等は事毎に云ふ

「此うしたら又た政府で何んとか云つて来やしまいか」

と。抑も彼等は此の道を何んと心得て居るであらう。此の道は彼等が常に信徒に対する説教の中に云ふが如く智者や学者の作つた道ではない。宇宙の無上絶対者の開いた無上無等々の神の道、天然自然の道である。其れは何も知らない政府や愚民の迫害や攻撃に依つて消滅するやうな道でない。火にも焼けず水にも溺れず刃をもつて切ることの出来ない道である。道の価値に對して此の無上絶対の自覚なくして自ら道の宣伝者たりと公言する権利は何処にあるや？ 苟も神の代表者と稱するものにして日常にかくの如き用意のない筈はないのである。もし此の不断の用意なくば其れは本部員にして本部員ではない。否な平凡普通の天理教信徒でさへないのである。

抑も本部とは何んぞや本部員とは何んぞや？ 本部は神の鎮座所であり、本部員は神の直臣神の直接の代表者である。然るに其の直臣、神の直接の代表者より進んで神の意志を實現する積極的愛と信と力とがなかつたならば本部員たる理は何処にかある？

畢竟本部員とは本部に生活するが為めの本部員と云ふのではない。神と最も精神的に密着して居るものが眞の本部員である。然るに今日の本部員の多数は政府と愚民との意志の表現には絶対に忠なれども神の意志の實現に関しては殆んど何等積極的の誠意がないのである。かくの如くにして果して神の飯を食ひ神の恩に生きて居る本部員として職責を全うしたりと信ずるであらうか？ 私は彼等が中心深く恥ぢんことを望むのである。

抑も「恐いと思ふ様では末代と云ふ道通れるものではない。」もし神の意志を直現直行して其の為めに此の道が潰れるものならば潰るゝ俛に任したが良い。吾人は唯行くべき所まで行けば足るのである。敢て神（宇宙生命）の大意志と本教の価値及び使命とを理解せざる否な宗教其の者の価値をも全然知らざる政府や愚人の言に耳を傾けるの必要はないのである。

人誰か三歳の小児の言によつて人生社会の重大問題を解決せんや。思ふて此処に至らば彼等の恐るべき理由は、聊かもないのである。寧ろ進んで彼等の無知を啓発こそ神の大意志の体现者たり濟世救人を天職とし生命とする宗教家の義務にはあらざるか？ 何んぞ一時一国の無智の政府当局者の言に左右せられて人類永遠の計を怠るべけんや？

蓋し今日の政府当局者が独天理教に對して苛酷の干渉をなす所以のものは眞に天理教の目的価値及び使命を自覚せざるに依るのである。

由来今日の政治家は余りに旧日本的である。彼等は余りに小日本を中心として凡ての事を裁断せんとするの固陋に墮して居る。彼等が天理教の神名を古典になきを名として削除改名を迫つた如きも其の一例である。之れ天理教の大日本の思想と容れざるや当然の事に屬するのである。

教祖は書き遺して居る今までは唐や日本と云うたれど之から先は日本ばかりやと。天理教の理想は全世界を日本とするにある。これが神の大精神であると共にやがて教祖の大精神である。従つて天理教は古神道の如き単なる小日本教ではない（古神道も其の元は小日本教ではない大日本教である。其れを後世の狭隘なる島国的愛国家が寄つてたかつて小日本教にして了つたのである。）。大日本教である。人類教である。世界教である。

然るに旧日本の思想を未だ脱しない小国家主義者や小日本主義者は日本即世界、日本の皇室即世界の皇室、日本国民即人類の天理教の大思想、大精神を理解し得ずして徒らに大日本教たる天理教に圧迫を加へて居る。思ふに政府をしてかくの如き誤解を継続せしむる所以のものは独政府当局者の無智と僻見にのみ歸することは出来ない。其の罪の半ば天理教当局者が余りに封建時代の旧弊を固守して政府の威権を恐れ自ら進んで自教の目的価値及び使命を当局者に理解せしめんとする積極的用意と積極的意志とに欠けたが為めである。私の考ふる所を述べれば彼等が政府の命令と云へば余りに平身低頭して聞かずに最つと自教の大精神を積極的に説明したならば当局の誤解も最つと早く解くことが出来たであらうと思はれる。

由来陰險は日本国民の特色である。彼等は一度其の身に迫害の来るや事の真相を隠蔽しもつて一時を免がれんとするのである。之れが殆んど彼等の常套手段である。今日迄の天理教当局者の取つて来た態度も此の婦女子的態度であつた。けれども今日は時代が一変した。何時までも天啓や教理を隠蔽して世人の鼻息を伺つて居る時ではない。自ら進んで積極的に自教の精神と自己の信仰とを直現すべき時代である。これぞ即ち世界一新の時期を早めると同時にやがて神意に添ふ所以である。敢て天理教当局者の猛省を促す。（大正四年五月十日稿）

以上述べたることは天理教の独立発展と其の結果によつて促進せらるゝ世界一新の事業の為めに私の云はざらんとして而かも云はざるを得ない卑見の千百万分の一に過ぎない。私は尚ほ将来に向つて世界の一新天理教の一新的の為めに身命を賭して敢て破邪顕正の事業

に向つて奮進する心算である。

唯此処に一言述べて天理教当局者並に信徒に御詫したいのは私が今日までに発表した天理教に関する意見の中に偶々言の諸卿に及んだのは一に憂世愛教の精神の発露である。敢て個人として何等の他意はないのである。従つて冷静に且つ沈着に私の誠意のある所を理解下さらば私の幸福は之れに過ぎない。敢て一言のお詫をさして戴くのである。

天啓の声

R O 生

因縁なれば通らにやならん。通さにやならん。通して心直さにやならん。

凡そ「動あれば反動あり」「原因あれば結果あり」と云ふのが宇宙の法則である。之れを時計の振子に見るに一寸左へ行けば行つた丈け後へ戻つて来る。人間も一里人道を踏み外ずして外道へ外れれば外れた丈け後戻りしなければならぬ。此の往復の道を因縁の道と云ふ。

因縁にも幾重の因縁があつて必ずしも一筋道とは云へない。けれども何の様な因縁も其の原因は心即ち性格にある。之れを例へて云へば心（性格）と因縁（運命）とは恰度影と形の様なものである。形が曲つて居れば影も曲つて映り形が真直なれば影も真直に映る。人間の性格と運命も同じこと。性格が曲つて居ればつい側道へ外れて終ひには谷底深く陥る様なことになり、性格が真直なれば一直線に本道を進んで終ひには無事目的地（無上の幸福）に達する様になる。其れであるから御神楽歌にも、

病の原因は心から

難儀するの心から

と説かれてあるのである。蓋し病氣をするとか災難に逢ふとかいふのは之れを例へて云へば右に回転すべき機械を左へ逆転し、左へ回転すべき機械を右へ逆転する様なものである。始めより自然の方向に向つて回転したならば機械の摩滅もなければ破損もない筈である。其れを不自然の方向に向つて廻転するから機械に破損や摩滅が来るのである。人間も其れと同じこと。本来は利他的方面に向つて使はなければならぬ精神を利己的方向に向つて使ふから遂ひ病氣をしたり、災難に逢つたりするのである。従つて天の親様が心得違の点を身上事上の上にて悟して下さるのを良く思案して心の向け方の間違つた点は早速直さなければならぬ。其うしたならば神も喜び、人も喜び果ては自分自身も喜ぶ（此の三喜の揃はぬ行為は真の天理人道に叶つた生活とは云へない）様な幸福に到達するのである。（性格は即ち運命なり）

心が澄まんから身の所が澄まん

御言葉に、

「身上は心の鏡といふ」

と仰せられてある如く凡て心通りの理が身上、事上、世上に映つて来るのが自然の理であるから心が濁つて居れば濁つて居る様、澄んで居れば澄んで居る様な理が形に表はれて来る。従つて身上——肉体を澄まさう——健全化せう——と思ふならば心を澄まさ——健全化し——なければならぬ。心が澄んで——健全化して来れば身上——肉体——も澄んで——健全化して来るのである。

皆面々に理を施すを助けと云ふても心に誠なふては人を助けると云へん。

理の浅い者——形式主義者——は金銭や物品を与へさへすれば施であり、教理を人に話しさへすればお助けした様に思つて居るが其れに誠と云ひ、同情と云ふ精神が添はなかつたならば機械や蓄音器も同じことである。

蓋し物施すと云つても物施すのではない。心の誠を施すのである。又た理を施すと云つても理を施すのではない。心の誠（同情、愛）を施すのである。

蓋し物も理も凡て皆神の物。吾が物と云ふは心一つ。精神一つ。誠一つ。其の心を施さん様では吾が施しとも吾が助けとも云へまい。恰度主人や親の贈り物を先方へ届けた丈けのものである。従つて我が効能にも我が功德にもなりはしないのである。

此の御言葉は広告屋的教師や虚栄の為めの慈善家に取つて蓋し頂門の一針である。

聖壇に立ちて

大 平 良 平

十、

凡そ人類の精神的生育期に三期ある。

第一期は智育期である。

第二期は情育期である。

第三期は意育期である。

仏教は第一期の智育教である。其の特色は觀照的、智識的である。

基督教は第二期の情育教である。其の特色は冥想的、感情的である。

天理教は第三期の意育教である。其の特色は積極的、活動的、現代的、意力的、平民的、殊に平民的、現代的である。更らに其れよりも大なる天理教の特色は現在に於て濟世救人の實力を有する生の宗教、力の宗教、価値（徳）の宗教であることである。

此等並に之れに類する天理教の特色は啻に宗教界のみならず實に人生に一新紀元を画する天理教独特の特色であつて、やがて全世界を自由平等化せんとする神の大意の一層徹底せしむることを表現せるものである。

釈尊曰く

「法は譬へば水の能く垢穢を洗ふに若くば井、若くば池、若くば江、若くば河、溪渠、大海悉く能く諸有の垢穢を洗ふが如く、其の法水も復是くの如し。能く衆生の諸の煩惱の垢を洗ふ。善男子。水の性（H₂O）は是れ一なれども江河、井池、溪渠、大海各々別異なるなり。其の法性も復是かくの如し。塵勞を洗除すること等しく差別なれども三法四果二道不二なり。善男子。水は俱に洗ふと雖も而かも井は池にあらず。池は江河にあらず。溪渠は海にあらず。如来世雄の法に於て自在なるが如く所説の諸法も復是くの如し。初（仏教）中（基督教）後（天理教）の説皆能く衆生の煩惱を洗除すれども而かも初めは中に非ず。而かも中は後に非ず。初中後の説文辞一なりと雖も而かも義は各異なるなり」——無量義經、慶長の小判も現代の金貨も黄金たるに於て或は同一であるであらう。けれども廢貨（仏教、基督教）は現代に通用しない。強めて通用せんと欲せば其を改鑄せざるべからず。而かも其は全く個人には許されてゐないのである。吾人の求むべき唯一の金貨は唯現代の通貨（天理教）あるのみ。

十一、

凡そ宗教にせよ、芸術にせよ、哲学にせよ、乃至倫理、道德、教育、政治、科学、実業にせよ、其が人生に対する使命は内外浅深広狭大小の差こそあれ、等しく刻々に湧き出づる人生問題を解決して更らに未来に向つて人生の向上発展の活路を開拓するにある。従つて其の内容は常に新鮮なる活力に富んだものでなくてはならぬ。何んとなれば人生其者は刻々に自然——神——の大意に依つて動きつゝある活物であるからである。従つて吾人の今日要求する所の宗教、芸術、哲学、倫理、道德、教育、政治、科学、実業は昨日の人生問題を解決して今日の人生問題を解決するに足らない死して既に生命を失つた廢物的宗教や廢物的芸術や、廢物的哲学や、廢物的倫理や、廢物的道德や、廢物的教育や、廢物的政治や、廢物的科学や、廢物的実業ではない。現在に生命と価値と實力とを有する生ける宗教であり、生ける芸術であり、生ける哲学であり、生ける倫理であり、生ける道德であり、生ける教育であり、生ける政治であり、生ける科学であり、生ける実業である。既に三千年乃至数十百年以前の過去に於て人生に対する使命を果して了つた釈迦や基督や孔子やソクラテスやプラトンやアリストテレスやダンテやゲーテやシエークスピアやが如何に当時の宗教界哲学界乃至芸術界の絶対權威者であるにもせよ進歩せる現代の宗教界、哲学界、芸術界より見れば殆んど何等の威力をも有しないのである。

現代を指導するものは須らく現代の宗教、現代の哲学、現代の芸術、現代の倫理、現代の道德、現代の教育、現代の政治、現代の科学、現代の実業でなければならぬ。而かも其れは今朝のものでさへあつてはならぬ。現在今といふ今の瞬間に於て生命と活力とを有する生きた新宗教であり、生きた新哲学であり、生きた新芸術であり、生きた新倫理であり、生きた新道德であり、生きた新教育であり、生きた新政治であり、生きた新科学であり、生きた新実業でなければならぬ、而かも其れは客觀的抽象的のものであつてはならぬ。主觀的具体的のものでなくてはならぬ。更らに云ひ換へれば宗教の為めの宗教、哲学の為めの哲学、芸術の為めの芸術、倫理の為めの倫理、道德の為めの道德、教育の為めの教育、政治の為めの政治、科学の為めの科学、実業の為めの実業であつてはならぬ。何処までも人生の為めの宗教、人生の為めの哲学、人生の為めの芸術、人生の為めの倫理、人生の為めの道德、人生の為めの教育、人生の為めの政治、人生の為めの科学、人生の為めの実業でなければならぬ。苟も人生而かも現代と交渉を有せざる宗教、哲学、芸術、倫

理、道德、教育、政治、科学、実業の如きは吾人に取つて殆んど何等の価値をも有するものではない。

畢竟宇宙は永遠無限の霊体、人間こそ向上進化の活物である。常に進歩し、常に発達す。其れに依つて神の無限理想が表はれるのである。現在の世界は神の仮普請に過ぎない。神は更らに万物を浄化し、人間を聖化して更らに完全無欠の黄金世界（甘露台）を此の地上に実現するのである。

十二、

現在の世界は既に第一期の精神的大革命（仏教）の時代を過ぎ、第二期の精神的大革命（基督教）の時代を過ぎて第三期の精神的大革命（天理教）の時代に入ったのである。

之れを人間より云へば少（智育時代）青（情育時代）年期を過ぎて壮年期（意育時代）に入り、之れを自然より云へば春（播種期）夏（培養期）の候は既に過ぎて秋期（收穫期）の候に入ったのである。

美伎子は実に此の第三期の精神的大革命期の総指揮官であり、未来永劫に亘つて建築せらるべき神殿建築の総頭梁であり、兼ねて世界の大收穫期の総支配人であり、新世界の第一人者であり、新時代の母であり、新生活の羅針盤であり、神が人類の為に開拓した新しき生ける天国の道であつた。

凡て如何なる偉人と雖も時代を懸絶して突発的に生るゝものではない。其の背景には必ず時代の要求——時代の要求は神の要求である——を負ふて出現するのである。此の世界最後の救世主の出現も亦

英雄は時代の産物なりと云ふ言葉を如実に語つて居るのである。

蓋し彼女は釈迦が智育時代の典型人であり、基督が情育時代の典型人であつた如く現代の意育時代の典型人であり、釈迦が觀照時代の象徴人であり、基督が冥想時代の象徴人であつた如く彼女は現代の活動時代の象徴人である。

見よ新生の太陽——中山ミキ子——は既に東山の頂に登つた。夜——懷疑——は去つて昼——信仰は来たのである。

吾人々類の仰ぐべき太陽は昨日の太陽——基督——昨日の太陽——釈迦——であつてはならぬ。吾人々類の仰ぐべき眞の太陽は今日の太陽——ミキ子——である。

吾人々類の求むべき天国の通貨は前代の廢貨——仏教、基督教——であつてはならぬ。

吾人々類の求むべき理想界の通貨は現代の通貨——天理教——でなければならぬ。

吾々は最早や檀特山の樵夫たることを望んではならぬ。吾々はもはやカラリヤの漁夫たることを望んではならぬ。正さに庄屋敷の農婦たることを望まねばならぬ。之れぞ現代の要求であり、やがて私自身の中心の要求である。（つゞく）

編集室より

天理教も第一次の神殿建築事業が終つた。喜ばしい事である。けれども其の喜びの間にも第二次の有形無形の神殿建築の事業に取り掛らなければならぬ。マア／＼之れで良い、之れで一先づ安心と氣を抜いて了ふ様では何もならぬ。奉告祭は奉告祭として思ひ切り盛んに祝つたならば祝つた帰り途より檻褻着て働く覚悟でなければならぬ。働きと云つても金儲けの爲めの働きではない。助け一條の爲めの働きである。助け一條の働きが御祭よりも遊び遊山よりも面白くない様では眞の天理教徒とは云へない。これを此度の奉告祭の祝詞として置かう。

道の友は表紙四面に天理教の心掛けとして

- (一) 天理教徒はヒノキシンの精神を以て活動せなければならぬ
- (二) 天理教徒は無用な時間を費してはならぬ
- (三) 天理教徒は約束を確実に実行しなければならぬ
- (四) 天理教徒は表面の善行よりも陰徳を重んじなければならぬ
- (五) 天理教徒は第一に神に仕へ次に人に仕へなければならぬ
- (六) 天理教徒は深い慈悲心を持たなければならぬ
- (七) 天理教徒は他人を責める前に自分を責めなければならぬ
- (八) 天理教徒は形の上の飾りよりも心の上の飾りを主としなければならぬ
- (九) 天理教徒は大いに日本を敬愛しなければならぬ
- (十) 天理教徒は執着心を去らなければならぬ

の十條を挙げて居るが私の希望は天理教徒といふ固有名詞の代りに人といふ普通名詞を用ゐられたいことである。何故なれば天理教即ち自然の法則は今日の所謂天理教徒といふ

特種の団体のみに適用すべき法則ではなく全人類に通じたる共通の法則であるからである。

次には「ねばならぬ」といふ拘束的・命令的の言葉を用ゐられたことである。これは天理教々理と現代思想の特色とを無視した書き方である、何故なれば今日は「ねばならぬ」と云ふ教訓的、命令的、圧迫的、拘束的、封建的、政治・道徳・宗教の時代は過ぎた。今日は将に「……せんと欲す」と云ふ自由意志の時代である。天理教は即ち此の自由意志時代の宗教であるからである。天理教が凡ての宗教中最も進歩せる自由意志教なる証拠には御示訓の中にも「何ふせ此ふせこら云はんこら云へん。云はん云へんの理を聞き分けるなら何かの理も鮮かと云ふ」と云はれてあり、又た御神樂歌七下り目第七節に「無理に何うせと云はんでな其処は銘々の胸次第」と云はれてあるのでも明かである。之れと同一の意味の言葉（来ぬ者に来いと云はん。往ぬ者に来いと云はん）が御言葉の中にもある。教祖は唯天然自然の客観の法則云ひ換へれば神の大主観を叙述したに過ぎない。其れを信ずると信ぜざるとは個人の自由に任せたのである。

由来人間は「貸物借物の理」に説かれてあるが如く精神一つの自由を先天的に附与せられてある。其を掠奪し牽制することは神の最も喜ばざる所のものである。別けて天理教は自由意志を尊重する宗教である。云ひ換へれば自由意志をもつて天理即ち神の意志を尊重する宗教である。云ひ換へれば自由意志をもつて天理即ち神の意志に服従することを教へる宗教である。其の宗教の機関雑誌からして此う云ふ旧式の官庁的用語を用ゆると云ふ事は第一天理教の自発的・自覚的特色を無視したものと云はなければならぬ。此の自家撞着の態度は教庁の訓令に於ても亦同様である。吾人の教庁並に道の友記者に望む所はかくの如き高踏的態度を捨て、教祖の所謂低い心なる平民的態度・啓発的態度に出でられんことである。これは本部より力めて力行しなければならぬ点である。

次には天理教の心掛け十ヶ條の内容である。之に就て私は私丈けの意見を持つてゐるが道の友の記者もマサカ之れを以つて天理教の教憲として書いた心算でもあるまいから其れは略すとして最後の二ヶ條に対して一寸私の感想丈け述べて置かう。其れは

(九) 天理教徒は大いに日本を敬愛しなければならぬ

(十) 天理教徒は執着心を去らねばならぬ

と云ふ言葉である。

記者の意見では日本と云つたのは小日本を指したのであるか大日本即ち世界を指したのであるか明かでないがもし小日本の意味で書かれたものであるならば其れは天理教の理想を自ら狭窄する様なものである。もし大日本の意味で書かれたものであるならば誤解を招かぬ様の書き方即ち大日本或は世界と書いて戴きたい。

次には「天理教徒は執着心を去らねばならぬ」と云ふ言葉であるが一概に執着心を去れと教ゆることは最も危険なる教訓である。記者の意見では我執即ち小我に対する執着心を去れと云ふ意味で書いたものであらうが其れなら其うと書かなければならない。何故なれば一口に執着心と云へば大我に対する執着心もあれば小我に対する執着心もある。永生に対する執着心もあれば一時生に対する執着心もある。其れは何れにしても生に執着すると云ふこと云ひ換へれば生を愛するということは生物自然の本能である。其の生物自然の本能を撲滅せよと教ゆることはやがて一種危険なる虚無主義に墮するからである。

由来天理教は仏教の如き厭世主義の宗教と異なり生を熱愛する樂天的宗教である。其の核心を形造くるものは執着心即ち永遠に生きんとする強烈なる意志である。この執着心即ち意志の強大なる点がやがて天理教の今日並に将来の偉大をなす所以である。従つて私は天理教徒に向つて否な人類に向つて大なる執着心を養へとこそ忠告すれ毫も執着心を去れと教ゆべき理由を認めないのである。況んや天理教は将来一層大なる積極的・現代的活動を展開せざるべからざる時期に於てをや。これは極々些細の文字である。而かも私はかくの如き小文字の一端にさへ未だ眞の天理教の生命が生きたる表現を持たないのを悲しむのである。(RO生)

今までの事は何にも云てくれな二十六日（天保九年十月二十六日）に始めかける
で

御言葉に
昇り切りたら下らにやならん。落ちにやならん
と。これと同一の真理を昔から異つた言葉をもつて語つて居る。即ち
月満れば欠く
と。之れを植物に見るに春に花咲き夏に実を結び秋に熟して冬に憩ふ。憩ふて更らに来る
べき春を待つて居る。之れを人間に見るに母胎より離れて幼年期、少年期、青年期を過ぎ
て壮年期に入り、初老、中老、後老の時期を過ぎて再び自然の懷に歸つて行く。而して再
び更生の時機を待つて此世界に生物として表はれて来る。此の期間を称して人の一生と云
ふ。人生とは畢竟此の一生と一生との永久的連鎖である。
けれども此の天然自然の一大法則なる循環律は目的なしに繰り返さるゝものではない。
必らずや一定の目的を有するのである。例へば此處に熱心なる一人の植木屋がある。彼は
沢山の植木を持つて居る。彼は嚴冬には温室に移し、酷暑には日蔽を作り、湿期には火氣
を与へ、干天には水を施す。或は肥料を蒔き、或は贅枝を剪り、或は土地を更ゆ。かくの
如く朝夕丹精して夫々に美しき樹木に育て上げた。彼の苦心には目的がなかつたであらう
か？ 否彼には多くの樹木を美しく育てゝ樂まんとする欲望があつたのである。神が人間
を生み人間を育てるにも亦之れと同一の目的があつたのである。即ち神が人間に水火風を
与へ、衣食住を与へ、智徳を与へ、苦樂を与へて来たのは人間を偉大にして善美に育て上
げんが為めである。其の生を更へるは所を更へるのである。其の間を貫く神の意志は人間
をして神の予定の目的に従つて向上発達せしめんが為めである。かくの如くして吾人々類
は一生の期間に幾分の進化（もしくは退化）を遂げ更らに次の一生に移るのである。
けれども転化は一生の始と終とにのみあるものではない。一生の中にもある。更らに詳
しく云へば年々が転化期であり、月々が転化期であり、日々が転化期であり、時々刻々が
転化期である。けれども此處に転化期と称するのはかくの如き個人の一生もしくは一年も
しくは一月もしくは一日もしくは一時もしくは一分もしくは一秒の転化期をさしてのみ云
ふのではない。人類全体世界全体の歴史的転化期に就いて云ふのである。
凡て物極はまれば必らず移るは宇宙の法則である。これは自然と人生とに通じて同一で
ある。即ち之れを自然現象に就て云へば春極はまつて夏に移り、夏極はまれば秋に移り、
秋極はまれば冬に移り、冬極はまれば春に移る。かくの如く四時循環して止む時はない。
之れを人事現象に見るに苦極はまれば樂を生じ、樂極はまれば苦を生じ、榮極はまれば枯
を生じ、枯極はまれば榮生じ、盛極はまれば衰生じ、衰極はまれば盛生ず。貧富順逆も亦
同一である。これは個人の運命を支配する永久不変の法則である計りでなく人類全体の運
命を支配する永久不変の法則である。而して如何なる英雄、豪傑、聖人、君子と雖も此の
天然自然の法則に漏るゝことはできない。又た如何なる宗教、哲学、芸術と雖も此の法則
に漏るゝことはできない。これは独史家の認むる事實であると同時に又た天文学者、地質
学者の均しく認むる所である。
歴史家の説を聴く迄もなく進化論者の説を聴く迄もなく天文学者地質学者の説を聴く迄
もなく天体並に地球及び人類が今日の天体、今日の地球、今日の人類に発達するには数千
回数万回の転化期があつた。独人間に就て云つても原人に進化するには八千八度の更生が
あつた。爾來今日に至る迄前後併せて九千九百九十九度の更生と聴けど其の間に行はれた
る人生の一大転化期は其う数多くはなかつた。而して現代は其の中に於て殆んど空前絶後
の一大転化期に際してゐる。
即ち歴史上何時の世に昼夜の中に数百哩の山野を走り、一周日の中に万里の波濤を越
え、或は地に潜り空に翔り、（神は飛行機飛行船の出来ざる五十年以前に此の予言を發表
して居る。）水を犯して進みたる事実ありや？ 又た歴史上何時の世に点ぜざるに燃え、
見えざるに声を聞き、千里を隔てゝ談話通信を自在に交換したる事実ありや？ 此等は現
代の物質文明の顯著なる一二の実例に過ぎざれども此の他農業工業商業軍事交通の上に発
明せられ応用せられつゝある物質文明の力は實に空前の一大現象である。而かも文明は独
眼に見ゆる現象界物質界のみに限られてはゐない。更らに目に見えざる偉大なる無形の文
明を無象界精神界に於て見るのである。此の無形の精神的新文明とは即ち天理教文明に外
ならないのである。（今日の歴史家は未だ此う云ふ新熟語を使用することを知らない。け
れども後世の歴史家は必らずや此の新熟語を使用して現代を批評する時が来る）
畢竟現代は物質的に又た精神的に新旧文明の空前の一大転化期に際してゐる。即ち古き

凡ての旧物質的文明旧精神的文明は破壊せられて全然新らしき新物質的文明、新精神的文明が建設せられんとしつゝある時代である。此の新旧文明の一大転化期の桧舞台が日本である。其処には最も鮮かなる色彩を以つて転化期に於ける人類の活動の生きた姿が画かれつゝある。其処には最も麗かなる音律を以つて東西文明の混合錯綜せる生きた音楽が奏でられつゝある。其処には最も華かなる衣装を着けて時代の明星が登場演舞しつゝある。而かも宗教界芸術界哲学界政治界教育界実業界軍事界科学界の代表的演者の総出をもつて。聞け彼方北海の門を叩くは露西亜ではないか？ 彼の来れるは我が国と交際を開かんが為めである。見よ此方浦賀の海に見ゆるは英船ではないか？ 彼の来れるは亦我が国と交際を開かんが為めである。此の他琉球に仏、長崎に蘭皆之れ吾が国と交際を開かんが為めである。最後に訪れたる客は米国である。長い間鎖された日本の門戸は遂に此の最後の客の為めに開かれた。爾来当時まで固守せられて来た鎖国主義、排外主義、保守主義、消極主義、封建主義は廢れて漸次開国主義、世界主義、進歩主義、積極主義、立憲主義が起り遂に明治維新の一大革新が實現せられた。

けれども文明は独外から来たのではない。内により大なる文明の核心の潜んでゐたことを忘れてはならぬ。其のより大なる文明の核心とは天理教祖に依つて開發せられたる精神的文明である。之れを例へて云へば天理教文明は未来の日本（世界）の中心を形造くる核であつた。西洋文明は其れを培養する肥料である。此の内外二種の文明が相応じて此処に始めて完全なる未来の一大新文明を生むのである。

教祖が天啓を受けたのは天保九年十月二十六日。明治維新に先つこと三十年であつた。けれども事は成る日に成るにあらずして其の前に準備を要するのである。而かも其の事実が偉大なれば偉大なる程其れに要する準備も亦大なる時間と労力とを要するのである。明治の維新が一日の中になつたものではなく千有余年の事業であるが如く天保の精神的大革命も亦神の長き準備の下になつたのである。之れを自然現象として説明する時は封建の弊極はまつて立憲政治が生れ貴族的専制的思想の弊害が極わまつて平民的立憲的新宗教が生れたのである。けれども政治上の革新といひ、精神上的の革新といひ偶然に行はるゝものではなく凡て皆神の大権の發動せるものであることを忘れてはならぬ。将来の文明史家は其の注意の焦点を此処に置かなかつたならば恐らく世界進化の中心の意義を捕捉することが出来ないであらう。

蓋し政治と云ひ宗教——宗教は神の政治である——と云ひ今日の世界では恰かも二元的の姿を呈して居るのは未だ人為的法律が宇宙の最高法律——宗教——に及ばないからである。云ひ換へれば現実の世界は未だ真に理想の世界に到達しないからである。けれども人生の理想より云へば此の政教二つは終局に於て一致せざるべからざる運命を有してゐる。唯だ其れに到達するには時の問題である。今の道上（皇帝）の俛やと思ふてゐる心違ふで神の俛なり

上たるは世界中を俛にする神の残念これを知らんか
是までは万世界は上の俛もう之れからは文句變るで
此の世を始めからに何もかも説いて聞かしたことはないので
上たるは世界中を我俛に思て居るのは心違うで
此の世を治めるも上天も神上と神との心わけるで
是からは神の心と上たるの心と心の引き合はせする
此の話し一寸の事やと思ふなよ神が眞実見兼ねたる故
是からは神の力と上たるの力比べをすと思へよ
いかほどの強敵あらば出して見よ神の方には倍の力を
眞実の神が表へ出るからはいかなもよふもすと思へよ

之れ即ち政教一致の時期の近づける神の予言である。
蓋し政治上に於て封建の旧制が廢れて立憲政治が布かれたのもこれを人間の力人間の事業と思つてはならない。神の力神の事業である。又た思想界に於て専制的貴族的思想が亡びて平民的立憲的新思想が起つたのもこれを人間の力人間の事業と思つてはならぬ。神の力神の事業である。

畢竟宗教といひ、芸術といひ、哲学といひ、科学といひ、政治といひ、実業といひ、其れは部分的、畸形的に発達するものではない。必らずや一つの完全なる有機体の一部分として相調和して発達するものである。従つて其の時代の宗教もしくは芸術もしくは哲学もしくは科学もしくは政治もしくは実業の一端を伺へば当時の時代思想と文明の程度とを推測することができる。恰かも偉大なる動物学者が動物の化石の一片を見て其の全体の骨格組織を推測するが如くに。蓋し宗教といひ、芸術といひ、哲学といひ、科学といひ、政治といひ、実業といひ、之れは人生といひ社会といふ一個完全なる有機体を形造る有用の要素である。其れには人間の肉体の神経組織が大小脳即ち神経中枢の命令を全身に伝達するが如く神の意志を伝達してゐる。従つて其の一つを伺えば他を類想することが出来る。現

代の宗教、現代の芸術、現代の哲学、現代の科学、現代の政治も亦其うである。吾人は其の一つを研究することに依つて現代社会の文明の程度を推測することが出来る。今や政治上に於て封建制度が倒れて立憲政治が實現せられたるが如く宗教上に於ても封建的宗教（旧宗教）が倒れて立憲的宗教が建設せられた。此の新時代の立憲的宗教とは天理教即ち之れである。

今迄は高い山やとはばかりて何か万を俛にしたれど
これからは月日かはりて俛にする何かの事を俛にしてみよ
今迄は高山やとてけん／＼と俛にしてゐた事であれども
これからは如何程高い山でもな谷底俛に更らにでけまい
高山に暮らしてゐるも谷底に暮らして居るも同じ魂
それ知らず皆人間の心ではなんと高低あると思ふて
確かと聞け高山にても谷底も見れば月日の子供ばかりや
人間は一系列子供可愛かる神の残念これ思てくれ
此のかやし大社高山取り払らい皆一系列に承知してゐよ
何のよふな大社高山油断しな何時月日とんで出るやら
何のよふな事をするの月日やで何を云ふのも皆月日やで

吾人は明治維新の事業と天保の精神的革命とを見て此の神の予定の理想の一部分の實現せられたるのを見る。而して此の政教両界の維新革命とを見るに其の間に大なる一致を見るのである。即ち政治界に於ては今迄將軍と諸大名とに依つて行はれた寡頭政治、専制政治、貴族政治、封建政治が破壊せられて長い間武家の圧迫によつて失はれて居た政權が天皇に返り其れと同時に多数政治、立憲政治、平民政治、自由政治が漸次建設せられつゝあるが如く宗教界に於ても亦長い間神の代表者と其の弟子とに依つて独占せられて来た命令的、教訓的、拘束的、強制的、非現實的、非社会的、超人的貴族教が倒れて自由と独立とを尊重する現實的、社会的、平民的、現代的新宗教が天啓された。彼の神社仏閣が日に日に荒廢して僅かに篤志家の寄進に依つて維持して行く所以のものは神の意志が移り人類の宗教的欲望が既に其処を去つて全然新しき世界の建設に移つたことを示すものである。

此のかやし大社高山取り払らい皆一系列に承知してゐよ

並に

今迄の事は何んにも云てくれな二十六日（天保九年十月二十六日）に始めかけるので神歌は即ち此の間の消息を語つて居るのである。

蓋し明治維新といひ、天保の天啓といひ、之れを時代の趨勢より考ふる時は明かに内政（宗教）外政（政治）の上に於ける神の意志の全然一変せることを表象してゐる。これは天理教の立教並に明治維新の新政の事実が何よりの証拠であるが更らに過去の既成宗教と天理教の比較並に封建時代の政治と現代の立憲政治とを比較研究せば一層此の事実を確めることが出来る。即ち

第一條 汝智を尽し、情を尽し、意を尽し、力を尽して主たる汝の神を愛すべし

第二條 汝と同じく汝の隣を愛すべし

これは過去の既成宗教中比較的近代迄勢力を維持し今尚ほ偉大なる古典的頭腦の間には多少の信仰を繋がれて居る基督教の憲法であるがこれを天理教の

第一條 理（神）を立てゝ身が立つ

第二條 人を助ける理が助かる

の二大憲法と比較対照せば其内容に於て形式に於て明かに大なる相違点を発見するであらう。即ち前者は教訓的、命令的、拘束的、圧迫的、高踏的思想の跋扈した靈界の専制時代の旧憲法であり、後者は自覚と自由とを尊重する靈界の立憲時代の新憲法である。前者は人類を非人格的に取扱ひ、後者は人間を人格的に取り扱つて居る。即ち前者は未だ人間の眞の獨立した人格を認めない。けれども後者は明かに人間の人格を認め、其の向背信不信は全く個人の自由意志に任せて居るのである。此処に新旧宗教の顯著なる対照を発見するのである。

此の他詳細に亘つて仏教、乃至基督教と天理教とを比較研究せば明かに後者には前者に於て到底見るべからざる偉大なる眞実を発見するであらう。一例を挙げて云へば貸物借物の理並に今より十億万年の過去に於て人類が始めて現今の大和三島を中心として神に依つて造られ爾來凡ゆる生物の階級を通つて現在の人間に進化して来たといふ天理教の新創世説の一片をとつても如何に深く自然人生の眞実に徹底した新宗教たるかを知る事ができる。

更らに天理教と天理教以前の旧宗教との形式上の差異に就て見れば（基督教は尚ほ比較的簡單なる近代的の構造を持つて居るけれども）其の教理は殆んど時間と勢力とに余裕を失つた近代人の研究には不可能なる程複雑な組織をもつて居る。勿論其れは充分に觀照や冥想に耽つて居ることのできた當時に於ては良かつた。けれども今日は最早觀照や冥想の

為めに多大の時間と勢力とを裂いて居ることのできない時代である。此の多忙時代の宗教として表はれたものが天理教である。

天理教の教理は一見何人にも理解し得る所の通俗平易の簡単な形式をもつて居る。即ち身上貸物借物の理の如き、因縁の理の如き、八埃の理の如き、日の寄進の理の如き、足納の理の如き、之れを六ヶ敷く説けば如何程にも六ヶ敷く説かれる宇宙の真理を最も通俗平易の簡単な日常語而かも仮名をもつて説いて居る。此の通俗平易の天理教々理は世人の信ぜざるが如く教祖の無学の結果ではない。教祖は基督と同じく書物の上の学問はしなかつたけれども先天的に眞の学才を有して生れた天才である。之れを説く方法の難易に就ては自由自在の力を有して居た。而かも之れを（仏教の如く）難解の言語もつて説かなかつたのは神の理想の層普通的平民的に進歩して来たことを語るものである。

要するに此の三教（仏教、基督教、天理教）は之れを一面より見れば人間が知情意の階級を経て進化する思想発達の記録であると共に之れを他の一面より見れば觀照時代より冥想時代を経て活動時代即ち眞人生に入る思想史である。之れを譬へて云へば仏教は玄米の如く、基督教は中白米の如く天理教は上白米の如し。仏教乃至基督教には尚ほ多くの滓を有してゐるけれども天理教には少しの贅物もない。全然磨き上げた玉の如きものである。其中には大海の如く東西古今の凡ゆる思想の潮流（個人主義も、世界主義も、家族主義も、国家主義も、人類主義も、人為主義も、自然主義も、理想主義も、現実主義も、自力主義も、他力主義も）を包有して居る。これ即ち神の所謂本道（往還道、四方面の教、本場の思想）たる所以である。

近来基督教界は一時英のブースを救世門に立たせ、米のエツデイを疾病門に立たせ、露のトルストイを智力門に立たせて世界の大勢に逆つて棹尾の防戦に力めたが（わけて救世軍の活動は覚醒せる基督教の新しい最後の試みであつた）其は決して永遠に続くべき性質のものではなかつた。何故なれば人類の信仰は既に其処を去つて新しい信仰に向ひつゝあるからである。今や基督教界は此の三將を失つて再び落日の感がある。

此の他仏教の如き、儒教の如き之れを現代思想より新しい解釈を試みて此の燃え尽した焼け木の中より多少の光明を発見せうと力めたものもあつたが其は新築の家に引き越さんとして旧き自分の住居を出発しながら中途に於て旧屋に未練を生じて引き返へせる人々である。従つて其は唯時代の變遷を知らざる骨董屋肌の空なる努力のみ。かくの如くにして旧世界に起つた旧宗教の中現代の世界思想を誘導するに足る価値と実力とを有するものは一つもないのである。あつても其等は唯内容を飲み尽した靈藥の空瓶のみ。又た中味を食ひ尽した神の飯櫃のみ。もつて現代人の靈の飢渴を医すに足らない。此の際に於て現代の矛盾を解決して現代人の靈の飢渴を医すべく突如として起つたのが天理教である。

其の終局の理想は過去並に現在の世界に横る利己的思想、貴族的思想、專制的思想を撲滅して自由平等の世界、光明と喜悅の世界、平和と満足の世界、正直と労働の世界、正義と博愛の新世界を此地上に實現せんとするにある。云ひ換へれば人の世界を神の世界とせんとするにある。此新旧両界を天理教では一の世界二の世界と云つて居る。蓋し天理教は此の新旧両界に向つて架せられたる純金の橋梁である。

将来——近き将来——に於て天理教——天理教は人生の最後の歸趣（参り所）であり、神の終局の理想（とゞめの教）である——が全世界に普及した暁には世に監獄はなくなるであらう。又た警察、裁判所、陸海軍、司法省はなくなるであらう。其の時来らば高利貸は神の會計員となり遊女は淑女となり、軍人は宣教師となり、裁判所は教会となり、陸海軍省は大なる集会所となるであらう。現在の世界は即ち此の暗黒時代より光明時代に、專制時代より立憲時代に、貴族時代より平民時代に、差別時代より平等時代に、觀照時代より活動時代に、冥想時代より実行時代に移る過渡期である。云ひ換へれば人間の世界より神の世界に移る一大轉化期である。天理教は即ち此の轉化期に於ける神の世界一新の新理想の表象である。

要するに宇宙は神の肉体である。其の一切の運動は神の意志の表現である。其れは書齋や図書館に籠居して世界の進化発達を知らざる机上の哲学者（山の仙人）の知る所ではない。常に直感と靈動とに生きて居る生きた詩人、生きた哲学者、生きた宗教家（里の仙人）のみに示されてあるのである。これからは心確つかり入れ更へて悪事払ふて稚きよふに

これとても六ヶ敷様にあるけれど神が出たなら貰ふてくるぞや
日々心尽した其の上は後の支配を万づ任せる
五人ある中の二人は内（天理教界）に置け後三人は神の引き受け
万づ世の世界の事を見晴して心鎮めて思案して見よ
今迄も神の世界であるけれど仲立ちするは今が始めや
これからは世界（未信者）のものは可笑がる何んば笑ふても是が第一
世界には何事すると云うてある人の笑を神が楽しむ

銘々の思ふ心はいかんでな神の心は皆違うでな
前世の因縁寄せて守護するこれ末代確かと治まる
愛する人々よ。古き予言を捨てよ。其の極樂の路は草生え、其の生命の継は腐つて了つ
た。唯庄屋敷の農婦の手によつて開拓せられた路のみ眞の極樂に導き、唯庄屋敷の農婦の
手によつて緇はれたる生命の継のみ人類を救ふことができる。彼女は神の道なり、生命な
り、眞実なればなり。

(大正四年六

月七日稿)

天理教界革命の聲 (二)

大平良平

利己的布教者

人を助ける理は面々に何うなつても関はんと云ふは第一。面々助かりて人を助けると云ふはこら当り前。因縁未だ分りてない——天啓の聲——

今日の布教者の語る所を聞けば十中の八九までは次の様なことを云ふ。
私がお助の爲めに働かして戴くのは自分の因縁を切らして貰ふ爲めだ
と。又た曰く
私がお助けをさして戴くのは自分の因縁を積まして戴く爲めだ
と。如何にも道の爲めに働き、助け一條の爲めに働くものゝ受くる所の報酬——達する所の結論は此処に来るのである。又た来らざるを得ないのである。けれども此処に一つの主要の問題が潜んでゐることを忘れてはならない。其れは此等布教者の口にし又た心に抱いてゐる所の布教上の目的主義方針を果して正しきや否やの問題である。天理教の二大律に
理(神)を立てゝ身が立つ
人助けたら吾が身助かる
と。之れは教祖が客観の世界を支配する客観の眞理を客観的に述べられたものであるが之れを主観に移したら何うなるであらうか？ 之れが主要の問題である。即ち理を立てるといふことが人生の目的であるか？ もしくは身を立てるといふことが人生の目的であるか？ 又た人を助けるといふことが人生の目的であるか？ もしくは吾が身助かるといふことが人生の目的であるか？ 凡ての信仰と一切の迷信とは此の問題を如何に解決するかによつて生ずるのである。
けれども此の實際生活上に於ては解決に至難の姿をとつてゐる人生問題も心を静めて客観的に考へる時は容易に此の眞理の精神を捕捉することが出来るのである。今此の人生の二大律の衣を剥ぎ去つて之れを本質的に考へる時は
動あれば反動あり、
と云ふ物理学上の法則に帰着するのである。此の法則は又た
原因あれば結果あり
と云ふ別種の説明を持つて居る。其れで問題の二大律の中第一律に就て云へば理を立てるといふことが原因であるか乃至身を立てるといふことが原因であるかと云へば云ふまでもなく理を立てるといふことが原因にして身が立つといふことが結果となるのである。之れと同一の原理が人助けたら吾が身助かるといふ眞理の中に含まれて居る。即ち人助けるといふことが原因であつて我が身助かるといふことが結果として生ずるのである。
然るに今日の布教者の中には此の原因と結果、目的と方便とを誤つて居るものがある。即ち彼等誤れる布教者の精神を解剖すれば口にはお道の爲めとかお助けの爲めとか云つて居るが其の多くは自分の爲めにのみ腐心してゐる。目的が之れ程現代的でなく又たこれ程利己的でないとしても自分の悪因縁を切らして貰はふとか自分の善因縁を積ませて貰はふとかいふことを唯一の目的として布教に従事してゐる者があるとしたならば之れも矢張り利己的動機より教理を売買してゐる仲買的布教者と云はなければならぬ。而して實際其う云ふ布教者が多くあるのである。而して彼等は單に自分自身で其う信じてゐるばかりでなく人にも亦其う説くのである。
人助けて置いたなら自分の悪因縁もほどけ更らに未来に良き身上を貸して戴くことが出来る。
と。これは客観の法則である。けれども大抵の教師信徒は之れを主観の法則、生活の信條としてゐる。即ち人一人助けて置いたら神様は其れだけの報酬を下さるとか全財産を教会にあげて置いたら必らずや幾万倍の報酬を下さるべきであらうと。中途にして自分の思ひ通りの欲望を満足されないのを見て神と道とに裏切をした似而非天理教徒の天理教信仰の最初の動機は實に此の種の利己的動機より始まつたのである。而して最後迄自己の信仰の

誤つて居ることを悟らないのである。御神樂歌に
欲があるなら止めてくれ。神の受取りでけんから
とある如く神は公平なる天の裁判官である。従つて欲の信神欲の救済を受ける道理はな
い。即ち間違つた動機より行つた似而非なる慈善に組する謂がない。神の嘉納するもの
は——善悪共に皆受け取り善は善悪は悪偽善は偽善偽悪は偽悪に分類し其れ相応の報酬を
与へるのである——唯自己の利害得失を離れたる真の善行のみである。之れを云ひ換へれ
ば何等報酬——物質的又は精神的報酬——を予期せざる真の助け一條の行為に附与するの
である。其れには勢ひ自己の悪因縁を切らして貰ひたいとか自己の善因縁を積まして貰ひ
たいとか云ふ利己的、打算的動機を離れて純粹なる同情と親切とに生きなければならぬ。
其の美しき精神より始めて悪因縁消滅善因縁創造の予期せざる結果が生ずるのである。始
めより吾が身を立てたい、吾が身が助かりたいといふ利欲にからまれた一念より布教に従
事するのは之れ助け一條の道の精神を裏切つて居るものと云はなければならぬ。従つて真
に善美なる結果を収め得ないのは当然の事実である。

要するに自ら助かる助からんは吾人の第一の問題ではない。吾人にとって第一の問題は
助けたいとの一念にある。因縁の切れる切れんは第二の問題である。吾人にとって第一の
問題は其れが止むに止まれぬ至情より出づるものでなければならぬ。これ第一義である。

苟くも真の布教者否な真の人間の精神は常に此処即ち助け一條の精神になければなら
ぬ。もし此の他人本位の献心的精神以外に自分自身の幸福を中心とせる利己的要素が混合
して居るとせば其の弁護は如何にもせよもつて真の信仰を有する布教者とは称し得ないの
である。而かも事實は形式あつて實質なく、行為あつて眞実なく、事業あつて精神なき此
の種の偽善的利己的自己中心的布教者が少ないのである。今日一般に天理教々師が信
者、未信者より債鬼の如く嫌はれつゝあるは此の種の利己的布教者の存在するが為めであ
る。従つて道を清めんと欲せば先づ此の種の利己的布教者より一掃しなければならぬ。

けれども今日は自己の因縁を切らして戴く為めにお道に使つて戴くとか自己の因縁を積
まして戴く為めにお助けをさして戴くとか云ふ欲の信神、利己的信仰は布教者の常套語に
なつて居る。従つて何人も之れに対して不審を抱くものがない。もし道の上より利己的布
教者を一掃せんとするならば同時にかくの如き利己的布教法をも改革しなければならぬ
い。何故なれば吾人天理教の使徒の有たねばならぬ精神は助け一條の精神より外何物もな
いからである。従つて其の結果として生ずる運命改造の予想の如きは寧ろ真の布教者（真
人）の予想することを恥づるところである。蓋し愛とは与へることである。欲とは取るこ
とである。今日の布教師は此の正邪善悪を転倒して居る。これ私が自己の悪因縁を切り善
因縁を積むことを唯一の目的として他人の疾病不幸に対する同情を第一とせざる利己的布
教者の反省を求むる所以である。

御遺訓に曰く

此ら程に思ふ月日の眞実を皆の心は何を思ふや

何のよふな口説き話しをするのもな助けたいとの一條ばかりで

と。これ神意である。この神意に一致することが眞に神性と一致する所以である。然るに
今日の布教師は人助けたいといふ眞の精神なく「百石蒔いて一粒万倍取ること計り思ふて
ゐるから何うもならん。」

私は繰り返していふ。助かりたいといふ心だけでは決して助かるものではない。助けたい
と云ふ心が助かるのである。

と。これぞ即ち客観の法則と主観の法則との異なる点である。即ち「理を立てゝ身が立つ」
「人を助けて我が身助かる」といふは客観の法則である。之れを主観の法則とせば助け一
條の精神に帰するのである。此の理路を誤つて結果を以つて直ちに原因とする結果主義、
行為主義、事功主義の弊は此処にある。敢て目的と方便、原因と結果、精神と行為とを誤
れる布教者の反省を求むる所以である。

利己的信徒

布教者に他人の幸福他人の利益を思ふよりも寧ろ自分自身の利益の為め自分自身の教会
を繁栄ならしむる為めに一人でも多くの病人一人でも多くの不幸者のあらんことを願ふ利
己的布教者があると共に信徒にも「互ひ立て合ひ助け合ひ」と云ふ精神もなければ「日の
寄進」の精神もなく唯病氣さへ助かれば良い、金さへ溜まれば良いといふ利己的動機より
信神する利己的信者が多い。此う云ふ信者に限つて不幸続きだとか病氣だとか云ふ時には
夢中になつて信神するがサア病氣が助かるとか又は幾ら信神しても自分の思ひ通りの守護
を戴かないとか教会が自分を優待して呉れぬとか云ふ時には手の裏を返へず様に信神を止
めて了ふ。これは独天理教に限つたことではない、天台でも眞言でも日蓮でも浄土でも其

うであるが殊に勢力の大なる宗教程信徒の出入が激しい。天理教は其の中の最も大なるものである。

凡て人間に限らず動物も亦其うであるが大なる力の下には必らず小なる力が群集して来るものである。一例を挙げて云へば此処に青雲の大志を抱いて居る一人の不遇者がある。彼の真価は未だ世に認められない。けれども運命は彼をして遂に天下を左右するの地位と権勢とを与へた。其の時の彼の周囲には今迄嘲弄罵詈を加へて相手にもならなかつた人間が却つて頭を低くして其の恩寵に与からんことを求めて来る。けれども彼が一旦其の志を失ふて再び昔の窮措大に帰るや昨日迄は其の門を訪るゝことを一生の名誉の如く思つて居た人間も途上に逢つても振り返らぬ様になる。之れが浮薄なる今日の人情である。此の浮薄なる人情の悲喜劇が常に権門富豪を中心として行はれつゝあるのである。

今日の天理教は謂ば精神界に於ける此の種の新華族、新富豪である。其の門前には常に其の力に依つて救はれんことを求むる物質的もしくは精神的貧人が群集してゐる。けれども其の中の十中の八九は其の偉力を利用せんとする利己的信徒にして真に道と生死を共にするものは寥々として朝天星の如くである。これ果して止むを得ざる自然の人情として打ち捨つべきか？ 否々天理教の使命は実にかくの如き利己主義者を打して一丸となし之れを純然たる利他主義者に改造するにあるのである。

蓋し一軒の家に一人の我俥者（利己主義者）を有することは其の家庭をして不幸ならしむる根本原因である。社会の動乱も歸する所此の種我俥者即ち利己主義者の混入の為めである。彼等は一家もしくは一村もしくは一県もしくは一国もしくは世界の幸福を破壊するパチルスである。けれども此のパチルスを家庭もしくは郡村もしくは国県の外に排斥し去る事は天理教徒のなすべき行為ではない。宜しく彼等をして麻の中の蓬の如く漸次に真直なる精神に改造することこそ吾人天理教徒の義務である。其れには自然淘汰が必要なるのみならず人為淘汰が亦従つて必要である。此の自然と人為の両面の淘汰に依つて始めて利己主義者をして利他主義者に改心せしむることが出来るのである。又たかくの如くせざれば人類全体の幸福を齎らす甘露台は実現し得ないからである。御神歌に

今迄と道が變りてある程に早く急き込め往還の道と。今日の社会は未だ世界一新の時期に到達せることを知らないである。これは天理教信徒の大部分も亦其うである。彼等は唯病気が助かれれば其れで良いのである。又た事業に成功すれば其れで良いのである。世界が改善せられやうがせられまいが其んなことは彼等にとつて問題ではない。彼等に取つて第一の重大問題は自分一身の目前の幸福である。自分一身の幸福に次ぐ重大問題は家族の幸福である。何故なれば家族の幸不幸健不健は自己の幸不幸と最も密接なる関係を有するからである。一村一郡一県一国全世界の幸不幸の如きは彼等にとつては殆んど問題外である。否な第三第四第五の問題である。此の人情の遠近法を利用した道徳教が儒教である。

けれども天理教は全人類の間に親疎の別あるを許さない。何故なれば我等は凡て同胞兄弟であるからである。其の親子となり兄弟となり夫婦となり朋友となるは因縁の為めのみ。然るに今日の社会も一部薄信の天理教徒も未だ在来の差別的相対的世界観を解脱することが出来ないである。為めに未来の世界も亦かくの如き自己中心の世界であると信じて疑はない。けれども時は刻一刻と迫りつゝある。其の時来らば全世界に一人の利己主義者なく一人の我俥者なきに至るであらう。けれども近眼なる利己主義者は洪水がやがて自己の立脚地を襲ひ、大火がやがて自己の住家を焼きつゝあることを知らないで居る。勿論彼等は其う云ふ時代の到来を喜ばないであらう。けれども彼等が喜ぼうが喜ぶまいが神は無頓着である。従つて其の時来らば彼等は広い天地間に身の置き所を發見することが出来なくなる。吾人が一般人類は云ふまでもなく未だ道に入つて道精神を有せざる利己的天理教徒に向つて其の魂の入れ換へ（人格改造）をすゝむる所以は此処にあるのである。乞ふ吾人の信仰の誤らざる事実を将来に見んことを。

積極的形式主義（偽善）と

消極的形式主義（偽悪）

教祖は或る時信徒に向つて、「お前さん道で乞食に逢いなはつた時な其の乞食に二銭銅貨一つ遣らうと思つて財布を開けても二銭銅貨がなかつた時は遣んなさんなよ。乞食は喜んで神様はお喜びにはならんでな」

と仰せられたことがある。此の言葉の意味を詮じつめると一切の道徳的価値は動機にありと云ふ倫理学上の動機論と其の主調を一にしてゐるのである。而かも此の動機論は宇宙の最高道徳の根本精神と常に相触れて居るのである。

蓋し倫理道徳と宗教道徳との主なる相違は一は形式を重んじ他は實質を重んずる点にあ

る。即ち此処に一人の紳士がある。彼は今或る慈善会より寄附金を勧誘せられて居る。彼は之れに或る多額の金に要求せらるゝ角の慈善家として居る。自分の自由意志より何等宗教道徳上の教訓は元來陰徳排斥するのである。否な天理教界には外観と形式と次浸入せんとしつゝある。之れは眞道徳實現を目的として居る天理教にとつては悲しむべき現象である。

天理教は元來陰徳排斥するのである。否な天理教界には外観と形式と次浸入せんとしつゝある。之れは眞道徳實現を目的として居る天理教にとつては悲しむべき現象である。

私は今回本部に帰つて参詣者が自分の所属教会より献金の釣銭を取つて帰るのを見て驚いた。献金の釣銭とは三円の献金に五円紙幣を出して二円の釣銭をとつて帰つたことではない。神殿建築の御瓦料として上げたのに受取を貰つて帰つたことである。これは信徒の方で要求したのではない教会の方で此う取り計つて信徒に花を持たせて帰したのである。けれども天理教の如き眞道徳生活を理想とせしめたる新宗教にかくの如き形式を喜ぶ弊風の残存するは未だ理想の世界の實現の遠きことを思はしめたのである。

之れは勿論偽善偽悪と稱すべき種類のものではないが而かも此の種の形式を喜ぶ浅薄な思想を脱しない為めに往々美言美行を誇るの風がある。為めに眞實にして神聖なるべき教会に於て往々小金持や小才子が跋扈し屢々眞の信仰と眞の道徳とに生きてゐる真人の光榮を蔽ふことがある。かくの如き例は本部を始め部下の各教会に於て屢々見る所の事実である。

けれども私は今日教会に行はれつゝある偽善よりも最つと大なる悪風を本部並に部下教会に見るのである。其れは即ち偽悪の風である。即ち今日の天理教界ではかく迄大なる実力と価値とを有する自教に対して中心恥づるの風がある。而して自ら天理教徒たることを隠蔽して居る。この悪風は一人部下の教師信徒間にあるのみならず又た本部大教会にもあつて居るのである。これは主として道の眞価を自覚せざるによる。而して此う云ふ人達に限つて世界並の事を口にし世界並の風を装ふて居る。此の最も嚴肅化せられたる偽悪が天啓の隠蔽と神道の模倣とである。此の偽悪の罪は却つて偽善の罪に超越して居る。

蓋し偽善と云ひ偽悪と云ひ其の何れも眞道徳の實現眞世界の實現の障碍物である。其は徒らに理想の世界の實現を遅らすのみである。従つて吾人は極力教界に横る偽善偽悪の弊風を打破して眞の道の開拓に従事しなければならない。これぞ甘露台建設の第一歩であるからである。

誤解せられたる絶対服従主義と盲従の打破

天理教は絶対服従主義の宗教であるといふことは此の頃一般に唱へられつゝある所の説である。(けれどもこれは天理教の半面観である)けれども絶対服従主義の内容及び意義について明かなる自覚がない為めに大なる誤解と迷信とが亦従つて其処から生れるのである。

広池博士は其の天理教々育主義の中に天理中学生徒の心得に関する訓諭と題して絶対服従主義を説いて居る。今其の一部を挙げれば

「抑々原始時代に在りては、人類の其父母に対する道徳觀念は、殆ど全く之なかりしも、其後吾人は、自己が其父母より生れ出で、父母に依りて養育せられ、以て其生を遂ぐる事を得るの事実を自覚し、茲に始めて父母の恩義なるものを知り、而して之に加ふるに、其人智進みて、自ら其父母を敬愛する所以の道は、即ち自己老後保存の道たる所以を反省する程度に達し、これより更に、父母孝養の道義心に一大勢力を加へ来り、為めに東西の倫理的道德に於て、父母の命令を重んずる事を教へざるものなく、又同じく其宗教的道德に於ても亦教を此に立てざるものなきに至れり。殊に天理教に於ては、宇宙根本實在の神を以て、宇宙及び人類の本源と為し、而して祖先及び父母は、其系統を根本神靈より受け伝ふるものなりと為し、是等に対する報本反始の礼を尽すを以て、其信仰の帰点と為すものなるが故に、其教理に於ては、神及び祖先は勿論、自己の父母に対しても、亦絶対的服従を要求す、是れを以て我天理中学の生徒たるものは其家庭に於て、現実なる父母祖父母に対して、絶対的服従と、無我の犠牲的孝心を捧ぐる事とは、申す迄も無き事にして、其父

親の父母を先きにし国父国母、天父天母を後にするは自然の順序を知らざるものと云はな
ければならぬ。従つて天父天母の意志と國父國母との意志乃至肉親の父母の意志との一
致せざる場合吾人は何れに於て服従せざるべからざるかと云へば私は先づ何を置いても
第一に天父天母の命を奉ぜざるべからざるべからざるのである。何故なれば之れ宇宙の
大脳小脳であるからである。

博士は此の絶対服従の範圍を擴張して普通師弟間に及ぼしてある。けれども問題は此等
の範圍に限られて居るものではない。之れを一層普通的に解釈すれば神と人神の法律と人
の法律との何れに仕ふべきかの問題となるのである。而して此の問題は平時に於ては何等
の問題とすべきものではない。何故なれば人に仕ふるとは同時に神に仕ふることであるから
である。けれども一旦神の意志即ち絶対者の意志と人の意志即ち相對者の意志との衝突せ
る場合——吾人は斯の如き例を教会に於て屢々見る。其れは神の言葉と會長もしくは先輩
との意見の相違せる場合である。には兩者其の一を選択する必要に迫るのである。従つ
て天理教の道徳は之れを二種に區別することができる。一は平時の道徳である。他は非常時
の道徳である。平時の道徳とは絶対者即ち神の意志と相對者即ち人の意志との一致した場
合の道徳である。非常時の道徳とは絶対者の意志即ち神の意志と相對者の意志即ち人の意
志との衝突せる場合である。私は此の二つの場合に共通せる一の法則を天理教々理より発
見してある。其の法則とは即ち

絶対者の意志には絶対服従をし相對者の意志には相對的服従すべし
と云ふことである。何故なれば絶対者の意志には選擇の余裕なく、又た權利と必要とがな
いからである。吾人は唯唯々として其の命に従ふべきのみ。けれども相對者即ち父母兄弟
姉妹夫婦師弟の意志には正しき意志もあるれば正しからざる意志もある。云ひ換へれば神意
と一致せる点もあるれば一致せざる点もある。之れ吾人が唯唯々として其の命の俛に服従し
得ざる所以である。此の危険なる実例は前に一度挙げた。もし博士の主張の如く父母もし
くば教師の意志に絶対服従——此の場合の服従は盲従となる。何故なれば至上者の意志は
真理なるが故に吾人の良心と何等抵触するものではなく却つて一致すべきものなれども又
一致するのが自然であるけれども人間の意志は不完全なるものであるから其れに絶対服従
することは良心の許さざる場合がある。而して良心即ち自由意志の許さざる服従は即ち盲
従に外ならないからである——を要求するとせば或る場合にはかくの如き要求は個人の幸
福を毀損するばかりでなく同時に社会の存在と幸福とを危殆ならしむることがあるからで
ある。(此の場合個人の幸福は犠牲にすべし。されど社会の幸福は絶対に犠牲にすべから
ざるものである。)従つて私は博士並に博士と其の意見を等しうして居る神人に対する同
一の絶対服従をもつて天理教の信條とする説には全体の賛成を表することの出来ない一人
である。何んとなれば私は私の信仰の誤らざる実例を吾人の良心生活と教祖の実生活に於
て見るからである。之れ私が

絶対者(神)の意志には絶対服従をし、相對者(人)の意志には相對的服従をすべし
といふのが天理教の信條であると信ずる所以である。是非は天下の輿論に任せんのみ。

誤解せられたる自治独立主義より生ずる
各教会間の感情の阻隔に就て

隔てる理は破れたものと同じ事。箱から種をもつて出るやら分らん。何名何人あるの
順序隔てなき様。隔てるは破れ入れ物。これ一ツ改まつたら悩みはスツキリないで——天
啓の声

天理教は一面に於て神靈中心主義であると共に一面に於て自治独立主義である。(此の
二つの主義は一見矛盾せる如く見へるけれども其の実は真の人間生活を客觀的に觀ると主
觀的に觀ると神を中心として觀ると人を中心として觀るとの差に外ならないのである。)
自治独立主義の要領は自分一身の始末は自分一身にて処理し累を他人に及ぼさざるにあ
る。此の主義の普及の結果として天理教徒の集合所に赴けば誰云ふとなく下駄まで生前と
直されてある。教会の美風である。けれども如何なる主義にも美点があると共に欠点も亦
伴ひ易きものである。今日天理教界に行はるゝ自治独立主義も亦其の中の一つである。即
ち各教会は自己の教会を整頓し自己の部下を訓練することに腐心する結果他の教会に附属
せる信徒に対しては往々継子扱ひをする所が少ない。且つ各教会間に於ても何んとな
融和せざる風がある。これは自治独立主義の余弊と云はんよりも寧ろ各教会の自会中心主
義に依ると云つた方が宜いかも知らない。其の主なる原因は何れにありとしても教会同士
信徒同士が互ひに打ち融けず水臭い態度を維持するのは世界一家族を理想とせる天理教の
大家族主義と一致せざるものである。

神の人類に望む所は全人類が恰かも大海の水の如く何れの河川湖沼の水をも差別なく飲

迎して相睦び相和せんことである。其の間識不識の差別があつてはならない。況んや教会の區別をや。

畢竟郡山と云ひ、兵神と云ひ、山名と云ひ、其は唯一本の樹の分枝のみ。吾人の希望は各教会各信徒が互ひに独立の意義を誤解することなく教会は教会として独立し個人は個人として独立しつゝも其の間を継ぐ愛情を継続せられんことである。何故なれば愛情は人類相互の継ぎであるからである。其れは恰かも珠数の玉と玉とを継ぐ糸の様なものである。眞の独立とは要するに一つ一つの完全なる個体を有しながら他の個体と愛情に依つて連り、もつて一連の完全なる神の珠数となることである。然るに今日の社会、今日の人類は云ふ迄もなく相互に連らざるべからざる理を有して居る教会信徒の間に於て此の愛情の糸が切断せられてある。其れは恰度珠数の糸の所々切れた様なものである。又た手足の思ひ／＼にバラ／＼に切り離された様なものである。手と足と離れ／＼になつたら其は人間とは云へん。珠数玉が離れ／＼になつたら其ら珠数とは云へん其れはたゞの手足、たゞの玉である。畢竟眞の独立と孤立との相違は人間相互間に愛情を継ぐか切るかにあるのである。苟も道——道は世界の継ぎである。愛は世界の継ぎである。人の道とは他にあるとは思つてはならない。愛が即ち道である——を生命とし理（道の別名）を生命の継とする教世界の人々にして此の間の區別がなかつたならば其は眞の道の人ではない。唯平凡普通の世界並の人間のみ。

天啓の聲に

「而して一つの咄がある。皆な兄弟集りたいが一つの理の台。眞実より恐い道はない程に／＼。心の散乱思ふから是迄の所皆な話したる。並んで居る顔実に兄弟治めるなら明い道は今にある程に／＼。皆んな一つの心の理思ふて一つの物も分けてやると云ふ心を定るなら成る程と云ふ日がある程に／＼。サア／＼又たる一つ話して置く。これ迄の処に何度の理に悟してある。大道で怪我はしなよ／＼と悟したる。細道は怪我はせん。皆んな仲善く鏡の道嫉み合ひは世界にも数はない／＼。思い／＼なりて来た。今日限り先刻話してある一つの物は分け合ふて／＼。又た其地らへも此地らへも分け合ふて楽しんで通る一つの理の台／＼。良ふ聞き分け。悟した理りは裏も取れば横も取るから治まりかねる。聞き損ならあつて何うもならん。万事イは治まり兼ねる／＼。良ふはじめ掛けたる処から取れば今日は何う云ふものと思ふ。これより小さうなると思ふたらいかんで。一つの節成らん所は彼地らへ廻り此地らへ廻り心さへ継ぎ合へば静々一つの理はある程に／＼又先々の所継ぎ合ふて通れば天の理がある程に／＼。」

独立したる完全なる個性と浄化せられたる愛情とをもつて全人類が互ひに相提携すること。これぞ即ち神の終局の目的であると共に吾々人類の終局の目的である。

「皆なこれ一本柱があつて一本柱は立つまい。彼地らから風吹く此地らから風吹く。ヒヨ口／＼細い柱も太い柱も植ゑ込んだる伏せ込んだるもあれば十分突張り／＼云ふたら其処へやれ／＼似たり皆事情夫々事情皆取り違ひ事情おくる／＼安んじ事情何年道すがら知らせん。分らん。」

蓋し教会と教会と孤立し、信徒と信徒と孤立するは譬へて云へば土台もなく屋根もなく一本づゝ柱をポツリ／＼と立てた様なもの。風が吹いたら彼れが倒れ之れが倒れ終ひには皆んな倒れて了ふ。けれども土台があつて梁木があり、屋根があつたら何んな風が吹かうが何んな雨が降らうが倒れも漏りもしない。土台は愛情である。愛情がなかつたら柱一本づゝ地上に立てた様なものである。内（天理教徒）外（非天理教徒）共に此の理を会得して自治独立の精神を拡張して個人的より国家的に国家的より人類的世界的に押し進めねばならぬ。

御言葉に曰く

「隔てと云ふは破れの元と云ふ」と。今日は最早や各教会各信徒が自教会もしくは自分自身の事情に没頭して居る時ではない。互ひに協力一致して世界を一新し、もつて甘露台建設の理想を実現しなければならぬ時である。敢て教師信徒各位の反省熟慮を望む。

消極的に流れんとしつゝある今日の天理教

人間は浅ない者であるほどに月日すること事知りたものなし
月日には何か万をだん／＼とことわりてある之れが承知か
今までも何か月日の残念を大抵口説きつめてはあれども
世界には誰か知りたものはなし月日の心残念を見よ
此の度はことわりた上又た口説きそれゆへなるのことはりである
いかほどに口説きことわりいふたとて確か聞き分けするものはない
其れ故にだん／＼日柄立つけれど何時かこれやとわかるめはなし

今日の日は最もふ節が来たるかから月日出かける皆承知せよ
日々に神の心をこわさないぞや
上たるこへ呼びも知らずに思ふなよ何か珍らし道があるぞや
此の事をも世と此の心は急いだてて皆の心はまるもよふなり
何にても世界並と始じめだてて皆の心はまるもよふなり
だん／＼と神の心は急いだてて皆の心はまるもよふなり
如何程に神の心は急いだてて皆の心はまるもよふなり
早々と思案の眞実根拠をつたはし何んも危き様があるぞや
此の根を眞実掘りつたはし何んも危き様があるぞや
其れ知らず世界の中はし何んも危き様があるぞや
何もかも万の事や段々胸の中心は急くばかりやで
其れからは何うぞ眞とせよ神の心は急くばかりやで
眞実に子供の心確とせよ神の心は急くばかりやで
日々に神の急き込み此の悩み早く助けるもよふしてくれ
内（天理教徒）なるは上（政府）を思ふていづみある恐味ないぞや神が請け合ひ
今までと道が変りてある程に早く急き込め往還の道 御筆先

熟々天理教界を觀察するに凡そ教勢の萎靡沈滞を重ねて其の止まる所を知らない。此の根本
席没後の教界は抑々何処にかある？ 之れ最も私の知らんとする所である。又た眞に道を思ふ者
的等しく知らんとする所である。今日の天理教会に於て萎靡沈滞の風を見る様々の原因
は多々ある。今其の主なる原因の一二を挙げれば其の第一の原因は今日の天理教界には現
実の人生に対する病的不満と理想の世界に対する根本的熱求を欠いてあるからである。其
の第二の原因は天啓の中絶である。

抑々今日の天理教信徒の天理教信仰の動機を研究するに其の大部分は自己の疾病（身
上）もしくは不幸（事上）の救済を最初の目的最初の動機として入つたものである。眞に
哲学的要求もしくは宗教的欲望の満足のために入つたものは殆んど絶無と云つて良い。為
めに其の精神には眞に人生の歸趣如何と云ふが如き根本的觀念宗教的欲望に欠けて居る。
これ彼等が理想の世界の実現に於てやゝもすれば不徹底に墮する根本的原因である。
蓋し疾病不幸の救済は信仰の門にして其の堂奥ではない。信仰の堂奥には常に現実に對
する不満より出発した理想に対する憧憬がなければならぬ。而かも現実に對する不満が大
なれば大なる程その理想に対する憧憬も亦従つて大である。云ひ換へれば厭世的觀念が大
なれば大なる程大なる樂天的思想が勃起するのである。

古來釈迦を初め基督、孔子、マホメツト、ソクラテスの如き偉大なる理想家は其の始め
必らずや偉大なる厭世主義者偉大なる厭人主義者であつた。而かも其れは病的程度迄昂進
して居る。我が教祖の如きも亦其の中最も大なる一人である。けれども彼女の人生に對
する此の消極的思想厭世主義厭人主義は東西古今の偉大なる理想家の思想の変遷した如く
變遷した。即ち彼女の現実の人生に對する不満はやがて積極的に進んで人生を理想化せん
とする積極的態度に變じた。云ひ換へれば此の偉大なる厭世主義者厭人主義者は遂に變じ
て世にも稀なる偉大なる樂天主義者、偉大なる愛人主義者と化したのである。これを彼女
の言葉を借りて云へば山の仙人より里の仙人に變化したのである。此の思想の變化は偉大
なる思想家の必らずや一度經驗せざるべからざる精神的徑路である。

凡そ眞理は恰かも富士山の絶頂に上るに或は甲斐口より登り或は駿河口より登る如く信
仰の絶頂に達するにも亦疾病病門もしくは不幸門より入る者と厭世門無常門より入るもの
とある。其の何れより入るも其の終局の結果は同一目的地——人格改造、世界改造——に
達するとは云へ其の出発点には自らなる相違がある。即ち前者は外より内に向つて進み、
後者は内より外に向つて進み、一は肉より靈に、他は靈より肉に、一は物質より精神に、
他は精神より物質に、一は運命より性格に、他は性格より運命に、一は形式より實質に、
他は實質より形式に向つて進んで居る。此の二者の出発点の相違は信仰の結論に達する迄
の過程に於て往々異つた徑路を發見するのである。

即ち疾病門もしくは不幸門より信仰に入るものは其の始め人生は如何に改造せられざる
べからざるか？ 人格は如何に改造せられざるべからざるか？ といふ靈の苦痛精神上的の
煩悶より出発したものでなく唯一時肉体の苦痛、境遇の苦痛より免かれんとして信仰の
門に入る者の多きが爲めに勢ひ人生の改造人格の改造の如き第一義的欲望の稀薄なるを免
かれない。此の第一義的欲望の稀薄は彼等疾病門もしくは不幸門より入れる者をして往々
靈的方面を閑却せしめ肉欲もしくは物質欲の如き第二義的欲望の満足に向つて走らしめ為

めに屢々信仰の本道を誤らしむることがある。彼の疾病もしくは不幸の救済より信仰に入つたものにして真に人格改造の必然の要求を自覚して真の信仰に進まざるに先つて早くも萎靡沈滞する所以のものは何処迄も現実の人生に対する不満、現実の自己に対する不平を出発点とせずして肉体の苦痛境遇の苦痛をもつて其の出発点とせるが為めである。其の肉体の苦痛が医され、生活の苦痛が幾分なりとも減退せらるれば彼は其の信仰を中絶するのである。けれども真に思想上の欠陥を感じて信仰に入る者は其の最初の目的が既に人生の改造、人格の改造にあるが故に中途にして如何なる障礙に遭遇するも其れが為めに自己最初の欲望を捨てることをしない。これ肉の苦痛より入れる者と靈の苦痛より入れる者と物質上の煩悶より入れるものと精神上の煩悶より入れる者との間に自然信仰上の區別を生ずるのである。

今日の天理教徒を見るに、其の十中の八九は疾病門より信仰に入つたものである。彼等の中には其の後人格改造、人生改造の必然の要求を痛感して真の信仰に入れるものも少くはない。けれども其の大部分は未だ小我の境を彷徨して居る。更らに進んで無我の境に入り無我の境を脱して大我の境に入るにはまだ大なる未来に属す。此の不徹底なる信者の多きことはやがて教会の沈滞を来した最大原因である。

「サア、最うこれ何うでも此うでも掃除と云ふ刻限出した代りには仕遂げにやならん。掃除仕遂げる。ゴモクだらけでごむさうて何うもならん。隅から隅迄掃除に掛る。掃除に掛つたら彼地ら此地ら声がきく。何んな事を聞いても心を授け高き理イに一名一人の心ゆふをめも恐れもなる心。控へる心は受取る事出来んと悟し置こふ」

けれども此の醜悪なる現実の人生醜悪なる現実の世界は改造せられずして止むべきものではない。又た改造せずして止むべきものではない。必らずや絶対に完美なる世界完美なる人間に改造せられざるべからざるものである。又た改造せずして止むことの出来ないものである。けれども未だ真に野獸性を脱しない今日の人類は余りに人生に対する感性を失つて居る。彼等は余りに殺人、強盗、窃盗、詐欺、破約、姦淫、強姦、私通、貪婪、高慢、虚栄に慣れて了つた。彼等は余りに奢侈、贅沢、偽善、偽悪、邪愛、邪智、邪心に慣れて了つた。彼等は余りに暴力、暴行、追従、輕薄、讒誣、中傷、輕侮、薄情、憤怒に慣れて了つた。彼等は余りに暴力、暴行、追従、輕薄、讒誣、中傷、輕侮、薄情、憤怒に慣れて了つた。彼等は啻に此等の大小の罪惡に対する強き感性を失つた計りでなく又た同情、親切の如き美德に対する感性を失つて了つた。彼等は如上の罪惡が白昼街上に於て行はれつゝあるを怪しまない。かくの如くにして現代には全世界に亘つて野獸性が横行濶歩して居る。これ吾人の一日も忍ぶ能はざる所のものである。又神の一日も忍ぶ能はざる所のものである。

蓋し神が此の新宗教を世界に宣伝する所以のものは之れを約めて云へば現実の世界、現実の人間の中に潜んで居る野獸性を撲滅して真に神性を發揮せんとするにある。甘露台建設の目的及び内容は此処にあるのである。

然るに現実の社会は云ふ迄もなく比較的野獸性の發揮に向つて努力すべき筈の天理教徒迄が未だ真に人類の過去生活を支配して来た野獸性を脱却し得ずして、其の日々を利己的野獸生活の為めに消費しつゝある。これ吾人の最も悲しむ所以であると共に神の最も悲しむ所のものである。

「サア、世界が皆変わる。スツキリ皆変わるで。分らん。九分分りたら一分。最ふ一寸の処で世界が変わるで。之れ能ふ聞いて置け。皆な成る程の理が訊れども日々の理が分らねば何うもならん」

甘露台（理想の世界）の建設は神の仕事である。其の日来たらば神が建設するであらう位の無關心の態度暢氣の心で居ては何うもならん。甘露台の建設は神の事業であつて同時に人間の事業である。其の建設の遅速は吾人の幸福に達する遅速である。

百年経つても千年経つても一万年経つても人間も社会も發達せず、何時迄も野獸性（利己心）を發揮して居る様では何うもならん。更らに詳しく云へば百年経つても千年経つても一万年経つても夜は錠を下ろし、昼は懐を用心して歩かねばならん様では何うもならん。世界より監獄や病院や警察や裁判所や軍隊を一掃して了ふには個人的人格が神格に改造せられなければならぬ。

けれども今日の天理教界に於ては上は本部より下は宣教所集談所に至る迄教会の維持擴張を目的として社会をして善美ならしめんとする努力を方便として居る傾向がある。此の教会並に信徒の利己的思想が不知不識の間に生長して遂に天理教の普及發達を阻害するに至つたのである。

けれども社会は一日も其の進歩發達を停止するものではない。時々刻々に眼に見へざる進歩發達をしつゝある。此の際全天理教徒が覺醒せずば彼等は未来の社会の灯明とならずして社会こそ却つて彼等を指導する牽制力となるであらう。これ教祖をして其の信徒に向つて常に

「道遅れなよ／＼」

と教へしめた所以である。

蓋し此の道は個人の利害や教会の利害の爲めに利用さるべき道ではないと共に個人の利害や教会の利害に依つて廃棄せらるべき道ではない。又た社会の迫害や政府の圧制に依つて廃滅すべき道でもない。常に社会の進歩發達に先んじて其の灯明たるべき道である。従つて其の對国家的態度も對社会的態度も對家族的態度も對自己的態度も常に積極的に出なければならぬ。

「サア／＼事上一ツこれ如何なる事も段々と悟し置いたる一ツ聞きとりてコロリと一ツ理早く定めて順序の理取りかへ／＼勇む心と云ふは道である。其処で早く皆々心を合せ満足与へにやならん。明らか速やかと一ツの道に急ぐと云ふ」——天啓の声。

陽氣は天理教の生命である。日々陽氣の心積極的態度を以つて道に勇むが天理教徒の生命である。徒らに社会の迫害や政府の圧迫や家族の反対を恐れて助け一條の精神を内に包み爲めに世界一新の神の理想の現実を後らす事は其の罪惡の最も大なるべきである。

蓋し道にいづむといふは人生に対する執着心が少いからである。云ひ換へれば生欲の力が小さいからである。苟も眞に人生に対する強き執着心を有し生を愛する熱烈なる欲望があつたならば単に一身もしくは一家族もしくは一国もしくは一教会の一時の利害の爲めに人類の運命に関する未来永遠の計を忘れることはできない筈である。其の心中には寝る時も起きる時も歩む時も座す時も飲む時も食ふ時も助け一條の精神を離れ得ないものである。眞に神を愛し、人を愛し、世を愛し、道を愛するものは厠も亦一個神聖なる教会であり厳肅なる書齋である。此の忘我の愛忘我の日の寄進の心なくば眞の天理教徒とは云ひ得ないのである。

要するに吾人天理教徒の唯一の務は山坂と云はず荆棘畔と云はず崖道と云はず劍の中、火の中、淵中と云はず神と教祖の導く俛に其の足跡を慕ふて喜んでお伴をさせて戴くより外何等の用はないのである。其れには時として父母兄弟妻子親戚朋友に別れることもあつる。又た国家社会教会教師信徒より離れることもある。離れるは我より離るゝにあらず彼等より離るゝのである。自分は何処迄も神と教祖の歩に後れてはならない。後れては御用が勤まらぬ。さればと云つて神の足跡について来ぬ者は個人として如何に親密の關係を有するとも神のお伴としては構つて居ることはできない。これを譬へて云へば国家に属する軍人が命令一下直ちに父母兄弟妻子を離れて砲煙弾雨の戦場の勤務に従事すると同一である。教師は即ち将校である。信徒は即ち兵卒である。唯国家の軍隊と神の軍隊との相違は一は国家の利害（国家的欲望）の爲めに殺人劍を採り他は宇宙の利害の爲めに活人劍を採るの相違である。一は欲の爲めに戦ひ、他は愛の爲めに戦ふ。

けれども神——神は宇宙の大將軍である——の軍務に服する者は国家の軍務に服する者の如く単に冷かなる義務として服従するものであつてはならぬ。神と人と世と道とを愛する自然の感情の発露でなければならぬ。其の感情の内容は喜悅と満足と感謝である。

「サア頼母敷／＼心備へを受取る／＼。泣く／＼する様では神が受け取れん。百万の物持つて来るよりも一厘の心受け取る。これだけ聞きたら何んなことも訳かる」

時は迫つた。世界一新の時機は縮まるとも延びることはない。今日は最早や一身もしくは一国家もしくは一教会の爲めに道の發展と真理の徹底とを延引する時ではない。世界に神の大理想を徹底普及せしめなければならぬ時である。敢て此等の事情の爲めにいづめる教師信徒諸氏わけて本部員諸氏の大なる自覺と奮起とを望む。何故なれば彼等のいづみは道のいづみ彼等の勇みは道の勇みの原動力であるからである。

貴族的に流れつゝある今日の天理教

「サア／＼マア是迄の処何でもと思ふ処十分理他に如何なる処も届いて居る。亦一ツ理ある。前々事情に悟し置いたる事上生れ子小児一ツ心になれ。生れ子の心には何も欲しいものはない。生れ子三歳又チヨト一ツ心分ろふまい。」

「サア／＼生れ子は持たせばもち持たさにや持たん。此の理確つかり聞き分け。何よの事も道と云ふものは通り良い様で通り悪くい。通り良い様にしれば通れる。何ふいふものである。通り良い様一ツ理悟しに依つて良ふ聞き分けにや分らん。何によの処飾外の飾はスツキリ要らん。道の飾り理の飾りは何ふでもせにやならん。破れ着物を着て働け。何ふ此ふ何によの処の飾りは一ツも要らん。生れ子三才にあふてあらふ。亦一ツ理もこれから聞き分けてくれ。これから一ツ何によの事も可愛から一ツ理悟しるのやで。破れ着物を着て眞に計り難ないと思ふやない。確つかり心に治めてくれ。破れ着物ではこれ迄の様な目に見ての飾スツキリ要らん。

年限を切つて置く。三才になれば言葉も分かる。此ふしてくれ何ふしてくれサア此ふであると此の理銘々の心に治め何程楽しんで一時に楽しんで暫らくのものや。何にもな

らんで。」
「サア／＼最う飾り／＼。目に見て楽しむ飾り。暫時／＼。其んなら此ふして行かふ。何ふして行かふ。何よの処も事情スツキリ聞き分けてくれ」

「サア／＼これ良ふ聞き分けにやならんで。サア／＼飾り／＼暫時の処ジツと治め／＼たに何よの事暫時の処ジツと治めて綺麗な処内に見て楽しむ処は要らん。ごむさい処が理やで／＼。」

「サア／＼これ心に一つ理をもつてくれるよふこたへといふこたへ通り外さぬ様。春になれば何ふ秋になれば何ふ此の心スツキリ要らん。草の中でも埃の中でも構はん。トントーツ心定め。」

「何も飾りは一つも要らん。前々より悟したる外の錦心の錦心の錦は神の聖」

「良ふ聞き分け。最う着る物無けにや無うても構はん／＼。美しい物着たと思ふ心がコロリと違ふ」
「一代と云ふはこれ一つ良ふ思案せにやならん。残念／＼でくれたる所思へば何んな事でも出来る。只一つの遊山も良い所へ行つた事ない。……其の心なら案じる事は無い。世界から力入れても眞実をして眞実の心あれば抜いた剣も鞘となる／＼。抜いた剣も鞘となると云ふは眞実神がうけとりたるから。」

「心胆治まる。これ聞き分け。人に手伝ふて貰らわんならん様ではいかん。手伝ふと云ふ力もつてくれ。これが第一やで。」

近来天理教は其の教勢の発展するに連れて教祖立教の当時の苦心を忘れ漸次貴族的に流れつゝある様である。一例を挙げて云へば其の服装である。此の道が未だ草生への間を通つて居た頃には其の教師の多くは角帯に前掛け掛けで包掛けをしたものである。然るに今日の布教師を見るに未だ宣教所は愚か集談所にもならぬ内にと身分不相応の贅沢なる服装をして大道狭し潤歩して要る者がある。而かも誰も其れを怪しまない。これは勿論時代の變遷した為めとは云へ道に精神より云つて悦ぶべき現象とは云へないのである。事実天理教の最も破竹の勢を以つて発展した時代は前掛時代である。其の当時は至る所に不思議な助けがあつた。然るに教師の生活が贅沢になり、教会並に教会の儀式に修飾を加へ、教理を世俗的に改悪するに至つて漸次教勢の発展が思はしくない様になつた。此の原因は外ではない。凡て皆各教師の精神を支配する道の精神の膨張せると萎縮せると充実せると稀薄せるとに依るのである。

蓋し此の道は外の錦を求むる道ではない。内の錦心の錦を求むる道である。人を使う道ではない。人に使はれる道である。遊ぶ道ではない働く道である。外に如何なる立派な服装を纏ひ大道狭しと潤歩した所が肝心の精神が腐敗して居たらば其れは錦に糞を包んだ様なものである。外部の修飾表面の美装はこれは凡俗の衆愚の仕業である。精神的生命を唯一の生命とし其の浄化を以つて唯一の事業とせる宗教家の云ふ事ではない。宗教家の唯一の仕事は人格の修養である。生命の美化である。世界の浄化である。苟も宗教家にして常に其の第一義的欲望とする所が、此処になかつたならば其れは宗教家の仮面を冠れる凡俗の衆愚のみ。

熟々現代の宗教家を見るに、其の大部分は飲食、衣服、住居、地位、財産、名誉、権勢に対する欲望に於て俗人と聊かも異なる所がない。否な俗人以上のものが多し。生命も財産も名誉も地位も神に捧げて居るべき筈の天理教々師間にも亦此の種の物質的欲望、世俗的欲望に眷戀せる者が少くないのである。殊に上級の教師程其うである。

今日の本部員もしくば直轄教会の会長役員を見て殊に此の種の感を深くするのである。けれども卿等が食膳に美味を味ふ毎に部下の支教会宣教所以下の教師信徒が着る物も着ず食食物も食はず眞面目に道の為めに奮闘努力する苦痛を思へ。卿等は種蒔である。彼等は刈り手である。種蒔の人の苦痛は大であらう。けれども刈り取る人の苦勞は更に一倍の大なる所以を思へ。これが眞の兄弟の情である。弟は因縁が悪いから苦勞するのは当然である。と云ふ不人情の心を以つて通るは眞の兄弟の情ではない。更らに其れよりも大なる罪は教祖立教の苦心に対する忘恩である。これ忘れたら道の人とも世界の人とも云へまい。

けれども私が今日の天理教が漸次貴族的になりつゝあると云つたのは本部を始め部下の教師信徒等が既往に比して漸次華美になり贅沢に流れつゝあることをのみ云つたものではない。実に教会並に教会の儀式の上に漸次成金式の貴族的を加味しつゝあることを云つたのである。これでは道に重味がないこれでは道の教師らしくないと云つて漸次他から窃取して来たものは今日に存在の意義を失つた古神道の古衣である。恰度新華族や新富豪が人格に権をつける為めに価値も訳らぬ骨董品を無暗に寄せ集めて来る様なものである。かくの如くにして今日天理教会の儀式（祝詞の如きも其の一つである）には純粹の天理教的特色を發揮せるものは殆んどない。

最後に最う一つ云つて置かなければならぬことは本部員を始め部下の教会長並に役員の下部に対する態度である。彼等は其の物質生活の上に貴族趣味を發揮せしめつゝある計りでなく其の精神生活の上に於ても亦貴族生活を發揮しつゝある。これは本部員を始め漸次

部下の教会長役員が部下に対する不親切な態度、傲岸な容子に於て遺憾なく發揮せられて居る——元より中には真に天理教の平民的精神と合した美しき精神のあることを忘れてはならぬ——凡て此等の成金式の貴族的精神は本部員より改めなければならぬ。何故なれば上の好む所下之れに倣ふといふ人情の定則に基いて部下の精神を真に天理教的精神に養成することは實に彼等の神より賦与せられたる一大責任であるからである。

蓋し質素——質素は物質的生活上の質素計りを云ふのではない。同時に精神的生活上の質素をも云ふのである——は天理教の生命である。此の質素の精神平民的精神こそ今日の天理教の盛大を形造つた又た将来に向つて形造る根本的潜勢力である。

今日の天理教はまだ外部の修飾を施す前に内部の充實を計らなければならぬ大切な時である。思を道と人類の未来に対して走する人々は須らく此の間の覺悟を明かにしなければならぬ。

けれども私が此処に今日の天理教は漸次貴族的になりつゝあると云つたのは単に物質的生活に於て貴族的になりつゝあることを指して云つたのではない。同時に精神的生活の上に貴族的になりつゝあるといふのである。精神上の貴族的生活とは人に仕へる精神なくして人を使ふ精神をさして云ふのである。

人を使ふは世界の道——世俗道徳である。人に使はるゝが真の道真の道徳である。教祖の教へた「低い心」とは即ち此の間の心理を説明したものである。

けれども此処に一つ注意しなければならぬことは低い心を卑屈な心質素の精神を不性の精神平民的精神を安価な精神と誤解してはならぬ。何処迄も真の質素の精神に生き真の平民的生活に生きなければならぬ。何故なれば、真の徹底生活とは此の質実な生活平民的生活より外にないからである。敢て天理教上下の士の反省を求む。

二元的に流れつゝある今日の天理教

「穢苦るし／＼／＼／＼／＼スツキリ着せ換へ／＼／＼。サア／＼古い物はいかんで。皆な古い物はスツキリ着せ更へたら良いのやで。一遍着せたら二度着やせんものやで。着せるやないで。古い物スツキリやつてしもふのやで。やるのやらぬやない。投げやりてしもふのや。古着着ては働けん／＼／＼」

基督曰く

「新き布を以て旧き衣を補ふ者はあらず、蓋補ふ所の者反つて之を壊り其の綻び尤も甚だしからん。又た新しき酒を旧き革囊に盛る者はあらず。若しかせば囊張り裂け酒漏れいでゝ其の囊も亦壊らん。新囊に新酒を盛れば両つながら存つべし」

と。千九百有余年前一面に於て旧約の予言を肯定して他の一面に於て其を否定して起つたナザレの大工の宗教は當時に於ては神が人類に与へた新しき神の初衣であつた。又た新しき神酒であつた。此の度人間創造世界創造の元の地場——大和三島——を中心として起つた天理教も亦一面に於ては古神道の肯定でもあり、同時に其の否定でもあるのである。肯定と云ふは古神道の繼續である。否定と云ふは新神道の發展である。

けれども此処に繼續と云ふは古き家を其の俛に保有して新しき家を別の屋敷に建築するの謂ではない。古き家を全部破壊して其の跡に全然新しき家を建つるの謂である。何故なれば古き家は既に棲むに耐へないからである。凡て新陳代謝は宇宙の法則である。宗教と雖も亦此の法則に漏れない。此の度古神道に代つて天理教の興起したのも要するに此の自然の法則と人生の要求に基いて居るのである。然るに今日の天理教徒は未だ自教の存在の意義及び価値に対して明かの自覺を持つて居ない。此の不徹底の無自覺より遂に新しき錦襪の初衣に仏教乃至古神道の破れたる古錦襪切片を継ぎはぎせしめたのである。これ吾人真新宗教を求むる者の暫時も耐え得ざる所である。

凡て芸術に通ずる第一の條件は其の形式が其の表現せんとする内容に一致することである。凡ての最高芸術は皆此の調和を有して居る。此の形式と内容とが不調和に終る時其処に其の芸術は失敗に終るのである。唯宗教が芸術と異なる所は此の内容と形式との一致を物象に依つて表現せずこれを直ちに実生活上に実現する点にある。此の一元的宗教生活を称して教祖は誠と云ひ、正直といひ、真実といひ、又た一筋心と云つた。

蓋し誠といひ、正直といひ、真実といひ、一筋心といふは之れを例へて云へば恰も富士山の如きものである。其の何れの方面より觀察するも同一姿態に映るのである。此の内外表裏縦横上下より觀察して一点の曇なき四方面の価値を有する徹底生活を称して一元的な生活といふ。蓋し宗教の生命である。

今日の天理教を觀るに其の内容と形式との間に甚しき距離がある。これは今日迄革命の聲に於て、屢々論じた所である。従つて私は今此処に具体的の実例を一一列挙することを省く。唯天理教当局者を始め一般信徒に望む所は新しき衣（天理教）を古き衣（仏教、儒

教、古神道)を以つて繕はざることである。又た世俗道德の衣をもつて真道德の本体を蔽はざることである。云ひ換へれば天理教は何処迄も天理教の精神と其の特色とを發揮せんとすることである。天理教は何処迄も教祖の宗教と一致せる形式を求めんことである。吾人は最早や教界の偽善と偽悪とに厭きた。何故なれば鍍金は永遠に其の實質を表わさずして止むべきものではないからである。これ吾人が此処に教祖の宗教を提唱し、之れと矛盾せる凡ゆる形式の打破と教会の二重生活の破壊を絶叫する所以である。

物質的に流れつゝある今日の天理教

天理教発達史上最も不思議なお助けのあつたのは彼の世人より天理教は医薬の妨害をなすと迄誤解せられた時代である。当時の教師信徒は皆な神を信じ神に凭れる精神が強かつた。此の強烈なる精神に乗つて神が不思議の働きをしたのである。其の後科学万能主義、物質万能主義、医薬万能主義、人間万能主義の跋扈に連れて天理教界も亦其の余弊を受けたる浅信の信者の侵入を受け疾病と云へば医薬を思ひ、貧窮と云へば金錢を思ひ、不幸と云へば人力の救済を思ふ者が少くない。

けれども物質力に依頼し、人間力に依頼し、法律の力に依頼するは必ずしも昨今天理教の信仰に入つた新米の信者ばかりではない。道に入つて長年を閲し社会に向つて道を説く布教者間にも亦少なからずあるのである。彼等は信徒に向つては神一心に凭れよ理一方に縋れよと教へながら自分自身は未だ真に其の境に達しては居ない。為めに信徒の信仰大小有無を物質的日の寄進の大小有無に依つて判断するの風がある。これは神一条を以つて生命とし理一筋をもつて生命の縋とせる天理教にとつて悲しむ現象である。何故なれば未だ物質力に依頼し、法律科学哲学の力に依頼して居る中は真に精神的根本的に助かるといふことはできないからである。

畢竟真に吾人を助くるものは物質ではない又た人間ではない。又た人間の作つた法律や哲学でもない。真に吾人を助くるものは精神である。神の人類の為めに下した生命の縋一理——に縋る精神力にあるのである。云ひ換へれば神一條の依頼心より外に助かる精神はないのである。これは少しく物質其の者、人間其の者、法律其の者を研究せるものゝ容易に知ることのできる事実である。

けれども人間は未だ第一義的信仰に達せざる為めに、自分が不幸に陥つたら父母が救つて呉れるであらう。自分が疾病に陥つたら医薬が救つてくれるであらう。自分が迫害に陥つたら朋友が助けてくれるであらうと思つて居る。けれども父母は助けたくも朋友が助けたくも彼等の力の届かぬ範囲がある。其れは死と疾病と煩悶と苦痛との境である。古来如何なる死人が父母の悲嘆の為めに復活したか？ 古来如何なる精神上の罪人が朋友の義侠に依つて救はれしや？ 更らに翻つて物質の力を試験するに金錢財宝は必ずしも人間の生命を保証するには足らない。死と疾病と精神的不幸に対しては彼等は何等の威力をも有しないのである。古来「地獄の沙汰も金次第」と云つて居るのは有限なる物質力の範囲を知つて無限なる超物質力の範囲を知らざる痴者の世迷言のみ。

畢竟神といひ、仏といふは此の物質力、人間力を超越したる大自然力である。其の絶大無限の靈力は世の物質万能主義者、形式万能主義者、医薬万能主義者、法律万能主義者、智力万能主義者の知る所ではない。唯靈感をもつて神と相通する者のみ知ることが出来る。従つて私は一般天理教教徒に向つて望む。

火と水と風との力に耐へ得ざるバベルの塔を築かんよりは天に飛翔する精神の翼を作れ。

と。蓋し物質力と人間力とは吾人を終局に於て救済するの力を有せざるからである。従つて私は教会が日に／＼物質的形式的に流れつゝ行くを悲しまずに居られないのである。此の悲は此処に此の言葉を生んだのである。

愛する人々よ、凡ての学問、知力、財産、地位、名誉、法律、人間に対する依頼心を捨て、神と神の法律に信頼せよ。何故なれば吾人々類を救ひ得る者は真にこれを置いて他にないからである。

天理教の為めの天理教 (功利的に流れつゝある今日の天理教)

熟々現今の天理教界を見るに其の大体の傾向が著しく功利的に流れつゝある。而かも其の功利的思想は局限せられて天理教の為めの天理教といふ趣がある。これは神の理想より云つても教祖の精神より云つても悲しむべき現象である。

凡て如何なる宗教も其の社会的存在の権利は「人生の為め」と云ふ条件の下に許されてあるのである。其の証拠には今日迄如何なる宗教も此の人生の為めの宗教といふ精神を離

れない中は其の社会に対する勢力も亦大であつた。けれども一旦墮落して其の後継者が人生の為めの宗教よりも寧ろ宗教の為めの宗教に墮するや漸次社会と深き交渉を離れて単なる冠婚葬祭の道具となつて了つた。現今に於て漸く余喘を保つて居る仏教基督教神道の如き皆然らざるはない。

然るに天理教も漸次教祖立教の精神を離れて人生の為めの天理教よりは寧ろ天理教の為めの天理教と云ふ消極的功利的思想を生むに至つた。而かも此の思想の生む当然の結果として進んで社会を救済せんとするよりは寧ろ自教の安立を図らんとする卑怯に墮するのである。今日天理教界の大半を支配して居る教会保存主義の如き本部保存主義の如き此の思想の所産に外ならないのである。

けれどもこれを宗教其の者の意義より云ひ又た、天理教立教の趣旨に鑑みるに甚しく其の本義を逸したる憾がある。何故なれば単に宗教に限らず芸術哲学科学政治道德の如きも其の本来の目的は人生の為めの芸術、人生の為めの哲学、人生の為めの科学、人生の為めの政治、人生の為めの道德にあつて、芸術の為めの芸術、哲学の為めの哲学、科学の為めの科学、政治の為めの政治、道德の為めの道德ではないからである。天理教立教の趣旨も亦此処にあるのである。

要するに天理教の立不立は一に天理教徒の努力にあるのである。而かも我を忘れて日の寄進的努力にあるのである。この信仰の第一義を忘れて自教の発達と安全とを期するが如きはこれ助け一條の道を自ら破壊するのである。

私は信じてゐる。

此の道は先づ内より壊れずして外より壊るゝ道にあらざるなりと。内より壊れるとは助け一條の道を背いて世界の道——利己主義——に墮することである。従つて私は一般天理教界に向つて希望せざるを得ない。

天理教の為めの天理教的思想を捨てゝ人生の為めの天理教に帰信せよと。これを置いて天理教の発達する道はないからである。

囚はれたる天理教

要するに今日の天理教は余りに情実因襲に囚はれて居る。余りに物質的、功利的思想に囚はれて居る。余りに実利的現世的思想に囚はれて居る。余りに貴族的、成金的思想に囚はれて居る。余りに法律と習慣とに囚はれて居る。余りに世俗道德と衆愚の輿論に囚はれて居る。云ひ換へれば余りに外的思想と外部の要求とに囚はれて居る。為めに教界全体の氣風には全く新鮮と自由とを欠いて居る。而して卑屈と因循姑息の氣風の中に埋没して了つた。

将来の天理教は最つと最つと教祖立教の当時の澆刺と新鮮とに帰らなければならない。天真と自由とに帰らなければならない。もし今日にして天理教徒の自覚が此処に想到しなかつたならば、彼等は情実と因習の毒瓦斯に窒息するであらう。

蓋し人生の理想は主観と客観との合一にある。云ひ換へれば神の大主観と人の小主観との一致。——天の理と心の理を合せること——にある。其処に白熱の世界がある。否な其処にのみ白熱の世界がある。其処に光明の世界がある。否な其処にのみ光明の世界がある。其処に喜悦の世界がある。否な其処にのみ喜悦の世界がある。其処に自由の世界がある。否な其処にのみ自由の世界がある。其処に満足の世界がある。否な其処にのみ満足の世界がある。此の理想の生活を称して宗教生活と云ふ。而かも偉大なる宗教程大なる白熱と大なる光明と大なる喜悦と大なる自由と大なる満足とを与へるものである。私は此の最大の満足と大なる宗教を独天理教に於てのみ発見するのである。

けれども私の信ずる天理教と今日の天理教との間には大なる距離がある。其の距離の因つて生ずる抑々の原因は今日の天理教が神の大主観と一致することを求めずして、人の小主観に一致せんことを求めて居るが為めである。云ひ換へれば情実因襲の羈絆に束縛せられて敢て其を脱して新鮮と自由とに満ちた自然生活に帰らうとする勇氣がない為めである。

之れを譬へて云へば今日の天理教は今日迄の人類の経験と習慣とに従つて一日三度の飯は食欲の有無に係らず其の箸を其の定刻に於て取ることを以て真の宗教生活の意義に叶つたものと信じて居る様である。けれども私の宗教生活の信條は渴せざれば飲まず、饑へざれば食はず、疲れざれば憩はざるの主義である。世の習慣の如きは私の問ふ所ではない。又た外部の規約の如きは私の問ふ所ではない。私は唯内部を支配する自然の法則——神の意志——に従つて生活するのである。従つて今日の天理教徒の生活と私の生活との間には自ら多少の距離なきを得ない。

けれども私は私の信條に従つて生活して未だ一度も後悔したことはない。唯此の信條を破つて世俗の習慣に肉体と生命とを任した時其処に大なる自然——即ち神の——制裁を受

けるのである。今日の天理教は之れと同様の自然の制裁を受けて居る。蓋し生活に自由と澆刺とを失ふは人為の法則に囚はれて自然の法則を忘るゝが為めである。彼等はコツプの中に分たれたる水である。大海の水の新鮮と自由とは彼等より奪はれて了つた。吾人の使命は此のコツプを破壊して其の水を大海の水と一致せしむることである。従つて私は世と道との為めに云はざるを得ない。

情実因襲の羈絆を脱せよ
と。此の言葉は今日の社会わけて天理教徒の耳を欬てゝ聴かねばならぬ言葉である。由来「宗教の使命は社会を指導すべきものにして社会に指導せらるべきものではないからである」。今日の如く其の五体を地平線（法律習慣）下に没して敢て其の範囲を超脱することを得ざるが如くは宗教家の天職は抑々何処にありや？ これ私の天理教当局者に向つて一層の考慮を煩はしたい所以である。

本部（教会）が大事か？ 道が大事か？

「サア／＼最うこれ迄の所に彼地らもいかん。此地らもいかん。先々様々の心の理から理を失ふてしまひ曇り／＼の中曇り危ないものが世界といふ。国々処々に多分の理を下ろしたる。日々働いて居る。曇り／＼ては何うもならず事でけん。人間心交ぜるから何うもならん。」

「サア／＼尋ねがけたる処々此れ迄と云ふものは何うもならん。教は一つの理であつて悟し一つ事情これ迄定まりあつて定まりない。幾度も事情にさしつまる理出来る。これ迄何度悟したる又刻限にも悟したる取りよ聞き様で分り難ない。応報と云ふていて真剣悟す理ない。元は元丈けの功なくばなるふまい。長らくそら尽してゐる。尽してゐりやこそ世界台となりて居る。中に間違何うもならん。何んぼ云ふても心に間違は何うもなるふまい。成りてから何うもならん。其処で刻限といふ。此の理悟したる。とり迫つたる今日の目これ聞き分けて万事先々何時／＼迄も悟とさにやならん。此の道前生から今の世又た生れ変りまで悟する理である。すれば元々はじめた地場といふ。皆んな治めにやならん。面々さへ治めてあれば良いといふ様な事ではならん。これは皆んな心にないといふ心が感じにやなるふまい。」

「綺麗な屋敷、神の屋敷に居て身つくりて居ては鏡屋敷とは云はん。濁り屋敷とや土とや云はん。其んな理から成らん様になる。鈍な者は猶ほ可愛がつてやれ／＼。これ丈け悟したら分るやろ。下程大切にせにやならん。」

「サア／＼良ふ思案して見よ其れ／＼身上迫れば治まらん。世界明るく道に埃ありては元の地場とは云へん。女であれど元々尽した効能と云ふ。元々女でも彼れ丈けの効能あるかと知らさにやならん。」

「サア／＼理を尊めすら／＼。何んぼふでも尊めば効能がある／＼。其の理は今日に云ふて出来よふまい。此の理を知つてあれば効能の理あらはれる。」

御言葉に曰く

「道盛なれば世界盛。世界盛と云ふは元があるから（教会）や」と。凡て根なくして何物も成り立つものはない。本部の今日あるは地場一つの理と教祖一代の理があるからである。此の根の根を忘れては眞の道とは云へん。

然るに今日の天理教は。物質的の建築物を以て唯一の本部（教会）と信じて其の維持拡張にのみ腐心し、やゝもすれば本部（教会）を生んだ元の理を忘れんとする傾向がある。今日の天理教がやゝもすれば其の外社会の侮辱を買ひ、内信徒の信仰を繋ぐに足らざるは此の本末終始を顛倒せるが為めである。

此の道は御言葉にある如く内さへ清めれば世界から頭を下げて聞きに来る道である。此方より頭を下げて聞いて貰ふ道ではない。又た此方より頭を下げて政府や国家より認可を願ふべき道ではない。何故なれば此の道は人間一條世界一條神一條を貫く宇宙も王道であるからである。其の前には国法の權威と雖も亦屈せざるべからざるものである。唯今日の所法律より一步先達つて国家社会の指導者たる所以は現実の世界は、まだ一躍して理想の世界に入る丈けの道を進んで居ないからである。

然るに過去の既成宗教は云ふ迄もなく天理教の如き新時代の指導者たる大使命を帯びたる新宗教迄が其の行動を一に法律の指揮に仰いで敢て其の上に一步を踏み出すことをしないのは独道の為めのみならず実に世界の進歩の為めに悲しまざるを得ないのである。

けれども今日は最早や今迄の消極的態度を維持すべき時ではない。更らに／＼積極的態度に出でざるべからざる時である。畢竟天理教が国家社会に対してかくの如き消極的態度に出づる様々の原因は道を主とせずして本部もしくは教会の存否にのみ杞憂を抱いてゐるからである。

抑々「本部（教会）が大事か？ 道が大事か？」これは今日迄屢々天理教の打つかつて来た問題である。然るに何時も曖昧の中に葬られて了つた。けれども今日は最早や此の問題を何処迄も無解決に放任して置くべき時ではない。必らずや之れに向つて眞の根本的解決を施さざるべからざる時である。此の問題を解決する第一の端緒は「本部もしくは教会を草生への中より今日に保護生長せしめたものは神法であるか？ 国法であるか？」の問題を解決するにある。然らざれば決して如上の問題を正解することはできないのである。

抑々今日の本部（教会）が今日迄生長したのは国家の力でなければ、社会の力でもしない。全く神の力。理の力である。地場に一つの理に教祖に一つの理あればこそ今日の本部（教会）が出来たのである。此の地場一つの理教祖一代の理は火にも焼けず水にも流れず風にも倒れざるものである。何故なればこれ眞実であるからである。けれども今日の天理教界にてはこの火にも焼けず水にも流れず風にも倒れざる元の理を忘れて火も防ぐ能はず水も防ぐ能はず風も防ぐ能はざる物質的建築物と其の中に生活する人々の安全をのみ考へて居る。神の怒は此処にあり教祖の悲は此処にある。

此の怒此の悲は屢々本部並に部下の節となりて表はされたれども何人も進んで其を改める勇氣がない。最も悲しむべきは後より後より遣はされる神の使者が、何れも教界の俗風の爲めに軟化せられて自己の使命を眞面目に果す者がないことである。けれども神は何時までも濁れる水を清くせず歪める木を直くせずして止むものではない。更らに／＼新なる使者を遣して、地上の掃除を完成せしむるのである。別けて本部は世界の神和泉の水源地である。其の源濁つて其の末の澄む道理はない。最も責任の重大なる所以である。

天理教の二大教憲に

「理（神）を立てゝ身が立つ」

「人を助けて我が身助かる」

と。これは個人生活上の眞理であると共に又た団体生活上の眞理である。眞に天理教を助けんとせば先づ理即ち神を立てざるべからず。又た眞に天理教を助けんとせば国家社会を助けざるべからず。此の第一義を忘れて本部を立て部下教界を立てんと思ふ者があれば其の人は春に種蒔かずして秋に收穫を思ふの徒である。其の不合理的なることを待たない。

私が一般天理教界に望む所は単に本部もしくは教界を経済的に維持することを天理教信仰の第一義とせずして本部並に教会を生んだ神の理を立てんことである。且つ又た本部と部下との関係を単に経済的關係に止めずして眞に精神的關係即ち愛情（親子としての）關係たらしめんことである。

蓋し天理教の儒教——儒教は主従教である——もしくは基督教——基督教は主従教より親子教に移る過渡教である——と異なる点は神と人との間が主従の關係を脱して、眞の親子の關係に移つた点にある。然るに今日の天理教界にはやゝもすれば既に葬られた主従的關係が復活せられんとしつゝある。これ最も戒心を要する点である。

凡て以上述べたことは本部を始め部下一般に対する一部の希望を述べたに過ぎない。けれども願はくばこれを単なる一信徒の言として聴かれざらんことを。何故なれば眞理は即ち神なればなり。

郷愿は徳の賊なり

熟々今日の天理教界を見るに甚しく眞の信仰に生きて居る真人に欠乏してある。其の百万人中の九十九万九千九百九十九人は凡て皆偽物である。而かも其の百万人中の最後の一人迄本錦欄はない。必ずや一本もしくは二本甚しきは数十百本の錦糸を交へて居る。もつて吾人の信仰の中樞となる能はざる所以である。

更らに甚しきは其の思想界である。其の中には眞に時代の先頭に立つて社会を指揮するに足る眞新思想家は一人もない。あつても其は凡て時代後れの骨董品のみ。而かも今日の天理教界に於ては此の方面の人物を養成することを閑却して居る。これ一言もつて当局者に言を進むる所以である。

古語に曰く

郷愿は徳の賊なり

と。古来一人の真人の表るゝや其を圧迫し妨害する者は無智の群衆にあらずして却つて不徹底なる識者である。これは時代の歴史の証明する所である。私の望む所は百の郷愿百の小徳家の出づるよりも一人の眞徳家の実現を望むのである。云ひ換へれば百の本部員よりも一人の本席の出現を望むのである。けれども其れは神の終局の理想ではない。神の終局の理想は全人類が凡て教祖たり本席たるに至らんことである。又た其れでなければ眞に甘露台は実現したと云ふことができないのである。

私は此の終局の神の理想を呈出して次の結論に向つて急ぐ。
扉を開いて世界を直路に踏み平らせ
と。之れが今日全天理教徒の双肩に懸つた唯一且つ緊急の事業である。
今日は最早や社会に向つて天の扉を鎖して居る時ではない。今日は最早や社会に向つて
日の光を蔽ふ時ではない。今日は最早や低声耳語する時ではない。
記せよ真理は耳語する時に悪言となることを。財宝は富豪に依つて独占せらるべきもの
ではない。真理は教会に依つて独占せらるべきものではない。財は天下の宝である。理は
天下の財である。其を停滞せしむることは社会の経済的乃至精神的基礎を破壊するのである。
私は望む
扉を開いて世界を直路に踏み平らせ
と。天の親差は雨を善き者にも悪き者にも降らせ、日を善き者にも悪き者にも照らし給ふ
のである。何んすれど日を蔽ふ雲となり露を奪ふ蔽ひとはなる。
全人類の人格は凡て平等化せられざるべからず。其の間を隔てる心の襖は凡て取り払は
れざるべからず。而して人の魂は皆大海の深みと広さとに向つて急ぐ。
時は迫つた。世界は直路に踏み平らされざるべからず。扉を開け／＼早く／＼一刻も早
く。

(大正四年六

月十八日)

道の上に大なる腫物が出来た。助けるには切らねばならぬ。六月号では皮を破つた。七
月号には膿を出した。皮を破つて膿を出して置いたら自然に快くなるであらう。私は其の
腫物を破るべく使はれた神の針である。
けれども針を打ち直せば腕輪となる。頸飾りとなる。時計の針となる。鎖となる。鍋と
もなれば釜ともなる。床の置き物ともなる。けれども必要があれば神は何時にても元の針
として使はれるであらう。

六月号天理教界革命の声に就て

私が本誌六月号に於て天理教界革命の声を書かせて戴いたに就て本部より広池博士を通
じ又た東京教務支庁より所属教会を経て取消の抗議を申し込まれた。

其中で最も問題となつたのは教典廃止論と本部改革論並に神道本局の三條の教憲であ
る。
教務支庁よりの抗議に依れば教典は故管長の著述でもあり旁々道の上では最も重要な宝
典であるから攻撃等のことはなき様にとのことであつたが(真の信仰を人に勧むべき地位
にある本部や教務支庁が却つて偽の信仰を勧むるのは大なる矛盾であるが)之れに対して
一言お答へをして置きたいことは元来私が道に入つたのは御神樂歌並に其の他の御言葉に
含める高遠なる思想に打たれたる為めであつて教典の為めではないといふことである。
正直の所私には始めより天理教に此んな不肖な連れ子があらうとは思はなかつた。其れ
が結婚後になつて始めて知れたのである。此の際私は其の連れ子を養育するの義務がある
であらうか? 私は然らずと信ずるのである。(由来信仰は絶対である。従つて自ら信ぜ
ざるに自ら欺くことはできない) 教務支庁の要求は此の連れ子をも自分の生児として養
育せよと云ふのである。私には悲しいかな其れはできないとお答へするより外はない。(
我が後に来る天理教の学者は一度は此の関門を通過する。従つて結局私一人を沈黙させた
所で何んにもなるものでない。)これ丈け断つて広池博士を通じて申込まれたる本部の要
求に対してお答へする。

本部では私が教典廃止論中の一節に、
「第二章は尊皇章であるが此の章も全然神道家の皇室観を述べたものであつて、天理教的
思想は片影だも伺ふことができないのである。例へば、
『神は万有を主宰し皇上は国土を統治す国土は神の経営し給ふ所皇上は即ち神裔にして皇
上の此土に君臨し給ふや実には天神の命に依り其生應せる蒼生を愛育し給ふにあり』
の如き

『世界の広き古今国を建つるもの無数にして其の帝たり王たるもの亦多しと雖も我皇室の
如く神統を継承し天佑を保有し国土綏撫の天職を帯び給へるもの何処にかある。即ち知る
我皇室は君主中の真君主にして宝祚の天壤と共に無窮なる所以を』
とか

『故に須く我皇上は天定の君主なるを確信し造化生育の恩を神に謝すると同一の至情を以
て誠忠を皇室に尽さざるべからず』
とか云ふが如き即ち之れである。之れを数千年間日本独特の古典思想に養はれて来た日本

人には何等の不思議はないのである。けれども之れを今日迄国体を異にし、風俗習慣を異にした外国人に理解せしむるには此くの如き説明なしの高圧的手段に訴へて心服せしむることにはできないのである。これは第三章の愛国章に於ても亦同一である。」
と書いたのを非国家主義の主張であるかの如く解せられた要であるが之れは本部の大なる誤解である。私が此の一節を摘出したのはこれまでは天理教の大精神が盛られてないと云つた迄である。之れは私の書き方が概括的であつた為めに却つて此ういふ誤解を招いたのであつて敢て国家主義を非難する心算はないのである。けれども之れが為めに天理教が非国家主義の如く誤解せらるゝ恐れがない為めに聊か天理教の国家主義なるものを解釈して置かうと思ふ。

即ち天理教の終局の理想は

日本見よ小さい様に思たれど根があらはれば恐れ入るぞや
枝先(外国)は大きいに見えてあかんもの構へば折れる先を見てあよ
同じ木の根いと枝とのことなれば枝は折れ来る根は栄え出る
今迄は唐や日本と云ふたれどこれからさきは日本ばかりや

の教祖の遺訓にある如く全世界を日本一国にすることである。けれども此の理想の国家が実現せられても全然世界に国家なるものゝ絶滅を説くのではない。更らに幾多の小国家に区分せられて存在するのである。けれども其の国家たるや今日の勢力的分布の国家ではなく地理的分布の国家である。恰かも現今の県郡市町村が自治制を布きつゝ中央政府に統一せられつゝあるが如く各国は互ひに自治制を布きながら日本に統治せらるゝのである。現在の国家は即ち此の理想的国家を実現する過渡時代である。

次には理想の国家の主権者である。之れは云ふ迄もなく神である。而して其の政治的代

表者は日本の皇室である。けれども之れは理想であつて現実ではない。天理教徒として現実の世界に処するには家族の一員として一家の責任を分つことは云ふ迄もなく村民の一員とし、町民の一員とし、郡民の一員とし、市民の一員とし、県民の一員とし、国民の一員として自己の属する部属の為めに忠を尽さざるべからず恰かも世界の公民として全人類の為めに忠を尽すと同一の至情をもつて。之れが今日の天理教徒の処世法である。

要するに天理教々理より云えば如何なる時如何なる人に対しても誠を尽すを以つて信條の眼目とするのである。従つて何処如何なる時如何なる人に対しても実行して悪い点は一つも無い。これ時所位に跨つたる新宗教たる所以である。

唯私が六月号に於て教典第三章を非難したのは其の中に真に此の天理教の理想が説明せられていないからである。敢て国家主義を非難したものではないことを断つて置く。

次には神道本局の三條の教憲である。之れは三條の教憲其の者の内容を非としたものではない。天理教の如き新宗教が立脚地を異にせる他の宗教と共同動作をする無定見を非難したのである。

けれども一歩を進めて見れば此処に京都より東に向つて旅を続ける数個の旅行団体が有る。其の或る者は名古屋に止まり其の或る者は静岡に止まるとする。又た其の或る者は東京迄行くとする。凡て此等の団体は同時に京都を出発しお互ひに仲良く旅行を続け、名古屋に止まる者は名古屋に止まり、静岡に止まる者は静岡に止まり、東京迄行く者は更に旅行を続けて行く。其れで此の数個の団体は共通の利益の為めに名古屋迄は皆一致の歩調を続けることを約束した。其れが三條の教憲である。此う大きく見たら却つて大きな意味の「互ひ立て合ひ助け合ひ」の教理に合しないこともない。其れは觀方に依つて何うにもなるが現在の所事情があつて神道一派の組合を脱することができないと云へば其れ迄であるが天理教将来の発展の為めに自教の立場を明かにして置くと云ふことは最も大事なことである。

次には本部改革の一事である。これについて大部誤解がある様であるが眼に不浄を見耳に不浄を聞けば口と筆とを以つて其の曲れるを直くし誤れるを正すは学者の神より与へられたる天職である。従つて学者の眼には裁判官と同じく王侯貴族の差別はない、正を正とし非を非とするは何人に対しても憚る所はない。私は此の与へられたる天職を忠実に実行した迄である。其れに向つて聞くと聞かざるとは私の関する所ではない、又た其の為めに生ずる一身上の利害得失の如きは私の関する所ではない。私は唯一意神意を奉戴して天裁の神聖を宣言した迄である。これを取り消すことは神の許さざる所であるから敢て言を再び左右にすることはしない。唯私を道の破壊者と信じ本部を敵として争はんとする者と誤解せる者に対しては一言の弁護なきを得ない、もし私の精神に一点の私情が混入してあるならば神立ち所に吾が命をめせと神誓してあるからである。私が此の苦言を呈するのは本部を憎むが為めではない。道を愛するからである。道を憎むが為めではない。道を愛するからである。私は愛せざる者に対しては一言の辞も呈さないであらう。これは広池博士にも申上て置いたことであるが唯一言全体に亘つて御詫びしなければならぬのは私の論

調が全体に亘つてやゝ激越に失したといふ非難である。これは率直と天真とを喜ぶ私の天性と物凡てを強く感ずる私の感性の致す所で止むを得ない。唯願くば私の言葉によらずして私の精神のある所を汲んで戴ければ幸福である。

最後にお断り迄に述べて置きたいことは私の天理教界革命の声について広池博士と関係のある如く誤解せられて居る信徒諸氏もある様に承つたが私と広池博士とは極最近の相識であり（今度の会見共三度さへお目にかゝつたことはない）且つ信仰の径路も信仰の立脚地も異つて居るから同盟云々の事は全く内部の事情を知らざる人々の想像より出た誤解である。

元来信仰は内的経験の発露であるから人格が違へば其の信仰の内容も自ら異らざるを得ないものである。而かも其の信仰を何処迄も徹底させて行く所に信仰の權威がある。私は未だ曾て他人の為めに自己の信仰を左右せられたことはない。私の今日迄の信仰は独立独立歩何人の為にも煩はせられざる自由の境を歩いて来たのである。偶々博士並に其の他の人の説と一致する点があつても（これは同じ天理教界に迄足を踏み込んだ人には尚更ら多い事実であらう）其れは偶然の一致であつて予期の一致ではない。これは博士の為にも迷惑の事であり私にとつても同時に迷惑のことであるから一言お断りして置く。

無形教会より（感想）

R

○ 生

真人と偽人、真の信仰者と偽の信仰者との區別は其の者が無形教会員であるか有形教会員であるかに依つて區別せられる。云ひ換へれば精神主義者であるか形式主義者であるかに依つて區別せられる。

私は有形教会を建てゝ其の会長にならうとは聊かも思はない。私の唯一の使命は全世界に無形教会を建築するにある。

私に要するものは薬瓶（経文）ではない。其の中に盛つてある靈薬（真理）である。何故なれば薬瓶は私の精神病を癒やすに足る力がないからである。

一本の箒を十年も二十年も使はうと云ふのは無理である。今日の宗教家今日の経世家の仕事は多く其れである。

吾は生きんと欲す。而かも永遠無限に生きんと欲すと云ふ生の根本的欲望を殆んど病的に痛感せざる人々に向つて宗教を説くことは犬に聖物を与へ豚に真珠を与へると同じ事である。けれども此の道は犬に聖物の価値を知らしめ豚に真珠の価値を知らしめ、石に立つて歩むことを教へる道である。

信仰なくして人生に生きんとする者は目的なしに世界を流浪すると同じ事である。其の得る所は云ふまでもなく絶無である。

神は根である。人は枝である。枝は根を離れては繁茂しない。根は枝を失ふて生長しない。此の不可分離的關係こそ神人の關係である。

神（理）を愛することは自己を永遠に生かす所以である。人を愛することは自己を無限に生かす所以である。天理教の

理（神）を立てゝ身が立つ

人を助けて我が身助かる

の二大教憲は即ち此の永遠無限の自己拡張の道である。

世人は屢々愛と欲とを混同視して居る。愛とは与ふることである。欲とは取ることである。一は人類的欲望であり、他は動物的欲望である。而かも此の動物的欲望の宣伝者が天理教布教師の中にもある。

我汝を愛すと云ひつゝも全我を挙げて其の者に与ふることのできない者は真の愛ではない。

一切を得よ然らざれば何物も得る勿れ。これが真人の宗教である。

柳生流の極意に真劍白刃取りと云ふ秘術がある。此の術の精神は「身を捨てゝこそ浮む瀬もあれ」と云ふ一首の歌旨に尽きて居る。生の奥義はこれ以上ない。

全力よ、全我よ。一切よ、生命よ！ 凡て此等のものを受くべき権利のある者は誰であるか？ 其れは云ふ迄もなく神一人である。

人は自信なくては何事もなし得るものではない。自信は偉人にとつては昇天の翼である。けれども凡人にあつては自信は屢々自負と變るのである。自負は墮落の錘である。

未だ偉人たらんと志して真の偉人になり得た者は一人もない。真の偉人とならんと欲せば先づ真人たらざるべからず。善人たらざるべからず。美人たらざるべからず。苟も此処に志を置かざるものは悪魔の徒弟である。

今日の布教師は上手に語ることを以つて道の布教と心得て居る。けれども私の唯一の信条は唯眞実を語ることである。

今日の商人の悪弊は客に依つて直段の掛け引きをすることである。更らに大なる悪弊は不親切の粗造品に依つて暴利を貪らんとすることである。此の不正直と不親切とは単に商業界のみならず一般社会の流行である。

口に眞を唱へて心に偽を抱き、口に善を呼んで心に悪を抱き、口に美を讃えて心に醜を思ふ。宗教家の權威は何処にありや。

権謀術数をもつて政治家の本領と信じて居た時代は過ぎた。

世界の人間が皆正直な人ばかりになつたら世に疑と云ふものはなくなるであらう。世界の人間が皆な親切な人ばかりになつたら世に争といふものはなくなるであらう。世界の人間が皆勤勉の人ばかりになつたら世に貧といふものはなくなるであらう。これが天理教祖の画いた理想の世界である。

人間の徳（人格的価値）が進歩して神徳の絶対境に達した時人は現身より光明を放つ。

愚人は一時の生欲と一身の生欲との満足を知つて永遠の生欲と人類の生欲との満足を知らない。勿論其う云ふ種類の間人は現在の世界に於ては一時の成功者たり、一時の勝利者たり得る。けれども世が遷り人が改つて世界に唯一人の利己主義者がなくなつた時彼は此の三千大千世界に於て身の置き所がなくなるであらう。其の時は間もなく来る。今一刻／＼迫りつゝある。けれども糞にたかつた青蠅は白駒の足音を知らないである。

世人が長らく夢みてゐた弥勒（中山ミキ子）の世は来た。けれども仏教徒も誰も其の時と其の人とを知らない。

人間第一の価値は其の人格の崇高偉大にある。博学多才は第二のことである。

今日は人間の階級を分類する方法が變つた。其れは人間を貴族と士族と平民とに分類した時代より善人と常人と悪人との三階級に分類する時代に到達したのである。善人の数と悪人の数とは人類の各一割である。後の八割は善人にもあらず悪人にもあらざる平凡普通の人である。現代は未だ此の平凡普通の人の世界である。（けれども其の間に無限の階級があることを知らねばならない）

偉人とは大なる包有力（愛）に外ならない。

口に幸福を祈つて行に幸福を呪ふ者は痴人の祈祷である。行に幸福を祈つて口に何事をも祈らざる者は賢人の祈祷である。

人間は唯三個の祈祷の文句をもつてゐる。曰く

朝起き、正直、働き、

人間は八個の呪詛をもつてゐる。曰く

ほしい、をしい、かはゆい、にくい、うらみ、はらだち、ゆく、こうまん、

神は運命を其の言葉に与へずして其の精神と行為に対して与へるのである。

信仰を強ゆる。結婚を強ゆる。凡て此の強ゆると云ふことより人格を侮辱した野蕃的行為はない。其れは恰度躰や腰の立たぬ病人に立つて歩めと命ずると同様である。而かも従来の宗教や道徳は平気で此の残酷な蕃行を続けて来たものである。

自由！ 自由！ 自由は人間の先天的特権である。其は神と雖も亦奪ふべからざるものである。

今日の天理教界には服従を説く者はある。けれども自由を説く者はない。無我を説く者はある。けれども大我を説く者はない。無欲を説く者はある。けれども大欲を説く者はない。無望を説く者はある。けれども大望を説く者はない。謙遜を説く者はある。けれども自信を説く者はない。推譲を説く者はある。けれども互立を説く者はない。

凡て此等の徳は従来の宗教道徳の説き古した廢語である。天理教に依つて新に説かるべき必要がない。

私が此度新に神と教祖の直命を受けて世界に向つて開かんとする新門は自由門である。大我門である。大欲門である。大望門である。自信門である。互立門である。

新は真なり深なり神なり心なり。私の説かんとする道徳は教祖御親に依つて説かれたる新道徳であり、真道徳であり、深道徳であり、神の道徳、精神道徳である。

世人は今尚ほ宗教や芸術や哲学をもつて一部専門家の玩具の如く信じてゐる。けれども将来の宗教将来の芸術将来の哲学は生命の源泉を作る常食であり、生活の便利を助くる日常品でなければならぬ。

大人の謙遜（追従輕薄）には倦きた。赤児の謙遜（天真爛漫）こそ神の望みである。

正直は最上の謙遜である。

古い宗教の目的は山の仙人——不生産的人物——を養成することにあつた。新しい宗教の目的は里の仙人——生産的人物——を養成するにある。

井戸を掘る人はある。けれども其れを掘り抜く人は少ない。従つて少しの干魃にあふと其の用水は直ちに涸れて了ふ。けれども掘抜井戸のみは如何なる大干魃期に際しても涸れることはない。

人間の価値は其の欲望の大小に依つて定まるものである。即ち自分一身の利益を思ふ者は其の価値も個人的である。自分一家族の利益を思ふ者は其の価値も家族的である。自分一国の利益を思ふ者は其の価値も国家的である。けれども世界人類の利益の爲めに熱中するものは其の価値は世界的人類的である。神の利欲は宇宙の利欲である。これより大なる価値あることなし。

トルストイを担ぎ、イプセンを担ぎ、ニイチエを担ぎ、ベルグソンを担ぎ、オイケンを担ぎタゴールを担いで歩く人は砂地に井戸を掘つて歩く人である。幾ら掘つても自然の泉は出て来ない。

掘れよ。掘れよ。掘れよ。掘つて掘つて大地の底に徹せよ。其処に無尽の泉がある。

凡ゆる人為的宗教を拒否するものも天然自然の宗教を信ぜざる訳に行かない。何故なれば其を信ぜざることは死であるからである。

万有は真である。人間は善である。全世界は美である。偽悪醜は一つもない。唯より真なるものより見てより価値の少なき真は偽となる。唯より善なるものより見てより価値の少なき善は悪となる。唯より美なるものより見てより価値の少なき美は醜となる。世に偽は一もない。世に悪は一もない。世に醜は一つもない。

世には憐れな孤児がある。而かもより憐れなる孤児のあることを人は知らない。其れは元なる親（神）を知らぬ者である。

飲食をとる第一の目的は排泄物（糞尿）を造る為めではない。肉土を肥さんが為めである。無形教会の第一の信條は思想の発表ではない。真理の研究である。発表は自然の心理的結果に外ならない。

あゝ憐れな者よ。其れは人を教へて自ら教へざる教師である。（此の反対も亦真である）

私は永遠より無限を貫く唯一つの真の本道を知り且つ信じてゐる。其れを人は天理教と云つてゐる。けれども其の名の如きは私にとつては何うでもよい。

愛する人々よ。唯一つの本道を発見して、其の道を直進せよ。枝葉の道は知るに及ばず、又た入るべからざるものである。

人は二人の親をもつことはできない。人は二人の主をもつことはできない。人は二つの世界を持つことはできない。人は二つの自己をもつことはできない。

不人情！ これは現代に於ける最悪の流行である。（つゞく）